

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

終焉者と魔法少女達

【作者名】

ウィングゼロ

【あらすじ】

ブラッディクライシス事件から2ヶ月…ようやく異世界の旅を終えた八神尚哉は平穏な生活を過ごしていく…だがその平穏は虚しくも崩されていく。

エブリスタで投稿中の小説をこっちにも書いてみました。

感想なども待っているのでコメントをお願いします。

2014年！正月特別版！

作者「どうもーウイングゼロです！明けましておめでとうござい
ます！」

全員「おめでとうございませす」

作者「今年はこんな作ってみたんだけど…どうかな？」

尚哉「どうかなって…いいんじゃないか？」

作者「まあ、簡単にいうとこれまでのことを振り返ろうと思ってま
す」

尚哉「それいいかもな、確か終焉者シリーズが始まったのって約二
年前…リリカルなのはにディエンドをデバイスにした主人公ぶちこ
んだら面白くね？という発想から始まったんだっけ…」

作者「そうそう、でも今ではディエンドは形だけになって性能が魔
改造されてww」

瑠子「そういえばはじめはD・C・とかの他の作品とのクロス
オーバーの予定もなかったんですよね」

作者「うん、どうしよっかなと思って…考えた結果出そうと思った
んだそっちの方が面白そうだし」

作者「それから何があったかというと…半年前にあった」

尚哉「ああ、新しいスマホに変えてみてパスワード忘れたから終

焉者シリーズ全滅……」

作者「そうだよ！あれのせいで……無印、A・S、A・S After
三期の一部1・5部が全滅……バックアップも取れてないから……約
500ページ消滅……一瞬にしてやる気なくしたもん……」

勇翔「特に後半の三つは完全なオリジナルストーリーだから余計だ
な」

作者「うん、今無印編書いてるけど……あのときと同じように書ける
かわからないし……」

はやて「作者そこんとこる頑張ろう、そやないとどうやって私達が
尚哉と結ばれたかとかわからんし」

杏「そうね、読者の皆さんは途中の第二部では？何でそうなってん
の？と思ってるはずよ」

茜「うんうん私と杏ちゃんを惚れさせたあのシーンも消えちゃって
るから頑張らないと……ねえ？」

作者「うん、そうだね……そうしようまだ俺の中にその時のストー
リーが記憶されてるからなんとかなるかな？」

リイン「そのいきですう……」

作者「さてと、それでは次は……そういえば終焉者シリーズでの人気
投票とかもやったな」

義之「ああ、あれな」

作者「そうそう、あれもかなり面白い結果になったよね」

尚哉「確か男性ベスト第三位が…」

全員「神だったからな…」

作者「そうだよ！俺の予想外なこと起きちゃったんだよ！しかもその投票者リア友だし」

作者「まあ、それはともかく…実は…」

第二回！終焉者シリーズ人気投票を開催しようと思います！」

なのは「ほ、ほんと!?!」

作者「がちでまじです！そういうわけで詳細をお伝えします」

作者「まず、投票したい人はコメント又はメッセージで読者が好きなキャラクターを男性ベスト3と女性ベスト3と男性ワースト3と女性ワースト3を必ずではないので書き込んでくださいワーストは重複あります」

作者「それでベスト一位は5ポイント、二位は3ポイント、三位は1ポイント加算されます、それに引き換えてワーストはそのマイナスがつくと思ってください」

作者「応募キャラクター一覧を作ります…こんな感じですよ」

オリジナル

男性

八神尚哉

霧島勇翔

ダイン

金ぴか

女性

浅倉優里

ユキ

レイ

リリカルなのは

なのは

フェイト

はやて

ヴィータ

シグナム

シャマル

アリサ

すずか

アリシア

ザフィーラ
クロノ
男性
レヴィ
ディアーチエ
シュテル
メガーヌ
クイント
ルーテシア
チンク
リイン
アインス
プレセア
エイミー
リンディ

SHUFFLE!

たくら

まゆき

茜

ななか

美夏

杏

小恋

由夢

音姫

女性

杉並

渉

義之

男性

D・C・

稟

樹

魔王

神王

女性

楓

ネリネ

シア

f a t e

アーチャー

ソードアート・オンライン

シリカ

リズベット

恋姫夢想

月

仮面ライダー

良太郎

翔太郎

フィリップ

映司

弦太郎

作者「まあこんな感じかな？締め切りは今日から6日までそれぞれは
2014年今年も」

全員「よろしくお願いします」

第二回終焉者シリーズ人気投票結果発表

作者「第二回！終焉者シリーズ人気投票結果発表!!」

ワーワーパフパフ

作者「どうも〜ウイングゼロです、さてと人気投票の結果をいっていきますよ〜そしてそのランキングキャラクターはこの中にいますよ〜」

尚哉「作者、司会進行しろ」

作者「わかってますって、それではワーストからいきましょうかそれではまず！ワースト3の発表を男性女性同時でやりましょう！それでは第3位！」

作者「3ポイント！渉と1ポイントで同着の杏、プレシア、さくらですー!」

さくら「にゃ！にゃ！ど、どうして僕がワースト入りしてるの!?!」

杏「園長先生と同意件ね、特に私正式のヒロインよ」

プレシア「私に投票したやつ、読んできなさい！今すぐに!」

渉「何で俺なんだ!?!」

渉以外全員「いや、それは日頃の行いが悪いからだろ？」

渉「みんな…酷い…」

作者「あゝそれはプレシアさん、それは無理なのでそれでは続きましてワースト第二位の発表です」

作者「第二位、6ポイント！樹！そしてまたまた同着で、レイ、リンディ、まゆき！」

樹「ば、バカな！この俺様が二回連続で？こんな何かの間違えだ！」

リンディ「そうよ、樹さんはともかく私達どついうことなのかしら？」

レイ「そうですね！私マイナスな印象どこがありました？」

まゆき「まあまあ、押さえて押さえて、そう作者に迫ったら消されちゃうよ？」

作者「…ごほん、あゝそれではワースト第一位の発表です！」

尚哉「まあ、男性はみんなよそうついでるわ」

作者「第一位！5ポイント獲得！これまた同着です、アリサと楓！そして37ポイント獲得！もちろんこいつ、金ピカ」

全員「ですよ〜」

アリサ「って！なんであたしが一位なのよ！」

楓「私もですよ！どうしてですか？」

作者「アリサはわからんが、楓はあれだ、アニメで怖いと」

尚哉「あゝなるほど…」

作者「それでは続きましてベスト3の発表です！」

作者「第三位！8ポイント獲得、アーチャー!!そしてまさかの同着！6ポイント獲得！フェイトと月！」

アーチャー「ふむ、まさか私だとはな」

月「へう、私がランクインなんて、は、恥ずかしい／＼／＼」

フェイト「うん、前回と同じでなんで私選ばれたのかな？」

作者「それでは続きまして第二位の発表です！」

作者「第二位！13ポイント獲得！勇翔！そして8ポイント獲得！なのは！」

なのは「やったよ、勇翔くん！私達前回と同じで2位だよ！」

勇翔「ちょ！なのは！嬉しいのはいいが抱きつくな〜」

作者「はいそこ、いちゃつかない、それでは栄光に輝いたベストランキング第一位発表です！」

作者「19ポイント獲得！やっぱりこの人が主役！尚哉！そして14ポイント獲得！はやて！」

はやて「やった〜！私達二回連続で一位や!!」

作者「正直、今回は尚哉が2位になるかと思ったたよマイナス点はいつてたから」

尚哉「マジで！」

作者「うん、まあ結果オーライだ、それではこれにて第二回終焉者シリーズ人気投票結果発表を終わります、さいなら〜」

尚哉「なあ、作者……」

作者「ん？何？」

尚哉「もしかして今回も金ピカ野郎は……」

作者「うん、ある人に処刑されたよ」

尚哉「やっぱり……」

皆様ご協力ありがとうございました、これからも終焉者シリーズをよろしく願います

プロローグ

??? 「うーん…ここは…」

俺は目を覚ますと真っ白な空間に倒れていた。

??? 「どこなんだ？確か俺は…」

「ここがどこなのか考えながらここに来る前に何をしていたのかを思い出そうとする。

そして何があったか思い出し俺の顔が真っ青になっていく。

??? 「…そうだ…俺…学校が終わって家に帰る途中でトラックに引かれそうな子供を助けて代わりに俺がs」「死んだのじゃよ」「誰だ!!」

俺は死んだことを自覚したその時、突如と聞こえてきた声に驚き聞こえた方向に目を向ける。

そこにいたのは、なんか神話に出てくる服を着ているおっさんが立っていた。

??? 「あんた…誰だ？」

おっさん「私は神じゃよ、『浅倉尚哉』くん」

尚哉「っ！何で俺の名前を知っている…！」

神「神じゃから」

全然理由になってないぞ、それにこいつの喋り方、非常にむかつく。

尚哉「まあ、それは置いといて、なんで神であるあなたが俺みたいな人間の前に現れたんだ？」

神「まあ…それは…実は…」

この様子を見ると何か訳ありらしいな。

神「わしミスでお主が死んでしまったのじゃ」

ブチ

その瞬間俺の何かがぎれた。

尚哉「おい、神…覚悟はできてるんだろうな」

神「な、尚哉くん!? そ、そんな目が笑ってない顔しながらこっちに近づいて来ないでよ」

尚哉「そんな御託はどうでもいい…さあ、貴様の罪を数えろ」

さあ、神をばこりますか。

神「いやああああああっっ!!」

フルボッコ開始!

……数分後

神「……」

反応がないただのおっさんのようだ。

尚哉「さてと、これから俺は天国に行くん」「お主が行くのは天国ではないぞ」「神、復活するの速!」

さっきぼこぼこにしたのにもう立ち直ってやがる。

尚哉「天国じゃないってことは俺は地獄に落とされるのか」

地獄に落とされるとさっき神をぼこぼこにしたのが原因だな…自重しとけば良かった。

神「地獄でもないぞ」

地獄でもないとする神のやろっ、一体、俺をどうするつもりだ。

神「お主にはこれからある世界に転生してもらって、その世界を救ってくれ」

なるほどな世界を救う…ええええ!!

尚哉「ちよつと待て神、いきなり世界を救えって言われても意味がわからぬ」百聞は一見に如かずじゃ、それじゃ送るぞ。「ちよつとまで、俺はまだやるとは、いやああああああっ!!」

神「あとお主の身体能力と知能は飛躍的に上げといたてデバイスはついたらあるから心配せんでもええぞ」

俺はそんな神の言葉が聞こえて、俺の第2の人生が始まった。

終焉者誕生！

神によつて転生した俺なんですが…

尚哉「いやあああああつっ」

ただいま絶賛落下中

なぜ俺がお空に飛んでいるかと言つと神によつて転生して気がつけばお空にいて、そう思った瞬間、いきなり重力に引つ張られ、今の状況になっている。

つて！そんなことを冷静に今の状況を考えてる場合じゃなかった。

尚哉「このままだと、地上にぶつかつてトマトみたいにつぶれちゃう」

転生してそつこつで死ぬつていやだよ。

そつ思っている間にも地面にとの距離は縮まつていく。

???「Master」

尚哉「!? 一体どこから…まさかこれから」

突如、謎の声が聞こえてきて、その発信源は見覚えのない十字架のネックレスだった。

…これ、どうみても魔法少女リリカルなのはに登場するデバイスだよな。そう言えば神のやつも転生したらデバイスがあるとか言つて

たし。

???「Please call my name」

謎の声はいきなり『私の名前を呼んでください』って言うてるけど後それと。

尚哉「日本語OK？」

日本語じゃないとわからないから日本語にしてくれ。

???「∴私の名前を呼んでください、神様から聞いているはずです」

尚哉「知らないって、神に説明もなくとばされたんだから」

文句あるなら神にいつてください。

???「なら今教えます、私の名前は『ディエンド』です」

∴なぜだろう、その名前を聞いた瞬間、あの武器が浮かんだんだが

…

尚哉「今は考えてる場合じゃない、行くよ、ディエンド」

ディエンド「わかりましたマスター」

「ディエンド…セットアップ」

そして俺は青い光に包まれた。

そして、青い光は消えると、そこには青いシャツに白いズボンに腰にはカードケースらしきものが付いているベルト、そして白を強調したロングコートを身に付けたバリアジャケットの俺の姿があった。

尚哉「よし！後は飛行魔法を使えば…」

バリアジャケットを身に付けた俺は今の状況を打破するために飛行魔法を使い落下するのを止めた。

尚哉「いや〜危なかった、一時はどうなるかと思ったぜ」

ディエンド「初めにしては上出来ですよマスター」

尚哉「ありがとよ…それにしてもディエンド、お前が起動している姿、思った通りの姿だったな」

今のディエンドの姿は一丁の銃でハンドガンより大きく、銃口は一つだけではなく2つあり少し青色を強調している銃だ。

尚哉「どこからどうみても『ディエンドライバー』にしか見えないんだが…」

俺が持っているディエンドは特撮アニメに出てくる『ディエンドライバー』に瓜二つなのだ。

そのディエンドは今、俺の右手で持っているのだが何故か違和感がある。

尚哉「何か可笑しいな…俺ってこんなに腕が短かったけな」

ディエンド「マスター1つ聞きますが歳はいくつですか？」

尚哉「何だよいきなり…16だがそれがどうした？」

ディエンド、いきなり変こと言い出したけど何かわかったのかな？

ディエンド「私にはマスターが『6歳ぐらいの子供にしか見えない』のです…」

なるほどね、俺が6歳ぐらいの子供にしか…ってええええええー!!

尚哉「身体が縮んでる!!」

ディエンド「マ、マスター、今気づいたんですか!?この世界に来たときからその身体になっていましたよ!」

何だよこの展開、まるで名 偵コ ンの主人公みたいになってるじゃないか!

それにしても、6歳の身体になると、いろいろと面倒だな。

例えば、義務教育のせいでまた小学校に行かないと行けないし、この世界には俺の親族や知人も居ないから誰にも頼れない。

ディエンド「マスター、今は身体のこととは置いて、そろそろ雲を突き抜けて町が見えてきますよ!」

そうディエンドが言っていると雲を突き抜けて町の光景を目にした。

俺の目には海や山に囲まれた、豊かな町が広がっていた。

尚哉「すごく綺麗な町だな」

デイエンド「そうですね、すごく綺麗です」

まあ、空から眺めるのもいいけど、そろそろ降りて町の情報を集めないとな、後降りるんだったら人気のないところにしないと…

デイエンド「っ！マスター！ここから10km離れた場所に『シャドウ』の反応です！」

俺が降りようとした瞬間、デイエンドがシャドウというものを感知したらしい。

尚哉「デイエンド、シャドウってなんだ？」

いきなりシャドウが現れたとか言われてもわからないからデイエンドに訪ねてみた。

デイエンド「まさか、神様から聞いてないんですか!? シャドウについて!?!」

尚哉「さっきも言ったが、いきなりこの世界を救えって言われて飛ばされてきたんだ、神はそんなこと一つも言っていなかった」

あと、神の奴、こんなに重要なことちゃんと説明してから飛ばせよ。

尚哉「今はそんなことより、急いで反応があった場所に向かわないと、行くぞー！デイエンドー！」

デイエンド「了解です！マスター」

俺は町に降りるのを止めてシャドウの反応があった場所に急行した。

シャドウ襲来！

尚哉「…まじかよ、酷いなこいつは」

現場へと急行した俺がみたものは、横転、火がでている車やそこらじゅうに倒れている死体、そして今にも息を引き取りそうな人達が悲鳴をあげていた。

その光景を見た俺は急に吐き気がしてその場でしゃがみこむ。

ディエンド「マスター！大丈夫ですか!？」

しゃがみこんだ俺を心配するディエンド。

尚哉「大丈夫だ心配させてすまない」

そう言いながら俺は立ち上がった。

その時、俺の目の前の地面から1メートルぐらいの黒い生物とは思えない怪物が3体現れた。

尚哉「何だ!?!こいつら!？」

ディエンド「目の前にいるのがシャドウです。種類は…『シャドウスパイダー』ですか…シャドウの中では最弱ですから楽勝です」

尚哉「こいつらがシャドウ…へ！やってやるぜ!！」

俺はディエンドを一回転させてシャドウ達に向かって走り出した。

俺はシャドウ達に向かっているとシャドウ達の一体がこちらに飛びかかってくる。

俺は空中に飛んで避けて飛びかかってきたシャドウ…複数いるからシャドウ1に魔力弾を3発放つ。

1発目は外れて後の2発は直撃してシャドウの身体は爆発する。

尚哉「よし！まずは一体！」

ディエンド「マスター、油断しないでくださいよ」

尚哉「わかってるって、よっと！」

俺が喋っている最中にシャドウの一体が襲って来たけどそんなんで当たるほど弱くは無いぜ…あれ、もう一体のシャドウが見当たらない。

ディエンド「マスター！上です！」

尚哉「なっ！しまった！」

もう一体のシャドウは俺の真上において今から避けても、避けきれない。

ディエンド「プロテクション」

ディエンドがバリアをはってくれてシャドウの攻撃は防ぎ、無防備になったシャドウの腹らしきところにディエンドを突き立て、5回トリガーを引き全て命中してそのシャドウは爆発する。

そして、最後の1体になったシャドウに銃口を向けて魔力球を連射する。

シャドウは最初は避けられていたが魔力球に当たりそれから次から次へと魔力球が当たり、最後の1体も爆発した。

ディエンド「次からは気をつけてくださいよマスター」

尚哉「わかった、次からは気をつける」

ディエンド「全く…っ！マスター！新たにシャドウの増援です」

また来るのかでも…

尚哉「大丈夫、さっきみたいにドジは踏まないさ、さあ、どこからでもかかってこ…い…」

…今、俺は正直な驚いている、さっきかかってこいなんて言ったが前言撤回したいぐらいに。

俺の目の前にはさっきと同じシャドウスパイダーがいるのだが…

尚哉「ディエンド…こいつら何体いるっ？」

ディエンド「ざっと20体です」

20体って…さっきの3体でも苦戦したのに20体はさすがに無理があるわ！

尚哉「ディエンド、現状では勝てる気がしないんだけど」

ディエンド「…しょうがありません。今のマスターには早いと思っ
ていましたが…マスター！右腰にあるカードケースからカードを何
でも良いので1枚とってください」

尚哉「わ、わかった」

俺はディエンドに言われるがままに右腰についているカードケー
スを開き、カードを1枚取り出す。

…何かディエンドが教えようとしてるのなんとなくわかったかも。

ディエンド「そのカードを私の挿入口に入れてスライドしてからト
リガーを引いてください」

そして、俺はディエンドの挿入口にカードを挿入してスライドす
る。

ディエンド「カメンライド」

ディエンド「デンオウ」

その瞬間、ディエンドから電子音が聞こえてきて俺はトリガーを引
いた。

そして、放たれた光弾はシャドウ達の真ん中ぐらいに着弾し光弾は
姿を変え、電車をモチーフにした。『仮面ライダー電王ソードフォー
ム』が現れた。

どうやらライダーを呼び出すのにかなり魔力を使っらしい、正直相

当疲れてる。

電王S「へっ！俺…」

電王は決め台詞を言おうとしてるけど…あいつがいる場所、シャドウ達のと真ん中だぞ。

電王S「さんじゅってじゃすんじゃねえ！真っ黒野郎!!」

やっぱり電王にシャドウ達集中攻撃してるよ。この事態を招いたのあんな所に撃っちゃった俺なんだけどね。

そう思っている間に電王はシャドウの攻撃を避けながら電王の武器デンガツシャーを組み立てて刀にする。

って、このまま傍観してる訳には行かないので俺も行きますか。

俺は魔力弾を撃ちながら電王の元へと走り出す。

電王もこちらに気づき、こちらにシャドウを斬りながら向かってくる。

尚哉「電王、協力してこいつら片づけるぞ」

電王S「おう、えーっと…」尚哉だ「尚哉！」

そう言いながら俺と電王は背中を預ける

電王S「俺は最初っから最後までクライマックスだ!!行くぜ!!行くぜ!!行くぜ!!」

電王はもう1つの決め台詞を言ってシャドウ達に向かう。

そつだ、あの人の決め台詞を言ってみるか。

尚哉「最初に言っておく……」

そう言いながら、俺は右手に持つディエンドを1回、回し左手を人差し指をシャドウ達に指差す。

尚哉「俺はかーなーり……強い!!」

ディエンド」ついでに言っておきます。……マスターは電王より弱いです」

尚哉「敵にそんなの教えるな!!」

俺はディエンドにツッコミをいれた後シャドウ達に向かって走り出した。

俺は魔力弾を撃ちながらシャドウ達の所に向かう。

撃ち続けていると、シャドウの1体に当たり、爆発する。

俺は電王の状況が気になり横目で電王の方を見る。

電王はデンガッシャーを振り回し、シャドウを真っ二つに斬られて爆発していた。

よく見るとすでに電王は3体は倒しているのが見て取れた。

俺は電王の方は大丈夫だろうと思い、目の前のシャドウに視線を戻

す。

そして、よく見れば俺はシャドウ達に囲まれていた。

尚哉「囲まれたか…ディエンド、カードケースにはアタックライドも入っているのか？」

もし入っていたらこの状況を逆転できる。

ディエンド「一応ありますが…マスター!?!まさか使っんですか!?!」

尚哉「そのまさかだ！」

俺はカードケースを開けて2枚のカードを取り出し左手に持つ。危険だと察知したのか囲んでいたシャドウ達が一斉に襲いかかる。

俺は襲われる前に左手に持っているカードを1枚、挿入口に挿入してスライドする。

ディエンド「アタックライド」

ディエンド「クロックアップ」

電子音が鳴り響いた直後、シャドウ達や向こうで戦っている電王の動きが止まった…いや、止まって見えた。

だが、俺とディエンドは普通に動いている。

これが、超高速の速度で攻撃する技、クロックアップである。

尚哉「さて、次は…」

そして、左手に持っているもう1枚のカードを挿入してスライドする

ディエンド「アタックライド」

ディエンド「イリユージョン」

同じ様に電子音が鳴り響くと、今度は、俺が3人に増えた。

尚哉「さてと…」

そして、俺達は互いに背を預け、回りにいるシャドウ達に…

尚哉「乱れ撃つぜ!!!」

今の俺達はクロックアップをしているからシャドウ達が止まっているかのように見えている。

そのため、当たり前なので魔力の残りのことを考えずに俺達3人は回りのシャドウ達に乱れ撃った。

ディエンド「クロックオーバー」

俺達が乱れ撃っているとクロックアップの発動時間が終わり、イリユージョンの効果で3人に増えていたが元に戻った。

そして、俺を囲んでいたシャドウ達はクロックアップが終わった瞬間、1人残らず爆発した。

尚哉「はあ…はあ…疲れた…」

残りの魔力だと後1回だけ強力な魔法を使えるぐらいか…

「デイエンド」まったく…もう少し後先を考えてください」

「デイエンドに注意されたけど…しょうがないじゃん。あそこでアタックライドを使わなかったらどうなっていたことか。」

それは今は置いてこころ電王の方に加勢しないと。

電王S「ああああっ!!!」

尚哉「で、電王!？」

俺がみたものは電王がこちらに吹っ飛ばされる光景だった。

何故!? さっき見たときは電王が優勢だったのに、この数分間でなにがあったんだ。

だが、その疑問はすぐにわかった。

俺は電王が吹き飛んできた方向を見ると1体のシャドウがいて驚いた。

そのシャドウはさっき戦っていたシャドウスパイダーなのだがそれだけでは驚かない、だが1つだけ変わっていた。それは…

尚哉「でか!!」

普通のシャドウスパイダー体長なら1mなのだがこのシャドウス

パイダーは3mは越えている。

ディエンド「マスター!!このシャドウは融合してます。気をつけてください!!」

ディエンドはそう言っているうちに『シャドウスパイダー融合体』はこちらに向かって走り出している。

俺も魔力弾で迎撃するが弾かれる。

だが、こちらに向かっていったシャドウスパイダー融合体は動きを止めて違う方向へ歩き出した。

俺は不思議に思い、シャドウが向かった方を見て驚いた。

そこには『茶髪の少女』がシャドウを見て怯えてる姿だった。

少女「嫌…来ん…といて…」

少女はそう言っているが、シャドウは着実に少女に迫ってきている。

このままだとまずいと思い、俺は全速力で少女の元に走り出した。

でも、シャドウの方が先に少女の目の前にたどり着き前足を上げて少女、目掛けて振り下げた。

少女「いやああああああっ!!!」

少女はもうだめだと悟り悲鳴をあげる。

俺と少女との距離はおよそ5m、少女の元に行ってバリアをはるの時間は時間がない…ならやるのはただ1つ!!

俺は少女の所までできて少女を抱いて回避する。

だが、完全には避けきれずシャドウの攻撃は左腕に当たり痛みがはしる。

尚哉「くっ！」

俺は痛みを感じながら、抱いている少女を見ると気絶している。

どつちら、あまりの恐怖に気絶したのだろう。

尚哉「電王!!俺はこの子を安全な場所まで運ぶからそれまでシャドウを引きつけてくれ！」

電王S「わかった!!」

電王にシャドウを任せて気絶した少女を抱えて安全な場所まで向かった。

少女を抱えて走ること数分後、火が届いていない場所を見つけた。

尚哉「ここなら、火は届かないし誰かが助けに来るはずだ」

俺は少女をその近くの壁にもたれさせ少女の顔を見る。

…やっぱり怖かったんだろうな、もう少して殺される所だったから、それにこの子はまだ幼いし両親と来ているはずだから、両親もどこかでこの子を捜しているはずだ。

「ディエンド」「マスター戻りましょう。電王だけではあのシャドウは倒せません」

尚哉「ああ、わかった。行こう！」

俺はシャドウと電王が戦っている場所に向かって走った。

俺は電王とシャドウが戦っている所に戻って、目にしたのはシャドウスパイダー融合体によって押されている電王だった。

俺は魔力弾を撃ちながら電王の元へ駆けつけた。

尚哉「すまない、待たせたな」

電王S「来んのが遅いんだよ。っでどうするよ、あの真っ黒やろっ、結構硬いぞ」

確かにやつのは身体は硬くなってなかなか攻撃が入らない…だけど。

尚哉「電王、同時に必殺技をあいつに当てろぞ！」

電王S「わかったぜ！」

電王の方はわかったみたいだし、こっちもあれが付いてるか聞かないかな

尚哉「ディエンド、1つ聞くが…『カートリッジシステム』はついてるのか？」

「ディエンド」確かにカートリッジシステムは私についていますが…
マスター!?まさか使うつもりじゃありませんよね。」

尚哉「そのまさかだ！カートリッジを使う!!」

カートリッジシステム…デバイスに搭載された、魔力の弾薬を排出しその時の魔力を飛躍的に上げるシステム。

「ここまで聞いていたら便利なシステムだと思いがデメリットがある。

それは使った本人とデバイスに負担がかかることディエンドは俺に負担がかかることを心配しているのだ。

尚哉「大丈夫!!俺は倒れない、だから信じてくれ、ディエンド!!」

ディエンド「…わかりました。マスターを信じます」

さて、ディエンドからの承認も取れたことだし派手にやってやるぜ。

尚哉「電王が先に仕掛けて俺はそれに続けて攻撃する」

電王S「へっ！ならやらせてもらっぜ!!」

「フルチャージ」

さて、電王も準備を始めたからこっちもやりますか。

尚哉「ディエンド!!カートリッジロード!!」

俺は足元に青い魔法陣を展開してディエンドをシャドウに向けて銃口に魔力弾が現れディエンドから2発、弾薬が排出される。

電王S「俺の必殺技パート2」

そう言うと電王が持っているデンガッシャーから刀身が離れてシャドウスパイダー融合体に当たり、シャドウスパイダー融合体はかなりダメージがあったのだらうかかなり苦しんでいる。

電王S「いまだ！尚哉!!」

尚哉「わかった!!ディメンジョーリーーン…」

俺はそう言いながらディエンドのトリガーをひいた。

「バスターーリーーン!!!」

そしてかけ声と、ともにディエンドの銃口にたまっていた、魔力が青くてぶつとい砲撃のように放たれた。

もちろんその攻撃は命中し土煙が舞ってそして…

ドゴーリーーン!!!

シャドウスパイダー融合体は他のシャドウスパイダー達と同じように爆発。違うといえば爆発の大きさぐらいだ。

電王S「へっ！決まった。…尚哉!!困った時はまた俺を呼べよな」

そう言つと、電王の身体が光り輝いてカードに戻りカードケースに

入っていった。

願

シャドウスパイダーを倒した後、俺は少女がいる場所に戻ろうとしたがその場で止まった。

なぜ、俺が止まったかと言うと微弱だが声が聞こえてきたからだ。

そして微弱な声が聞こえてきた方へ歩いていき、そこで俺が目にしたのはもう息が引き取っている男性と虫の息の女性がいた。

それを見た俺は女性の元に急いだ。

尚哉「大丈夫ですか!?今すぐに助けを呼んで……結構……です……!?!」

俺が助けを呼びに行こうとしようとしたら止められた。

女性「私は……もう……助……か……ら……な……い……か……ら……君……み……た……い……な……子……供……に……頼……む……の……は……お……か……し……い……け……ど……お……願……い……が……あ……る……の……」

女性は今でも息絶えそうな声で俺に話しかけてくる。そして俺は女性の話を真剣に聞いている。

女性「あの……時……助け……た……女……の……子……を……支……え……て……く……れ……な……い……か……な……」

その話を聞いて理解した、この人あの少女の母親だ。

女性「あの……子……悲……し……い……こ……と……や……辛……い……こ……と……を……1……人……で……抱

え…込ん…じゃう…性…格だ…から…」

少女の母親は俺にあの少女を支えてくれといったが、要するに私達はもう死んでしまう。そしてこれは俺の推測なのだが親族も居なくて、あの子は天涯孤独になってしまつから 俺に頼んだのだろう。

尚哉「でも良いのか？こんな見ず知らずの俺に娘を頼んで」

そんなに言っているのだからちゃんとした理由があるはずだ。

女性「きみ…なら…任せ…られる…そ…う思っ…たか…ら…」

全然理由になつてねえー！

でもこの人、俺を信じている目をしている。

尚哉「わかりました。あの子は俺が支えていきます。…だから安らかに眠ってください」

い！
ここまで期待されて断れる訳がない。それにあの子をほっとけない！

女性「それ…で…は娘…を…『はやて』…を…お願…い…し…ます…」

そして女性は笑顔で逝つた。

少女の母親が息を引き取ってから数分後、俺は少女の目の前で…倒れている。

なぜ倒れているかと言うと、俺は少女の所に戻ってそこでバリアジャケットを解除したんだが…

バリアジャケットを解除したらすぐに身体中に激痛がはしってその場で倒れてしまい現在にいたる。

尚哉「やばい、動けない。どうすればいいだろうか、ディエンド」

俺は武器から十字架のネックレスに戻ったディエンドにこの状況をどうすればいいか聞いてみた。

ディエンド「マスターがカートリッジを使ったから悪いんですよ」

そんなこと言われてもあそこで使わなかったらあのシャドウを倒せなかったんだからしょうがないじゃんか。

そう思っていると遠くから足音が聞いてきた。もしかして救助隊が来たのか。

やばい…急に眠気が…意識がとおのいて…い…く…

俺はその場で意識を失うのであった。

終焉と夜天

どうも、浅倉尚哉です。

今、俺はどこかの病院の個室のベッドで寝ているふりをしております。

なぜ俺が寝ているふりをしているかということ...

少女「ひっ……く……お父さん、お母さん………うっ、なんでや……なんで、私を、おいて……いなくなってしまうん……」

隣のベッドではあの現場で俺が助けた少女が泣いているのだ。

尚哉 ディエンド、この状況どうすればいいと思う

俺は念話でディエンドに問いかける。

ディエンド 慰めてあげたらどうですか？あの子の母親にも頼まれたのですから

「ここまで言われたらやるしかないよな。

よし、まずは…

尚哉「どうしたの？」

俺は優しく声をかけると、泣いていた少女はこちらに顔を向ける。

少女「……………」

少女は潤んだ目でこちらを見ているが、問に対しては返ってこなかった。

まあ、当然だろう。

この子の両親が亡くなって悲しんでいるときに、どこの馬の骨かわからない俺が話しかけたんだ。戸惑わない訳がない。

尚哉「ごめんな、急に話しかけちゃったりして。でも泣いていたのが気になったんだ」

俺は寝ていたベッドから降りて少女が座っているベッドに近づく。

少女「な、なんにもないんや。少し、いやなことを思い出しただけや……」

尚哉「え……いや、でも……」

少女「ほんとに大丈夫やから、気にしんといて……」

確かにこの子の母親の言うとおり、一人で抱え込んでしまってるな。

でも少しでもその悲しみを取り除けるなら俺は……

尚哉「大丈夫な訳ないだろ……さっきまであんなに泣いたのに……少しでもさ、思いを出した方が楽になるよ。悲しみを感じているときに泣いておかないと、悲しみがたまって身がもたないよ」

少女「……いや……本当に……」

尚哉「今はさ、大丈夫かもしれないけど。後で悲しみをうけとめてくれる人がいなくなったら、きっと悲しみと後悔が重なってもっと辛くなる。だったら今、悲しいことをだそう」

少女「……………うっ……………なんで……………見ず知らずの……………私なんか……………気遣って、くれるん……………」

尚哉「器用なやつは気にしないけど、俺みたいな不器用なやつはこっついのをほっとけないから。」

いままで避けようとしていた少女は少し苦笑いし、俺の胸に頭を預ける。

少女「そっやな……………ほんとに君は不器用やほんっ……………とに。うっ、うっ……………うあああああっ、あああああっ……………！」

少女は俺の胸にすがりつき、むせび泣く。

俺は片腕で少女の体を抱き寄せ、もう片方の手で少女の頭を優しくなでた。

少女は泣き続けていたい何時間たったであろう。窓から外を見ると日は沈みかけていた。

今は少女は泣き止んでいる。

尚哉「もう…大丈夫か？」

そっ言いながら少女から少し離れる。

少女「君のおかげで、すっきりしたわ。ありがとっな」

少女は笑顔でこちらを見てきた。やばいその笑顔は反則級だ。

尚哉「そう言えばまだ自己紹介がまだだったな、俺は浅倉尚哉、呼ぶときは尚哉でいい。」

少女「なら次は私やな。うちの名前は『八神はやて』、名前はひらがなではやてって書くんや。」

なるほど名前は昨日、母親に聞いたからわかっていたけど、姓は八神か……八神!?

ちょっと落ち着くんだ俺、COOLになるんだ俺!!

はやて「ど、どうしたんや!? そんな黙って。やっぱり名前がひらがなで、はやてって書くから変やと思ってるん?」

俺が黙っていることにはやては心配している。

今は考えていることは置いて、はやてが心配してるからそつちを何とかしなきゃな。

尚哉「そんな訳ないよ。むしろその逆でいい名前だと思うよ。」

はやて「あ、ありがとうな、尚哉くん。」

はやては少し顔が赤くなり笑顔でこちらを見てきた。やっぱりその笑顔は反則級だ。

その後、すぐにはやての担当医である。石田先生がやってきて、俺は呼び出され今はさっきまでいた病室の入り口前にいる。

石田先生「それで尚哉くん、少しお話があるのだけど」

なんとなくだが石田先生が言おうとしてることがわかる。

石田先生「尚哉くんはお家ってどこにあるのか教えてほしいんだ」

やっぱり聞いてきたか…さて、どうしたものか、俺はこの地球とは全く違う地球から来たのだ。だから、家はないし家族もない。平行世界から来ましたなんて絶対にいえない、となるとこれしかないな。

尚哉「俺、名前以外覚えていないんです。だからなんであんな場所に居たのかがわからないんです」

石田先生「え、それじゃあ、お家もお父さんやお母さんの名前も覚えていないの？」

石田先生がそう言うと俺は頷いた。

石田先生「困ったわね…このままじゃ、尚哉くんの両親が心配してるだろうし…それに、尚哉くんはあの事故現場にいたとなると両親もあの場所にいるはずだから最悪亡くなってるかも」

石田先生…そんな話、子供の前で言っちゃあいけないと思うぞ。

数分後…

それから石田先生は考えの末に何かいいことを思いついたのか今は元の病室に戻ってきている

先生によると、はやてにも関係があるからということとで俺が名前以外覚えていないということは、はやてにさっき教えた。

石田先生「今から重大なことを話すからしっかり聞いててね」

先生が重大なと言ったことによって俺とはやては固唾をのむ。

石田先生「尚哉くん、君には……」

そして先生は俺の想像を遙かに越えたことを言い出した。

石田先生「はやてちゃんのお家に住んでもらいたいです」

………はい？

尚哉 はやて「ええええええっ!!」

俺とはやてはあまりにも予想していなかったことに驚きを隠せなかった。

はやての家に住むことが決まった後、石田先生に「子供はもう寝る時間だから早く寝なさい」と言われ病室の明かりを消しベッドで寝れずにいる。

まあ、考え事をしているのもあるが実年齢が十代後半なので寝るのが早すぎるのだ。

俺は少し隣のベッドでははやてがぐっすり寝ている。

尚哉 ディエンド、今のうちに今後どう動くか話そう

はやてが起きてしまつ可能性があるため念話でディエンドに呼びかける。

ディエンド わかりました。まずマスターの目的はシャドウからこの世界を守ってほしいのです

あの時のシャドウとの戦闘で俺がなにをしなきゃならないのかはわかった。

ディエンド 続いてこの世界についてですが…

尚哉 ディエンド、教えなくてもこの世界がどこなのかわかってい
るよ

この世界が何処なのかを解くキーワードは2つ、1つ目は『デバイス』、2つ目は『八神はやて』、この2つのキーワードで導き出せる答えは…

尚哉 この世界は『魔法少女リリカルなのは』の世界だろ

ディエンド マスターが言う通り、この世界はリリカルなのはの世界です

尚哉 だとしたら可笑しいぞ。昨日のシャドウとの戦いの時、はやては狙われていた。もしあの場所に俺がいなかったらはやてはどうなっていたんだ

デイエンド 間違いなくはやてさんは死んでいたでしょう。そして、闇の書事件も起きなかったでしょうね

そうなっていたらデイエンドが言った通り、闇の書事件は起きなかったしヴォルケンスやリインフォースも救えなくなっていたのか。

尚哉 まあ、はやての話はこれぐらいにして、これからのことを考えないとな

デイエンド はやてさんがまだ6歳だということは原作は2年後になりますからそれまで……

尚哉 シャドウの殲滅と修行だな

原作までにはシャドウ達に楽勝で勝つぐらいの実力をつけないと、この世界はそんなに甘くはないしな。

さてとそろそろ俺も寝ますかね。

はやて「尚哉くん、起きとるか？」

寝ようとした突然はやてが小声で話しかけてきた。

尚哉「はやて？まだ起きてたのか？」

はやて「うん、ちょっと寝付けへんくてな。…尚哉くんお願いがあるんやけど」

こんな夜中にお願いごとか…なんだろう。

尚哉「俺ができることならなんでもするよ」

はやて「本当か!?なら…。」つちきて一緒に寝てくれへんか」

…

…え？

はやて「もしかして…一緒に寝るの嫌なん？」

尚哉「いや、そういう訳じゃあ…。」

俺ははやてのおねだりをつまく回避しようとするが…

はやて「ダメ？」

まさかの涙目になりながらのこちらを見てくる。

そして俺は…

尚哉「…はあ…わかったよ、一緒に寝よう」

覚悟を決めた俺はベッドから起き上がりはやてが寝ているベッドに潜り込む。

はやて「えへへへ、ありがとうな、尚哉くん」

尚哉「全く…妹以外にこんなことするとはなボソッ」

はやて「ん？何かいった？」

尚哉「何でもないよ、それじゃあお休み」

はやて「うん、お休み」

そうして俺は深い闇に落ちていくのであった。

…

翌日

俺は…俺達は病院から退院して今ははやてが乗っている車椅子を押しながらはやての家に向かっている。

何故はやては車椅子に乗っているかというとはやては生まれた時から足が不自由でその原因は闇の書の呪いによって起きているのだ。

そう思って歩いていたら道が二手に分かれていた。

俺はどっちに行けばいいのかわからないので…

尚哉「はやて、次どっちだ？」

はやて「右や、それで少し行ったところが私の家や」

はやてが言った通りに右に曲がる。

そして、歩き続けて約2分もするうちにアニメで見たはやての家が見えてきた。

はやて「あそこが私の家や」

そう言いながらはやては自分の家を指差す。

そして家の玄関にたどり着きはやては鍵を使って扉を開ける。

はやて「ただいま」

尚哉「お邪魔します」

そう言いながら俺は入ろうとしたのだが、はやてがこちらに向き。

はやて「尚哉くん、そこはお邪魔します、じゃなくてただいまやろ、家族なんやから」

家族か…そう言われるのも悪くはないか。

尚哉「なら改めて…ただいま。はやて」

はやて「おかえり。尚哉くん」

異世界の転生者である少年と最後の夜天の主と呼ばれる少女が交
差するとき物語が始まる。∴ 実際2年後だが。

2年後…

どうも、浅倉尚哉です

あれから2年経ってかなり強くなりました。

って、今はそんな悠長なことしてるばあいじゃなかった。

俺は今、結界を張った廃棄工場内で逃げているシャドウスパイダーを追っている。

シャドウスパイダーはどうやら外にできるつもりらしいのだが逃がさないぜ。

俺も後を追うように外にでる。

ディエンド「マスター！大変です!!」

尚哉「どうした、ディエンド」

外に出るなりディエンドが何かを警告する。

追っていたシャドウスパイダーも何故か待ちかまえていた。

ディエンド「シャドウ達に囲まれています!」

…まじで。

そう言われて辺りを見渡してみるとシャドウスパイダーがうじゃうじゃいた。

尚哉「…はめられたな」

その瞬間、シャドウ達が一斉に襲いかかってきた。

俺はシャドウ達の攻撃を難く避けながら魔力弾をシャドウ達目掛けて放ち1発も外さずにシャドウ達に命中して当たったシャドウ達は爆発する。

尚哉「くっ！きりが無い。ならこいつでー！」

襲いかかってくるシャドウ達を避けながら右腰にあるカードケースから1枚カードを取り出し、ディエンドの挿入口にカードを挿入してスライドする。

ディエンド「アタックライド」

ディエンド「ダガーファンク」

電子音が鳴り響くと、突然、俺のまわりから青い短剣が3本現れて

…

尚哉「いけ！」

俺の号令と共に3本の青い短剣は自由自在に飛び回りシャドウ達を次々と切り裂いていく。

尚哉「続けて、ディメンジョン…バスターー!!」

そして、俺はシャドウが溜まっている場所に青色の砲撃を放ちその射線上のシャドウ達は爆発する。

さて、シャドウ達もあと残りわずかさつさと片づけなきゃな。

ディエンド「マスター！シャドウ達が融合しています。気をつけてください」

ディエンドの警告通り、シャドウスパイダー達は融合していき全長10メートルはあるシャドウスパイダー融合体がいるのが見て取れた。

尚哉「1人じゃあきついな…なら！」

そうやって俺はカードケースから3枚取り出しディエンドの挿入口に挿入そしてスライドする。

ディエンド「カメンライド」

電子音が鳴ってトリガーを引いた。

ディエンド「リュウキ キバ ダブル」

そして、銃口から3発光弾が放たれ俺の近くに着弾して3発の光弾は姿を変え、鏡の世界ミラーワールドでミラーモンスターや他のライダーと戦っていた『仮面ライダー龍騎』と人とファンガイアとの共存を目指した吸血鬼をモチーフにした『仮面ライダーキバ』、そして、風都という風を守り続けた2人で1人の仮面ライダーこと『仮面ライダーWサイクロンジョーカー』が現れた。

さてと、準備は整ったことだしさつさと終わらしますか。

尚哉「龍騎、キバ、W、全員の力をあわせるぞ」

龍騎「わかった」

キバ「わかりました」

WCJ「そうと決まれば翔太郎」「わかってるぜフィリップ」

WCJ「さあ、お前の罪を数えろ」

俺の提案にみんな乗ってくれたあとWは決め台詞を言う。

そういえば、即行で囲まれてたから決め台詞を言うの忘れてたな。今言いますか。

尚哉「もう最初じゃないが言うておく」

俺はディエンドを右手で回しながら左手でシャドウに指を指す。

尚哉「俺は…かなーり！…強い!!」

ディエンド「ついでに言うておきます。マスターはこの2年間で本当に強くなった」

…それはフォローになっているのかわかってないのかわからないだが…き、気を取り直していっつ。

尚哉「いくぞー！ディエンド!!カートリッジロード」

そう言つとディエンドから2発弾薬が排出され足元に青い魔法陣が現れ銃口に青い魔力の塊が現れる。

「ファイナルベント」

「ウェイクアップ」

「ジョーカー！マキシマムドライブ！」

俺が攻撃の準備してあとを追うように龍騎は自分の契約モンスターであるドラグレッダーが現れ、キバは右足の鎖が解き放たれ、そしてWからは風が吹き荒れる。

尚哉「ディメンジョー……ン……」

俺は撃つ準備が整つとライダー達は空に飛び上がり龍騎はドラグレッダーと共にシャドウ目掛けて蹴り、キバも解き放たれた右足で蹴り、Wは身体が真つ二つに分かれて蹴りをいれる。

…本当にライダーって蹴り技、多いような気がする。

さてと龍騎達はシャドウ目掛けて蹴りをいれようとしてるから、俺はトリガーを引いた。

尚哉「バスター……！！」

銃口にたまっていた魔力は砲撃となり龍騎達と同時に攻撃が当たり、お約束のようにシャドウスパイダー融合体は大爆発を起こした。

シャドウを倒したのを確認したあと龍騎達はカードに戻りカードケースに入つていった。

尚哉の現状

俺はバリアジャケットと結界を解除し廃棄工場をあとにする。

そして、ケータイを開き俺は驚愕した。

ケータイのはじめの画面には着信やメールが50以上受信していた。そしてもちろんの差出人は…

そう思った瞬間また電話がきた。

なに言われるのかわからないが俺は覚悟を決め電話にでた。

尚哉「もしもし、はや…《尚哉くん！今どこにいるん！》は、はやて、もうすぐ帰れるから」

はやて《ほんまか!?なら帰ってきたらこんなに帰りが遅いことについてお話やからな》

すでに、時刻は夕方小学生なら家に帰っているだろう。

だが俺の場合は小学校が終わったあとにシャドウの反応を感知して現場に向かった訳なので服は制服のまんまで家にも帰っていないのだ。

尚哉「お、おう、そ、それじゃあな」

そして、電話を切り耳からケータイを離す。

やばい…電話越しでもはやてから黒いオーラを出していたのがわ

かる。これは実は道に迷っちゃったんだ、とか言っても信じてくれないな。

となると、ここまで遅くなってしまった理由と証拠を持って帰った方がいいな。

ここで2つ重要なことを教えておこう。

まず1つははやてに関してのことだ。はやては2年前の事故が起きていた時の記憶がない。そう言うことで俺ははやてに気づかれずにシャドウを討伐しなければならぬのだ。

そして2つ目は今、俺が置かれている状況についてだ。今俺ははやてに半強制的に聖祥大付属小学校に入学している。そしてなのは達と同じクラスで学校の時は無口でいるのだが、2人だけ近づいてきた人物がいた。1人はこの原作の主人公の『高町なのは』そしてもう1人は…

??? 1「じゅ、獣医専門の病院って確かここらへんなんだけど…どどうしようわからない」

??? 2「落ち着くんだったのは、慌ててもなにも始まらない」

??? 3「勇翔の言うとおりよ。まず落ち着きなさい」

??? 4「それに…どうゆう時はまわりの人に聞いてみるのがいいと思うよ」

なのは「アリサちゃん、すずかちゃん、勇翔くん…うんー」

俺が言おうとしたが、すでに言われたが説明しておこう。

俺が言おうとしていた。彼の名前は『霧島勇翔』なのはとは幼なじみでなのはの父親である高町士郎さんから剣術を教えてもらっているらしく、勇翔となのはが昼に一緒に食べようと誘われ、断ったのが勇翔達によつて強制連行され、まあ、これぐらいなら俺が魔導士ということにはばれないだろうと思ひ、それからよく話すようになり、それから勇翔達とは友達関係になった。

そして、後の2人、『アリサ・バニングス』と『月村すずか』はなのはの友達で2人とも家庭が大富豪である。

あと、勇翔は微弱だが魔力を持っていて出来て念話ができるだろう。

勇翔「あ！あそこにいるの尚哉じゃん、おーい！」

どうやら勇翔が俺に気がついたらしくなのは達と一緒に駆け寄ってくる。

勇翔「よっ！尚哉、今から家に帰ろうとしてるのか」

尚哉「ああ、放課後すぐに図書館に行っていて本を読んでいたんだ」

勇翔達なら大丈夫だろうと思ひ平然と嘘をつく。

勇翔「流石が優等生は行動が違うよな」

アリサ「成績は優秀、スポーツ万能、おまけにかっこいいし、どこかの超人よ、あんだ」

「ア、アリスちゃん、落ち着いて」

「…こいつら、当初、俺に話しかけてきた目的忘れているのか。」

尚哉「そう言えばなのはが慌てていたが何かあったのか」

俺の質問にみんなはっとなっていた。…やっぱり忘れてたのか。

なのは「そ、そうだった、尚哉くんここらへんに獣医さんの病院があったよね」

尚哉「獣医の病院ならあっちに行ったら直ぐにあるよ」

俺は獣医の病院がある方向を指差す。

なのは「ありがとうね、尚哉くん、急いであるから理由は明日、学校で」

アリス「なのは、早くその子を獣医さんにみてもらわないと」

なのは「うん、それじゃあね、ばいばい」

そうやってなのは達は獣医の病院がある方向へと走っていった。

そして、1人になった俺は制服のポケットにはいつているディエンドを取り出す。

尚哉「ディエンド、今晚なのはがユーノからデバイスを渡されて魔法少女になるはずだ。そのための準備は整っているか」

「ディエンド」はい、心配無用です」

尚哉「さてと今晚からジュエルシート事件に武力介入を開始するぞ」

「ついで、運命の齒車が動き出した。」

開幕

そして時は流れて夜。

もちろん、家に帰った時にはやてからのお話があり、翠屋で何を買っただいこうか迷った末夕方になってしまったという理由とあれから本当に翠屋に行きシュークリームを小遣いで買ったことで、はやては黒いオーラを消してくれた。

はやてが黒いオーラを放っている状態ははやての後ろから般若がちらついて見えてしまう。正直怖い。

はやてを説得？したあと晩飯を食って今はリビングでテレビを見ながらくつろいでいる。

??? 力を……力を貸してください

そして、そのくつろぎはこの念話によって終わった。

尚哉（来たか……さて介入しますか…まあ、その前に）

俺は、はやての方へ目をやると、はやては辺りを見渡している。どうやらはやてにも届いたようだな。

尚哉「どうした？はやて」

はやて「あ、いやちょっと変な声が聞こえてきて」

尚哉「変な声か……よし！俺が家の辺りを見てくるよ」

俺はリビングから出て行き玄関のドアノブに手を当てる。

はやて「強盗やったらどつするん、尚哉くん何かあったら、私……」

尚哉「大丈夫だよ。それに俺が強いのはやても知ってるだろ」

はやて「……うん、わかった。尚哉くん、気をつけてな」

尚哉「了解、じゃあ行ってくる。」

そう言って、ユーノがいる病院に向かった。

家を飛び出した俺はユーノが入院している病院に向かっている。

原作通りならなのはもユーノの念話を聞いたはずだし急がないと。

ディエンド「っ！マスター、西2キロの場所にシャドウの反応あり
種類は…シャドウイーグルです」

尚哉「くっ！こんな時に」

しかも病院とは逆方向かシャドウ達が現れた。この出現は何か理由があるのか。

尚哉「ディエンド、ユーノがいる病院とシャドウがいる場所が入る
ように結界をはってくれ」

ディエンド「了解です………展開完了です」

そして、結界をはったことにより空が少し赤くなっている。

尚哉「よし、ディエンドーセットアップー」

そして俺の身体が青く光、さっきの服とは違いバリアジャケットとの姿になる。

尚哉「ディエンド、例のものを出してくれ」

ディエンド「追加防護服を展開します」

そして、また身体が光り出し、今度は黒いフードをきた姿に変わっていた。

なぜ今日のためにこの黒いフードを用意したかと言うとなのはに学校で会っているから、あのまま行くと俺が魔導師だとゆうことがばれてしまい、闇の書事件の時に色々めんどいになる。だからジュエルシード事件の時は黒いフードをかぶりながら戦うつもりだ。

尚哉「さてと服はこれで大丈夫だ。次は……」

俺は右腰にあるカードケースから3枚取り出し2枚をディエンドに挿入しスライドする。

ディエンド「カメンライド」

ディエンド「クウガ オーズ」

電子音がなりトリガーを引き銃口から2発の光弾が放たれ、その光弾は姿を変え。未確認生命体第4号と呼ばれた。『仮面ライダークウガ』とメダルを使い戦うライダーである、『仮面ライダー000(オーズ)』が現れた。

尚哉「クウガはなのは達を援護、オーズは俺と一緒にシャドウを殲滅、殲滅したら俺もなのは達の所に行く。」

クウガ「歩いていっていったら間に合わないぞ」

尚哉「大丈夫だ。このカードを使う」

俺は最後の一枚をディエンドに挿入しスライドする。

ディエンド「アタックライド」

ディエンド「フロート」

電子音がなりトリガーをひき放たれた光弾はクウガに当たりクウガの身体が浮く。

クウガ「お、俺の身体が浮いてる」

クウガは自分が浮いていることに驚いている。

尚哉「さっきのカードはフロートって名前で発射した光弾に当たった対象は空中を自由に動き回ることができるんだ」

俺はクウガにフロートのカードの効果を説明する。クウガも理解したようだ。

クウガ「よし、なら俺はもう行くぜ」

そう言うとクウガは空に飛びユーノがいる病院の方向に向かって

いった。

尚哉「さて、俺達も行くぜ。敵はシャドウィーグルだから空中戦になる」

オーズTTB「わかってるよ尚哉」

オーズはオーズドライバーから2枚メダルを抜き、違うメダルを入れて傾けてオースキャナを持ちメダルをスキャンする。

「タカ！クジャク！コンドル！」

「タージャードル！」

オーズはタトバコンボからオーズのコンボのなかで唯一飛行ができるオーズタジャドルコンボに変わった。

尚哉「オーズ、行くぞ！」

俺達は空へと飛びシャドウィーグル達がいる場所が目視できるようになってきた。

尚哉「そのシャドウ達、最初に言っておく！」

シャドウ達に近づきながら俺はいつもの台詞を言う。

尚哉「俺は……かーなーり！……強い!!……行くぜ!!」

台詞を決め俺達はシャドウィーグルの群れに突入した。

なのはSIDE

どうもはじめまして、高町なのはです。

私は突然頭の中に声が聞こえてきて、今日見つけたフェレットさんが心配になり、預けた病院に向かっています。

なのは「はあ…はあ…つ、ついた」

病院に着いたのはいいけどこれからどうしよう。

???「おーい、なのは」

突然、わたしの後ろから名前を呼ばれたので振り返ってみると。

???「はあ…はあ…やっと追いついた」

なのは「ゆ、勇翔くん!」

そこにいたのは私の家のお隣さんで幼なじみの霧島勇翔くんが右手に木刀を持っていた。

なのは「勇翔くん!? どうしたの? そ、そんな木刀なんか持って」

勇翔「どうしたはこっちの台詞だ。宿題やってたら、なのはが飛び出していくのが見えて、何かあったんじゃないかって思って、夜は危険だから護身用に木刀を持って急いで追いかけたんだ」

勇翔くんが来てくれたのって私のことを心配してくれたからなんだ。やっぱり優しいな勇翔くん。

勇翔「それはそうと、なのははどうしてこんな夜中にフェレットを預けた病院に？」

なのは「実は部屋にいたら頭に声が聞こえてきて、そしたらフェレットさんが心配になって」

勇翔「なるほどな……実は俺も頭に声が聞こえてきたんだ」

勇翔くんも聞いていたことに私は驚いた。

勇翔「頭に聞こえてきた声は気になるけど、今はフェレットの様子を見に行くんだろ」

なのは「あ、うん」

私と勇翔くんは病院の庭たら突然、空が赤くなった。

なのは「空が…赤くなっちゃた」

勇翔「いやな予感しかしない。フェレットの確認をしたら急いで帰るっ」

勇翔は赤くなった空を見て一層、警戒する。

そして次の瞬間、私達は有り得ない光景 を見てしまった。

いきなり病院の壁が壊れその中から学校の帰りに捨てたフェレットさんとそのフェレットさんを追う謎の黒い怪物だった。

怪物はフェレットさんに襲いかかり、それをフェレットさんはうまく避ける。

なのは「何なの？」

勇翔「1つわかることは、まじでやばいってことだ」

状況があまり読み込めない私とここは危険だと悟る勇翔くん。

そしてフェレットさんはこっちに気づき怪物の攻撃を避けてこちらに飛んでくる。

怪物はフェレットさんの後ろにあつた木に当たり動かなくなっている。

私は飛んでくるフェレットさんを私は捕まえる。

フェレット「来てくれたんですね」

なのは「しゃ、しゃべった！」

勇翔「なのは！今はそれどころじゃないだろ！」

なのは「う、うん！」

私は勇翔くんに空いている左手を掴まれて病院を後にした。

私達は病院からあの黒い怪物から逃げてきているが怪物は私を追ってきている。

勇翔「くそ！まだ追ってきてやがる」

勇翔は怪物がまだ追っつけてきているのを確認すると走るのを止め、怪物に向けて木刀を構える。

なのは「勇翔くん!?なにをする気なの!？」

勇翔「俺がこの化け物を足止めするからその間になのははそのフェレットを連れて逃げる」

フェレット「無茶だ!やめるんだ!」

勇翔「無茶は承知だ」

勇翔は怪物に向かって走り出し木刀を大きく振りかぶる。

だけど木刀は怪物に当たると同時に折れてしまいそして怪物は触手みたいなもので勇翔くんを吹き飛ばす。

なのは「勇翔くん!!」

私は勇翔くんの側に向かった。

勇翔「なのは、何してる...早く逃げろ」

なのは「勇翔くんを置いて行けないよ!」

そう言っている間にも怪物は私たちにとどめを刺そうと触手を上げる。

まだ、すずかちゃんやアリサちゃんや尚哉くんともっとお話したいのに、やりたいことや行きたいところもいっぱいあるのに、ここで死

ぬの？

私の中でやり残したことがいっぱい出てくる。そして私は…

なのは（誰か…：助けて…）

その瞬間、怪物は触手を私達目掛けて振り落とす。

私は怖くなり目をつぶったが痛みは来なかった。

不思議に思った私は目を開けて怪物の方を見ると…

??? 「はああああっ!!」

全身変な格好をした怪人さんが私達を襲おうとした怪物に蹴りをいれた光景だった。

怪人さんの蹴りをくらって後ろに下がる怪物、驚きの連続でわからないことだらけだけど1つだけわかることがある。それは…

??? 「君たち、大丈夫？」

この怪人さんは味方だということが。

??? 「君たち、ちょっと離れてて」

なのは「あ、はい」

怪人さんに言われた通りに私は倒れている勇翔くんを引きずって

少し離れる。

??? 「さて、始めるか、はあ！」

怪人さんは怪物に向かって走り出し怪物の触手をよけながらパンチやキックを怪物にいれていく。

なのは「凄い……」

フェレット「けど、封印ができないんじゃないあ、いずれあの怪人の方が不利になっていく」

なのは「それじゃあどうすればあの怪物を封印できるの？」

フェレット「これを起動させてくれればいいんだ」

そう言われて渡されたのは赤い玉。

なのは「どうすればこれを起動できるの？」

フェレット「今から言うことを繰り返して!!……我使命を受けし者なり……」

なのは「えっと……我使命を受けし者なり……」

フェレット「契約の元、その力を解き放て」

なのは「契約の元、その力を解き放て」

フェレット「風は空に 星は天に……」

なのは「風は空に 星は天に…」

フェレット「そして不屈の心は…」

なのは「そして不屈の心は…」

フェレット なのは「この胸に!!」

フェレット なのは「この手に魔法を!!」

フェレット なのは「レイジングハート！セット…アップ!!」

私は赤い玉を持っている手を掲げて赤い玉は輝き出す。

なのは「えっ!?何々?」

フェレット「落ち着いて！イメージするんだ!!その身を守る防護服と戦う為の杖の形を!!」

なのは「えつと……………取りあえずこれで!!」

その瞬間私は光に包まれその光が消えると聖祥の制服を改造したみたいな服と赤い玉がついた杖を持った私の姿だった。

フェレット「凄い…成功だ」

なのは「ふえええー!?嘘!」

私がイメージした通りの服を着ていたことに私は驚く。

勇翔「なのは…その服装、どうみても学校の制服を少し改造しただけだろ!!」

なのは「そんなこと言ったってすぐに思いついたのが学校の制服だったんだからしょうがないじゃん」

フェレット「2人とも今はそんなことより、思念体がこちらに向かってきています」

フェレットさんに言われて怪物がいる方向を見ると、怪物がこちらに向かって走り出していた。

???「君!!危ない!」

怪人さんに忠告されたけどすでに遅く、避けられる距離ではなかった。

だけど私の後ろから青い短剣みたいなのが3つ通り過ぎ怪物を連続で切り裂いて続いて青い玉が怪物に命中し怪物はひるむ。

???「…全く、くるタイミングがちょうどすぎますよ。な…ディエンド」

ディエンド「済まない待たせたな」

怪人さんの向いている方向を見ると黒フードを被った私達ぐらいの子が浮いていた。

尚哉SIDE

尚哉「急がないとな…」

俺はシャドウ達を殲滅したあとなのは達の元へ急いで向かっていった。

ディエンド「っ！マスター！膨大な魔力を感知、これは…」

尚哉「たぶん、なのはだろう。」

そう言っているとなのは達がいる場所が見えてきてなのはが思念体に襲われそうになっていた。

尚哉「ここで助けておくか」

俺はカードケースから1枚取り出しディエンドに挿入しそしてスライドする。

ディエンド「アタックライド」

ディエンド「ダガーファング」

周囲に青い短剣が現れ思念体目掛けて飛んでいき思念体を切り裂いていく。

続けてディエンドから魔力弾を放ち思念体に当てる。

クウガ「まったく、来るタイミングがちょうど過ぎますよ。この格好しているときはディエンドって呼んでくれ な…ディエンド」

危なかった…危うく正体がばれるところだった。

尚哉「悪いな。待たせた」

なのは「あなたは一体…」

尚哉「そうだな………ディエンドと言っておこつか」

フェレット「ディエンド…」

フェレット「いや、ユーノはこちらを警戒しているようだ。」

尚哉「さて、今は君があれを封印できるように弱らせなければな」

俺はカードケースから2枚 取り出し、1枚ディエンドに挿入しスライドする。

ディエンド「ファイナルフォームライド」

ディエンド「ク ク ク クウガ」

尚哉「クウガ、痛みは一瞬だ。」

クウガ「うっ！」

そうやって俺はクウガに光弾を当てるとクウガは突然身体が変形していきクワガタの形をした。ゴウラムへと変形した。

なのは「怪人さんが！へ、変形した!!」

勇翔「というか、人間離れしてる」

ユーノ「何なんだ、彼は…」

全員、驚いているが見事に意見がばらばらだな…てか、勇翔…居たんだ。

尚哉「行くぞ！クウガ!!」

クウガG「わかってる」

そして、手に持っている1枚をディエンドに挿入しスライドする。

ディエンド「ファイナルアタックライド」

ディエンド「ク　ク　ク　クウガ」

電子音が鳴り終わるとゴウラムになったクウガが動き出し、思念体を挟み上空に上がる。

その間に俺は右足に魔力を集中される。

そして、クウガはUターンしてこちらに急降下してくる。

それを見て俺は足に魔力を集中させて大きく上へと飛び、飛び蹴りを思念体に食らわせる。

尚哉「今だ！封印するのだ！」

なのは「え？は、はい！」

なのは「リリカルマジカルジュエルシード封印！」

なのはが封印魔法で思念体を封印し無事に終わるのであった

戦いが終わったあとクウガは消えた。

俺はジュエルシードに近づき手に持つ。

なのは「あの、それ、フェレットさんの大事な物なんですだから……」

尚哉「大丈夫だ、今回は取ったりしない」

そう言うとジュエルシードをなのはに渡しレイジングハートの中に保管される。

そしてなのはは、バリアジャケットを解除する。

なのは「これで…終わったの？」

ユーノ「はい、これで…大…丈…夫…」

なのは「フェレットさん!？」

その瞬間、ユーノは倒れる。

そして、遠くからサイレンの音がだんだん近づいてきているのがわかった。

俺はカードケースからカードを1枚取り出す。

尚哉「それじゃあ俺はここらで失礼するよ。あと君達も早くここを離れた方がいい。」

なのは「あの、それってどつゆつことですか!？」

俺はなのはが言っていることを無視してカードを挿入しスライドする。

ディエンド「アタックライド」

ディエンド「インビンジブル」

そして、トリガーを引くと俺はその場から姿を消し急いで家に戻った。

そして家に戻ったら、はやてに帰ってくるのが遅いと怒られたのは余談である。

なのはに足りないもの

なのはが魔法少女になってから翌日、俺は朝早く町が一通り見える高台にきている。

そこに気づかれないように結界をはり、右手には起動したディエンド、左手には飲み干した空き缶を持っている。

尚哉「それじゃあ、命中力の練習始めようか」

そう言うと俺は左手にある空き缶を真上にほり投げ、右手のディエンドで空き缶を連続で狙う。

ディエンド「1、2、3、4、5…」

そして、当たった回数をディエンドが数えてもらっている。

ディエンド「50、51、52、53、54、55…」

やばい空き缶が結構上に行ってるから狙いを定めるのが難しくなっている。

ディエンド「95、96、97、98、99、100!!そこまです!!」

終了の合図を聞いた俺は撃つのを止める。

その瞬間、空き缶は凄い速度で落ちてくる。

尚哉「っ!?こいつでラスト!!」

そう言つと俺は魔力弾を1発放ち、見事に当たりゴミ箱にはいる。
入ったのを確認した俺はデイエンドを待機状態に戻す。

尚哉「今回は何点なんだ？」

デイエンド「80点ぐらいです」

尚哉「俺もまだまだだな」

俺は高台を後し家へと戻った。

あれから、家に帰り朝食を食べて学校に行き今は教室にいる。

だが教室はいつもとは違い、ざわついていた。

勇翔「尚哉、おはよう」

どうやら、なのは達4人組ではなしていたが勇翔が俺に気づき手招きする。

俺は勇翔達のところに向かう。

尚哉「なのは、アリサ、すずか、おはよう」

なのは「アリサ、すずか、おはよう、尚哉くん」

尚哉「っで、」のざわつきようはなんかあったのか」

すずか「実は昨日の夜…」

すずかの話だと昨日の夜、車が獣医の病院にぶつかったり、道路がめちやくちやになっていたり、道路のご真ん中にクレーターが出来ていたり、奇妙なことが起きていたらしい。

…まあ、真実を知っているからわかるけどクレーターができたのはなのは封印のせいだ。

尚哉「確かに妙だな…実は事故じゃなかったりして」

そう言うとなのはと勇翔が一瞬焦ったの顔した。

アリサ「それじゃあ、尚哉は事故じゃないって言いたいの」

尚哉「いや、事故じゃないとは言い切れないけど、事故にしては奇妙すぎる。第一クレーターまでできているんだろ」

すずかとアリサは確かにという顔して頷き、勇翔となのはは焦りの顔が濃くなっている。

尚哉「そういえば、昨日、お前らその病院に向かったけど…何しに行ってたんだ」

すずか「実は…」

すずかの話だと昨日塾に行く途中に近道を使い行っていると突然なのはが走り出し追いかけてみるとフェレットが倒れていてそれで獣医の病院に行ったらしい。

尚哉「なるほどな、それで病院に…」

すずか「うん、だからあの子が心配で」

なのは「すずかちゃん、そのことについて実は…」

なのはの話によるとなのはは夜にフェレットが心配になりこっそり病院に向かい、病院の惨状を見て、後から追ってきていた、勇翔と一緒にフェレットを探していたらしく今はなのはの家にいるらしい。

アリサ「そうだったの、よかったー」

すずか「そういえば、あの子の名前って決まったの？」

なのは「うん、ユーノくんって名前だよ」

…フェレットにくんをつけるのはどうかと思うぞなのは…

そう思いながら今日も長い授業が始まった。

暇な授業が終わり今は放課後。

俺は一度家に戻ったのだがそのとき、はやてに晩御飯のお使いを頼まれた。紙に書いてある材料をみた感じ今日はチャーハンだな。

尚哉　なあ、ディエンド、1つ相談したいことがあるんだけど

ディエンド　マスターが私に相談してくるとはよほどのことですね

尚哉 実は…俺の決め台詞を考えているんだがなんかいい台詞ないか？この2年間、俺はかーなーり…強い!!でやってたけど、やっぱり、人の決め台詞を使うのはよくないかなーって思ったんだ

デイエンド ……真剣に聞いた私が馬鹿でした

そんな相談をしているとジュエルシードの反応を感じた。

デイエンド マスター！今はそんなどうでもいいことより、ジュエルシードの元に行きましょう

尚哉「そんなことないと思うんだが…けど今はジュエルシードだな。急ごう」

俺は急いでジュエルシードがある場所に向かった。

俺はジュエルシードの反応があった場所である、神社に到着しバリアジャケットを装着し結界をはり、目の前にいるものを見ている。

体調は2メートルも越える巨大な犬？がこちらを見て警戒していた。

先に動いたのは巨大な犬の方でこちらに飛びかかってくる。

それを俺は後ろに下がり魔力弾を当てる。

??? 「デイエンドさん!!」

俺は声が聞こえた方を見るとなのはとユーノと何故か勇翔がいた。

尚哉「君達は昨日の…」

なのは「私、高町なのはって言います。そっちの子が霧島勇翔くん
でこの子がユーノくんです」

尚哉「そうか…高町、この相手は俺だけで十分だ。下がっている」

助けはいらなと言われて戸惑うなのは、そこにユーノに何か言わ
れたらしく俺から離れた。

尚哉「さてと、さっさと片づけるか」

俺は魔力弾を撃ちながら犬に近づき左手に魔力を集中させる。

そして、犬の懐に飛び込み左手で犬の腹を殴り真上へと飛ばす。

勇翔「あんな…でかい犬を飛ばすなんて…」

ユーノ「ディエンドは左手に魔力を集中して強力な一撃を放ったん
だ。まだなのは達と同じ年ぐらいなのに…凄い」

俺は飛ばした巨犬にディエンドを向けて足元に魔法陣が現れる。

尚哉「ディメンジョン…バスター」

ディエンドから放たれた青い砲撃は空中にいる巨犬に直撃そのま
ま地面に叩きつけられる。

巨犬はかなり弱っている。次で決めるか。

尚哉「さあ、音楽の時間だ」

なのは達は俺が言ったことを理解できないのか首を傾げている。

そんなことを知らない俺はカードケースから7枚取り出しそのうちの4枚をディエンドに挿入しスライドする。

ディエンド「カメンライド」

ディエンド「イブキ アマキ ザンキ トドロキ」

トリガーを引くと光弾を4つ放たれた光弾は姿を変えて、トランプットを模した武器、音撃管を扱う音撃戦士、仮面ライダー威吹鬼と仮面ライダー天鬼、ギターを模した武器音撃弦を扱う音撃戦士、仮面ライダー斬鬼と仮面ライダー轟鬼が現れた。

なのは「ひ、光の玉がか、怪人さんに！」

ユーノ「召還魔法!? いや違う…」

勇翔「怪人達が持つてるのはトランプットとギター…なのか？」

俺は素早くカードを1枚ディエンドに挿入しスライドする。

ディエンド「カメンライド」

ディエンド「ヒビキ」

トリガーを引き光弾を放ち光弾は姿を変えていく。

そしてその姿は太鼓と撥を模した武器、音撃鼓と音撃棒を扱う音撃戦士仮面ライダー響鬼が現れた。

尚哉「さてお次は…」

俺はまた1枚ディエンドに挿入しスライドする。

ディエンド「ファイナルフォームライド」

ディエンド「ヒ ヒ ヒ ビキ」

尚哉「響鬼、痛みは一瞬だ」

俺はトリガーを引くと光弾が放たれ響鬼にあたり響鬼はヒビキアカネタカにファイナルフォームライドした。

ヒビキアカネタカ「キュオオオオオン!!」

ヒビキアカネタカは鳴き声をして巨犬に突っ込み、巨犬をひっくり返す。

尚哉「これで終わりだ」

俺は最後の1枚を挿入しスライドする。

ディエンド「ファイナルアタックライド」

スライドする。

ディエンド「ヒ ヒ ヒ ビキ」

ヒビキアカネタカ「キュオオオオオン!!」

すると、ヒビキアカネタカは鳴き声あげ、響鬼の音撃鼓に模したヒビキオンゲキコに変わりひっくり返っている巨犬の腹に張り付く。

尚哉「忘れてたがあれも必要だな」

俺はまたカードケースから1枚取り出しディエンドに挿入しスライドする。

ディエンド「アタックライド」

ディエンド「オンゲキボウ・レッカ」

電子音が鳴り響くと俺はディエンドを真上に投げディエンドは光だし銃から太鼓撥を模した武器、音撃棒・烈火に変わる

そして、音撃棒を両手に持ってヒビキオンゲキコが張り付いている巨犬の腹に乗る。

尚哉「音楽セッション…行くぞ!」

ドンドンドンドン、ドンドンドンドン…ドンドン、ドンドンドン!!

俺は烈火でヒビキオンゲキコを叩く。…すると、腹の底まで響くよ
うな。太鼓音が響いてくる。

斬鬼「俺達もやるぞ。」

轟鬼「はい、斬鬼さん」

斬鬼達は音撃震を装着し音撃弦を突き刺す。

ジャンジャラジャンジャン、ジャンジャラジャンジャン、ジャン
ジャラジャンジャン、ジャラジャラ!!

斬鬼達は聞いている全員の心が震わせるような、熱いギターを演奏
する

威吹鬼「僕達もいくよ」

天鬼「はい」

パラパラッ、パッパララァン！パラアラララッ、ランラン
ラァン!!

威吹鬼達も耳に残るようなトランペットの音色を奏でていく。

この太鼓、ギター、トランペットのセッションは続いていきそして

…

尚哉「はあっ！」

ドドン!!

俺は最後の締めめに、太鼓を思いっきり叩くすると巨犬は叫び声をあげて何故か爆発した。

そして、土煙がだんだん晴れてくるとそこにいたのはなんとモカワらしい犬とジュエルシードだった。

俺は烈火をディエンドに戻しジュエルシードの方へ向かっていく。

ジュエルシードの方は無事に封印できているようだ。

それを確認すると俺は響鬼達をカードへと戻した。

尚哉「ジュエルシード…回収完了…」

俺は封印したジュエルシードをディエンドの中に保管する。

なのは「ディエンドさん!?何を!？」

俺がジュエルシードを回収したことになのは達は驚く。

尚哉「ただ回収しただけだけど…なにか？」

なのは「それ、ユーノくんの大切なものなんです。だから…」

尚哉「大切なものねえー…だけど渡さないよ」

それを聞いて、ユーノと勇翔はこちらを睨んでくる。

勇翔「昨日は渡したくせに、今日は渡さないってか」

尚哉「あの時、言っただよ今回だけって」

それを聞いた瞬間、あっ!とした顔になる。

尚哉「後それと、高町、君には1つ足りないものがある」

なのは「私に…足りないもの？」

そう言っている間に俺はカードケースから1枚取り出す。

尚哉「君がそれに気づきそして出来たのなら渡してもいい。だけどそれができないのなら…ジュエルシードを集めるのをやめろ」

言い切るとカードをディエンドに挿入しスライドする。

ディエンド「アタックライド」

ディエンド「インビンジブル」

尚哉「それじゃあさようなら」

なのは「ま、待って！」

俺はなのはの言うことを無視してトリガーを引いて、姿を消しその場から離れた。

ジュエルシードを回収したあと、俺は晩ご飯のお使いを済ませ、今は家でのんびりくつろいでいる。

尚哉 ディエンド、1つ提案があるんだが…

ディエンド 提案って、また決め台詞のことですか？

尚哉 違うよ、実はホルダーでも付けてみようかなって思っ

ディエンド 何故今になってそんなことを？

尚哉 今日の戦いで、ファイナルアタックライドしてからディエンドを音撃棒・烈火に変えたじゃないか、それだと、カッコ悪いと烈火のときに他のライドカードを使えなくなるだろ

ディエンド 確かにそうですね。なら、マスターのホルダー作りは、晩ご飯を食べてから

尚哉 了解

そう言つとディエンドとの念話が切れる。

はやて「尚哉くん、二二にあるお皿とかあっちに持って行ってくれへんか？」

尚哉「ああ、今いく」

俺は立ち上がりはやてに言われた通り、皿を持って晩ご飯の準備をした。

晩ご飯を食べた後、俺は寝室でディエンドをいじくっていた。

はやては晩ご飯の後片付けをしている。俺も手伝おうとしたのだが、はやてに「尚哉くん、疲れてるんやろ、やったらゆっくり休んどいて」と言われた。

尚哉「…これでよし、ディエンド、後は頼んだぞ」

「ディエンド」了解です。マスター」

後の作業はディエンドに任せ俺は椅子に腰を掛ける。

尚哉「後は待つだけか」

はやて「何を待つだけなんや？」

そりゃあ、追加で作っているホルダーの完成待ちに決ま…って…る

…

尚哉「は、はやて!?いつからそこに!？」

はやて「ちよっと前や、お風呂が沸いたから呼びに来たんや、ノックとかしたんやけど返事が無かったから入ってきたんや」

尚哉「そ、そうだったのか、気がつかなかった」

はやて「それで、何が待つだけなん？」

尚哉「えっと、それは…その…」

まずい、現段階ではやてに俺が魔導師だってばれるのは極めてまずい。なんとか誤魔化さないと。

俺は頭をフル回転させた。そして行き着いた答えは…

尚哉「しゅ、宿題とか終わったから、後は風呂が沸くのを待つだけかって言ったんだ」

はやて「そうなんか、なら行くつか」

俺ははやてが乗っている車椅子を押しながら寝室を出て行った。

尚哉「いい湯だ」

はやて「そうやな」

今、俺達は風呂に入っている。

はやては足が不自由だからいつも俺と一緒に入っているのだが、俺が八神家に来たばかりの頃は顔を真っ赤にして気絶したことが何度もあったが、今では気絶はしなくなった。

はやて「それにしても、家に来た頃は尚哉くん、私と一緒に風呂に入ったらいつも気絶しとったな」

尚哉「そ、それは、はやてと一緒に入るのを意識してしまうから、それだ…」

はやて「尚哉くんは意識し過ぎなんやって」

気にしちまうんだよ、精神年齢が年齢だから。

尚哉「そろそろあがるつか、はやて」

はやて「うん、せやな」

そう言いつつ、俺達は風呂から出て行った。

風呂から出るときはやては足が不自由なために俺にお姫様だっこをされていてその時のやての顔は真っ赤だったのは余談である。

はやて「尚哉くんこれやらへんか。」

はやてが持っているのはゲームソフト。

尚哉「いいよ。」

はやて「ほなやろうか。」

俺とはやてはゲームをやり始めた。

数時間後…

はやて「…これでどないや!!」

尚哉「無駄無駄無駄無駄!!」

絶賛はまり中

そして数分後…

はやて「これで…終わりや!!」

尚哉「負けた!!」

はやてに負けました。

尚哉「まさか、最後の伏兵が看破されるとは…」

はやて「尚哉くんお得意の戦術やったから最後に伏兵があると思っ
たんや。」

尚哉「やつぱは戦術を変えた方がいいな。ってもうこんな時間か…は
やてもう寝よう」

はやて「うん、そうやな」

俺はゲーム機などを片付けはやてと一緒に寝室に向かう。

俺のいつも寝る場所なのだがはやての部屋であるそのためはやて
とは一緒に寝ている。

はやて「尚哉くん、お休み」

尚哉「お休み」

俺とはやてはベッドに寝転び、電気を消した。

覚悟

俺がジュエルシードを回収してから数日後、ジュエルシードの反応はあったがなのはが全部回収している。

理由はなのはの修行のため、このまま俺が取り続けねばなのはは強くならないのであえて無視している。

そして今、俺は深夜に発動したジュエルシードはなのはに回収させ、その帰りに使うであろう道に飛行魔法で待ち伏せしている。

そうしているとなのは達がやってきた。

なのは姿を見れば一目瞭然で疲れているのがわかる。

その証拠になのはのデバイスであるレイジングハートを引きずっている。

その状態を見てユーノや勇翔が心配している。

さてと、そろそろ声をかけた方がいいな。

尚哉「こんばんわ、高町なのは」

俺が声をかけるとなのは達は前、後ろ、右、左、下、右、左、の順に辺りを見渡している。

…お前ら…上にいるって言う発想はないのか、それと下にいたら、怖いわ!!そいつ絶対変態だろ。

尚哉「上だ、それと下にいたら怖いわ!!」

そう言うと、なのは達は俺に気づき、俺は道路に降りていく。

なのは ユーノ 勇翔「ディエンド(さん)」

尚哉「久し振りだな、高町なのはとその他2人」

ユーノ 勇翔「その他2人ってなんだよ!!その他って!!」

その他2人と呼ばれたユーノと勇翔は俺に怒鳴り、なのははそれを聞いて苦笑いする。

尚哉「それはいいとして、高町なのは、君に足りないものはわかったかな」

なのは「それは…その…」

勇翔「そんなものが無くてもなのははやっていける」

尚哉「確かに今のところはなくても平気だが…いつかは後悔するぞ」

ユーノ「ならディエンド、なのはに足りないものっていったい何なんだい」

尚哉「いいだろう、高町なのは、君に足りないものは…」

その場にいる全員が俺を見る。

尚哉「覚悟だ」

なのは「覚悟？」

尚哉「そつだ。高町はいつたい何のためにジュエルシードを集めている」

なのは「それは…ユーノくんのお手伝いで…」

尚哉「やはりな、だから君は覚悟がないんだ」

その瞬間、黙っていた勇翔が木刀で俺に切りかかり俺は空中に逃げる。

尚哉「いきなり攻撃するなんて危ないな」

勇翔「黙っていらやあ好き勝手いいやがって!!」

なのは「勇翔くん、落ち着いて」

ユーノ「なら、君は何のためにジュエルシードを集めているんだ」

やっぱりその質問がきたか…まあそれぐらい予想できている。

尚哉「別にジュエルシードには興味は無い、だがこの町でジュエルシードのような危険なものがあれば、俺はそれを回収する。それだけだ」

そう言いながら、俺はカードケースから1枚取り出す。

ユーノ「あなたが、ジュエルシードを集める理由はわかりました。

ですがそれならなのはにジュエルシードを渡してもいいはずだ。」

「尚哉」その質問だが…残念ながら時間切れだ」

俺はカードを左腰についている新しく作ったホルダーに挿入する。

「アタックライド」

「インビンジブル」

俺は姿が消えはやての家に帰った。

新たな出逢い

翌日、俺はジユエルシードが発動するまで家でゆっくりしようとしていたのだが…はやてに頼まれて日用品などの商品を買いに出かけてその帰り道。

尚哉「さて、帰ったらゆっくり休む…ん？あれは…」

俺の目に止まったのは平凡なグラウンドなのだがそこでサッカーをしているが片方のサッカーチームがざわついている。

尚哉「なんかあったのか？」

そう遠くで見ているとざわついている中の1人が俺に気づき近づいてくる。

そして、近づいてくる者は俺がよく知っている人物だった。

勇翔「尚哉！いいところに！」

尚哉「勇翔!? どうした？ そんなあわてて…」

勇翔「話は後ですからちょっとだけ手を貸してくれ」

そう言いながら勇翔は俺の手を持ちグラウンドの方へ連れて行かれた。

……

尚哉「…どうしてこうなった…」

勇翔「ごめんな、無理やりこんなことさせちゃまって」

なのは「尚哉くん、勇翔くん、頑張ってる!!」

アリサ「負けたら許さないわよ!」

すずか「2人とも頑張ってる!」

…なぜこんなことになっているのか状況を説明しておこう。

今日、このグラウンドでなのはの父親、高町士郎さんがコーチ兼オーナーをしているサッカーチームが練習試合のしている。勇翔達、仲良し4人組+もうすぐ珍獣になるフェレットことユーノがこの試合を見に来ていた。

ところが前半終了後、フォワードの2人の調子が可笑しかったため
士郎さんが調べてみると…

2人とも足に怪我をしていてフォワード2人はそれを隠していた
らしい。

もちろんそれを知った士郎さんはフォワード2人をベンチに下げ
たのだが、控えの選手がおらず、応援席にいた勇翔と偶然通りかかっ
た俺がフォワードとしてグラウンドに立っているわけだ。

状況説明をし終えた瞬間ホイッスルがなり後半戦が始まった。

今、こちらがボールを持ってパスをしながら相手陣地に攻めてい
る。

そして俺にパスがまわってきた。

そして、ボールを取った俺は相手陣地へとあがっていく。

相選A「ディフェンス!!そっちに行つたぞ!」

相手選手のひとりがディフェンスメンバーに指示し3人がこちら
に向かってくる。

尚哉「…甘いな」

俺は向かってきた相手選手を難なく突破する。

相選B「抜かれただ!!」

相選C「あいつ人間か!？」

：今、失敬なことをいった奴がいたが、見た目はそこら中にいる小学生だが、やっていることが違うのだから（シャドウ討伐など）当然だろう。

尚哉「勇翔!!」

俺はノーマークでゴール前にいる勇翔にパスを出した。

勇翔「任せろ!!うおおりやあああつ!!」

勇翔は俺がパスをしたボールを全力で蹴り、相手ゴールに入った。

ここで一つ言っておく勇翔は小学生とは思えない、大人顔負けほどの運動神経と機械の知識を持っている。

なぜ機械の知識を持っているかと言うと両親が機械の専門家だったらしい。

俺はだつたと言ったが勇翔の両親は勇翔が幼いときに亡くなっていて勇翔は家で1人暮らしなんだがいつも高町家に世話になっているらしい。

勇翔「よーし!このまま一気に攻めていこつぜ!!」

尚哉 味選全「おおー!!」

勇翔の過去はこれぐらいにして試合に集中しますか。

そして時間は過ぎていき15対0というなんとも歴史的圧勝で練習試合は幕を閉じた。

その後、なのはの両親が経営している。喫茶翠屋でなのは達と同じテーブルでケーキを食べている。

アリサ「それにしても、あんたたち、どこからあんな力出してるわけ」

なのは「私には絶対無理な領域だよ」

なのは「お前も魔法のことに関しては人のこと言えないと思うぞ。」

すずか「それに勇翔くん、一時的だけど急に動きがよくなった時あったよね」

確かに勇翔の奴、ピンチの時とかどっかの大人気なロボットアニメのSEE みたいに動きがよくなってたからな…まあ、なんとなくどうしてそうなったのかわかるから、ちょっとだけだからか。

尚哉「すずか、その原因はなのはの応援だと思っぜ」

アリサ「どうしてそう言い切れるのよ」

尚哉「それはな、勇翔がピンチの時、なのはが「勇翔くん頑張って!!」って聞こえてきた瞬間、急に動きがよくなってたからな」

すずか「なるほど」

アリサ「あれは、あんたたちの愛の力って訳ね」

その瞬間、なのはと勇翔は湯気を出すほどに赤くなり。それを見ている俺達は少し笑っていた。

勇翔「そ、そう言えば尚哉、手に持ってるの何だ？」

すぐに元に戻った勇翔が俺が持っている袋が気になって指を指す。

尚哉「ああ、これは、今日、頼まれて買いにいった、日用品……」

ここで俺は重大なことを思い出し顔から冷や汗が流れる。

なのは「な、尚哉君!?急に汗なんてかいてどうしたの!？」

尚哉「じ、実は……」

その瞬間、俺のポケットから着信音が聞こえてきてケータイを取り出す。もちろん電話の相手は、はやてだ。

俺は恐る恐る電話に出る。

尚哉「も、もしもし、は、はや……《尚哉くん……一体どこで道草食ってるん?》……い、いやこれには訳があつてな」

やばい、電話越しだが怒ってるのがわかる。

はやて《早よ帰ってき、帰ってきたらお話やからな》

そして、電話が切れ、俺はケータイをポケットに入れる。

やばい…身体が恐怖で震えてやがる。

勇翔「尚哉…」

勇翔は何かを察したのか俺にこういった。

勇翔「死ぬなよ」

尚哉「…当たり前だ」

俺は椅子から立ち上がり急いで家へと走り出した。

尚哉「やばい…まじで早く帰らないと！」

俺ははやてが待っている家に急いでいる。

理由は、はやてのお話は間違いなく避けられないだろう。そうなる
と、俺にできることはこれ以上遅くならないために急いで家に帰るこ
とだ。

尚哉「!？」

だが俺は足を止めてしまう信号などで止まったわけでもなく、シャ
ドウの気配を察知したわけでもない。ただ…

尚哉「なんかあっち、騒がしいな…ちょっと行ってみるか…」

俺はざわざわしているのが気になり騒いでいる方へ向かってみる

と…

不良1「これを返して欲しかったら力づくで取るんだな」

少年「それは小恋の大切なものなんだ、返せ！」

そこでみたのは3人の不良と2人の黒髪の男の子と小麦色の髪をした女の子小恋と言っらしいが3人の不良に絡まれていた。

現状で見るに不良が持っているヘアピンは女の子の大切なものでそれを不良が奪って男の子はヘアピンを取り返そうと必死に立ち向かっているが返り討ちあって怪我をした。そんな所だろう。

小恋「義之、もういいよ！これ以上やったら義之の身体が！」

小恋と呼ばれた女の子は必死に取り返そうとしている。義之と呼ばれた男の子を心配する。

義之「大丈夫…絶対に小恋の大切なものを取り返すから」

義之と呼ばれた男の子はそう言っているがはっきり言って立つのがやっとだろう。

尚哉（…ごめん、はやてもう少し帰るの遅れそうだ）

俺は心の中でため息をつき不良達と義之の間に割り込む。

不良1「ん？なんかようか、ガキ」

不良の1人が俺に気づきこちらを向く。

義之「君は…」

義之もこちらを見ている。

尚哉「ねえ、お兄さん達、こんな男の子をいじめて何か楽しいの？
というか恥ずかしくないのか？この子の大切なもの取ってその男
の子をいじめて」

不良1「このガキ!!そんな言葉二度と口にできないようにしてや
る」

俺の言ったことに腹を立てた不良が殴りかかってくるがそんなも
の俺に当たるはずが無いので難なくよけて男の子の近くによける。

小恋「あの、その…」

尚哉「はい、これ…君の大切なものだろ」

そう言いながら俺は不良に背を向き、小恋にさっきまで不良が持つ
ていた小恋のヘアピンを返す。

それをみて不良もそして義之や小恋もいつとりかえしたのかと
びっくりしている。

不良1「っ！てめえ!!よそみしてんじゃねえ!!」

不良達は驚いていたが1人が俺に襲いかかる。

小恋「あ、危ない!!」

だが俺は後ろからきている不良にカブトの回し蹴りのように回し蹴りしてわき腹にはいりその不良は2メートルぐらい飛んでいき白目を向いて気絶した。

あの後不良達は気絶した不良を連れて血相を変えて逃げていき、事態はこれ以上被害を出さずに終わりを迎えた。

尚哉「これで一件落着だな、おい、怪我大丈夫か？」

俺は怪我している男の子に近づき怪我の具合を見る。

義之「これくらい大丈夫で…うっ!!」

小恋「義之！無理しないで！」

尚哉「義之くんで名前あってるよね。はつきり言って直ぐに手当てしたほうがよさそうだ。俺が君のいえまで運ぶから家がどこにあるか教えてくれないか」

小恋「えっと、私達のお家は初音島にあるんです」

尚哉「初音島か…ここからじゃ、1時間は間違いなくかかるな…」

初音島…俺やはやて達が住んでいる海鳴市と橋で繋がっている島、初音島は少し特殊な場所です1年中、桜が吹き荒れている。そしてその初音島には海鳴市に繋がっている橋を渡るか船着き場に行つてフェリーに乗るかしか行けない。

尚哉「このままだと、義之くんの傷口から菌が入るな…しょうがない、俺の家で手当てしよう、それでいいな？」

小恋「で、でも…」

尚哉「でもじゃない、行くぞ」

小恋「…うん。」

俺は義之の担ぎながら家へと向かった。

修羅の門と初音島となのはの覚悟

義之を連れて数分後、はやてがいる家についたのがいいが…

義之「ねえ…」

尚哉「な、なんだ、よ、義之くん（…）」

義之「ド、ドアから黒い何かが出てきているんだけどさ、気のせいだよな」

尚哉「いや、気のせいじゃないから」

俺達は家の前で立ち尽くしている。理由は玄関から黒いオーラがにじみ出ているふつつのドアが修羅の門に見えてしまう。

これから察するにははやてはかなり怒っているのがわかる。

だが、このままだとなにも始まらないので俺は…

尚哉「ここで立ち尽くしていてもしょうがない…逝こっ!!」

義之「なんか、字が間違ってるよっな」

…義之くん気にするな。

俺は黒いオーラが出ているドアノブに手を当てその扉を開け中
はいると…

はやて「オカエリ…オソカッタナ、ナオヤクン?…」

そこには般若がいた。

尚哉「た、ただだ、ただだだ、ただいま、は、はやて」

やばい、恐怖で心の底から震えてやがる。

後ろの2人も震え上がってるのがわかる。

尚哉「は、はやて、お、お説教は夜に聞くから今は義之くんを手当てしないと行けないから救急箱持ってきてくれないか？」

はやて「義之くん？っ！その子、怪我してるやん！直ぐに救急箱を持ってくるから尚哉くんはその子達をリビングに案内して！」

はやてはどうやら気づいていなかったらしく義之の怪我をみて血相を変えて救急箱を探しに行き、俺は義之達を連れてリビングに向かった。

はやて「はい、これで終わり」

小恋「何ともなくて良かった…」

義之達の手当てが終わり安心する女の子、はやてにはなぜ義之が傷だらけなのかと言うことは手当てしている最中に話した。

義之「あの、怖い男から小恋の大事なもの取り返して、それから俺の手当てまでしてくれてありがとう」

はやて「困った時はお互い様や。そう言えば自己紹介がまだやったな、私の名前は八神はやて、よろしゅうな」

尚哉「俺も言ってなかったな、浅倉尚哉だよろしく」

義之「それじゃあ次は俺だな、桜内義之です。呼ぶときは義之でいいです。最後は小恋」

小恋「あ、うん、月島小恋（ここ）です。義之と一緒に名前を呼ぶときは小恋でいいです」

はやて「義之くん小恋ちゃんやな、それで、義之くん達ってどこら辺に住んどんの？」

小恋「初音島です」

はやて「初音島ってこの町の橋から行ける、1年中桜が咲いてる、あの初音島？ならなんで海鳴市に…」

小恋「はい、実は義之が「本島の方へ行ってみない」って言われてこっちに来たんです」

要するに義之の提案で海鳴市に来たが運悪く不良に絡まれたという話か。

はやて「義之達の両親も心配してるやろっしそろそろ家に帰ったらどうじゃ？…尚哉くんもついて行くみたいやし」

尚哉「よくわかったな、俺がついて行くってこと」

はやて「だって帰ってきたとき」お説教は夜に聞くから「って言う

てだから義之くん達を家、送り届けるんがわかったからな」

さすが、はやて、俺が考えてたことが半分くらいわかってるよ。

尚哉「まあ、はやての承諾も得たことだし、日が暮れる前に送り届けるか、行くぞ」

はやて「尚哉くん、行ってらっしゃい」

尚哉「行ってきます。はやて」

俺は義之達を連れて初音島へと向かった。

歩き始めること1時間は経過しただろうか今は橋を越え初音島にいる。

始めてきた初音島だがかなり美しいと俺は思う。

小恋「あの、尚哉くん」

尚哉「どうしたんだ？小恋」

小恋「はやて、車椅子に座ってたけど、足どこが悪いの？」

義之「俺も少し気になってたんだ」

やっぱり小恋達、気になるよな。

尚哉「はやては生まれつき原因不明の病で足が不自由だったらし

い
」

義之「だったってことは詳しくは知らないの？」

尚哉「ああ、俺がはやてと会ったのは2年前…はやての両親が亡くなった次の日だったから」

小恋「亡くなっただってそれって！」

尚哉「…2年前、ニュースで見たことあると思うけど、あの大事故にはやてもはやての両親も…そして、俺もあの大事故の現場に居たんだ」

小恋「尚哉くんごめんね、つらいこと聞いちゃって」

はやての事情を聞いて小恋は落ち込む。

尚哉「…確かにあの大事故が起きたって言う過去はもう変わらない。…でも、明日は…未来は変えていけるだから、俺は前へと進んでいくんだ」

小恋「…尚哉くん、すごいよ、そんなこと考えられるんだから」

だてに精神年齢が高校生だからな。

それから歩きながら喋っていると公園らしきところについた。

義之「この公園、家の近くの公園だ」

尚哉「義之、家が近いんならここから家に戻るか？」

義之「そうだね、もうここまで来れば大丈夫だから、今日は小恋の大事なものを取り返したり、怪我を手当てしてくれてありがとう。それじゃあ、いつかはやての家に遊びに行くから」

尚哉「いつでも遊びに来いよ」

そう言って義之達は腕を振って義之達の家があるであろう方向に走っていった。

尚哉「…いったか…さて、ジュエルシードはまだ発動してないし。それにせっかく初音島に来たんだ。噂になっている願いが叶う桜の木でも見に行きますか」

俺は噂になっている桜の木がある場所に向かった。

俺は願いが叶うと言われる桜の木に向かって獣道らしきところを歩いていると、辺りには何もなく、1本だけ、さっきまでみてきた桜の大きさが違う桜の木が立っている。

俺はそれが願いが叶う桜だと思い近づき桜に手を当てる。

尚哉「っ！こいつは…」

俺が桜に手を当て感じたもの、それは、悲しみ、怒り、嫉妬などの負の感情だった。

尚哉「…ディエンド、」の桜お前ならどっと思っ」

ディエンド」そうですね、この桜は負の感情に満ち溢れています、この桜が本当に願いを叶える桜ならば、いずれその負の感情が原因で何か起きなければよいのですが…」

尚哉「そつだな…よし！家に帰るとする…」弟くん！何処にいるの!?いたら返事して!!」「っ！な、何だ!？」

俺は帰ろうとしたら後ろから女の子の大声が聞こえてきて後ろを振り向く。

そこには、大きな桜色のリボンと前髪のアホ毛が特徴の女の子とその女の子の妹だろうか髪が球のように2つまとまった女の子がそこにいた。

その2人は多分、あの子たちの弟を探しているのがわかる。

女の子1「弟くん…一体どこに行っちゃったの…」

女の子2「お姉ちゃん、きつと見つかるよ」

お姉ちゃんと呼ばれた女の子は弟が見つからず今にも泣き出しそうになりその女の子の妹だと思っ女の子は慰める。

女の子2「あそこにいるあの子に聞いてみよっよ。あー、すみません」

尚哉「どうしたんですか」

女の子1「実は私達ある男の子を探しているんですけど何か知りませんか」

尚哉「特徴とかがわからないからちょっとわからないかな。一応、名前も教えてくれれば助かる」

女の子1「ごめんなさい、ちょっと唐突すぎて…えっと、髪は黒くて君と同じ年ぐらいの子なんですけど…名前が義之って言うんです」

…あれ？ついさっき公園で別れた義之の名前が出てきたんだが…気のせいかな…

尚哉「あの、もしかしてだけど、その子の名前って桜内義之って名前前で、そして友達に月島小恋って名前の女の子がいたりする？」

そう言った瞬間、どうやらあたりだったらしく2人とも驚いた顔をしてこちらを見る。

女の子1「っ!!弟くと会ったの!!今どこにいるか教えて!!」

尚哉「義之なら、今頃家に帰ってると思いますよ。現にさっき、公園で別れましたから。」

女の子1「本当!?そうだったら急いで帰ろう」由夢(ゆめ)ちゃん

女の子は急いで義之がいるであろう家に向かう。

由夢「お、お姉ちゃん!あ、あの、お騒がせしてごめんなさい。それじゃあ私も急いでいるので。」

その女の子、由夢だったかな、その子も先に家に向かった多分姉だろ。女の子を追いかけていった。

そして周りは俺以外の人は居なくなり静かな時間が過ぎていく。

「っ…ディエンド!!この魔力って!」

ディエンド「間違いません、ジュエルシールドが発動しました!」

さっきまでの静けさを打ち消すようにジュエルシールドが発動し俺は首にぶら下げている。ディエンドを持ち起動の合い言葉を言う。

尚哉「ディエンド、セットアップ!!」

その瞬間、俺の周りから青い光が輝きその輝きが消えると俺は大空へと飛び上がりなのは達がいるであろう場所に向かった。

初音島から離れ海鳴市に戻った俺が目にしたのは、街を覆い尽くすような大樹が街を破壊していく光景だった。

尚哉「街が…早くなのは達の元に急がないと、それにジュエルシールドがどこにあるかわからないし、ディエンド、エリアサーチを使う。ジュエルシードを見つけたら教えてくれ」

ディエンド「わかりました。マスター」

その瞬間俺の周りから青い玉が4つ現れ四方に飛んでいった。

尚哉「さて、なのはは…いた!」

俺はなのはを見つけなのはがいる高いビルの上屋上に降りた。

そこには、バリアジャケットを身にまとっている。なのはといつものメンバーがそこにいた。

勇翔「っ！ディエンド!!」

勇翔がいち早く俺に気づき名前を叫ぶ、叫んだことでユーノやなのはも俺がいるのを認識する。

尚哉「…高町なのは、ジュエルシードを封印しないのか？」

なのは「っ！」

なのはは構えていたレイジングハートをおろしてしまっ。

尚哉(このジュエルシードはなのはに封印させようとしたが、しようがない俺がやるか)

俺はそう思いつつカードケースから3枚取り出しそのうちの1枚をディエンドに挿入しスライドする。

ディエンド「カメンライド」

ディエンド「キバ」

俺はトリガーを引き光弾が放たれその光弾は仮面ライダーキバへと姿が変わる。

尚哉「もういい、俺がやる」

そう言って1枚、カードを挿入しスライドする。

デイエンド「ファイナルフォームライド」

デイエンド「キ キ キ キバ！」

尚哉「キバ、痛みは一瞬だ。」

そう言って俺は光弾を放ちキバにあたり、キバは弓へと姿を変え、キバのファイナルフォームライドの姿『キバアロー』へとフォームライドしデイエンドを一旦待機モードに戻しキバアローを持つ。

そして、最後の1枚をホルダーへと挿入する。

「ファイナルアタックライド」

「キ キ キ キバ」

俺はキバアローを引きエリアサーチで見つけた、ジュエルシードのある場所に狙いを定める。

キバット「キバっといくぜ!!」

キバットが決め台詞を言うと俺はキバアローの矢を発射しジュエルシードがある場所に目掛けて飛んでいきそして…

尚哉「ジュエルシード…封印完了…」

ジュエルシードがあった場所から光輝き、大樹が消えていった。

ジュエルシードが封印されてディエンドの中に保管され一安心した俺は後ろを振り向きなのはを見る。

尚哉「さて…なぜジュエルシードが発動していたのに封印をしなかったのかな、高町なのは」

なのは「それは、その……私、ジュエルシードの持ち主に気づいていたんです。でも、気のせいだと思って。それで、それで…」

なのはは顔を伏せて、声は小さくなる。

尚哉「…なるほどな、お前はこの光景を見て『こうなる前に止められたかもしれない』とでも、思っていたのか」

なのは「っ！…はい、その通りです」

尚哉「…高町なのは、おまえに問う。今日の光景を見て、何のため魔法を使いジュエルシードを集める。そこにいるユーノのお手伝いの為か？…それとも…他の別のためか？」

俺がなのはに話しかけて数分、なのはは今まで伏せていた顔を上げこちらを見つめる。そしてその瞳は強い覚悟を持った瞳だった。

なのは「……私が、私がジュエルシードを集めていたのはユーノくんのお手伝いだったけど、これからは私の意志でジュエルシードを集めます」

なのは「これからは私の精一杯じゃなく、全力で……もう、今日みたいになこんなことを起こさないために」

尚哉「……」

俺はなのはの言葉を聞きながら鋭い目でなのはを見る。だが、なのははそれに臆することもなく俺を見つめている。

尚哉「…どつやら、魔法を使う覚悟を見つけたようだな。ならば…」

そう言って俺はディエンドからジュエルシードを1つ取り出しなのはに渡す。

なのははいきなりジュエルシードを渡されて驚いたがすぐにさっきまでの冷静さを取り戻す。

尚哉「そのジュエルシードはお前が覚悟が出来た。その祝いだと思ってくれ」

なのは「あ、ありがとございます。ディエンドさん」

尚哉（さてと、今日は引き上げますか）

そう言っつていつも通りカードケースから1枚、カードを取り出す。

勇翔「あっ！そう言えば、ディエンド!!お前、ジュエルシードをもっ1つ持ってたよな」

今まさにこの場から姿を消そうとしたのだが勇翔が俺がもっ1つ持っていることを思い出しなぜ渡さないか問いつめてきた。

尚哉「そうだな…時がきたら渡そう…さらばだ」

そう言っつて俺はカードをホルダーに挿入する。

「アタックライド」

「インビジブル」

俺は姿を消しその場から離れた。

ゴールデンウィーク

なのはが覚悟を決めてから1週間ほどがたった。

この1週間ほどにジュエルシードの反応はあったが無視した。なぜなら、なのはとなのはのライバル…まあ、最終的に友達になる『フェイト』の初めての対立だ。流石にそこは邪魔したら悪いし無闇に登場してたら2人とも強くないからあえて介入しなかった。

そして、今日は学生達にとって嬉しい連休、ゴールデンウィークである。

そのゴールデンウィークに俺は何をしているかということ…

尚哉「…なるほどこのカードにはそんな効果があるのか」

なぜカードなんかを見ているかというと、俺ら八神家（一応、俺も八神家に居候なので八神家の一員）は家の主であるはやては足が不自由なため、いつも、ゴールデンウィークは家でごろごろしているわけで、俺は自室（はやての部屋でもあるが）そこでディエンドのカードリッジの整備などをして、今はバリアジャケットから外したカードケースから中のカードを見ている。

一応いっておくが、ディエンドは既に待機モードにしてあるからはやてにはばれない。

…話は変わるが…

尚哉「…暇だ」

「ゴールデンウィークだからか友達は旅行などに行っているし俺が出来ることと言えばはやてのお手伝いぐらいだ。」

はやて「尚哉くんちょっと来てくれへんか」

リビングからはやてが俺を呼び待機モードのディエンドを持って自室から出る。

はやて「尚哉くん、ちょっと昼ご飯の材料を買ってくれへんか」

そう言っちはやては俺にエコバックと買い物リストを差し出し俺はそれを受け取る。

尚哉「了解、それじゃあ行ってくる」

はやて「いつてらっしやい」

はやてSIDE

はやて「いつてらっしやい」

私の名前は八神はやて、年齢的には小学3年生です。

なぜ年齢的に言っているかというところは生まれつき足が不自由で学校などに行かれへん身体なんです。

そのため私は両親に介護されとったんやけどその両親も2年前に亡くなってしもつて親戚も居なくて天涯孤独やったんやけど...

その孤独を救ってくれたんが今、家で居候している。浅倉尚哉く

ん。

尚哉くんは私の両親が亡くなった事故に巻き込まれて私と一緒に病院に運び込まれて、あの時は辛いことや悲しいことを溜め込んで私に優しくしてくれて、尚哉くんは名前以外、記憶喪失で石田先生の提案で尚哉くんは家で居候する事になってそれから尚哉くんとの2人暮らしなんやけど…

この頃、尚哉くんを見ただけで何故か胸が熱くなる。…まあ、いつかこの熱くなる理由がわかるかな。

はやて「さてと、これで洗濯物の干すんはこれで終わりや、自室でゆっくりと」と」

そう言っ私は車椅子を操作して私の部屋に向かう。

はやて「？、机になんかおいてある…何やるこれ？」

私の部屋…いや、尚哉くんも一緒に部屋やから私達の部屋に着いた私は机に置いてあるものが気になり近づいて手に持ってみると、何かのカードケースの形をしたものやった。

はやて「カードケース？…けど尚哉くんがこんなカードケース持ってるってなんかみたことないし…これ開きそうやな…よし」

私は興味本意で尚哉くんのもものと思われるカードケースを開け中から数枚取り出す。

はやて「えっと、何々…『アブソリュートゼロ』？『アーストウアース』？『インビンジブル』？何や技の名前が書いてあるカードやな」

私はこのカードを見ているとますます興味を持ち他のカードも目に通すのであった。

尚哉 SIDE

俺ははやての頼みで買い物に行き頼まれたものを買って帰り道に海沿いの道を歩いている。

俺は足を止めて海がある方向を見ると、なんとも美しい海とその海の先にある初音島、その景色がなんとも美しかった。

次に初音島に続く橋を見ると車が渋滞を起こしているのが目にかかる。

理由は初音島は枯れない桜で有名だから観光地になっていてそれを見にくる人がいっぱいいるのだ。ゴールデンウィークなどの連休になったら見にくる人はたくさんいるのは当たり前だろう。

尚哉「初音島か…よし！決めた!!」

俺は良いことを思いつき急いで家に帰ろうと走り出す。

ディエンド「っ！マスター!!シャドウの反応です。ここから少し離れていますけど数は1つ、それとこの反応は私のデータにはない反応ですからおそらく新種のシャドウです」

尚哉「くっ！急ぐぞ！反応があった場所を教えてください」

ディエンド「了解です。マスター」

そう言ってディエンドは目的地を表示し俺は目的地に急いだ。

シャドウの反応があった場所に着いた俺は結界をはり、シャドウがいる方向を見ると言葉を失った。

そこにいたシャドウはいつものように戦っているスパイダーやイーグルとは違い体長は軽く30メートルは軽く超えていてそのシャドウは四足歩行でその上に身体を守るためにつくられたであろう頑丈そうな甲羅……ここまで言ったらこのシャドウが何に似ているかは一目瞭然だった。

尚哉「亀だな」

ディエンド「亀ですね。このシャドウの名前はシャドウタートルと言ったところでしょうか」

ディエンドがああシャドウ……シャドウタートルの名前を決めたことで、そろそろ全力で叩き潰して、さっさと、はやてが待っている家に帰らないとな。

尚哉「さっさと終わらせますか」

あの甲羅を見るに守りは硬い、ディメンションショット（いつも撃っている魔力弾のこと）では弾かれるだろう。

尚哉「それならあのカードだな」

そう言って俺はカードケースに……

尚哉（あれ？開かない？）

俺は不思議に思いカードケースがある場所を見ると……

尚哉「デイエンド…俺…カードケース…どうしたっけ…」

デイエンド「なにをいつているのですか？家で暇つぶしにカードの能力を見ていて、それから………マスター…まさかですが…」

尚哉「…うん…そのまさかだ」

そう言う少し時間、静かになり、そして…

尚哉「デイエンド」「忘れたー!!」「」

何でカードケースを家に置いてくるミスをしてしまったのだろう。

デイエンド「ど、どうすんですか、マスター」

尚哉「こうなったらしょうがない、カードなしであのシャドウを倒す。それにあのシャドウ、動きが遅いから攻撃が来るまでじっくり考え………」

俺はシャドウタートルの方を見て絶句した。

俺の目にはこちらに多数の何かが飛んできている。そしてその何かを甲羅から発射しているシャドウタートルの光景だった。

尚哉「デイエンド…あれ…何?」

デイエンド「ど、どつやらのシャドウが中で生成したミサイルのようですね。数は…100は超えています」

そう言っている間にもシャドウタートルから発射したミサイルは着実にこちらに向かって飛んできている。

ディエンド「プロテクション」

俺は左手を突き出しバリアを張り俺目掛けて飛んでくるミサイルを防ぐ。

だが、ミサイルをバリアで防いでいるとバリアにひびが入った。

尚哉「やばっ！」

だが時すでに遅く、バリアは破壊され防ぎきれなかった、ミサイルは次々と俺の所に直撃し土煙が舞った。

ミサイルが直撃し土煙が舞う中、俺はなんとか空中へと逃げ延びる。

だが、俺の身体は無傷ではなく追加防護服である黒いフードはそこから破けていて本来のバリアジャケットの白いロングコートにも焦げた跡があった。

尚哉「はあ…はあ…久しぶりだな…防護服を傷つけられたのは」

ディエンド「そうですね。前に防護服に傷を付けられたのって半年前のらライダー3人との模擬戦以来ではありませんか」

そう言っているうちにシャドウタートルがミサイルの第2射目を放ってこちらに飛んできている。

尚哉「プロテクションじゃさっきと同じ様になってしまっ…ならば
」

そう言つと俺は向かってくるミサイルにディメンジョンショット
を連射して撃ち落としていく。

だが、いつかは俺の魔力が切れてやられてしまうのはわかってい
る。俺は一か八か賭にでた。

尚哉「はつきり言つてこれが通らなかつたら負けだな。…ディエン
ド!!カートリッジロード!!」

俺は向かってくるミサイルから離れながらディエンドから4発、
カートリッジが排出され、ミサイルから距離をとつた後、そこでとま
り足元に青い魔法陣が現れシャドウタートルに狙いを定める。

尚哉「ディメンジョー…」

ディエンドの銃口に魔力が集まりそして…

ディエンド「バスター」

尚哉「バスターー!!」

集まっていた魔力は砲撃となつてシャドウタートル目掛けて放た
れそして射線上にあつたミサイルはすべて落としシャドウタートル
に直撃した。

尚哉「はあ…はあ…やったか?」

ミサイル撃ち落とさせいで煙がまいシャドウタートルが目視できない。倒せていなかったならまじてやばい。

そう思っていると煙が晴れていき、俺は驚いた。

尚哉「まじでかよ」

煙が晴れたその先には少し甲羅が焦げていたが健在のシャドウタートルの姿だった。

驚いているのもつかの間、シャドウタートルはこちらを目視するとまたミサイルを発射する。

俺も迎撃しミサイルを落とす。

ディエンド「マスター!! 現状はこちらが不利です。一旦茂みの中に隠れましょう」

尚哉「くっ! そうだな、一旦隠れよう」

俺はミサイルを撃ち落として出来た煙を使って上手くシャドウタートルから視界から消えて近くの茂みに隠れた。

茂みに隠れた俺はシャドウタートルの様子を探る。

シャドウタートルは警戒態勢だが俺を見失ったのがわかっただけでもいいとするか。

尚哉「さて、奴を倒す方法…何かないか…」

現状でいうと俺の使える魔法で奴を真つ正面から倒すことはできない。一番破壊力があるディメンションバスターが全然効かなかったのが奴の甲羅はすごく堅くできているという証拠だ。

ディエンド「マスター、大丈夫ですか？」

一向にいい案が浮かんでこないことに心配するディエンド。

尚哉「大丈夫だ。俺を誰だと思ってやがる」

…つい、あのロボットアニメの名台詞を言っちゃったよ。

あのアニメの主人公機あれは強かったな…なんせそのアニメの機体が出てくるゲームで100機以上は主人公機のドリルで葬っただらうか。

ディエンド「マスター？ちゃんと考えているのですか？」

しまった、つい脱線してしまった。

尚哉「すまん、ついあの名台詞を言ったらそのアニメの機体が出てくるゲームを思い出して、その機体を使って100以上の敵機体をドリルで風穴を開け…た…」

…ドリルで風穴を開けた…ドリルは回転しながら前に進んでいく…回転は回ること…回る…回る…

尚哉「これなら奴を倒せるかもしれない!!」

ディエンド「マスター!?何か思いついたのですか!？」

尚哉「ああ、実は……」

説明中……………

尚哉「…という方法だ。どう思う？」

デイエンド「確かに試す価値はありますね。ですが試すにはディメンションバスターのように遠距離ではありませんからシャドウタートルにあのミサイルの中で接近しなければなりません。その方法はあるのですか？」

尚哉「手ならある。行くぜ!!」

俺は茂みから飛び出し空へと上がる。

シャドウタートルもこちらに気づきミサイルを発射する。

俺はミサイルを迎撃しミサイルの雨の中を突破していく。

デイエンド「マスター！シャドウタートル、射程圏内に入りました」

俺は動きを止めてミサイルを迎撃するが数が多すぎるため俺がいた場所に爆発し煙がまっ。

作者SIDE

尚哉がいた場所に煙がまいシャドウタートルは攻撃を止めて勝ちどき上げるかのように雄叫びを上げる。

???「全く、思った通りだったぜ」

突如、煙の中から1人の男の声が消えてくると煙が晴れそこにはさつきよりぼろぼろになった尚哉が足元に魔法陣をだし残りのカートリッジも全て排出し発射体制に入っている姿だった。

尚哉SIDE

ディエンド「マスター、作戦通りうまくいきましたね」

尚哉「ああ、やっぱりシャドウタートルは敵を目視しないと攻撃をして来ない。おかげで新技のチャージの時間が稼げた」

今、ディエンドの2つの銃口に作られている2つの魔力弾はディメンションショットで撃っている魔力弾とは違いチャージがかかる強力な魔力弾と言ったところだろう。

だがそれでもシャドウタートルの甲羅を貫くことは出来ない。

そこで使われるのは俺が思いついた案である。

俺はトリガーを引こうと思ったとき茂みに隠れていた時に説明した内容を思い出す。

数分前

尚哉「2つの強力な魔力弾をドリルのように突き進んでいく技。その名も……」

現在

尚哉「デイメンシヨントルネードシヨット!!」

俺はトリガーを引くと2つの魔力弾がドリルのように進んでいきシャドウタートルの甲羅に直撃し甲羅とデイメンシヨントルネードシヨットの間で火花が散る。

尚哉「貫け!!!」

俺の思いが伝わったのかシャドウタートルの火花が散る場所の甲羅にひびが入りそして…

甲羅は一部、砕けて火花を散らしていた魔力弾はそのまま砕けた場所に入っていくシャドウタートルは悲鳴に近い雄叫びを上げ海へと沈んでいく。

そして、シャドウタートルの身体が目視できなくなると海に異変があり噴水のように水柱ができて海の水が雨のように降る。

どうやら倒せたようだ、証拠にさっきの水柱はシャドウタートルの爆発で出来たはずだし。

デイエンド「シャドウの反応消滅どうやら倒したようです。お疲れさまですマスター」

尚哉「本当にカードなしたとこんなに苦戦するとは…俺ってやっぱりカードに頼りすぎなのかね」

デイエンド「そうですね…マスター明日の朝の練習のメニュー久しぶりに模擬戦でいかがでしょうか」

尚哉「そつだな…明日は模擬戦にするか、まだ10時半か…早いこ

と帰ろう。はやてに良いこと思いついたことを教えないと」

俺は時間を確認するために開けたケータイを閉じて家に帰った。

あれから数十分、カートリッジを7つも使ったこともあってか体全体に激痛がはしりながらも耐えてなんとか家に帰ってこられ玄関のドアを開ける。

尚哉「ただいま」

家に帰るといつもならリビングのドアが開きはやてがお帰りと言ってやってくるのだが…はやてが来ない。寝ているのだろうか。

不思議に思いながらリビングに入るとそこには誰もいなく俺は自室にはやてがいるのではと思ひ自室の扉を開ける。

思った通りはやてがそこにいて机で何かをしていた。

尚哉「なんだ、自室に居たのか返事が無かったから寝てるかと思っ…た…」

俺ははやてが見ているものを見て固まった。

はやて「あっ！尚哉くん、お帰り。帰ってきていきなりなんやけど…このカードケース…尚哉の？」

はやての手に持っていたのは今日のシャドウタートルの戦いの時、家に忘れてきてこれがあればすぐに終われたであろうカードケースがはやての手に持っている。

尚哉「ああ、俺のだ。やっぱりそのまま机に置いて行っちゃまったかな」

俺はカードケースを受け取る。

尚哉「そうだ、忘れるところだった。はやて、お弁当を2つ作ってくれないか」

はやて「別にかまわへんけど…いきなりどうしたん？お弁当を2つ作ってなんて言って」

尚哉「昼も俺達予定なんて無いだろ。だから、2人でちょっと初音島に観光でも行かないかと思ってな」

はやて「初音島に2人で…それって言い換えたらデート…やんな」

はやてが何故かぶつぶつ何かをいって顔も赤くなっている。さつきも初音島に2人でまでは聞こえていたがその後何かいっていたが聞き取れなかった。

尚哉「嫌だったか？それなら他に良い案が、行こう!!今すぐに!!」な
いか…そ、そうかそれはよかった。でも今すぐには行けないぞ。お弁当作ってないし」

はやて「なら、今すぐにお弁当作るから」

そうやって俺の左手にあるエコバックを手渡しはやてはリビングのキッチンに向かった。

そして自室に俺1人になったのを確認しカードケースをディエン

ドの中に入れる。

そして、リビングに戻るとはやてがキッチンですごくい早さで料理していた。

その数十分後にお弁当が完成しはやてと一緒に初音島に観光に行った。

はやて「ここが初音島…遠くから見ても綺麗やけど近くで見たらもっと綺麗や」

家を出て1時間ほど経った、今は初音島で幻想的な桜が並び立つ通りを歩いている。

尚哉「ああ、俺もここに来たときは本当に綺麗だと思ったしな」

俺もはやてが言ったことに共感し桜が並び立つ通りを歩いていると1週間ほど前に義之と別れた公園にたどり着いた。

公園には観光客が多くいて中には家で作ってきたであろうお弁当を食べている人もいる。

はやて「もうお昼時やな、私達もここでお昼にしようか」

尚哉「いや、もうちょい先に行ったところで食べよう」

俺達は公園から出て獣道を通り願いの叶うと言われる桜の木にたどり着いた。

はやて「周りの桜より大きくて綺麗…」

尚哉「それにこの桜は特別らしくてなんでも願いが叶うらしい」

はやて「そうなんか…尚哉くんは何か願い事あるん？」

尚哉「あるのはあるけど…俺はこんな願いが叶うって言われる桜なんか頼らずに自分の力で願いを叶えるぞ」

…俺の願い…それは、はやてと一緒にこのまま暮らしていきたいこと。そして、あと1ヶ月ほどで来る夜天の書の騎士達と初代リインフォースを救うこと。

原作では初代リインフォースは消えて新たにリインフォースができる。

けど、俺は初代リインフォースを救いたい、はやてを悲しませたくないから。

はやて「尚哉くん、考え事か？」

尚哉「まあな、さてと、そろそろ昼ご飯にするか」

はやて「あっ、うん」

そうやって俺ははやてが持ってきたバックから床に敷くシートを出し広げる。

そこに俺と車椅子から下ろしたはやてが座りはやてが作ったお弁当を渡さる。

はやて「それじゃあ…いただきます」

尚哉「いただきます」

俺は手を合わせたあとお弁当を開ける。

お弁当の中身は色とりどりで、栄養バランスもちゃんと取れている。

まず、最初にだし巻きを口に運び食べる。

尚哉「うん、やっぱりはやてが作った料理はうまいな」

はやて「そんなことないって、それに尚哉さんの料理もおいしいやん」

そんな話をしながら俺達はお弁当を食べていった。

尚哉「ごちそうさまでした」

はやて「お粗末様でした」

お弁当を食べ終わり、片付ける。

はやて「尚哉くんこれからどうするん？」

尚哉「そうだな……これからどうするか……ん？あそこにいるのは、義之に小恋じゃないか。それにあとの2人は……」

俺は今後のことを考えていると義之と小恋、そして以前義之を探していたあの姉妹が俺の目に入った。

はやて「ほんまや、あそこにいるん義之くん小恋ちゃんや、おい、義之くん、小恋ちゃん」

そう言っってはやては義之達に手を振る。

義之達もこっちに気づいたのかこちらに向かってきた。

義之「はやて、それに尚哉も！」

小恋「どうして初音島に？」

2人は俺達が何故、初音島にいるのか気になり問いかける。

尚哉「まあ、ちょっととした観光だよ、初音島なら歩きでも行けるしな」

はやて「尚哉くんが突然、初音島に観光に行こうなんていって私もちょっと驚いたんや」

尚哉「ゴールデンウィークなのに何もせずというわけにはいかないと思ってな」

小恋「そうだったんだ」

女の子1「あっ！君はこの前の、確か名前は…浅倉尚哉くんであつてるよね。先日は弟くんがお世話になって、私は朝倉音姫（おとめ）で私の隣にいるのが…」

女の子2「妹の朝倉由夢（ゆめ）です」

尚哉「音姫さんに由夢ちゃんだね、まあ、名前は義之から聞いたと思うけど、浅倉尚哉だ。それで、こっちにいるのが…」

はやて「八神はやてです。よろしゅうな」

自己紹介が終わった後、話に花が咲き、はやては義之達と商店街に行くことになり、俺はここで昼寝でもしとくといってはやて達と別れた。

それから、朝のシャドウの戦いがあったからかすぐに眠気が来て熟睡する。

熟睡する俺だったがその熟睡はすぐに邪魔されてしまった。

熟睡していた俺だが急に殺気を感じ寝ていた身体を起こす。

起きて目にしたのは空中に漂う多数の魔力弾と空は赤くなっている。それを見て結界を張られているのがわかった。

尚哉「…全く、今日は厄介ことが多い日だ」

そうやって俺はディエンドを起動させようとするが…

???「君、デバイスを起動させようとしたら、容赦なく攻撃するよ」

この結界などを行った者から警告され俺は起動するのを止めた。

尚哉「なら、隠れてないで出てこい」

そう言つと桜の木の影から昔の魔法使いが持っつていそうな木の杖を持った金髪の少女が現れた。

少女「君に言われた通り、姿を見せたよ。じゃあ次は僕の質問に答えられないかな」

尚哉「答えられることならな」

俺と少女は互いに警戒しながら話が進んでいく。

少女「なら質問するね。君は管理局の魔導士？」

尚哉「残念ながら、フリーの魔導士だ。だが、いつかは管理局に入るかもな」

少女「なるほど、なら次の質問、この前から海鳴市にロストロギアの反応を感じるんだけど君はそのロストロギアが何なのか、君は知ってる？」

まあ、魔導士ならロストロギアの反応があれば気になるよな。

尚哉「ジュエルシードという願いが叶うロストロギアが今海鳴市を中心に散らばっているんだ。今は俺を含めて3人の魔導士が争っている。それとまだ管理局は介入してきていない」

少女「なるほど、なら君はジュエルシードを集めてなにをしようとしているの」

尚哉「俺はただ町を…いや、家族に降りかかる危険をつみ取っているだけだ」

少女「家族を…あの時君の横にいた車椅子の女の子のためか…」

その言葉を察するにこの少女は俺とはやてがまだいたときにはこちら辺にいたということがわかる。

尚哉「こっちは質問に答えたんだ。こっちも1つだけ質問したい……この桜はいつたい何なんだ……この桜から異様な魔力を感じる……それもロストロギアレベルのな」

少女「っ！そ、それは……」

この反応を見るとどうやら知ってるようだ。

俺と少女の間で静寂が続くがその静寂は長くは続かなかった。

尚哉「ん？電話か…相手は…義之？どうしたんだろっ。おい、電話に出ていいか？」

少女「それぐらいなら別にいいよ。だけど、妙な動きをしたら……」

尚哉「それぐらいわかっている」

俺は少女が作った魔力弾が漂う中、義之の電話に出た。

尚哉「もしもし、義之？どうかした…《大変だ尚哉!!》…どうやらやばいことが起きたらしいな」

そう言いながらケータイを操作し少女にも聞こえるようにする。

義之《音姉やはやて達がさらわれた!!》

その話が少女にも聞こえたからか驚いている。

尚哉「はやて達がさらわれたって本当か!？」

義之《ああ、俺が少し音姉達と離れたときに狙われて、あと犯人は集団で魔族や神族だった》

尚哉（魔族に神族か…結構…いや、かなりやばいな）

尚哉「義之、その犯人グループどっちに行ったかわかるか」

義之《港の方だった》

港となると奴らは船で逃げるつもりだろうと俺は思った

義之《あと、それだけじゃないんだ》

尚哉「他にもなんかあるのか」

義之《実は音姉達以外にも逃走車の中に1人誰か乗っているのが見えただ》

なるほど、はやて達とその1人を含めて5人捕らわれている。おまけに敵は魔族に神族、全員を救出するのは容易ではない。

尚哉「わかった。義之は警察に電話、俺ははやて達を助けに行く」

義之《正気か!?いくら何でも無理……》

時間が惜しかった俺は電話を切り視線を少女へと向ける。

尚哉「悪いが緊急事態なんだ、まずまわりの魔力弾と結界を消して見逃してくれないか」

少女「いやだといったら」

尚哉「その時は力ずくでも通らしてもらおう」

少女は考え、少しするとまりの魔力弾は消え結界もとけた。

少女「これで配置していた魔力弾と結界は消したよ」

尚哉「すまない恩に着る」

少女「多分、魔力反応から感じると港近くの廃棄工場だと思うよ」

確かに少女が言ったとおり港の方から魔力が2つ感じられる。1つははやて、もう1つは……

尚哉「……………だな」

少女「うん、正解この魔力は……………だよ」

尚哉「知り合いなのか？」

少女「正確には……………の祖父が僕の幼なじみなんだ」

……………の祖父が幼なじみってそしたらこの少女はいつたい何歳なんだよ。

少女「むっ、今、変なこと思ったでしょうっ」

かなり鋭いな。

尚哉「じゃあな、今度あった時は敵でないことを祈るよ」

俺は金髪の少女の横を通り過ぎディエンドを起動させバリアジャケット（朝にぼろぼろにされたがすでに修復済み）を身にまとい空へと飛びだった。

尚哉「待ってる、はやて！今助けに行くからな」

俺は速度を徐々に上げていきはやての魔力を辿っていった。

だが、俺はまだ知らない。さらに厄介事巻き込まれることに。

暴かれる真実

はやてSIDE

私は今日、尚哉くんが急に初音島に行こうと言い出しピクニック気分分で初音島にやってきた。

それから偶然に1週間ほど前に家に尚哉くんが連れてきた。義之くん小恋ちゃん、それで義之くんの義理の姉妹である。朝倉音姫さんに朝倉由夢ちゃんと出会って楽しく時間が過ぎていった。

だけどそれは少し前の私らの状況。

突然、後ろから何かを嗅がされ意識を失ってしもうた私は気がつく。とさっきの場所とは違い、薄暗い多分工場のなんかやと思う場所に腕と足を縛られていた。

私はまわりをみるとまだ眠っている由夢ちゃんと小恋ちゃんに既に起きている音姫さんと私が知らん肩まで髪が伸びていて髪の色はオレンジ色でその瞳は何かを恨んでいるような瞳をしている女の子が私と同じように縄で縛られているのがわかった。

そして私達をさらった張本人やと思う神族と魔族が1人ずついた。

神族に魔族、その存在は5年前に起きた事件によって開いた門から神族や魔族は現れて今やこの人間界には神族や魔族の人達が住み着いている。

魔族「どうやらその嬢ちゃんもお目覚めのようだぜ。」

魔族の人がそう言うと言姫さんも私が起きたのに気づく。

音姫「八神さん、気がついたんですね」

はやて「はい、あとこの状況もなんとなくわかってきましたし」

神族「おい、この女の記憶みてみようぜ。お前ならできるだろ」

魔族「そうだな、俺もこの嬢ちゃんの記憶には興味がある」

そう言うと言姫の右手がうつすらと輝き女の子の頭を掴む。

魔族は魔法が使えるその種類は様々といわれている。

そして今日の前で使われているのは他人の記憶を見る魔法やと思う。

魔族「こいつは面白い、この嬢ちゃんの名前は芙蓉楓（ふよう）かえで、どうやら恨んでる奴がいるな。そいつの名前は土見稟（つちみりん）、理由は…なるほどな、嬢ちゃんの母親は2年前の交通事故に巻き込まれて死んだ。だがその前日に嬢ちゃんは風邪で熱をだしてしまい土見稟が嬢ちゃんの母親に電話で早く帰ってきてくれと言って帰ろうとした途中に事故に巻き込まれた。もし、土見稟が嬢ちゃんの母親に早く帰ってきてくれなんて言わなかったら嬢ちゃんの母親は死ななかつた。だから、母親を殺したも同然の土見稟を憎んでいる」

神族「なるほどそれでこんな目をしてるのか」

そう言いながら神族達は不気味に笑った。

部下1「頭！」

外からひとりの魔族が入ってきた。

魔族「どうした」

部下1「はい、先ほど見回りをしたら人間のガキを見つけて捕らえました。おい、連れてこい」

部下である魔族が外にいる仲間を呼ぶと4人の神族と魔族にその4人に捕まった1人の男の子がこちらに近づいてきた。

楓「っ!!」

楓ちゃん…やったかな、楓ちゃんがその男の子を見た途端に鋭い目で睨む。

男の子「っ！楓！大丈夫か!?怪我とかしていないか」

どうやらあの男の子は楓ちゃんのことを知ってるようやな、でもあの楓ちゃんの鋭い目つきを見ると…まさか！

魔族「どうやら、そのの嬢ちゃんと知り合いみたいだな、お前も記憶を見させてもらおうか」

さつきと同じように右手が光、男の子の頭を掴む。

男の子「くそ！離せ!!」

男の子は抵抗するが相手は大人、子供がかなうはずがない。

魔族「っ！こいつは…ふふふ…ふははははは！！こいつは傑作だ！！」

魔族は男の子の記憶を見て大笑いする。

魔族「なあ、ガキンチョだった今、お前の記憶をみさせてもらった。もしあのことを嬢ちゃんに教えたら嬢ちゃんはどつなるだろうな」

男の子「っ！！止める！！止めてくれ！！」

男の子は突然、激しく抵抗するが4人の神族と魔族達が押さえつける。

魔族「嬢ちゃん…良いことを教えてやるよ。嬢ちゃんの記憶にはこのガキンチョ、土見稟のせいで母親が死んだと記憶にあったが、土見稟のせいで嬢ちゃんの母親が死んだのは真っ赤な嘘だ」

楓「えっ？」

楓ちゃんは驚いた顔して魔族を見つめる。

魔族「事故の日、土見稟は確かに電話をして嬢ちゃんの母親に早く帰ってきてほしいと言ったが実は嬢ちゃんの母親はその時仕事が予定より早く終わって帰ろうとしていたんだ。要するに嬢ちゃんの母親は土見稟に言われても言われなくてもあの事故に巻き込まれていたんだよ」

楓「それじゃあ…なんで稟くんはあの時私にあんなことを…」

楓ちゃんは真実を知るのが怖くては震えながら2年前のことを思

い出す。

魔族「その後、嬢ちゃんは母親が死んだことによって生きる目的を無くして倒れたらしいな。さて、ここで問題だ、土見稟は生きる目的を無くした嬢ちゃんを救いたかった。嬢ちゃんを救うためにはどうすればよかったでしょうか」

音姫「それってもしかして！」

音姫さんはその答えがわかり驚く、私もその答えがわかった、それは…

魔族「無ければ作ればいいのさ」

魔族「その後は嬢ちゃんでもわかるだろう。土見稟は嬢ちゃんを助けるために自らを犠牲にして嬢ちゃんに生きる目的を作ったんだよ。いやはや、こんな傑作なことはない。はははははは!!」

魔族は本当のことを知って笑い続ける。

楓「そんな…私は稟くんに酷いことを…」

楓ちゃんは真実を知ってしまい頭を抑えながら震えている。

神族「それでよ。そのガキどうする」

今まで黙っていた神族が稟くんに向かって指を指す。

魔族「そうだな…いつそ殺すか」

その瞬間私を含めて4人は 背筋が凍った。

それはもちろん、日常で暮らす私達には「冗談に聞こえるけど今の状況でそないなことを言われたら嫌でも背筋が凍ってしまふ。

楓「止めて！稟くんを殺さないで!!」

楓ちゃんは必死に魔族に殺すのを止めてくれるように頼む。

魔族「今俺は嬢ちゃんが絶望する顔を見てみたいんだ。だから…殺せ」

楓「だめええー!!」

楓ちゃんは悲痛な叫びして私は見てられなくて目を閉じる。

神族「ちよつと待て、妙に外が騒がしくないか？」

魔族「外が?………確かに何かあったか？」

私も外が騒がしいのが気になり耳を傾ける。

そこで聞こえてきたのは…銃声…叫び…悲鳴…普通の生活では聞かない音だった。

そう思っていると外から身体がぼろぼろのあの魔族達の部下が1人入ってきた。

神族「おい!どうした、何があった!!」

神族はぼろぼろの部下に駆け寄る。

部下「頭…めっちゃ…くちゃ…強い…ガキが…一人…来て…外に…
いた…仲間…が…次々と…倒されて…」

ぼろぼろの部下は力尽き倒れる。

そして外から1つ足音が聞こえてくる。

その足音は着実にこちらに向かってきていた…そして…

外に繋がる扉が開かれそこから全身を黒いフードで被って右手には青色を強調した棒を持った子供が私達の目の前に現れた。

尚哉SIDE

さてと俺の視点に戻ったわけですが、読者の方々にはやてsideの間のことを説明しておこう。

まず、ここに到着した俺は工場の敷地内に入り様子を救出の機会を伺っていた。

所が何故かこの場所にいた俺のクラスメートだが話したことはない土見稟が誘拐グループに捕まり多分リーダーのところに連れて行かれたのだろう。

だが土見稟が何もなくなるところにくるはずがない。あるとすれば…あの子も…芙蓉楓が捕まっているかもしれない。

義之の話によればもう1人車の中にいたと言っていた、それが芙蓉楓なら土見稟がここに居るのが説明がつく。

土見稟と芙蓉楓の仲は一方的に芙蓉楓が土見稟を憎んでいるが土見稟は芙蓉楓を恨んでいるところか何かに安心して顔をしていた。

まあ、あいつらに何があったのかは興味はないし、これはあいつらの問題だから首を突っ込まない。

だが、土見稟を殺されることになったら話したことは無いが一応クラスメートだ。顔を知ってる奴が死ぬところなど見たくはないから俺はライドカードをホルダーに挿入し仮面ライダーメテオストームが使う武器『メテオストームシャフト』を持ち突撃する。

その後は簡単で気づいた神族や魔族達は銃器などを取り出し脅すが俺はそんな脅しなど聞かないので遠慮なく叩き潰していく。

脅しが聞かないとわかったか奴らも遠慮なく撃ってくるが魔力強化した運動神経とここまでの戦いで鍛え抜かれた反射神経で銃弾を避けて近づき奴らを倒していく。

この光景を離れた場所でみている奴がいたらこう思うだろう。

大の大人達が銃器を使っているのにガキ1人に次々と倒されていくと。

そして5分もしないうちに周りにいた神族、魔族達は全滅しかし1人だけ動いている奴がいて多分リーダーにこのことを知らせにいったのだろう。

俺はリーダーのところにはやて達がいると考え逃げた奴の後を追う。

そしてたどり着いたのはとある倉庫、確かに誘拐して捕まっている場所と言えば定番と呼べるような気がする。

そして倉庫の扉を開けてあの状況に行き着く。

さてと今の状況を振り返ってみると…

土見稟の近くにいる4人と少し離れた場所にいる神族と魔族の2人で合計6人、それに人質である。はやて達も無事のようにだ。

魔族「貴様、外にいた仲間はどうした」

ぼろぼろな奴の近くにいた魔族が質問してくる。

尚哉「俺が此処にいる。それでわかるだろ」

魔族「なら、最後の質問だ。…貴様は何者だ」

尚哉「そつだな…こつ名乗らせてもらつ」

そつ言つと持っていたメテオストームシャフトを構える。

尚哉「正義の…味方だ!!」

神族「正義の味方か…だがこつちには人質がいるんだ。下手に動いたら…そこにいる土見稟がどうなってもいいのか？」

俺は土見稟を見ると奴らの部下が土見稟に銃を突きつけられている。

楓「稟くん!!」

あの数分で何かあったのか今の芙蓉楓からは憎んでいた時のピリピリした感情は無くなっている。

土見稟は銃を突きつけられているから俺が動いたら発砲されてしまつから普通の人なら動こうとしない。そう…普通の人なら…

実は倉庫の中に入る前に4つほど魔力弾を生成していて倉庫の中に配置、そしていつでも撃てるようになってる。

稟「俺のことはどうなっても構わない。だから遠慮なくやってくれ」!

部下1「このガキ!!」

そう言つと部下1は銃を持っている腕で殴るつとする。

俺はそれを見逃さず走り出す。

それに気づいた部下達は部下1は土見稟に突きつけ直そうとしそれ以外の3人は俺に銃を構える。

尚哉（今だ!!）

すぐさま、俺は倉庫の中に配置させていた魔力弾を動かす。

1つ目の魔力弾で土見稟に突きつけられていた銃を弾き飛ばし2

つ目と3つ目が腹に直撃し最後に後ろから頭に直撃し地面に倒れる。

尚哉「速攻で片付ける！」

「リミットブレイク！」

尚哉「メテオストームパニッシャー!!」

俺は身体を一回転させメテオストームシャフトの先端部分にあるコマが敵に向かって放たれ次々と蹴散らしていき周りの敵は気絶する。

コマはメテオストームシャフトの先端部分に戻り、もう必要ないから消して人質になっている友達のところに行く。

尚哉「君達、もう大丈夫だ、今、縄を解くから」

そう言うと俺はまず音姫さんの縄を解きかかる。

音姫「君、何者なの」

音姫さんは警戒しながら話しかけてくる。

尚哉「さっきもいったる。正義の味方だ」

音姫「……」

音姫さんは黙り俺は解くのに集中した。

その後、はやて達の縄もほどき今は立ち往生している。立ち往生している理由は…

楓「「「めんなさい、めんなさい、めんなさい、めんなさい……」

芙蓉楓の縄を解いた後いきなり土見稟の元に近づき抱きついた拳
げ句今までの仕打ちを謝っているのだろう。

稟「楓…俺、怒ってないから、前みたいにさ笑っていてほしいんだ」

楓「稟くん…はい」

ゴールデンウィークに入る前の教室で見た芙蓉楓から出てくる恨
みなどはもうなく、今あるのはあの子の笑顔だけだ。

尚哉「……空気を読まないのは悪が、今はここからでないか？ 気絶
した奴らが目を覚ましたらいやだからな」

その瞬間気絶している小恋と由夢以外がこちらを向き空気呼んで
よと言わんばかりにこちらを見てくる。

尚哉「本当なら俺も此処で君達の感動の仲直りを阻みたくはないの
だが、妙にいやな予感がしてな……」

音姫「それじゃあ此処を離れ」音姉!! 由夢!! 小恋!! はやて!! 大丈夫
か!?!?! この声は弟君!?!」

声が出た方向を見ると義之がこちらに向かってきているのがわ
かった。

義之「みんな！無事か？怪我とかしてないか？」

音姫「大丈夫、そこにいる子が誘拐犯を倒してくれたから」

尚哉「何、偶然連れさらわれたところを目撃したから駆けつけただけだ」

そう言った普通の話が聞こえてくる。

だが…

神族「貴様……………許さんぞ」

その空気は一瞬にして壊れ土見稟は芙蓉楓とはやての前に義之は音姫さんと由夢、小恋の前に立ちふさがる。

尚哉「あきらめるんだな、さっきのでわかってるだろ。俺とあんなの力量の差は歴然だ」

さっきの戦闘でこいつの力はわかった。それを知っていてかかってくるなど無謀すぎる。

神族「力が…力がほしい…あのガキをぶっ殺せるほどの力が!!」

尚哉「…さっさと気絶させるか」

そう言うと俺はライドカードで出したデンガッシャーを組み立てロッドにすると走り出し振り回す。

確実に意識を奪うことができる攻撃、俺も確信していた。だが…

神族「力が欲しい!!」

ここに来てから感じていた嫌な予感…

尚哉「う…そ…だろ…まさか…持ってたのかよ…」

攻撃がはいる瞬間いきなりあいつの服のポケットからいきなり青色の輝きが放たれそれに気づいた俺はすぐに後ろに下がる。

俺はあの青色に輝いてる物を知っている。

それは願いを無差別に叶える願望器…

尚哉「ジュエルシード…」

神族の体内にジュエルシードが取り込まれていくとあいつの身体が異変が起こりまず上半身の服が破け、身体も突然、発達したかのように筋肉がつく。

義之「っ!!」

稟「くっ!」

楓「嘘…」

音姫「いきなりなんなの!？」

はやて「なんや…これ…震えが…止まらん」

突然、変貌した神族から発せられるただならぬ殺気は一般人であるはやて達にもわかるらしく身体が震えている。

俺も神経があいつはやばい、今は逃げると訴えている。

だが先に動いたのは奴の方だった。奴は姿を消し、次に俺が奴を認識した場所は目の前ですでに右ストレートをくりだしていた。

気づいた俺は右ストレートをデンガツシャーで防ぐがジュエルシードの力も加算されているから脅威的な腕力によってデンガツシャーは無残に折れ、次に繰り出された回し蹴りが俺のわき腹に入り吹き飛ばされる。

俺が吹き飛ばされたことにより、より一層恐怖する。

さつきまで神族、魔族を相手に無傷で蹴散らしていたのに今はその俺が吹き飛ばされている。

吹き飛ばされたことによって肋を1つか2つはいつたが痛みを堪え立ち上がる。

あいつを見ると今、着実にはやてに狙いを定めたのか近づいている。

はやて「嫌…来んといて…」

はやては足が不自由でまともに動けない。音姫さん達もあまりの恐怖に動けずにいる。

俺は慌ててはやての所に激痛がはしりながらも堪えて走る。

あいつはすではやてに攻撃が当たる場所まで来て腕を振り上げる。

この光景…そう2年前の事故現場ではやてがシャドウスパイダー融合体に襲われそうになっていた時に似ている。

そう思いながらも俺は走った。はやてとの距離は後わずかだったがあいつの腕は振り下ろされた。

はやて「いやあああああっっ!!」

尚哉「間に合え!!!」

俺は勢いよく飛び込みはやての身体を抱きしめてぎりぎり攻撃を回避する。

外れた攻撃は地面に当たり地面が少し割れる。

勢いよく飛び込んだ俺ははやてを抱きしめながら転がり二三回転した後止まった。

だが飛び込んだのはいいが、当然、頭に被っていたフードは取れたことよって…

音姫「嘘…」

義之「どじゆじゆことだよ…」

稟「お前は…確か、クラスメートの…」

楓「なんで…君がこんな所に…」

はやて「…尚哉…くん?…」

ここにいる（気絶しているメンバーを除く）メンバーにばれてしまった。

正体がばれたことによりはやて達は戸惑うが、あいつは待つてくれず近づき襲いかかってくる。

俺はすぐにシールドをはり防ぐが神族の身体能力が異常に上がっているこのままだと破壊され深手を負うことになる。

俺はこの状況を打破するために当たりを見渡す。

尚哉（何かないか…何か…っ！そうだ!!）

俺はシールドを消しはやてを抱えて避けるが完全には避けきれず足に少し当たる。

尚哉「くっ！ディエンド!!」

身体はぼろぼろの中俺は待機中だったディエンドを起動させカードケースからライドカードを取り出しディエンドに挿入しスライドする。

ディエンド「カメンライド」

ディエンド「オーズ」

俺はトリガーを引き光弾が放たれその光弾は姿を変え仮面ライダーオーズに変わった。

もちろんだと思っがこの光景を見たはやて達のリアクションは…

義之「光の弾が人に！」

音姫「……………」

楓「私達…夢を見ているのでしょうか…」

稟「楓…これは夢なんかじゃない、現実らしい」

はやて「あのカードケース…今朝机に置いてあった。」

みんな別々の反応を示すが今はそんなことより…

尚哉「オーズ！ラトラータだ!! 奴の隙を狙ってここから逃げ出す。」

オーズTTTB「わかった!!」

オーズはオーズドライバーからコアメダルを2つ抜き新たに違うメダルを入れて傾かせオーズキャンナでコアメダルをスキャンする。

「ライオン！トラ！チータ！」

「ラタ ラタ ラトラータ」

電子音が流れるとオーズはタトバコンボからラトラータコンボに変わった。

尚哉「みんな!!目を閉じる!!」

全員、いきなり言われてあたふたしていたがみんな目を閉じる。

オーズRTT「はあ！」

オーズは体中から光を放ち神族の目くらましをする。

神族は目くらましをされて苦しんでいる。

オーズRTT「尚哉！今のうちだ」

オーズは姿を消しカードに戻り俺はカードケースに入れる。

尚哉「今のうちだ！ここから逃げるぞ！」

そう言うつと気絶している由夢と小恋は音姫さんと義之がおんぶしはやては俺はお姫様だっこしてその場から逃げ出した。

オーズのおかげで倉庫から抜け出した俺達は出口に辿り着いた…
辿り着いたのだが…

義之「くそ！どうなってやがる！」

楓「稟くん、大丈夫ですか」

稟「ああ、なんとか」

今、義之は腕を振り落とそうとしているが何かに止められる。まるで目に見えない壁があるかのように……いや……実質そこにあるのだろう。理由は土見稟が一番早く出口に辿り着き出ようとしたのだが突然何かに激突したかのように動きを止めそのまま倒れた。今は芙蓉楓が看病している。

はやて「尚哉くんなんかわかるか？」

お姫様だっこされているはやてが訪ねてくる。

尚哉「たぶん結界だ。無意識のうちにあいつが発生させたんだと思う」

義之「なら、どつすればいいんだよ」

尚哉「簡単だ」

そつ言いながらはやてを下ろし来た道歩く。

はやて「尚哉くん、どこに行くんや!？」

尚哉「ちよつくら、あいつをぶっ飛ばしにいくだけだ」

はやては心配した顔で見つめてくる。

尚哉「そんな心配すんなよ。大丈夫だ「大丈夫やないやん!」はやて!？」

はやては腕を使ってこつちに近寄り抱きついてくる。

はやて「今までの尚哉くんは昔の私が辛いことを隠してるみたいになんか隠し事してるやろ!」

尚哉「隠し事なんてしてな「嘘や!!」「っ…」

俺はいつもはこんなには叫ばない、はやてが今はこんなにも叫んで

いることに驚いた。

はやて「私知っとるんやで、尚哉くんが深夜とかにどっか行っとるか他にも時々帰ってくんのが遅いときも私に黙ってなんかやってるなって知っとった」

はやては今まで黙っていたことを口にする。

はやて「それで今日……尚哉くんが何やってるんかはつきりわかった……いつもあんな危険なことに首を突っ込んだんやな」

尚哉「……そうだ、俺は密かにこんなことをしていた。……失望しただろ……自分のみじかにいたやつがこんな危険なことをやってたことを……」

あそこまではれていたから俺は正直に言っ

はやて「なら、1つだけ教えて……尚哉くんは何のためにこんなことをしとるんや」

何のために……か……あいつからの頼みを除くと今俺を突き動かしているのは……

尚哉「俺はこんなことをしている理由はこの町を守りたいから……かな」

はやて「かなって……」

それを聞いたはやては少し呆れる。

尚哉「しょうがないだろ。今はそういうことで納得してくれ」

無理やり納得させ抱いている手を外し再び歩き出す。はっきり言って、一歩一歩歩くのに横腹と左足に激痛が走っている。

義之「尚哉、大丈夫か？ちよくちよく痛そうな顔してるけど」

尚哉「大丈夫、大したことないから」

心配をかけないように平然とした顔で義之を見る。

ディエンド「どこが大丈夫ですか」

今まで黙っていたディエンドがしゃべりだす。

はやて「尚哉くん？こんな時に腹話術か？こんなやばいときに止めてや」

ディエンドがしゃべったことを俺が腹話術でしゃべったと勘違いしている。まあこれが普通だ。

尚哉「はやて、これ腹話術じゃないんだ。ディエンドこんな時だけど挨拶」

ディエンド「お初にお目にかかります。マスターのデバイスのディエンドです。以後お見知り置きを」

ディエンドの紹介が終わると周りのみんな…いや1人除くが口をポカーンとした表情でディエンドを見ている。

はやて「あの〜ディエンドさん？尚哉くんが大丈夫じゃないってど

「うづつことですか？」

「一番早く正気に戻ったはやてがディエンドに訪ねる。」

ディエンド「マスターは左足の骨に罅に横腹は骨を一本確実に折れています。その上、朝の戦闘でかなり疲れています」

ディエンドから俺の状態を聞いたはやてはすぐさま近づき。

はやて「全然、大丈夫や無いやないか!!」

どこからともなく取り出したハリセンで俺の頭を力いっぱい叩く。

尚哉「つゝゝ！はやて！ディエンドにばらされたからわかっているのに、怪我人に暴力振るうな！そしてそのハリセンどこから出した！」

頭をハリセンで叩かれたぐらいだったらひりひりするだけなのだが横腹と左足を怪我をしているから異様に激痛が走った。

はやて「これは、尚哉くんが今まで私に嘘をついてた罰や!!それとハリセンのことは禁則事項や!!」

ディエンド「反省してくださいマスター、このまま行ったらこれ以上怪我が増えます」

確かにあのジュエルシードを取り込んだ神族相手にこれ以上、深手を負うのは目に見えている。

ディエンド「ですから……協力をしていただけないでしょうか」

尚哉「そうだな、俺がこんなだし……1人で立ち向かったらどうなるかわからない……だから、俺とおんなじデバイスを持つてるあなたに力を貸してください」

俺はある人に視線を向けてとその人の名前を告げる。

尚哉 ディエンド「音姫さん」

音姫「……どうして……そう思うのかな」

少し黙っていた音姫さんが冷静に答えるが内心はかなり驚いているのがわかる。

尚哉「簡単だ、素性のしれない金髪ツインテールの少女に聞いた」
俺がそう話すと心当たりがあるのか音姫さんと義之は少し苦笑いする。

尚哉「その顔を察すると……知り合いのようだな……」

義之「音姉……」

音姫「大丈夫、心配ないよ。みんな……これから起きることは内緒にしてね」

音姫さんがそう言うとみんな頷く。

音姫「……お母さんから受け継いだこの魔法……まだ使いこなせていないけど、一緒に頑張ろう。ホープウィング」

ホープウィング「はい、一緒に頑張りましょう。マイマスター」

その瞬間、音姫さんの足元から淡い桜色の魔法陣が展開し音姫さんは右手を上に掲げる。

音姫「行くよ……ホープウィング！セーリット…アップ!!」

ホープウィング「スタンバイレディ？セットアップ」

その瞬間音姫さんが淡い桜色の光に包まれその光が消えると和風の桜色の着物をきてそれに淡い桜色の羽衣も付けていてデバイスであるホープウィングは音姫さんの両手にグローブになっている。

その姿を見てから率直に言った。

尚哉「えーっと……そのデバイスを見ると……サポート系の魔導士だよ」

音姫「う、うん、サポート魔法以外にもお母さんの召喚獣を受け継いでるから召喚魔法も使えます……けど……」

尚哉「けど…なんだ？」

音姫「実は召喚魔法は1つだけうまくいくんですけど他の召喚魔法は力が強すぎてうまくコントロールができないんです」

尚哉「了解、音姫さん、俺があいつを引きつけるからバインドでやつ動きを封じてください。後は俺がやります」

デイエンド「マスター、来たようですよ」

作戦が決まった瞬間、ディエンドの警告でさっき向かおうとした方向を見るとゆっくりとこちらに近づく神族がいた。

尚哉「さて、行きますか」

はやて「尚哉くん…気い付けてな」

尚哉「わかってるよ」

俺は神族に向かって歩き出し一定の距離になったとき、動き出した。

先に仕掛けてきたのは神族で一瞬にして間合いを詰められ右手を振りかぶってくる。

俺はシールドを展開し今度はなんとか直撃を避ける。

そして、神族から距離を取り足元に魔法陣を展開しディエンドの銃口に魔力が集まる。

尚哉「ディメンジョンブラスト！」

いつもよりでかい魔力弾が放たれ次の瞬間、魔力弾が8発に別れ全弾直撃する。

ブラストを食らった神族の動きが鈍くなっている。

尚哉「音姫さん！今です！」

俺の呼び声を合図に音姫さんの足元に魔法陣が展開、そして詠唱す

る。

音姫「我が求めるは…戒める物捕らえる物言の葉に答えよ…鋼鉄の縛さー！」

音姫さんが詠唱していると神族の足元に淡い桜色の魔法陣が展開される。

音姫「錬鉄召喚…アルケミックチェーン！」

神族の足元の魔法陣から鋼鉄の鎖が現れ神族を縛る。

尚哉「いくぞ！デイエンド!!カートリッジフルロード!!」

デイエンドからマガジンに入っている総数7発を使い銃口に魔力が集まりだしその銃口を神族に向ける。

尚哉「デイメンションバスター…フルパワー!!」

トリガーを引きいつものデイメンションバスターとは段違いの大きさと威力が暴走した神族を飲み込んだ。

デイメンションバスターをし終わるとデイエンドから蒸気が排出されクールダウンされる。

デイメンションバスターを食らった神族は身体中から煙りが出ていてちゃんと取り込んでいたジュエルシールドも封印できたようだ。

俺はジュエルシールドに近づきデイエンド中に入れたところで意識を失った。

はやてSIDE

はつきり言って驚くしか出来ひん。

いきなり魔法陣みたいなのが現れて、そこから鎖が出てきたり、尚哉くんがレーザー光線見たいなものを撃つたり、普通ではまずありえへんファンタジーな光景を目にしたのだから誰でもそう思ってしまう。

尚哉くんが神族に近づいて……何かをディエンドさんの中に入れた……あれ？なんか尚哉くんふらついてるような……

次の瞬間尚哉くんは地面に倒れた。

はやて「尚哉くん！」

ディエンド「マスター！」

私は必死に腕を使って尚哉の元に近づいていく。

???「やつほー！みんなだいじょう……ぶじやないみたいだね」

私は声が聞こえた方を見ると金髪のツインテールをした少女がおった。

音姫 義之「さくらさん！」

音姫さんと義之くんはどうやらこの子のことを知ってるみたいやな。

さくら「話は僕の家で話した方がいいみたいだね。みんな、僕に近づいて！ 転移魔法で僕の家までいくから」

そう言われて私は音姫さんに運ばれてさくらさんのところまで運ばれて他の気絶している友達も私同様に運ばれた。

さくら「それじゃあ行つくよー！」

さくらの足元から黄色に近い色の魔法陣が展開して私たちは工場から姿を消した。

語られる真実

尚哉SIDE

目を覚ますと知らない天井だった…

これは、ぼけてる訳ではない、本当に知らない天井なのだ。

俺は頭の中で覚えていることを思い出す。

確か……朝にシャドウと戦ってそれから俺の考案で初音島に行った。

そしたら偶然に義之達と出会って、それからちょっと寝てたんだ。たな、それからすぐに……そうだそうだ。

はやて達がさらわれて救出したのはいいけどあの神族の持ってたジュエルシードが発動したんだ。

それでジュエルシードを回収したところで倒れたんだ。

さて、意識を失う前のことはこれぐらいにして、今の状況かなり可笑しいところがある。

今、俺は此処が何処なのかはわからないが布団の上で寝ていた。それはまだ分かる。

次に右を向くと隣ではやてと一緒に寝ている。これも俺してはいつも一緒に寝ているからわかる。

問題はここから、次に左を向いてみる……何故か土見稟と芙蓉楓が仲良く寝ているのだ。

なんで此処にこの2人がいるわけ!? しかも同じ布団で寝てるし、そのせいで布団からはみ出そうになってるよ。

その思っていると襖が開き金髪の少女が入ってきた。

??? 「グッドモーニング、朝だよ、あっ！ 尚哉くん気がついたんだ」

やたらとテンションが高い金髪少女によってはやて達が起きる。

はやてと俺は目が合いまだ寝ぼけているのかそのまま止まり時間がたつと意識がはつきりしてきて……

はやて「尚哉くん！」

尚哉「っ！」

いきなり抱きつかれ激痛が走る。

??? 「は、はやてちゃん、尚哉くん痛がってるよ！」

はやて「え？ うわあああ！ ごめん、尚哉くん大丈夫？」

はやては俺が痛がっていることに気がつき抱きついていて手を離す。

尚哉「大丈夫、ちょっと痛かったただけだから」

???「尚哉くんもはやてちゃんもそれぐらいにして、朝ご飯できたからすぐに来てね」

金髪少女は部屋からでていき俺は起きあがろうとしたのだが…

尚哉「足が…動かない」

足がぴくりとも動きませんまさか…カートリッジを使いすぎたのが原因か。

稟「ほら肩を貸してやる」

尚哉「悪いな、土見」

稟「昨日は助けられたんだお互い様だ。後、これからは名前で呼んでくれ、楓もな」

尚哉「わかった」

俺は稟の肩を貸りて部屋から出た。

それから音姫さんが作った朝ご飯をおいしくいただいて、今はテールの周りに由夢と小恋を除く昨日のメンバーが緊迫した空気で落ち着きようがなかった。

尚哉「はやて、少し落ち着こうか」

はやて「いやいや、そないなと言われても、昨日は音姫さんもさくらさんも『明日に全部話す』って言ってたから」

尚哉「なるほど…」

納得した俺は金髪少女……さくらさんを見る。

どつやら今から話そうとしている。

さくら「みんな…昨日はごめんね、あんな危険なことに巻き込まれて」

はやて「大丈夫ですから、そんなにお気になさらずに」

尚哉「俺の場合、自滅に近いから、それに危険なことは結構あつたし問題無い」

稟「それに俺達の場合、あんなことがあつたから今は和解できたんだし」

楓「もし、誘拐されなかつたらあのまま稟くんを恨んでいましたから」

さくら「みんなありがとう…」この中には知ってる子もいるけどこれから話すことは本当のことだから、他の人には他言無用で」

わくわくの言いつつみんな頷く。

さくら「あと質問するときには手を挙げてね。それじゃあ話すね。音姫ちゃんや尚哉くんが使っていた。魔法について」

説明する前にはやてが手を挙げる。

わくわく「はい、はやてちゃん」

はやて「魔法って神族や魔族が使ってるあの魔法ですか、ってことは尚哉さんと音姫さんは魔族か神族なんですか!？」

さくら「確かに魔法は魔法だけど神族達が使っている魔法と音姫ちゃんや尚哉くんが使った魔法は根本的に違うんだよ」

尚哉「神族達が使っているのは炎とか雷を出したりできるけど、俺達の場合はデバイス…昨日俺が持ってた銃のことな、それに組み込まれてるプログラムとかを使っただけで戦う。魔法と言うより超科学っていった方が適切だな」

俺の説明でみんな納得してくれたようだ。

楓「尚哉くん、そのデバイスはどこで作られているんですか？そんな高性能なものが世間で知られていませんし」

尚哉「それはこの地球でデバイスなんてもんは存在しない」

稟「存在しないって、じゃあ尚哉達を持ってるそれはどこで作られたんだよ」

はやて「尚哉くん？地球には存在しないひんって言ったけど、それやとうちらが住んでる地球以外にも神界や魔界みたいに別の世界があるみたいに聞こえんねんけど」

尚哉「その通りだよ。地球や魔界、神界以外にも、別世界が1000を超えるほどに存在する。その中には科学が発展しているところもあつたり魔法文化が存在しているところもある」

さくら「にゃははは、僕が言おうとしていること尚哉くん已全部言われちゃった……まあ、そんなわけで音姫ちゃん是由姫（ゆき）ちゃん……音姫ちゃんのお母さんからデバイスを貰っているんだ。それに僕も魔導士だからちゃんとデバイスを持つてる。後は尚哉くんなんだけど……」

尚哉「わかってます……みんな、今から話すことはさっきの話がかわいく思えるぐらい衝撃的な話だから……覚悟しろよ」

そう言つとみんな此方を向き頷く。

尚哉「それじゃあ話す前に……はやてには謝っておこないといけない」

はやて「なんや？謝っておかないかんことつて」

尚哉「実は……俺、記憶喪失なんてしていないんだ」

はやて「へ？」

その瞬間はやてが固まる。

尚哉「ちゃんと覚えてるんだよ。家族のこととか、どこに住んでいたとか、どこの学校に通っていたとかも全部」

さくら「なら、尚哉くんはなんで家族のところに戻らないの？」

尚哉「帰らないんじゃないんです。帰れないんです」

音姫「帰れないっていったいどうして？」

音姫さんがなぜ帰れないか質問してくる。

尚哉「俺が出身世界……地球なんですけど此処とは全く違う地球……平行世界からやってきたんです」

俺が言ったことにその場の全員驚く。

さくら「なら尚哉くんは……元の世界に帰るために頑張らないの？ 家族みんな心配してるはずだよ」

尚哉「……両親はもう亡くなって、妹が1人いるんだが……心配じゃなく悲しんです」

はやて「なんで悲しんでるって断言できるんや」

尚哉「そりゃあわかるさ……俺はあっちの地球で交通事故で死んだから」

そう言いきった瞬間時間が止まったように静かになる。

稟「交通事故で死んだって……それじゃあ、今俺達の目の前にいるお前はなんなんだ」

尚哉「少し待てすぐに説明する」

稟「ああ……」

尚哉「交通事故で死んだ俺は気がつくとも真っ白な空間にいたんだ。そしたらいきなり声が聞こえてきて、そちらを振り向くと……」

楓「振り向いたら……」

みんな固唾を飲んで此方をみる。

尚哉「謎のおっさんがいた」

尚哉を除く全員「へ？」

尚哉「いや、本当におっさんがそこにおいてな自ら神とか名乗って何故俺がこんなところにいるんだって聞いたら……」

話を一度区切り、また話す

尚哉「俺が死んだ原因が交通事故って言ったが実際は神のやつが誤って殺したんだよ。もちろん、神をボッコボコにしたけど」

ボッコボコにしたと言ったらみんな苦笑いする。

尚哉「それですぐに蘇った神が俺にこの世界に転生して世界を救ってくれて言われて、こっちの世界に強制的に飛ばされたんだよ。そのときにディエンドもらったんだ」

義之「尚哉、転生ってなんだ？」

尚哉「転生って言うのはなこの世界にくる前の記憶……要するに元いた世界で過ごした記憶を引き継いでいるってこと、ゲームで言うところのニューゲームみたいなものだ」

義之もどうやら納得してくれたようだ。

さくら「尚哉くんがデバイスを持っている理由はわかったんだけど

ど、世界を救ってくれってことは何か目的があるの？」

尚哉「はい、俺はこっちに来てから2年間…シャドウという怪物と戦ってきました。今から2年前の初めて、シャドウと戦った時の映像を流します。……その映像……かなりグロテスクだから本当は見せたくないけど特にはやてには……どうする？見るか？」

みんな覚悟は決まっていたのか頷く。

尚哉「わかった。ディエンド映像をモニターに出してくれ」

ディエンド「わかりました……映像出します」

その瞬間ディエンドから映像が流されその映像は2年前の事故現場だったためみんな驚いた。

尚哉「この映像は2年前…こっちの世界に来たばかりの時、あの事故現場だよ」

そして映像は切り替わり黒い怪物が現れたシーン。

さくら「尚哉くん、これは……」

尚哉「こいつらがシャドウ…種類で言つとシャドウスパイダーって名前だ」

そして映像は進んでいき俺とシャドウスパイダー融合体が戦っているシーン。

尚哉「このシャドウはさっきのシャドウスパイダーが数体が融合している。ディエンドからはシャドウスパイダー融合体って聞いてい

る」

はやて「…何でやろう、私このシャドウ…見覚えがあるんやけど」

尚哉「その疑問もすぐにわかるよ」

そしてシャドウスパイダー融合体が少女を…はやてを襲おうとする映像が流れる。

この映像にはやても含めてみんな驚きこちらをみる。

はやて「尚哉くん、この映像に出てきたあの子って…私やんな」

尚哉「ああ、はやて、前に事件最中のこと覚えてるって聞いたじゃないか、実はシャドウに襲われた時の記憶を覚えてるかどうか、確認したかったんだ」

そして、映像が切り替わりシャドウスパイダー融合体を倒したシーン。

尚哉「その後シャドウスパイダーを倒して俺の初戦闘は終わったんだ。これで理解できたか」

俺がそう言つとみんな頷いた。

尚哉「これでわかっただろ俺が戦い続けている目的は」

はやて「尚哉くんは1人で戦つとつたんか」

尚哉「ああ、これは俺だけの問題だしほかの奴を巻き込むわけには

いけない」

そう言うとはやては車椅子を使いこちらに近づき...

スパーン!!

尚哉「っ!」

はりせんで頭を叩かれました正直痛い。

はやて「尚哉くんのどアホ!何でそないなこと隠しとるんや!それに何で1人でそのことを背負い込もうとするんや!」

若干涙目ではやては俺を怒鳴りつけ抱きつく。

はやて「尚哉くんに何かあったら、私...」

尚哉「ごめん...」

はやて「なら約束して、もう1人で何もかも背負わんとして今度はらは私も尚哉くんと一緒に背負うから」

尚哉「いや、それは...ちょっと...」

さくら「尚哉くん、レディにそこまで言われたんだから当然答えは決まってるよね」

さくらさんのその言葉を言われ完璧に退路を断られた。

尚哉「わかったよ約束する。もう1人では抱え込まない」

はやて「ほんまやな、なら、指切り」

そう言うとはやては右手の小指を立てる。

俺もはやてと同じように右手を差し出し小指と小指で握る。

尚哉 はやて「指切りげんまん、嘘ついたら、針千本飲ーます。指切った。」

のどかな時間

GWから数日が経ち重症だった怪我也完治した俺はいつもの高台に訪れて射撃の練習をしていた。

尚哉「それじゃあラスト一回…やっていこうか」

俺は左手に持つ空き缶を空高く真上に投げて右手で持っているダイエンドで狙い撃ちその魔力弾は空き缶に当たり更に上へと上がっていく。

ダイエンド「35…36」

俺が当てた回数を数えるダイエンド、だが当て続けることで空き缶のある高さはここから見たら豆粒以下の小ささまでなっている、故にかなりの命中精度が求められるのだ。

尚哉「くっ！」

ダイエンド「98…99…100…そこまで」

ダイエンドに終了の合図をかけられると俺は撃ち方をやめると空き缶が重力に従って物凄い速さで落ちてくる。

尚哉「っ！こいつでラスト！」

俺はダイエンドを構えてタイミングを合わせて魔力弾を放ち空き缶に当ててごみ箱に入れる。

尚哉「…ふう…ディエンド今回の評価は？」

」

ディエンド「まあ、85点ですかね」

尚哉「まだまだ修行が足りないか…？そんなじゃあはやてが家で朝食作って待ってるはずだから行こうか」

ディエンド「はい、マスター」

俺は練習を止めて家に帰る帰路を通る。

GWが終わっても俺の怪我は治らず学校は発熱ということでした、そして昨日…俺とディエンドは次元震があったのは確認済みだった。

ということは「今日は時空管理局が…」というかKYクロノが乱入してくる日なのである。

そんなことを思っていると無事に家まで到着し中へと入りいつも通りにこう言った。

尚哉「ただいま」

はやて「おかえり〜尚哉くん」

稟「おはよ、尚哉例のトレーニングか？まあほどほどにしておけよ」

楓「おかえりなさい、尚哉くん」

そこにいたのは家主であるはやてとGWから友達になり案外家が

遠くなかったので朝食を共にすることにした土見稟と芙蓉楓の姿がそこにあった。

はやて「尚哉くん、お風呂沸かしといたから入ってきい」

尚哉「そうかそれじゃあお言葉に甘えて」

そういつて俺は制服をもって風呂場に向かった。

あんな出来事が…そして俺の全てを知ったのに関わらず今以上に接してくれるみんなに感謝しないとな…

朝食をとった後、俺と稟達は学校向かうため登校の道を歩いていった。

尚哉「なあ、稟、学校の方は？どうだったんだ？やっぱ回りの奴等は納得いっていないのか？」

俺が思っていたことそれは稟に対するいじめだ、楓の仲が戻ったと言っても周りの生徒達はいそうですかというはずがない。

稟「それについてなんだけどさ、尚哉のいった通りだ、初めは認めないやつもいたけどさ勇翔が一喝してからなにもされなくなったんだ」

尚哉「そうか…勇翔の奴…」

尚哉（あつちだけでも精一杯なはずなのだがな）

そう思っていると学校にたどり着き、教室の前になのはと勇翔の姿を見つける。

尚哉「勇翔！なのは！おはよ」

なのは「あ…尚哉くん、それに稟くんと楓ちゃんも」

なのはは平然を装うが内心は落ち着いてはいないことに気がついた。

稟「そういえばどうしたんだ？なかに入らないのか？」

勇翔「実はな…中にはあいつがいるから入ったら…わかるだろ？」

ああ…なるほど

尚哉「全くこの頃来ないから飽きられたと思ったが…少々痛い目に見てもらおうかな…勇翔…稟少し手伝え」

俺はそう言って俺と勇翔ドアの両端に立ち稟が正面にたち俺達は何も喋らずに意思を伝えて俺はドアを開けると…

???「なのはちゃん！楓ちゃん！ようこそ俺様の胸のもとへー」

いきなり謎の男の子が出てきて稟に抱きつくが稟はそんな男の腹にパンチを繰り出し後ろによるけると俺と勇翔の回し蹴りが炸裂し男は後ろに吹き飛び地面に叩きつけられ気絶し俺達は男を素通りで席に向かうのだった。

余談だが吹き飛ばした男の名は緑葉樹、一応友達なのだが性格が女たらしである。

学校が終わり俺と稟達は直ぐに家に戻った、あることを教えるためにだ。

はやて「そうそう、そんな感じや」

楓「はい」

只今はやてが楓に料理を教えているのだ。

稟「なあ、尚哉」

尚哉「なんだ？」

稟「尚哉って料理とか作れるのか？」

尚哉「ああ作れるぞ」

稟「マジてか！」

尚哉「男が作るのがそんなに変か！」

そんなたわいもない話をしているときだった、その時ジュエルシードの反応を感知する。

稟「どうしたんだ？」

いち早く俺の異変に気づいたのは近くにいた稟であった。

それに連鎖するように楓とはやてもこちらを向く。

尚哉「いや、何、どうやら久しぶりに戦いに出ることになりそうだ」

そういつて俺はディエンドを持って家をと思ったがはやてが出口前で立ちほだかる。

はやて「尚哉くん、ちょう、ディエンド起動して」

尚哉「今此所ですか？…わかったよ」

俺ははやてに言われるままにディエンドを起動する。

はやて「ディエンド借りるぞ」

そしてはやては俺の手から離れると小声で何か言い争っているのかそれから一分そこらでなんと！予備のカートリッジのマガジン4つを取りだしそれをはやてが持ってディエンドは、はやてに返され

る。

尚哉「あの、はやて何故換えのマガジンを持ってるんだ？」

はやて「勿論。尚哉くんが無茶しいひんためやでカートリッジは
ディエンドに入っとるヲ発だけです」

尚哉「…わかったわかった、はやてが一度言い出すと言うこと聞か
ないしな」

俺はそう思ってディエンドを待機状態に戻して現場へと向かった。

KYクロノ登場！さあ…フルボツコの時間だ

俺がたどり着くと既にジュエルシードは封印されており今まさになのはとフェイトが激突する刹那…！

クロノ「ストップだ！此処での戦闘は危険すぎる！」

そこに転移で飛んできたのは勿論KYクロノ

クロノ「時空管理局、クロノ・ハラオウンだ！詳しい話を聞かせてもらおうか」

さてと準備に取りかかりましょうかね

まずは…

これでよし！さっさとおっばじめますか

そんなことをしていると既にフェイトにクロノのデバイスが向けられていたその時！

「スキヤニングチャージ！」×50

オーズGKB×50「セイヤアアアアアアアアアアアツ!!!」

クロノ「何!?ぐわああああっ！」

オーズガタキリバコンボの必殺技が炸裂しクロノに直撃するも倒せてはいないだが悪夢は此処からなのだ。

クロノ「いきなりなんだ！なっ！空が夜に？」

気づけば空は夜になっておりその空中に

キバ&ファイズ「はああああああっ！」

フォーゼ「ライダードリルキック！」

まず、クロノはファイズポインターから放たれた円錐形のものに拘束されなすべもなくキバのダークネスブレイクにファイズのクリムゾンスマッシュにフォーゼのライダードリルキックが直撃しクロノは空から落ちていくだが追撃するかのよつに…

「ライティングスラッシュ」

ブレイド「ウエエエエエエエエエイ!!!!」

クロノ「ぐぼおー！」

ブレイドのライティングスラッシュが直撃そして

「トリガー！マキシマムドライブ」

W「トリガーフルバースト！」

そしてタイミング良くクロノはライダーキックという名の回し蹴りを直撃し木に叩きつけられ気絶した。

尚哉「ふむ、やり過ぎたか」

なのは「やり過ぎたじゃないですよ！あの人大丈夫なんですか！」

尚哉「大丈夫、死にはしないから」

まあ多分、ジュエルシード事件が終わるまでは動けないだろう。

尚哉「それでは俺は帰るとしよう、ジュエルシードは…と思ったが
あちらは撤退していたか…それでは俺も引くとしよう」

厄介なことになる前に

??? 《待ちなさい！》

なのは「ふえ!？」

尚哉「…はあ…遅かったか」

リンディ《時空管理局リンディ・ハラオウンです、お話があるんですけど、こちらに来てくれませんか?》

尚哉「ということだ、話は君達だけで聞きたまえ、俺は帰るとしよ
う」

リンディ「いや、君にも着いてきて欲しいのだけど…」

尚哉「丁重にお断りします、俺とあなた達はいずれは雌雄を決することになる運命(さだめ)なのでね、手の内は晒したくは無いです」

リンディ「運命(さだめ)？」

尚哉「ええ、あなた達とそこにいる高町達とは戦うことは運命づけられてるのです」

なのは「わ、私達もですか？」

リンディ「一体なんだというの？」

尚哉「一言だけいっておきましょう…闇の書と…ね」

その瞬間リンディさんの顔が強張った。

リンディ「あなた！まさか闇の書を知っているの！教えなさい」

尚哉「それは時が来ればわかりますよ、それでは」

リンディ「もうひとつだけ聞きたいわ、あなたは何者？どうして未来で起こることを知っているように話すの？」

尚哉「そうですね、リンディさん、あなたは転生者と言う者を信じますか？本当に存在していると」

リンディ「…それがあなただと言っの？」

尚哉「ええそうです、前世であなた達が辿る運命も知りました、以上です」

俺はインビンジブルですがたを眩ましその後なのは達は管理局に協力し三つ巴の戦いは終幕へと向かっていく。

時を駆ける列車／俺！参上！

時空管理局が介入したのは達が管理局に協力して5日が経ち、俺はというとジュエルシードからは一時的に手を引いてあれの練習をしていたが今回は廃棄工場にシャドウが現れすぐに殲滅したのだが帰り途中で廃棄工場に奇妙な異形の者を見つける。

尚哉「あいつら…シャドウじゃないな」

ディエンド「はい、反応がないので恐らくは…」

俺が見たやつらは何かを探しているのか辺りを搜索していた。

それにしてもどっかで見たような…あっ！

尚哉「思い出したぞ、あいつらイメージンって言って仮面ライダー電王に出てくる怪物だ」

ディエンド「本当ですか!?ならばなぜやつらはこんなところに」

尚哉「さあな、恐らく目的あって来てるはずだから…痛め付けて聞き出すか」

俺はライドカードを取り出してホルダーに挿入する。

「アタックライド アーストゥアース」

電子音が聞こえると俺の左手にバレーボールぐらいの青い球が現れ俺はそれを上に投げて

尚哉「よい…しよつと…」

全力で蹴りを繰り出しイマジン達の元へと飛んでいく。

イマジン1「ん？おい、なんだあれ」

イマジン2「こっちに飛んできてねえか？」

イマジン3「よ、避ける！」

イマジン達はアーストゥアースに気づくも既に遅しアーストゥアースは見事に地面に着弾すると爆発をおこしイマジンを仕留めるまでには至らなかったがダメージを負わすことができた。

尚哉「さてと、いったい何をたくらんでいるか…はいてもらおうか」

イマジン1「くっ！おい！お前は目的のもんを持って行け！俺達がかいつを食い止める」

イマジン3「ああ！」

一体のイマジンが仲間のイマジンから何かの欠片を渡されると全速力で逃げる。

俺は直感であれを逃がしたら不味いと思ひ追いかけてよとするも残ったイマジン2体がそれを阻む。

イマジン1「行かせるかよ」

尚哉「じゃあ、押しとおる！」

俺はディエンドを構えて牽制のつもりで魔力弾を発射させると案
の定避けるので避けたところで一気に距離を積めてイマジンに左ス
トレートを顔面に食らわす。

イマジン1「ぐふあ！」

イマジン2「てめえ！格闘もできるガンナーなんて邪道だ！」

尚哉「悪いがそこは察せ、どんな状況でも対応できるようにした
だけなんだな！」

数分後…

イマジン達「ぐわああっ！」

尚哉「こいつで終わらせる！ディメンジョンプラスト！」

イマジン1「ぐわああああっ！」ドカーン！

尚哉「続けて！ディメンジョンバスター！」

イマジン3「ぐふう！…完全なる悪の組織に…万歳！」ドカーン！

俺はノーダメージでイマジン2体を倒すも死ぬ前にいった悪の組
織という言葉が頭に引っ掛かる。

ディエンド「マスター！考えているよりも！逃げたイマジンを！」

尚哉「っ！そうだな、ディエンド、エリアサーチをしてイマジンを

探してくれ！」

ディエンド「了解です、マスター！」

俺はやつが逃げた方向に走り出すのとエリアサーチの球が四方に飛び散る。

尚哉「くそ！何か不味いことでもあるって言うのか」

ディエンド「マスター！ここは人手呼ぶということでライダーを！」

尚哉「ああ、わかった！」

敵はイマジンだからな此処は電王のファイナルフォームライドでモモタロスに頼むかあいつなら鼻がきくしな

俺は早速カードケースから電王のカードを取り出してディエンドに挿入する。

ディエンド「……………あれ？読み取れない？」

そんな馬鹿な！

俺はディエンドから電王のライドカードを抜いてカードを見るがカードの力が失っているということではないようだ。

尚哉「ど、どうなっている……」

デイエンド「マスター！エリアサーチに反応あり！奴は此処から来たのほうに…そこに列車も止まっています」

尚哉「列車？…考えても仕方ないか行くぞ！」

俺は考えるのを止めて全速力で向かい数分後に辿り着くと既に逃がしたイマジンは列車から出てきたであろうイマジンに謎の物は渡されていた。

尚哉「逃がすか！」

俺はがむしやらに魔力弾を放ちやつらを妨害しようとするも謎の物を持った奴は列車の中に入り渡したイマジンはこちらに近づいてきた。

尚哉「くそ！間に合わなかったか！」

イマジン3「遅かったな、仲間の敵を討たせてもらうぞ！」

尚哉「そう簡単にはやられないぞ！」

そういつてデイエンドを構えて一触即発な空気になる。

互いに動き出そうとしたしたそのとき何処からか列車の汽笛が聞こえてくる。

尚哉「汽笛？」

はつきりいつて此処は廃棄工場であり汽笛など聞こえてくるはずがないが現に聞こえてきたので辺りを見渡した。

ディエンド「マ、マスター…上を！空に電車が！」

なぜか奇妙なこと言い出したディエンドに言われたとおりを上を見て俺は絶句した。

俺の目に写るそれは正しく赤と白を強調した列車…それが空に出現しているレールの上を走っている。

だが俺は電車が空を飛んでいることに絶句しておらず、その物じたいに驚きを隠せなかった。

尚哉「デン…ライナー…」

それは正しく仮面ライダー電王の拠点である過去や未来を飛び越えられる、時を越える列車だ、何度か前世でアニメを見たことがあるから見間違える筈がない。

??? 「行くぜ！行くぜ！行くぜ！」

デンライナーの頭部のハッチが開きそこからマシンデンバードが飛び出してきて搭乗者は俺もシャドウの戦いのときに何度か助けてくれた…そして俺が初めてカメンライドしたライダーその名も…

尚哉「電王…」

正しくあれは仮面ライダー電王ソードフォームだった。

電王S「くそ！手遅れだったか！」

イマジン「ははー！残念だったな電王！既に魔石は我らのものだ」

電王S「ちくしょう…ん？」

イマジン「ん？どうし」
「デイメンジョンブラスト！」
「ぎゃああああっ！」
「ドカーン！」

尚哉「全く…戦っているときによそ見とは…」

電王S「お、おめえ！尚哉じゃねえか！」

尚哉「ん？俺の名前を知ってるってことは…俺がよくライドしてるモモタロスでいいんだな？」

電王S「おう！あんときは暴れまくったな」

電王S「というよりモモタロスは憂鬱になりながら変身を解くと赤鬼の姿をしたモモタロスモモタロスに憑依されていた、野上良太郎の姿を現した。」

尚哉「そういえば、何か手遅れとか言ってたけど…まさかだと思っけどさっきイマジンが妙な石の欠片を持っていったが…もしかしてそれ？」

良太郎「き、君、それ見たの!？」

尚哉「はい、あいつらそれを見つけた所で攻撃しかけましたし、なんか事件に絡んでますよね、なんなら自分も同行しますよ?」

良太郎「え?それはちょっと…」

尚哉「戦力が多い方がいいですね?」

モモタロス「なあ、良太郎連れていこうぜ、こいつの力は俺も信用できるしよ」

良太郎「うん、わかった、モモタロスがそう言うならいいよ、でもこれからいくところは過去だから絶対に過去を変えちゃいけないよ」

尚哉「わかった、約束する」

モモタロス「そんじゃあ、早くあいつらを追おうぜ!」

そういつて俺は良太郎とモモタロスについていき時を駆ける列車
デンライナーに乗り込んだ

時を駆ける列車デンライナー…次の行き先は過去か…未来か…それとも異世界か…

時を駆ける列車ノライドインミットチルダ

此処はデンライナーの車両…

俺は窓から外を見るとそこは一面が砂のいった光景があった。

…すこし現実から目を背けたが本当に信じられない話だった。

尚哉「つまり、魔王っていうロストロギア確定の代物を狙って何故か生きてたネガタロスと戦闘の末に魔王が2つに割れて時空の歪みに落ちて現在魔王の欠片がある時代に向かっている…」

良太郎「うん、そうだよ」

しかも聞いてみればつい先程見つかった平行世界の路線だとかなんとか…ほんとにほんとに…

尚哉「いくらなんでも、こ都合主義過ぎるだろ！」

つい怒ってしまったり。

ハナ「なに、いきなり大声だしてるのよ！」

尚哉「あ、すいません」

つい大声を出してしまってハナさんに怒られてしまった。

ナオミ「はい、ナオミ特製コーヒーです！尚哉くんどうぞ」

そういつて乗組員のナオミさんから特製のコーヒーを前に出され取りあえず飲む

そして飲んだ感想を言っておこう…甘い！甘すぎる！コーヒーの苦味がディケイドが破壊した並みにぐらいに甘いのだ！甘ったるくて…でもまだこんなにある…

キンタロス「なあ、亀、あの坊主無理しとらんか？」

ウラタロス「いや、キンちゃんあれは無理してるんだよ」

少し離れた座席に座るウラタロスとキンタロスがコーヒーを我慢しているのを見ている。

え？リュウタロス？リュウタロスなら…

リュウタロス「よし…どうだ！」

オーナー「まだまだ」

あの伝説のチャーハン対決をしています。

尚哉「良太郎、要するにこちらの目的は第一に魔石の片割れをネガタロス達より早く手に入れること、もしくはネガタロスを倒して取られた魔石の片割れを取り戻す」

良太郎「うん、間違いなく戦うことにはなると思う」

ナオミ「まもなく目的地に到着いたします、御料者ありがとうございます」

います！」

遂に目的地に到着するのであった。

目的地に辿り着いた俺達は降りた場所が場所だったので啞然としていた。

尚哉「えっと…ここは…」

リュウタロス「わ〜大きな穴だ〜」

ウラタロス「というより、なにかの爆発で…一面が瓦礫の山だね」

キンタロス「魔石はこの辺りらしいし…骨折れんで」

良太郎「うん、そうだね、それじゃあ二手に別れようか、僕とモモタロスとハナさんがあそこのクレーター辺りを探すから残りの尚哉達はあつちを探してきてくれる？」

尚哉「は、はい、わかりました」

俺は普通に承諾し瓦礫の山の中、魔石を搜索が始まった……………

……………

恐らく30分は経過しただろう……そしていま思っていることを言わせてくれ…

尚哉「見つかるわけないだろおおお！」

俺の大声をあげて手近なところにあつた石を蹴り飛ばした。

ウラタロス「まあまあ、そうかりかりせずに」

キンタロス「もうこれは地道にやってくしかないで…」

リュウタロス「ねえねえ、みんな！なにか此所にあるよ！」

ウラタロスとキンタロスが俺を宥めてる中、リュウタロスが何かを見つけたのかリュウタロスが指差す方向…それは俺の足元でどうやら先程蹴り飛ばした石が無くなったことで埋もれていたものが少しだけ見えたのであろう。

キンタロス「魔石か？」

尚哉「いや…違う…スケッチブックだ」

回りの石をどかして出てきたのは何も普通なスケッチブックで表面は名前が書かれているのだが土で汚れてその上字が掠れて穴虫状態だ。

尚哉「えっと…ミッド語だな」

ウラタロス「読めるの？」

尚哉「ああ、ディエンドから教わったから大体は、えっと…シア…タロ…？なんだこれ…多分名前だと思うけど…殆ど穴虫状態だから読めん」

キンタロス「なかには何て書いてあんのや？」

尚哉「見てみるか…ちょっと失礼つと……」

俺はこの場にいない持ち主に勝手に見ることを謝っておき中身を拝見する。

どうやら子供が書いたようで絵は下手だが大好きなのかかなり書き込んでいる。

スケッチブックをペラペラと捲っていくなか俺は気になった絵があったのでそこで捲るのを止めてそれをじっくりとウラタロス達も後ろから見る。

ウラタロス「これ…家族の似顔絵かな？」

尚哉「多分そうだろう…でもこれは……」

キンタロス「真ん中の黒髪の女が母親で…両方にいる金髪の嬢ちゃん
が双子の娘なんか？」

尚哉「ああ…多分そう…でもこれ……」

ウラタロス「なに？心当たりでもあるの？」

尚哉「俺の時代にいるフェイト・テスタロッサにそっくりなんだよ
…でも、フェイトがこんな瓦礫の…恐らく研究施設に行くようなこと
は無いと思うが……」

「あゝ……」

尚哉「ああ、リュウタロス、ちょっといま推理中なんだ…」

「わえっつば」

尚哉「リュウタロス！」

リュウタロス「ぼ、ぼく何もいってないよ！」

尚哉「それじゃあだれが…」

「しっじだよー上ー」

尚哉「上？」

そう言われたので上に振り向くと…

「…さめてびびり」

宙を浮いている金髪の少女の…フェイトに似た女の子がいた。

……

尚哉「……ディエンド」

ディエンド「セットアップ」

俺はバリアジャケットを装着しそしてディエンドの銃口をフェイト似の女の子に……

女の子「ちょっ！ごめんごめん！だから撃たないで〜」

銃口を向けられたことで直ぐに謝ってきた。

尚哉「……はあ……っで君はもしかしてこれの持ち主か？」

そういいながらディエンドを下ろしスケッチブックを彼女に見せる。

女の子「あ！それは私の！」

そういつてスケッチブックを手に取るうとするも手に取ることが出来ずに通り抜けてしまう。

女の子「……怖くないの？」

尚哉「……怖くはないが……可笑しいな……幽霊とはな」

女の子「うん、でもみんな私の姿見えてるみたいだから、声かけてみたんだよ……でも」

尚哉「驚かれて逃げたと」

女の子「…うん」

尚哉「そういえば名前聞いてなかったな、俺は浅倉尚哉だ」

女の子「アリシア…アリシア・テストロッサだよ」

尚哉「アリシアな…よろしく」

やっぱりアリシアだったかなら幽霊なのも領ける…けどどうして？

リュウタロス「ねえねえ、魔石知らない？」

アリシア「魔石？」

尚哉「ああ、実はだな…」

俺は魔石について形状を話す。

尚哉「まあ、形はそんなもんだ何か心当たりとかあるか？」

アリシア「ん…あつ！それなら私持ってたよ！」

ウラタロス「…マジで？」

キンタロス「…マジか？」

尚哉「…マジだ」

シヨウタイム

アリシア「うん、そういえば変な怪物もここら辺探してたけど声かけたら逃げちゃった」

尚哉「…イマジンだな」

ウラタロス「イマジンだね」

キントロス「イマジンやな」

というか、怪物が怯えて逃げるっておい

アリシア「それでね、その魔石なんだけど私こっとなる前に持ってたの」

キントロス「ほんまか！それ！」

アリシア「うん、そうだよ、そういえば私がこっとなる前に光ったよ
うな…」

尚哉「まさか…アリシアがなんでそうなったかわかったかも」

アリシア「ほんと!？」

尚哉「ああ、たぶんアリシアがそうになったのは魔石のせいだと思う、推測だけど、アリシアの危機に反応して守ったが対価としてアリシアは魂だけの存在になってしまった」

ウラタロス「なるほど、そういうことが」

アリシア「すごい！頭いいね」

伊達に二十歳は越えてないからな

キンタロス「ところで、それはどこら辺に落ちたんや？」

アリシア「えっと、ここら辺に私の部屋があったから…そこら辺を探せば見つかるよ？」

尚哉「よし！さっさと見つけるぞー！」

そうしてアリシアの助けもあってアリシア部屋の跡のところを重点的に探すこと30分…

リュウタロス「あ、あった！」

尚哉「マジ！」

リュウタロス「ほら」

リュウタロスの右手には間違いない魔石だ！

キンタロス「でかしたで！リュウタ！」

ウラタロス「これで、ネガタロス達は揃えることができないね」

尚哉「それじゃあ良太郎達と合流しよう、アリシアありがとうそれ

「じゃあ俺達急ぐから」

アリシア「ま、待って！その私も連れてってくれない？」

尚哉「え？あ…それは…なあ、ウラタロス…オーナー…アリシア連れて行って大丈夫かな？」

ウラタロス「いや、流石に…」

尚哉「でも、アリシア今回の騒動の被害者でもあるし…」

ウラタロス「確かにそうだけど…」

正直俺の推測が正しければ俺の時代のアリシアは…

「デイエンド「マスター」

尚哉「っ！全員伏せろ！」

その瞬間俺達のいる近くに光弾があたり爆発した。

尚哉「くっ…大丈夫か？」

ウラタロス「なんとか…」

キンタロス「助かったで」

「どうやらみんな無事みたいだ。

リュウタロス「あっ！魔石！」

俺達から少し離れた瓦礫の上にリュウタロスが持っていた魔石がさっきの爆発で手を離れたのだろう…

それは俺達ではない…いや、あの格好は見覚えがある。

??? 「ふふふ、わざわざ、探してくれてありがとう、見つけたところで横取りする、これぞ、勝てる悪の組織だ」

尚哉「ネガ…タロス…」

遂に俺達の前に敵の首領が現れた。

時を駆ける列車／集え！終焉の光！！

尚哉SIDE

俺達はネガ電王に向かって走り出すなか、ネガ電王はデンガツシャーガンモードで射撃してくるがそれを最小限で避けながら近づいていく。

電王C「でりゃあ！」

まず一番に早く到着したのは電王で走ってきた速度を殺さずにそのまま飛び蹴りならぬ、飛び殴りを繰り返すがネガ電王はものともしない雰囲気を受け止めてその腕をつかむと電王を投げ飛ばした

電王C「のわあ！！」

ゼロノス New電王「はあぁっ！」

尚哉「くっっ！」

次にゼロノスとNew電王がゼロガツシャーとテディが変化した銃剣を使って攻撃し俺は少し離れたところでディエンドとデンガツシャーガンモードで射撃する。

ネガ電王「どうした？貴様達の力はその程度だったか？」

ゼロノス「くそ！おちよくってんのか！」

デネブ「侑斗！挑発に乗ってはダメだ！」

ネガ電王「やはり俺が強くやり過ぎたのか」

ゼロノスは挑発に乗ってしまいネガ電王に鳩尾を食らわされて続けて回し蹴りて吹き飛ばされる。

New電王は銃剣を振るつもネガ電王に銃剣…

テディを弾き飛ばされ直ぐにデンガッシャーのソードモードで戦うも持っている手を捕まれそこからゼロ距離射撃をくらう。

尚哉「幸太郎!!」

俺はネガ電王に接近し飛び蹴りをはなちそれを両腕で防がれ、防がれたのでそのまま足に力を入れて空中バクテンしてバクテンの最中にネガ電王に目掛けて射撃する。

ネガ電王「ほお、かなりの銃さばきだな」

尚哉「そりゃあどうも」

ネガ電王「ならば俺も銃でいこう」

そういつてNew電王から奪ったデンガッシャーをガンモードにして俺と同じく二丁拳銃を構える。

尚哉「…」

ネガ電王「…」

互いに銃口を向けて一触即発の雰囲気ですしの時間が流れて…

尚哉「…っ!!」

互いにトリガー引き魔力弾と光弾がぶつかり合う。

そして俺もネガ電王も二丁拳銃から飛び出す弾丸を飛び交いあうも全て相殺されて一歩も引かない均衡が続く。

尚哉（この銃撃戦…集中力を切らした方が負ける！）

俺は撃ちながら左に走り出すがネガ電王も同じ考えだったようでやつも全く同じ動きをしていた。

およそ500メートルを30秒で走る速度で走りながら銃撃戦が約2分ぐらい続きその間にも俺と奴の距離は縮まってい

そして距離1メートルになったときに俺とネガ電王…両者動き出した。

お互い足払いを狙いお互いに姿勢を崩して空中で回転し姿勢を直すすと二丁の銃のトリガーを飛ばすが…

ネガ電王「ふっ!!」

魔力弾と光弾は相殺されることなく避けられ一気に詰められて左手のデンガッシャーを弾き飛ばされ俺を倒しネガ電王は俺の腹に足を押し付け銃口を向けた。

ネガ電王「ジエンドだ」

そうしてトリガーを…

電王C「させつかよ！」

引かれようとしたとき横から電王がタックルをかましてネガ電王は吹き飛ばされ危ないところを助けられた。

電王C「大丈夫か？」

尚哉「何とかな…」

電王C「でもどうする？あいつ…あの石のせいで滅茶苦茶強くなつてやがる」

尚哉「あの魔石を破壊できれば…一か八か試すか」

電王C「なんかあんのか！」

尚哉「はつきりいつてこれ成功したこと一度もない…成功しても破壊できなかつたら終わりだな」

電王C「ならやってみようぜ、一か八かよ」

尚哉「そうだな…みんな！できるだけ時間を稼いでくれ！」

そして俺は飛行魔法で空高くに飛び上がり上空千メートルぐらいのところまで止まりいつも展開している魔法陣より遥かに大きい魔法陣を展開する。

そして俺はこの場に散らばった魔力の残留をかき集める。

そして下では電王、ゼロノス、New電王がネガ電王と戦い気を引いてくれている。

尚哉「デイエンド！チャージ完了にはあとどれくらいかかる？」

デイエンド「おつよそ一分と行ったところでしょう、急ぎましょつ」

そして一分が経ち俺の目の前に直径20メートル程のスフィアを完成させデイエンドを魔力スフィアに向ける。

尚哉「みんな！完成した！待避を！」

おれはみんなに待避を指示して…

尚哉「集え！終焉の光!!ディメンジョン…」

俺は…

尚哉「ブレイカアアアアアッ!!!」

ディメンジョンブレイカーのなを叫びながらトリガーを引きディメンジョンブレイカーはネガ電王を飲み込んだ。

そして辺り土煙が舞うなかに俺は電王の横に降り立つ。

電王C「やったか？」

そして煙が晴れていくとそこにはボロボロでアーマーから火花が

散り近くには魔石だったであろう魔石の残骸があった、破壊は成功したみたいだ。

尚哉「良太郎、モモタロス最後は決めてくださいね」

電王C「おう！任せとけ！」

「チャージ&アップ」

電王C「俺達の必殺技…クライマックスバージョン！」

電王の右足にエネルギーが集まり走り出して助走をつけて電王クライマックスフォームの必殺技ボイラーキックがネガ電王に炸裂した。

ネガ電王「まさか…、俺が…！だが…悪の組織は…不滅！」

そして断末魔を挙げてネガ電王は爆散した。

ネガタロスを倒したあとゼロノス達はゼロライナーでネガライナーを破壊しに向かい、俺達はというとデンライナーで搭乗しているアリシアのことを話していた

尚哉「今回、アリシアは魔石のせいであんなことになった…だから…この通り！」

オーナー「今回は君の働きに免じて目をつむりましょう」

尚哉「本当ですか！ありがとうございます！」

オーナー「歴史には問題はありませんからね、アリシアさんは特異点であって分岐点でもありませんから」

…く？

「ええ（；。）」

オーナー「ということはあなたがいる時代なら彼女をもとに戻すことが出来ますよ？」

尚哉「…もしかして…」

時の庭園での決戦でアリシアを助けることが出来るかもしれない

ディエンド「マスターこれはかなり私達に運がきましたね！」

尚哉「これならいける！絶対に！アリシアを助けられる！…けど」

ディエンド「プレシアさんの病ですね」

オーナー「それなら大丈夫でしょう…もつすぐ彼らが来ることですし」

彼ら？

オーナー「尚哉くん、アリシアさんは時がくるまでここにいてもらいましょう、ですからデンライナーに入れるようにこれを」

そういつて渡されたのは無制限のデンライナーのチケットとデン

オウパスだ。

尚哉「いいんですか!？」

オーナー「まあ、たまに遊びに来てください」

尚哉「ありがとうございます」

こうして俺は元の時代に戻りはやてが待つ我が家に帰るのであった。

作者SIDE

世界と世界を繋ぐ道…その道を爆走する2台のバイクには四人の人間が乗っていた。

??? 1「もうすぐ目的地に到着するぞ」

??? 2 & 3「行くぞ！新世界！」

??? 4「いや、違うから！」

その中の女性二人がボケて一人が冷静につっこむ。

??? 1 「よし！気を引きしめていくぞー！」

??? 4 「おう」

??? 2 & 3 「ジャツジ!!」

??? 1 「なんで境ホラ!？」

今終焉者と彼らの邂逅は間近に迫っていた。

海上決戦

管理局が介入すること10日が過ぎて俺は5つのジュエルシードがある海上へと急いでいるのだが途中でシャドウイーグルの群れに襲われていた。

尚哉「くっ！早くいかないと！」

ブレイド「尚哉ここは俺達が！」

オーズTJD「尚哉くんは先にいって！」

尚哉「ああ、わかった！頼む！」

そういつて俺は戦線から離脱し海上へと急ぐ。

ディエンド「っ！これは！マスター！ジュエルシード発動地点上空に異次元転移反応！」

尚哉「なっ！何か…くる！」

作者SIDE

一方、管理局面々はフェイトが5つのジュエルシードと戦っているところをただ傍観していた。

なのは「リンディさん…！」

リンディ「ダメよ、なのはさん、今はフェイトさんが疲労するのを待ってそのあと身柄を拘束します、少しの間は待っていてね」

直ぐにでも現場に駆けつけたいのはは、リンディ達によって待機を余儀なくされていた。

そしてそこに…

エイミィ「艦長！海上上空に転移反応！で、ですが転移魔法とは異なる反応を示しています！」

リンディ「っ!?!一体なんなの？」

そして海上では5つのジュエルシードと戦うフェイトとアルフは既に体力が限界に近かった。

フェイト「はあ…はあ…」

アルフ「フェイト、もう限界だよ少し撤退しよう」

フェイト「まだ…！母さんのために持ち帰らなきゃ！」

アルフ「あんな糞ババアのことなんて聞くことも…」

そこでアルフは突然止めて上見上げ、フェイトは突然黙ったのが気になり振り向いた。

フェイト「どうしたの？」

そしてフェイトも釣られて上を見ると上空には謎の穴が出現して

いた。

アルフ「フェイト…なんかヤバイよ、何か…とてつもない…あの糞ババア以上の何か危険なやつが来る」

フェイト「え？」

フェイトの母親「オーバースのプレシア以上の実力者がくるそれだけでフェイトにとっては戦慄が走るのは当たり前だった。

そして謎の穴から…

2台のバイクに乗った四人の魔導士が飛び出てきた。

女性1「ブリザードアロー！」

男性1「電牙天衝！」

そして乗っている二人が斬撃と氷の矢を海に目掛けて放ち海半径1kmを凍らせその上にバイクを着地させた。

アルフ「なんなんだ、あいつら…」

フェイト「でもあの人たちアルフがいった通り危険だ」

そういつてバルディッシュ構える。

そして尚哉も漸く現場にたどり着いた。

尚哉SIDE

漸くシャドウの包囲網から突破した俺が目にしたのは海が氷その上にバイクに乗った四人の姿を捉えその容姿と武器に少し疑った。

まず弓を持った女性は…まあ、大丈夫だ。

そしてその隣にいる、男性は…服装は大丈夫だが、デバイスがガンダムWのツインバスターライフルって… まあ、これもよしとしよう。

だがあとの二人…

なんで女性の方はファイアーエンブレムのラグネルもってんだよ！そしてもう一人の男性はなぜブリーチの死神の格好!? しかももってるの斬魄刀だし！

そんな心のツッコミをしながら観察しているといいことを思い付いたので俺は早速彼等の近くに降り立った。

思い付いたというのは今の俺の姿だ全身を黒ローブで包んでいるためもしあれを知っていれば…

女性1 & 2 「 機関…だと…！」

はいボンゴ

尚哉「あんたら転生者だな？」

女性1 & 2「なぜ…ばれた…！」

男性2「いや、それいったらわかるやつにはわかるだろ…それじゃあこれは知ってるか？」

そういつて取り出したのは赤い本…だが俺にはそれに見覚えはあった。

尚哉「まさかそれは…！」

そして赤い本はラグネルを持っている女性に渡されそして本が開かれると俺は身構えた。

女性2「ザケル！」

あの女性がそう叫ぶと突如電撃が一直線に飛んできて横に避けた。

女性2「なら、バオウザケルガ！」

ちょっとまってえ！いや流石にバオウザケルガは無しだってとか心でつつこんでいる内にバオウザケルガ来てる！

尚哉「こつなれば…！」

「アタックライド クロックアップ」

その瞬間俺はクロックアップ空間に突入し周りの光景が遅く見える。

そして俺はメダジャリバーを右手にまず、赤い本、魔本を持った女性に接近し魔本を破壊してから脇腹に5発魔力弾を放ち回し蹴りをいれて、次は死神の姿の男性にメダジャリバーで一撃をいれて、そして弓使いの女性に接近しようとしたときにあるものに阻まれた。

男性2「いかせるか」

尚哉「っ!？」

尚哉（こいつもクロックアップを!）

男性2「古河和也…押して参る!」

和也「ふっ!はあ!」

尚哉「くっ!」

踏み込んできた和也は全くの隙のない太刀筋で俺をどんどんとい込んでいく。

尚哉「このお!」

俺はこのまま、防戦一方を打開するために足払いをしたが簡単に避けられる。

和也「火竜の咆哮!」

和也の口から炎を吐き出し近距離のこともありフードコートに火花が飛び散る。

尚哉「はぁあっ！」

俺はメダジャリバーを構えて踏み込み和也に目掛けて振るう。

和也「どうした？お前の力はこの程度か？なら！」

簡単にあしはらわれて連続で切るが次の瞬間和也の姿が消える。

尚哉「どこに!?!」「うしろだ！」

辺りを探すと和也は後ろに回り込んでおり火竜の鉄拳を放とうしていてなんとか反射神経でぎりぎり回避することができた。

尚哉「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…」

尚哉（このひと今まで戦ってきたやつらより実力が…いや次元が違う）

和也（こいつ、今の特訓だとこの程度だが鍛えれば滅茶苦茶強くなる）

尚哉「ダイヤモンドブラスト」

俺は落とされるとダメ元でブラストを放つ

和也「…っ！」

ブラストは和也の起こした風圧ですべて落とされ煙が舞うなか俺は煙の中から和也に奇襲を仕掛けた。

尚哉「うおおっ！」

メダジャリバーと和也のデバイスがぶつかり合い通りすぎると直ぐに反転してディエンドを向ける。

尚哉「ディメンジョン…バスター!!」

休めることなく砲撃を放つ。

和也「…渴!!!!」

だが砲撃はただ気合いだけでかき消された。

尚哉「おいおい、気合いで消せんのかよ」

「クロックオーバー」

そしてクロックアップの制限時間が終わり通常に戻るのであった。

??? 1「ぐっ！これはクロックアップか！」

??? 2「う、うう…」

クロックアップがきれたことにより、攻撃を加えた二人のうち魔力弾を打ち込んだ女性がうずくまっていた。

??? 2「生まれる…」

その変な言葉で空中で和也と一緒にずっこける。

そんなとき俺と和也の間にモニターが開きリンディさんが写る。

リンディ「こちらは時空管理局です、速やかに戦闘を中止しなさい、それとディエンド、あなたには闇の書について聞きたいことがあるから逃げないでね」

和也（こ、こんなときに闇の書の話が!? あいつなに言ったんだよ）

リンディ「それとあなた達は一体なにが目的でこんなことをしてるんですか？」

??? 2 「標的？」

和也「違います」

??? 3 「ビフテキ？」

和也「違います」

??? 2 「快適？」

和也「違いますって」

??? 2 「じゃあ索敵？」

??? 3 「弾幕薄いよなにやってんの!」

尚哉 和也「何故ブライトさん!」

??? 2 「外敵？」

??? 3「ケンタッキ」

尚哉「もう目的から食い物になってんじゃねえか！ふざけてるだろ！わざとふざけてるだろ！」

??? 2 3「モチ！」

あー頭痛がする。

なのは「せーの！」

突如なのはの声が聞こえてきたので振り向くといつの間にかなのはは現場に来ておりフェイトと共に共同作業でジュエルシードを封印していた。

ディエンド「決着ついたみたいですね」

尚哉「そうみたいだな、行くぞ」

そういつて俺はなのはの元へ飛んでいく

なのは「ディエンドさん！」

フェイト「あなたは！」

俺に気づいたなのはは驚き对象的にフェイトは警戒を強めている。

尚哉「そんなに警戒を強めなくてもいい、俺はディエンド…高町からなにか聞いているだろ？」

「フェイト「あなたがディエンド」

尚哉「それでどうやらジュエルシードは封印してみたいだね、ならばあれで最後のジュエルシードだったわけだ、ならば」

そういつて俺はディエンドから持っていた2つのジュエルシードを取り出す。

フェイト「ジュエルシードー」

尚哉「これはジュエルシードが全て封印された御祝いだと思ってくれ」

フェイト「ジュエルシードをくれるですか！どうして…」

尚哉「理解ができないか？まず俺はジュエルシード事態にはあまり興味はないただこの街に危険な物を取り除いただけさ」

フェイト「………そうですか」

なのは「…フェイトちゃん、ディエンドさん、私伝えたいことがあるの」

なのは、何かを言おうと決心して俺とフェイトはそんななのはに顔を向ける。

なのは「友達になりたいんだ」

尚哉&なのは&フェイトVS和也

友達になりたいんだ…

それはなのはに取つてのフェイトとたぶん俺も含まれるだろう…
戦う理由要するに分かりあいたいという意味だろう……だけど今の俺
にはなのはには打ち明けることなどできるはずがない

フェイト「…私は…」

突然の友達宣言に戸惑いを隠せないフェイト……だが…

和也「その言葉!」

女性1「言うには!」

女性2「早すぎる!」

三人「トリプルムーンショット!」

尚哉「なっ!ぐわあ!」

フェイト「へ?キヤア!」

なのは「何!?キヤア!」

突然横槍を入れたかの如く俺達は飛びけりをくらい海に叩きつけ
られて直ぐに体制を立て直すところあるものを使ってから海上に上がり
辺りを見渡すと同じく海上から上がってきたのはとフェイトも健

在だと確認できた。

なのは「言ったいなんなの？」

フェイト「っ!!ジュエルシードが!」

フェイトが声を荒げて俺達も先程いた場所を見ると和也と仲間三人がジュエルシード七つを強奪した。

なのは「ジュエルシード!そんな!」

和也「ジュエルシードは確かに確保した…なあ、お前らと俺で勝負と聞かないか？」

尚哉「勝負だと?」

和也「そう、簡単なことだ、俺に勝てばいいそれだけだ」

女性2「ただし、弟くんはデバイス、攻撃魔法、防御魔法は一切使わないっていうハンデありで」

フェイト「っ!ふざけるなあ!」

和也たちによる挑発に乗ったフェイトはソニックムーブで高速で和也に接近する。

尚哉「フェイト下がれ!なのは!俺達も行くぞ!」

なのは「え!?は、はい!」

バルディッシュ「サイズフォーム」

フェイト「はあああっ!」

俺となのははフェイトのあとに続き飛んでいくがフェイトは和也の後ろに回り込みバルディッシュをサイズフォームにして大きく振りかぶる。

和也「…甘いなフライ返し!」

フェイト「え? キヤアアッ!」

確実に取ったと思われたフェイトは何か押し返されるかのように吹き飛ばされ和也はフェイトの方向を向く。

和也「サウンドバズーカ!! マシンガンボイス!」

そして口から超音波?らしきものを発射させフェイトに追撃をする。

なのは「フェイトちゃん!」

なのはは俺より先にフェイトの元へと急ぐが和也はお見通しかのように手にはどこから出したか不明な剣を持っていた。

和也「風の傷!」

和也は剣圧を飛ばして俺はこのまま当たると思い砲撃で相殺する。

尚哉「やらせるか!」

俺は右手にもつメダジャリバーで和也に接近戦を持ちかけ罅迫り合いにする。

なのは「デイエンドさん、離れてデイバイン…バスター！」

フェイト「サンダー…レイジ！」

罅迫り合いをしている左右からにはなのはとフェイトの砲撃が放たれ俺はタイミングを見計らって後ろに回避する。

和也「クリエイイト！ひらりマント」

そういつとどこからともなくマントを取り出す和也に俺は大声で叫んだ。

尚哉「なのは！フェイト！避ける！」

和也「ふっ！せい！」

次の瞬間なのはとフェイトの砲撃はマントによって跳ね返される。

なのは「ふえ!?きゃっ！」

フェイト「なっ！くっ！」

二人は何とか回避に成功するも回避したところを見逃すわけがない。

和也「10倍かめはめ波！」

なのは「きゃあああつ！」

フェイト「っ！」

和也「つぎはこれだ！でりゃあ!!」

かめはめ波でなのはを攻撃したのち次はフェイトに気弾を連発するも全て外れていた。

フェイト「？」

和也「これで逃げ場はないぞ！魔空包囲弾！くたばれえ！」

フェイト「は！」

フェイトも今ごろ気づいたがもう遅くフェイトの回りにあつた気弾は一気にフェイトに向かっていき爆発に飲み込まれた。

尚哉「フェイト！次はお前だ！」くっ！」

既に和也は俺に至近距離まで接近しており殴りかかってくる。

尚哉「くっ！」

ライダー達との組み手なんかもよくしていた俺だがかなりギリギリ

りで避ける。

和也「そこ！ペガサス流星拳!!」

尚哉「っ！これぐらい!」

俺はラウンドシールドをはり和也のペガサス流星拳を防ぐがこれだけでは終わらない。

和也「続いて！螺旋丸!」

尚哉「何！ぐう!」

和也「まだ破れないかならば！雷切り!」

尚哉「くっ！っ!!罅が!」

かなりの攻撃を耐えたが遂にラウンドシールドにヒビが入る。

和也「これでください！ゴルディオンハンマー!」

尚哉「ちょっとまって！それはなしだ!」

和也「そんなのしるか！光にな…」
「ディエンドさん！避けて!」
ん
?」

尚哉「っ！なのは!ぐっ!」

俺はなのはの声で気をとられた隙に後方に下がると左右からディエンドとフォトンランサーがやって来て和也に命中する。

なのは「デイエンドさん！大丈夫ですか？」

尚哉「はあ…はあ…これが大丈夫に見えるか？というよりもう少しで光になるところだったぞ、だが助かった高町」なのは「へ？」

なのは「なのはでいいよ、さっき名前で読んでくれたよね？あとフェイトちゃんも」

フェイト「…考えておく、それよりあいつは…」

尚哉「たぶんかすり傷1つについてないと思う」

そういつて煙が舞う方向をみて煙が晴れると黄緑のフィールドバリア…というかGNフィールドで守られていた。

尚哉「くそ！やっぱりか」

なのは「ねえ、フェイトちゃん、デイエンドさん、あの人を倒す方法ある？」

フェイト「手の内じゃむり…あの方は桁外れに強い」

尚哉「となると秘策はあれか」

なのは「なにかあるんですか！」

尚哉「ああ、取っておきのな、そうなるはずはあいつの動きを止めないといけない…いけるか？」

フェイト「頑張ってみる」

そういつてなのはとフェイトが和也に飛んでいく。

尚哉「さてと、集束砲撃…いくぞ」

そういつて俺は集束砲撃の準備に入ろうとしたとき突然和也が消えてなのはとフェイトが吹き飛ばされた。

尚哉「なっ！まさか！ぐふう！」

俺はこの現象に覚えがあったから言おうとしたときに腹に異様な衝撃が食らった。

和也「悪いなこれで終わりだ」

尚哉「クロツク…アップ…」

まさかの2回目となるクロツクアップによる攻撃だった。

和也「これで終わりだ」

終わりか…はは…

尚哉「あんたがな！」

此処まで接近されているのなら好都合であり俺は和也の体を腕で封じ込める。

和也「なんのつもりだ！」

尚哉「なのは！フェイト！俺ごとバインドにかける！」

なのは「そ、そんな！」

フェイト「ほんとにいいの？」

尚哉「いいからやれ！」

フェイト「っ！」

そして和也と俺は一緒に黄色と桃色のバインドにかけられる。

尚哉「よし、あとは任せるぞ！」

尚哉！」

そして俺は曇っている雲が徐々に晴れていくと

尚哉「待たせたな！集束砲撃のチャージは完了だ！」

そこには本物の俺が集束砲撃を今でも宇津体勢が整っていた。

尚哉（偽） SIDE END

尚哉（本） SIDE

いったいいつ本者と偽者にすりかわっていたかというところは和也達に吹き飛ばされ海の中にいたときに俺はイリュージョンのカードで俺の分身を作り偽者は和也と戦い本物である俺はインビジブルで密かに空中にいき集束砲撃のチャージをしていた。

そして今完全に身動きができなくなった和也を見下ろしながら俺は銃口を向ける。

尚哉「これで終わりだ！集え！終焉の光！ディメンジョン…ブレイカー！！」

トリガー引くと集束砲撃が放たれ和也へと目掛けて飛んでいく

それを見ていたなのは、フェイトそしてアースラで見ている誰もが俺の勝利を確信した。

だがそれは…

和也「だがその幻想をぶち殺す！」

和也の右手に触れた瞬間消滅した。

尚哉「なっ！そんな…！」

俺の魔法のなかでも最強を誇る魔法が何も効かなかった…：それがどれほどショックだったか言うまでもない。

和也「ふん！」

そして和也は気合いでバインドを消滅すると次は俺の分身に右手

に触れるとまた分身が消滅このときになって俺は何が起きたか理解した。

あの右手は例え神の奇跡でさえも打ち消してしまうとんでもない能力

尚哉「幻想殺し……」

とあるの幻想殺しによって起きたことだと理解した。

和也「さてとそろそろおしまいでしょう、アーマークリエイト！
ソーラーアクエリオン！」

そういうと和也の体は変化してあの有名な機械の天使…アクエリオンに変化した。

なのは「な、なに!？」

フェイト「人がロボットに……」

和也「行くぜ、無限拳!!」

そしてアクエリオンになった和也はアクエリオンでお馴染みな無限拳を両手から飛び出しなのはとフェイトを掴む。

和也「プレゼントフォーユー!!」

そしてこちら目掛けてなのはとフェイトを堀投げる。

なのは フェイト「きゃあああっ！」

尚哉「なのは！フェイト！くっ！」

俺は飛ばされてきたなのはとフェイトをなんとかキャッチするがすでに和也はアクエリオンから戻り何かやばそうなものを持っていた。

和也「ジェノサイド…ボンバー!!」

そしてその危険物はこちらに飛んできた。

尚哉「やばい！直ぐに離れる！」

なのは「え？それって」

俺はなのは達に後退をするように呼び掛けたがああ危険物は待つてはくれず一瞬光ったと思ったら危険物は爆発し俺たちを飲み込んだ。

尚哉「ぐわああああっ！」

なのは フェイト「きゃああああっ！」

俺達はなすすべもなくその技に当たり俺はそのダメージにより落下し意識朦朧としながら回りを見るとなのはたちも同じように落ちていてそこで意識が途絶えた。

……

真っ暗だ…

いやこれは俺が目を閉じてるだけか

そう思い目を開けてみるとそこにあつた光景は俺にとって見慣れた光景だった。

尚哉「俺のへや？」

見に写つたのは見慣れた俺の部屋だったことに疑問に思った、意識を失ってから何があったのかあのままなら管理局に捕まると思ってたのは達にもばれてしまふと思っていた。

尚哉「…リビングの方についてみるか…いっ！」

俺は寝ていたベットから降りようとしたときに全身に物凄い激痛が走り体制を崩しそうになるがなんとか耐えてリビングへの扉を開けた。

はやて「…尚哉くん？」

稟「尚哉！お前動いて大丈夫なのか！」

リビングには、何故かディエンドを持っているはやてに稟と楓といたいつものメンバーが居て驚いた表情を浮かべる。

尚哉「動いただけで激痛が走るけど魔力を使えばなんとかな」

稟「そうなのか…でも意識が戻ってよかった」

はやて「尚哉くん…よかった…よかったよ」

そういつて涙を流しているはやては俺に抱きついてくるが…今の俺にはそれは…

尚哉「ぎいやああああっ！は、はやて！全身に激痛っ！」

はやて「へ？あー」「ごめん…」

尚哉「ぐっ！はあ…はあ…それで1つ聞きたいことあるんだけどいいか？俺はどうやって戻ってきたんだ？」

稟「それはな尚哉が召喚してたブレイドとオーズだったっけそいつらが重傷の尚哉を運んできてくれたんだ」

尚哉「ブレイド達が？そうか…あいつらが…そういえば、はやてなんでディエンド持つてるんだ？」

はやて「え？ええっとそれはな」

ディエンド「実は私からマスターを倒した人達のことを聞こうとしていまして、なぜですかと聞いたならその人をしばき倒…「ああ!!なにいつてんねんや？そや！もうすぐ夕飯できるねん、ナポリタンやで、それじゃあ私はパスタの方見てくるわ」…」

ディエンド（これはこれは、もしかしたらマスターとはやてさんはもう少ししたら…今からでも楽しみですね）

そんなディエンドのことなど知らずに俺はナポリタンを食べるの
であった。

一方…

和也「…っ!!」ゾク!

??? 4 「どうした? 風か?」

和也「いやそっとう訳じゃないけど…」

はやての例の言葉に反応して寒気がした和也だった。

決戦の準備

なのはSIDE

海上での戦いから翌日、リンディさんから家族が心配するからという事で久しぶりに家に帰ってきました。

久しぶりの家に…少し懐かしむ感じがあるけど、ふと脳裏をあの手を過ると俯いてしまう

でも真実が知りたくて私は今日学校に登校して確かめる。

勇翔「なのは…やっぱり怖いか？真実を確かめるのは」

なのは「…うん、だってディエンドさんが…尚哉くんかもしれないんだよ？」

あの海上での戦いするとき私は意識が薄れていくときにしっかりと見た。

墜落していく私達のなかにディエンドさんもいたけどいつも隠していた素顔は晒されていてそのとき見たのは尚哉くんだった。

勇翔「…ついたな」

なのは「…うん…」

一度深呼吸をしてから覚悟を決めて教室に入り尚哉くんの机を見るけど鞆も下げられていないからまだ来ていないみたい。

アリサ「なのは！勇翔！久しぶり！」

なのは「アリサちゃん！すずかちゃん！稟くん、楓ちゃん！」

楓「なのはちゃん、お久しぶりです」

稟「全く今までどこにいったんだ？」

勇翔「ちよつとな」

久しぶりのアリサちゃんたちとお話をして私は意を決して聞いてみた。

なのは「ねえ、そういえば尚哉くんは？」

アリサ「尚哉？確かに今日は見てないわね」

すずか「いつもならもう来ていてもおかしくないんだけど」

楓「あ。尚哉くんなら」

稟「熱だして欠席だぞ」

なのは「え？」

尚哉くんが体調を崩したことを聞いて思わず声を漏らす。

勇翔「熱!?尚哉がか？」

楓「はい、実は昨日の帰りに溺れている人を助けるために飛び込んでそれで」

すずか「風邪を引いて熱だしたってこと？」

稟「ああ、そういうことだ」

尚哉くんが来ない以上確かめることはできないから私は今日の授業を集中することにした。

尚哉SIDE

尚哉「はつくしゅん！」

デイエンド 風ですか？

尚哉 いや誰か噂してるのかも

例えばアリサ、すずか辺りかな？

尚哉 それでこちら辺でも収穫なしか

デイエンド そう簡単に見つかるとは思っていないでしょ？

俺とデイエンドは学校を仮病で休み、昨日の和也とその仲間達を探していたのであったが、これがまたなかなか見つからない。

尚哉「てか、もうお昼時か…早いな」

俺背中に背負っているリュックサックから弁当（はやて作）を出しておかずを口に運び食べる。

尚哉「ん？なんか今日の料理は一段と上手いな」

デイエンド　ふふ、それはある調味料をいれているからですよ？

尚哉　調味料を？というより何をいれたか知っているの？

デイエンド　愛情ですよマスター

その瞬間思わず咳き込んだ。

尚哉　デイエンド？いきなりなに言い出すんだ!?

デイエンド　それにあなたははやてさんをどう思っているのですか

？

はやてについてか…

まず初めはアニメとかの空想上の人物だったけど今は…

尚哉　家族…いやなんか違うな、何故か言葉がでない

デイエンド　そうですね、それで話は終わりますが、これから行く宛があるのですか？

尚哉　…一応ある、あの人たちは必ず元々無い物に興味を示すはずだ

デイエンド　それはいい…

尚哉　…初音島だ、あそこは元々原作ではなかったし一年中桜が咲

いてるから興味を示すに決まってる、飯を食ったら行くぞ

その後弁当を平らげてリュックサックのなかにいれると初音島に向かった。

初音島に向かっていてる途中、初音島に一瞬だけ強大な魔力反応を感じし推測通り、あの和也達の誰かだろうと思った俺は急ぎめにその反応があった地点大きな枯れない桜の木がある場所に行くとそこには案の定、俺やなのは達を手も足もでなかった古河和也がそこにいた。

和也「…来たか…」

尚哉「気づいていたんですか？魔力は押さえてたはずなんですけど」

和也「気配だけで誰なのかはわかる」

尚哉「なら、ひとつ聞きたいことがある、あんた達はどうしてこんな！」

俺はディエンドを起動して銃口を向ける。その時俺の体が悲鳴をあげるが耐える。

和也「…ほらよ」

和也は俺の体の状態を見越していたのか何かの回復薬を渡される。

尚哉「なんのつもりですか？」

和也「ラストエリクサーだ飲めそしたら体力も疲れ完全回復だぞ」

俺は黙りながらラストエリクサーを飲むと先程まで痛みが嘘かの

ように引いていった。

和也「さてと、お前とは話し合いがしたいからちよっくら誰にも聞かれない場所で」

尚哉「それならうつってつけの場所がある」

そういうことで俺と和也は絶対に他人に聞かれないある場所に向かった。

そして誰にも聞かれない場所…デンライナーにきた俺と和也さんは互いの情報を交換しあっていた。

尚哉「つてことは！和也さんは平行世界のフェイトと結婚してるんですか!？」

和也「まあな、それとお前もはやてと同棲してるんだから似たもん
だろ？」

尚哉「いや、それは…その／＼」

はやてとはそんな…家族だよな？義理の家族な筈だ…確証はない
けど

和也「それで俺としてはアリシアには驚いたわ」

和也さんは指を指して俺もわかっているがその方向に向くと…

アリシアとリュウタがクライマックスジャンプヒップホップバー
ジョンを踊っています。

アリシア&リュウタ「イエーイ！」

曲が終わるとアリシアとリュウタが満面の笑みを浮かべながら両手でハイタッチする。

尚哉「…まあ、いいんじゃないですか？こつこつのはかなり見ものですよ？」

そついいながらミルクと砂糖を入れたコーヒーを飲んで一息つく。

和也「所でさ…」

尚哉「なんですか？」

和也さんはなにかを探しているのかデンライナーの車両内を見渡す

和也「あいつ…白いイメージ、えっとなんだっただけな…!？」

和也さんはどうやら白いイメージ…おそらくジークを探しているのだが突然光の球が和也さんの背後から体内に入り込みそして突如和也さんの回りに白い羽が舞った。

尚哉「まさか…」

若干笑みを引き釣りながら今和也さんに起きた現象が理解した。

和也「降臨…満をじして」

先ほどから話していたジークが和也さんに入り込んで憑依してしまっただ。

ハナ「ただいま〜って何この羽!?まさか…ジーク!」

そこに戻ってきたハナさんがこの光景に驚き原因はジークだと直ぐに理解した。

和也G「おお!姫!ささ、こちらへ、おいそこのお供!直ぐにコーヒーを入れる」

モモ「なんだと!?!この手羽先野郎!ていうか、はやくその体から出るよ!そいつ良太郎じゃねえだろ!」

ジーク「問題ない、私なのだ!勝手に俺からだを乗っ取るな!」何!?

次の瞬間和也さんの体からジークが飛び出してきた。

和也「はあ…はあ…全く、人の体を勝手に…」

尚哉「自力でイメージを追いつくのはすごいと思いま すよ…」

そう思った俺なのだが直ぐに気持ち切り替えてある議題を持ちかけた。

尚哉「それで、もしよければ協力してほしいのですが…いいですか?」

和也「別に構わねえよ?だって俺達も闇の書事件終わるまでいるつもりだし」

尚哉「助かります、ではまず問題点は二つ、一つはプレセアさんの病…そしてもう一つはグラム提督による作戦の妨害の二つです」

和也「任せておけ、あと管理局の不正データとかあるのか」

尚哉「ありますよ、できればこれをリンディさんに渡そうかと」

和也「ならよ、もっとうってつけの人物いるぞ」

尚哉「え？誰ですか？」

和也「ミゼット・クローベル」

その瞬間俺は飲んでいたコーヒーを少し吹いた。

尚哉「伝説の三提督に渡すんですか!？」

和也「そっちの方が効率いいだろ？」

尚哉「まあそうですね」

和也「それじゃあ本局に潜入といきましょうか」

そして俺は和也さんの協力もあり伝説の三提督にお忍びで会いに行き無事にデータを渡すことができた。

明日の決戦の打ち合わせを終えた俺は当初の目的は達成したために家に帰ることにした。

尚哉「ただいま…あれ？なんか靴多いな、誰か来てるのか？」

玄関の靴置き場にはいつもより靴が多いことから来客者がいるのかと思った。

そんな疑問を持ちながらも俺はリビングのドアを開けると…

音姫「あ、尚哉くんお帰り」

はやて「尚哉くん帰ってきたな、今日は私らで作るからゆっくりしててな」

そこにははやてといつものも稟や楓だけではなく、義之、朝倉姉妹、小恋といった、初音島メンバーもいた。

尚哉「義之!?!どうして初音島のみんなも!?!どうして」

義之「いや、今日遊びにきてそれで今夜はお泊まり会ってことでみんなで夕食をな」

尚哉「ああ…なるほど」

音姫「やっぱりこういうのもいいかな?って」

小恋「もちろん、お母さん達には了承してもらってるよ?」

尚哉「そうなんだ、それじゃあ俺少し部屋でやることあるから」

はやて「そうか…もうすぐできるさかい、出来たら呼ぶな」

そういつて俺は部屋に入り引き出しを漁る。

尚哉「おっ！あつたあつた」

俺は引き出しの奥の方に隠されていたマガジンを1つとりだし直ぐにデイエンドに収納した。

尚哉「明日は決戦だし予備を持っていつとかないな」

そして直ぐにご飯の準備が完了しその夜はみんなで楽しく過ごすのであった。

翌日

デイエンド マスター…マスター

尚哉「…んん…もう予定の時刻か？」

いつもより早い時間にデイエンドの念話で起こされパジャマから私服へと着替えるとパスは持っているかを確認し家を出て門前でデイエンドを起動させ軽く回してから待機モードに戻した。

はやて「尚哉くん」

尚哉「は、はやて…それにみんなも」

後ろから声がして振り向くとはやてを始めに俺の小恋と由夢以外のみんなが玄関前にたっていた。

尚哉「おいおい、起きてたのかよ」

はやて「まあな、それで一体隠してたマガジンなんかもってどうするんや？」

尚哉「そこまで気づいてたのかよ、はあ…簡単に言っと決着をつけに行く」

義之「大丈夫か？」

尚哉「心配するな、俺は強いし協力してくれる人もいるからよ」

はやて「…そうか、なら絶対に約束して必ず私らの元に帰ってくるって」

尚哉「…とうぜん！それじゃあ行ってくる！」

そういつて俺は家を出て決戦の地へと向かった。

今一つの戦いが終わりを迎えようと動き出す。

プロジェクトF（フェイト）

もう少しで夜明けといったとき、俺は海鳴の公園の近くの茂みに息を潜めて決戦の火蓋が切って落とされるのを静かに待っていた。

尚哉「…きたか」

公園に近づいてくる足音からなのは達が到着したのをみてそしてフェイトも姿をみせた、そして話し合いが広がり遂に戦うといったときバイクのエンジン音が鳴り響き俺やなのは達がそちらに向くと予定通り来た、和也さんが堂々と登場した。

勇翔「あんたは！」

和也「まあ、ことを構える気はねえ、ほらよ、ジュエルシード…勝った方がこれを持っていきな」

先日は俺やなのは達から奪ったのに今度は明け渡して勝った方に譲るといった、それによりかなりの混乱を招く。

勇翔「なんなんだよ！あんたは！」

和也「ただの魔導士だ」

いや、それは可笑しいと思いますよ和也さん

なのは「決着をつけよ、フェイトちゃん、これが最初で最後のフェイトちゃんとの真剣勝負！」

フェイト「うん！私は母さんのために負けられない！」

そして両者が激突した。

そしてその光景を見届けていると和也さんから連絡が来た。

和也 尚哉、見てるか？

尚哉 はい、見てますよ、それで最終確認なんですが、なのは達の決着を見届けたあとに俺 はデンライナーに乗ってアリスア達と時の庭園に向かう

和也 それで俺達は原作通りにアースラから行くぜ

尚哉 わかりました

フェイト「フォトンランサー・ファランクスシフト！打ち砕け！ファイア！」

俺と和也さんの念話のやり取りをしている他所に既にフェイトが大技を使いそろそろ決着が付きそうであった。

そして大技を前になのはも相当堪えたのか息があがっており、だがここから攻防が逆転する。

なのは「受けてみて！ディバインバスターのバリエーション！」

なのはは収束砲撃を放つ準備しており止めようとフェイトは動くとした瞬間バインドで固定され何もできずそして

なのは「全力全開！スターライト…ブレイカー！」

なのはの最強砲…スターライトブレイカー（星を軽くぶっ壊す魔法）を放ちフェイトはなすすべもなく砲撃に飲み込まれた。

尚哉「さてといきますかね」

俺はそれを見届けてからその場から去った。

作者SIDE

なのはとフェイトの決闘が終わった後プレシアによる次元跳躍魔法による雷を和也のクリエイトして上空に投げた短剣が避雷針がわりになり二人とも無事でアースラにやって来た。

リンディ「始めまして、フェイトさん…そしてまたお会いしましたね」

和也「おう、そうだな正式自己紹介はしてなかったな…」

そういつて和也達はバリアジャケットを解除してそして来ていた服装はリンディ達と同じ管理局の制服だった。

クロノ「なっ！」

和也「別の世界の管理局教導隊所属の古河和也だ」

春美「同じく捜査官の古河春美」

ひかる「同じく！執務官の秋山ひかる！」

一輝「同じく、特別救助隊、黒崎一輝だ」

なのは「クロノくんたちと同じ局員!？」

クロノ「ならなぜ僕達の邪魔したんだ同じ管理局だろ!」

和也「だから別の世界のつていつてるだろうが!」

なのは「逆ギレ!？」

リンディ「んん! まあそれはいいわ、いま、武装隊がプレシア・テック
タロツサの捕縛動いているもう時間の問題よ、なのはさん、フェイト
さんを別の部屋へ、親の逮捕の瞬間なんて見させるものじゃないわ」

リンディはなのはにフェイトをブリッジから連れていくように頼
んだがすでに遅くアースラに写るモニターには武装隊がプレシア
のいる玉座の間にたどり着き取り囲んでいた光景でフェイトやなの
は、ブリッジにいるアースラクルーもモニターに目を写していた。

そして一人の武装局員が玉座の間に奥にある扉を開けると、そこ
にはアリシアの体がありその映像をみて何も知らないのはや、フェイ
ト達は驚愕した。

プレシア《アリシアに近づくな!!》

プレシアはサンダーレイジで一撃で局員を全滅させてアリシアが
入っている生体ポットに近づきすぎる。

プレシア《もう終わりにしましょう、この子のなくした時間も…ア
リシアの代わりにあの人形を娘呼ばわりするのよ》

フェイト「人…形…？」

フェイトは突然母親から人形呼ばわりされて頭が混乱中プレシアの話は続いていく。

プレシア《聞いていて？フェイト。せっかくアリシアの記憶を与えたのにそっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使えない。私のお人形》

プレシアの言葉が続くなか黙っていた和也が口を開けた。

和也「安全管理企業で起きた魔道炉の暴走事故。アリシアはそれに巻き込まれて命を落とした。その後プレシアが行っていた研究は使い魔を超えた人造魔道士の生成。死者蘇生の技術。記憶の定植型特殊クローン技術。通称プロジェクトフェイト。」

プレシア《あら？よく調べたわね、そうよ、でも、失われた物の代わりにはならなかった。》

和也「あたりまえだ、人間命は1つだ、作り上げるなんてできるはずがない」

プレシア《作り物の命は所詮作り物。アリシアはもつと優しく笑ってくれたわ。わがままも言ったけど、私の言う事を良く聞いてくれた。アリシアはいつでも私に優しくかった。フェイト。あなたは私の娘じゃない。只の失敗作。だからあなたはもういらぬ。どこへなりと消えなさい!!》

フェイト「…そんな…」

勇翔「あのやろつー！フェイトを道具扱いかよ！フェイトは生きてんだぞ！」

プレシア「良いことを教えてあげるわ…あなたを作り出してからずっと…私はあなたが…」

プレシアは言い切るまえに玉座の間の扉が突如として爆破されプレシア、そして和也を除くアースラメンバーが突然のことで驚く。

和也（全くタイミング良すぎんぞ、計ったか？）

そして扉を破壊したことで土煙が舞い晴れていくとミサイルランチャー…ギカントを担ぐディエンドこと尚哉と良太郎を始めとするチーム電王、そして魂だけとなったアリシア・テッタロッサが今プレシアの目の前に辿り着いた。

尚哉SIDE

デンライナーで時の庭園に突入した俺たちは局員達に見つかることなく、アリシアの案内で玉座の間前まで辿り着きなんともシリアスな場面だったのでこちらに気を取られるようにミサイルランチャーのギカントでドアを木っ端微塵に破壊し突入した。

アリシア「お母さん！もうやめてよ、私こんなこと望んでないよ！」

プレシア「アリシア…そんなはずが…」

プレシアがいった言葉により聞いていたアースラクルー全員が驚愕し俺の目の前にモニターが出現する。

クロノ どういうことだ!?何故アリシアテストロッサがそこにい

る、彼女は死んだはずだ！

尚哉「そうだ、死んだはずだった…でもそのときアリシア所持していたロストロギアの破片によってアリシアは死なずに済んだんだ」

プレシア「じゃあなんでこの中にいるアリシアは目覚めないの」だが、副作用があった」副作用？」

尚哉「そう、ロストロギアの副作用によってアリシア体が魂が抜けて…ずっと、あの研究所の近辺を迷っていたのさ…」

アリシア「お母さん、もうやめよう、私が体に戻れば元通りだから…一緒にまた暮らそう？お母さんと私とフェイトとみんなで」

アリシアはプレシアに近づこうとしたが目の前に突然雷が落ちてくる。

プレシア「危うく、うまくできた、ホログラムに騙されるところだったわ…そうよ、アリシアは甦らせる、さあ、行きましよう…アルハザードへ」

そういつてプレシアはアリシアの体が入ったポットと一緒に転移魔法を使ってこの場から消えた。

作者SIDE

その頃アースラでは尚哉とプレシアの話聞いて騒然としていた。

一輝「まさか、アリシアが死んでなくて幽体離脱とはね」

和也「そりゃあ、そんなこと聞いて信じられるわけねえよな」

春美「それで、どうするの？」

和也「決まってる！プレシアの計画阻止！」

ひかる「そうだよな、なのはちゃん達も来る？」

なのは「はい！」

和也「それじゃあ「待ってくれ！」ん？」

和也達が時の庭園に突入しようとしたとき勇翔に呼び止められた。

勇翔「俺も連れていってくれ」

なのは「勇翔くん!?駄目だよ！勇翔くんは…」

勇翔「わかってるよ、でもあんなこと言われて黙ってみていられるかよ！」

フェイト「君は…」

和也「いいのか？正直に言って援護は難しいぞ、死ぬ覚悟は出来るのか？」

勇翔「そんなの、この戦いに乗ることになってからすでにできてるさー！」

和也「ふっ！その決意、気に入った！クリエイト！」

勇翔の体が光そして収まると勇翔の右手にはエクスカリバー、背中にシンフォニアの天使の羽がついていた。

勇翔「なんじゃこりゃあ!!」

和也「それで戦えるはずだ、よし!いくぞ!」

全員「はい!!」

クロノ「って!なんでお前が仕切っているんだ!」

そういつてアースラメンバーも時の庭園に乗り込んだ。

尚哉SIDE

まさか、このアリシアを偽物って言うとはな…ファーストプランは失敗か…穩便に行けると思ってたんだが…

アリシア「そんな…どうして…」

良太郎「大丈夫、まだ終わった訳じゃないから」

モモ「そうだが、金髪、んでなんかへんなやつが出てきたな」

多数の魔法陣が出現し魔導兵器達が登場する。

ウラ「多いね…」

リュウ「ねえねえ、あいつら倒していいんだよね?」

尚哉「いいぞ」

リュウ「まあ、答えは聞いてないけど」

キン「ほな、俺らのちから見せつけんとな」

尚哉「今回は大出血サービスだ行くぜ！」

そういつて電王メンバーはデンオウベルトを装着し俺は11枚のライドカードを取りだしディエンドに挿入した。

チーム電王「変身！」

「ソードフォーム」

「ロッドフォーム」

「アックスフォーム」

「ガンフォーム」

「チャージ&アップ」

ディエンド「カメラライド クウガ アギト リュウキ ファイ
ズ ブレイド ヒビキ カブト キバ W オーズ フォーゼー！」

読み取りが終わるとトリガー引いてするとディケイドを抜くクウガからフォーゼまでの平成主演ライダーが横一列に並ぶように出現する。

電王S「俺！参上！」

電王R「お前、僕に釣られてみる？」

電王A「俺の強さにお前が泣いた！泣けるで！」

電王G「お前、僕らにやられてもいい？答えは聞いてない！」

電王L「みんな、いくよ」

尚哉「っ！」

突然カードケースから2枚の白紙のカードが飛び出しすると絵柄が浮かんでくる。

尚哉「新しいカードかこいつは使えるな」

俺は一枚をケースに戻してもう一枚はディエンドに挿入した

ディエンド「フォームライド オールライダー！」

トリガーを引くと電王以外のライダーの前にカードを幻影が現れそれを通りすぎるとライダー達の姿が変わった。

クウガライジングアルティメット、アギトシャイニングフォーム、龍騎サバイブ烈火、ファイズプラスター、ブレイドキングフォーム、アームド響、ハイパーカブト、キバエンペラーフォーム、Wサイクロンジョーカーゴールドエクストリーム、オーズスーパータバコンボ、フォーゼフュージョンステイツと全員自分の最強フォームへと変わった。

電王S「今回は全員クライマックスだ！」

尚哉「アリシア、絶対にプレシアを止めるぞ！」

アリシア「うん！」

電王S「いくぜいくぜ！」

そして俺たちは魔導兵器の軍勢へと突撃をした、プレシアのもとにたどり着くために

決戦！時の庭園

作者SIDE

時の庭園のエントランスまで電撃的に侵入した管理局勢はそこで多数の魔導兵器と対立をしていた。

ユーノ「ストラグルバインド！今だ、なのは！」

なのは「うん！バスター！」

ユーノが敵の動きを止めてなのはが砲撃で一撃で仕留めていていた。

ユーノ「それにしても…勇翔があんなにも強かったなんて…」

なのは「にはははは」

なのはとユーノが見る先そのには何十体の魔導兵器の残骸に魔導兵器を破壊していく勇翔の姿…その場に散らばる残骸は全て勇翔が破壊した魔導兵器だった。

フェイト「あの子あんなに強かったんだ…確か…霧島勇翔…」

なんだかんだフラグを作っていた罪深き男である。

なのは「でもそれよりすごいのは…」

そういつてしたの方を見ると

和也「ヒューー！ハアー！」

一輝「卍解、千本桜景義」

春美「私たちの前に！」

ひかり「てきはなし！」

何千という相手を瞬殺している。和也たちチート集団であり彼らのお陰でここまで楽に行けた。

クロノ「なんて、強さだ」

執務官のクロノでさえもその光景に啞然としてあると息を潜めていた魔導兵器が飛び出してクロノを襲いかかる。

クロノ「しまった！」

和也「む！クリエイト！ドンパッチソード！」

和也はクリエイトでネギを持ちブーメラン要領で投げるとネギが魔導兵器をあるうことか胴体から真っ二つにして壁に突き刺さった。

クロノ「彼には常識が通用しないのか…」

クロノが頂垂れているとまた奥から大量の増援がやって来ていた。

和也「クリエイト」

次にクリエイトしたのはクリア色の指輪と手形のドライバーであり上下のレバーに一往復すると電子オンが鳴り響く

『シャバデウビタッチヘンシン シャバデウビタッチヘンシン』

和也「変身」

『インフィニティ！ヒースイフドーゴウザブアビユードゴン！』

和也は仮面ライダーウィザード インフィニティに変身する。

和也「さあ、シヨウタイムだ！」

そのご増援を30秒で全滅させ和也たちは先へと進んでいった。

尚哉SIDE

プレシアさんを追いかけるため玉座の間にみんなに後押しされて追いかけている途中俺と後ろに浮かんで着いてくるアリシアと共に突き進んでいた。

尚哉「邪魔だ！どけ！」

デイエンドのヴァリアブルショットで魔導兵器を一撃で沈めていき速度を落とさずに最短距離で向かっている。

アリシア「尚哉！その階段を降りてその次左！」

尚哉「おう！デイメンジョンバスター！」

階段を下り左の通路を見ると魔導兵器が待ち構えており砲撃で一撃で倒す。

尚哉「敵の数が多くなってる…ってことは近いな」

そう思っていると遂に通路の突き当たりにとどり着きその前には
今までとは遥かに大きい魔導兵器が待ち受けていた。

尚哉「あの奥か！」

俺は魔力弾を仕掛けるが兵器の装甲にびくともしていなかった。

ディエンド「今までとは装甲が固いようです、ここはトルネードで
！」

尚哉「ああ！ディメンジョントルネードショット!!」

二つの魔力弾が高速で回転して飛んでいき魔導兵器を貫通させる
と俺は砲撃で後ろの扉を破壊して中に入るとプレシアさんがアリシ
アの体を大事そうに持っていた。

プレシア「まさか、貴方が一番早くここにたどり着くなんてね」

尚哉「プレシアさん」

アリシア「お母さん…」

プレシア「まだ、そのホログラムをけしてなかったの」

アリシア「っ!!」

プレシアはアリシアを見て酷い言葉を言ってアリシアを怖がらせ
る。

尚哉「…アリシア、下がって…ここまで来たら、言ってわかる人じゃない…」

俺はディエンドを構えてアリシアに下がるように言う。

アリシア「…うん、お母さんを絶対に助けて」

尚哉「おう！」

プレシア「貴方達は目障りよ！消えなさい！サンダーレイジ！」

尚哉「くっ！」

紫の雷に狙われそれをギリギリで回避して隙を見て魔力弾を放ち攻撃を加えていく。

プレシア「この程度の攻撃」

プロテクションを張られて全て防がれそしてフォトンランサーが俺にめがけて放たれてそれはラウンドシールドで防ぐが勢いが強く後ろに下がり地上に降りると近くいたアリシアが近づいてくる。

アリシア「尚哉大丈夫!？」

尚哉「ああ、問題ない、全くこれで病人なんだから、ありえないっ
ての」

プレシア「貴方に私の願いは邪魔をさせない、私はアルハザードに
いってアリシアを甦られる！」

クロノ「プレシア！世界はいつだって、こんな筈じゃない事だらけ

だ！昔から、いつだって誰だってそうなんだ！」

突如、壁が破壊されるとそこから頭から出血しているクロノと後ろからフェイトとアルフがやって来る。

クロノ「こんな筈じゃない現実から逃げるか、立ち向かうかは、個人の自由だ！けどな、自分の勝手な悲しみに、無関係な人まで巻き込んでいい権利は、どこの誰にもない!!」

フェイト「母さん…」

プレシア「…まだいたの」

フェイト「っ！」

プレシアから冷たい一言を言われて傷つくフェイトだが恐れながらも前に進むためにいう覚悟する

フェイト「母さんに言いたいことがあって着ました」

フェイトから言われたことは感謝であった、アリシアの偽物であっても私はプレシアの子供であると…

アリシア「うっ、フェイト」

尚哉「いい妹じゃねえか」

そんなことを離れたところで聞いていた俺たち。

プレシア「馬鹿馬鹿しいわ」

フェイト「っ！」

フェイトが決心して語ったにかかわらず、突き飛ばそうとするプレシアの姿勢に俺はあることに気づく、もしかしたら…

尚哉「プレシア・テストロッサ…あんたはあえてフェイトを突き放そうとしてるな」

フェイト「…え？」

クロノ「なんだと!？」

プレシア「何故、私が人形などにそんな気遣いをしなければいけないのかしら?」

尚哉「まず、1つさっきいったときの表情が悲しそうだった…2つ…フェイトが要らなかつたらわざわざシュエルシードなんかを回収させない、嫌いなら棄ててここにいる機械兵にさせればよかつたはずだ」

クロノ「…確かにディエンドの言うことには一理ある…」

尚哉「そして、何より3つ目の理由は…あんたはフェイトをアリシアとして…甦らせようとした…結果は見ての通りだがな」

プレシア「そ、そうよ…だからこそ」

尚哉「だがプレシア・テストロッサはアリシアの生死に関わらず、フェイトを産み出していた!」

プレシア「!?!」

フェイト「え？どういふこと？」

尚哉「その理由なんて…簡単だった…過去にいつてアリシアのスケッチブックに描かれていた…プレシア・テストロツサとアリシア…そしてアリシアが生まれてくると夢見て描いたフェイトが笑っていた絵だ！」

尚哉「それにアリシアに何かほしいものがあるかって…いった…その時言った答えが…」

尚哉「妹がほしいだ」

フェイト「それ…って」

尚哉「つまり、フェイトは誰かの願いで生まれたんだ、生まれかたは違ったけどな、プレシア・テストロツサ…まだ遅くない…自害なんてやめろ…フェイトとアリシアには、母親のあんたが必要なんだよ」

プレシア「私は…私はああっ!!」

プレシアが頭を抱えて混乱してしまうと魔力が暴発しはじめて後ろに吹き飛ばされそうになる。

ディエンド「不味いです！この魔力の暴発を止めなければプレシアは！」

尚哉「くそ！穩便には行かなかったか…あれを止めるには大ダメージを負わせるしかないな」

アリシア「お願い…母さんを助けて！」

尚哉「…当たり前だ…俺を誰だと思ってる！俺はディエンド！終わりを司る終焉！そのあとに見えるのは新たな始まり！だから！」

尚哉「プレシア・テスタロッサ!! 『終焉者』の名において…この戦いを終わらせる！」

そういつて俺はカードケースから先程手に入れたライドカードを取り出すと後ろから俺を送り出してくれた良太郎達がやって来て横一列に並ぶが一人だけ見たこともないライダーいた。

和也 俺だ、俺

なるほど、和也さんか…

尚哉「みんな！行くぞ！」

そう言いいきり俺はライドカードをディエンドに挿入してスライドする。

ディエンド「ファイナルアタックライド！ディディディディエンド!!」

ライドカードを読み取ると俺は銃口をプレシアに向けるとファイズ、ブレイド、良太郎、キバ、フォーゼが自ら持つ武器を構え、その他のライダー達は上にジャンプする。

尚哉「はあああああつ!!!!」

トリガー引き光線を発射すると他の全員もプレシア目掛けて斬激、

光線、キックを放ちプレシアがいた場所が大爆発する。

フェイト「母さん！」

煙で見えないが直ぐに晴れていくと倒れこんでいる、プレシアの姿をみるとフェイトとアリシアはプレシアのもとに駆けつける。

フェイト「母さん…」

プレシア「フェイト…ごめんなさい…貴方には酷いことを…母親失格ね…でもフェイトが望むなら、こんな母親だけど…いいかしら？」

フェイト「…うん！…大好き、母さん！」

フェイトは目から涙を流しプレシアに自分の母親に抱き締めた。

無印エピソード／名前を呼んで

プレシアの暴走も止めてこれでハッピーエンドといきたかったのだが…

ゴゴゴゴゴゴ！

突然、時の庭園全体に地しびきが発生し始める。

尚哉「これは！」

ディエンド「マスター！まだ戦いは終わっていません！ジュエルシールドが先程の攻撃で共振しています！このままでは次元断層が！」

尚哉「方法は？」

ディエンド「マスターの全力収束砲を撃っても封印できるか…」

尚哉「くそ！それじゃあ…」

和也「何一人でやろうとしてるんだ？」

尚哉「……あなたは…」

和也「ジュエルシールドを封印するんだろ？なら俺も手伝っ」

そういつて和也さんはレイをツインバスターライフルにして手伝うといってくる。

尚哉「ありがとうございます…」

作者SIDE

地球ではジュエルシードの共振により各地で地震や雷などが起きており人々は混乱していた。

八神家

楓「きゃっ！」

稟「楓大丈夫か？」

楓「は、はい大丈夫です」

義之「この地震と雷、もしかしてだけど」

音姫「多分、ロストログアのせい…尚哉くんも多分止めるために頑張ってるんだよ」

はやて（尚哉くん…がんばって…）

はやては手を合わせて尚哉の無事の帰還を祈るのであった。

尚哉SIDE

和也「行くぞ」

尚哉「はい」

和也さんの横に立ち俺は足元に魔法陣が展開する。

クロノ「何をしようとしてるんだ、まさか！あの状態のジュエルシールドを止めるつもりなのか!？」

後ろでは俺たちが今から行う行為を予想しむちゃくちゃな行為であるため驚く。

プレシア「無理よ！あの状態のジュエルシールドをオーバースの私でも無理なのよ」

尚哉「無理かどうかはやってみないとわかんねえんだよ!」

ディエンド「チャージ完了！行けます!」

尚哉「集え！終焉の光！ディメンジョー—ンプレイカアアアア!!!!」

俺の収束砲を放ちジュエルシールドとぶつかり合いとてつもない風圧が周りを襲う。

尚哉「くっ！力は互角か！でも！まだ！ディエンド!!カートリッジフルロード!!」

ディエンド「ロードカートリッジ!!」

ディエンドに搭載されているカートリッジを全発使い更に出力が上がる。

クロノ「なっ！カートリッジシステムだど!」

クロノ（何故、ベルカのカートリッジを…!）

そんなクロノは俺に疑問を持つがそんなこと俺は知らずにディメンジョンブレイカーがジュエルシードを押さえ込み一時的に共振が止まる。

フェイト「やった!？」

プレシア「ダメよ！止まったけどすぐまた！」

尚哉「いや、これでいい…欲しかったのは一瞬の停止するとき！今だ!!」

和也「おう！これで終わりだ！その幻想をぶち殺す！」

パキヤーーン！

和也さんが一気に飛び込み幻想殺してジュエルシードの力を完全に打ち消した。

クロノ「…止まった…」

プレシア「何が起きたというの?」

和也の右手に触れた瞬間ジュエルシードが止まったことに回りは困惑するがそんなかなかかなりの魔力を使い果たした俺は膝をつけて倒れこむ。

モモタロス「おい！大丈夫か!？」

尚哉「ああ、かなり使い果たしたからな…それより、プレシアさん…」

プレシア「…なにかしら」

尚哉「アリシアを目覚めさせよう…だからポットから出してほしい」

プレシア「っ！ええわかったわ」

そういつてプレシアはよろよろとした足取りでポットまでいってなにいるアリシアの体を取り出す。

尚哉「アリシア…行ってこい」

アリシア「うん」

アリシアは体に近づきそして体に触れると魂だけのアリシアの姿が次第に消えていき完全に消えると体のアリシアがピクツと動いた。

アリシア「ふにゅ？」

そして徐々に瞼を開けていき、そして俺は完全に成功したと心からほっとした。

プレシア「アリシア!!」

プレシアはアリシアが完全に甦ったことでアリシアを抱き締め涙を流す。

アリシア「お母さんの…感触だ…漸く帰ってこれたんだ…こんなに…嬉しいことはないよ」

アリシアも嬉し涙を流し周りのみんなもよかったと思う。

良太郎「尚哉…僕達は」

尚哉「そうだな…俺達は立ち去ろうここにいたら別の件で問いただされそうだから…」

そういつて俺と電王達は密かにこの部屋から出て行ってすぐさまデンライナーで脱出した。

地球 海鳴市

あのあと、地球に戻ってきた俺はデンライナーではやての家の近くに止まってもらいそこから降りて家へと向かった。

デイエンド「帰ってきましたね…」

尚哉「ああ…」

何故かここに帰ってきたのが数カ月ぶりみたいな感覚になるが玄関の扉を開けてなかに入り靴を脱いでリビングの扉を開けると…

はやて「あ…尚哉くん」

はやてがリビングを開けて入ってきた俺にすぐに気づき俺は一言こういった。

尚哉「ただいま、はやて」

はやて「お帰り！尚哉くん！」

はやては飛びっきりの笑みを浮かべて俺の帰りを祝ってくれた。

数日後…

ジュエルシード事件が解決してからシャドウの出現もなかったことから平穏な日常を味わっていた。

そして漸く、アースラが地球を離れる日俺はなのはとフェイトのあのシーンが行われる場所から少し離れた場所からその様子を見守っていた。

尚哉「なのは…勇翔…よかったな」

遠くから見守っていると…

和也 尚哉、聞こえるか？

突然、和也さんから念話が出て首をかしげながらそれに応答した。

尚哉 はい、聞こえていますよ

和也 そうか、なら単刀直入に言う…強くなりたいか？

尚哉 …それはまあ、みんなを、守れるくらいに強くなりたいです

和也 なら、話が早い、俺がお前を鍛えてやる、言っておくが俺の教導を受けて正気を保ったやつはいないから覚悟はしておけよ

尚哉 …は、はい！

そう念話が終わるとなのはとフェイトのリボンを交換しあいそしてフェイト達は転移してアースラとともに旅立っていった。

尚哉「さてと…もうすぐ、夜天の書が目覚める…決戦まで大体半年…絶対に全員救って終わらせる!」

俺は来るべき、戦いに備えて今日も前を見据えるのであった。

作者SIDE

海鳴公園にての尚哉の行動を監視するものがいた。

それは真つ黒な空間で水晶で尚哉を監視していた。

???「ふーん、あれがあの神が転生させた人間ね」

???「だが、あの程度ならば私の足元にも及ばん、デュポン様の許可があればわたしが斬滅しに行く」

???「まあ、待てレクサスよ…デュポン様からはまだ監視ということになっている」

デュポン「…ファイアー…貴様が始めに仕掛ける」

ファイアー「わかりました、全てはデュポン様と想像する世界のために」

遂に影が動く

next seconds

闇の書起動、そして舞い降りたイレギュラー

6月3日23時12分八神家

はやて「……」

尚哉とはやての寝室ではベッドに寝転がり小説を読む、はやてと机で宿題をしている尚哉がおり、静かに時間が過ぎていた…

尚哉（もうすぐ…夜天の書が起動する…）

尚哉は横目で夜天の書を見てジュエルシード事件でも戦いぬけたのだから問題はないとおもっ思う。

はやて「尚哉くん？どうしたんや？」

尚哉「え？ああ…何でもないよ…」

はやてが何かを考えている尚哉に気がつき声をかけると誤魔化され、むうと頬膨らまされる。

デイエンド「マスター…悲しいお知らせがあります…」

尚哉「…何？」

デイエンド「シャドウが出現しました…」

尚哉「…何でこんなときに限って…ごめん、はやて…えっと…本当はプレゼント日が変わったら渡そうと思ってただけ…」

はやて「ええよ、尚哉くんは正義の味方なんやから…はよいかな」

尚哉「ごめん…いつてくる」

そういつて尚哉は机においていたディエンドを手に持って部屋を出ていき少しするとはやての部屋の窓から空へと昇っていく青い光、尚哉が見えていた。

海鳴上空

尚哉「全く、空気をよんでほしいってのシャドウの奴等や」

ディエンド「なんとか日付が変わる前に終わらしたいですね…」

尚哉「ああ…それで敵の位置は？」

ディエンド「はい、ここから300メートル先の…っ！マスター！敵の砲撃来ます！」

尚哉「なにい!?!」

上空を飛んでいる尚哉はディエンドからの警告に驚きながらも右に回避すると前いたところに砲撃が通る。

ディエンド「もうすぐ、視認領域です！」

尚哉「見えた！っ！新型か！」

ディエンド「相手は新型…気を付けてください」

尚哉「了解！」

そういつて尚哉は速度をあげてシャドウのいるもとへと向かった。

23時58分八神家

はやて「遅いな…」

尚哉が出ていって既に30分は過ぎており未だに帰ってこないこと
と少し心配になってくる。

はやて「…もうこないな時間…」

はやては時計をみると既に明日になるまで1分を切っていた。

5

はやて「誕生日尚哉くんと一緒に迎えたかったな」

4

はやて「しょうがないか…」

3

はやて「もう寝よう…」

2

はやて「お休み…」

1

はやて「…」

0

6月4日になったときランプを消したはずなのに奇妙なことに明るいことに気づき後ろを振り返るとはやてが生まれたときから存在していた古書が紫の光を放ち中を浮いていた。

はやて「な、なんや!？」

いきなりの光景に頭が混乱するはやてであるが事は待つてはくれずに家が揺れる。

はやて（尚哉くん！）

はやては尚哉に助けを求めるが…尚哉はここにはいない。

そして

闇の書「起動」

闇の書が起動を開始した。

一方尚哉は廃棄工場にて新型のシャドウと交戦状態に入っており、尚哉はデイエンドで射撃しながら走っているが敵も素早くその上手のひらからエネルギー弾を連射してくるので攻防一体の戦闘が起きていた

デイエンド「シャドウは残り8体です」

尚哉「わかってる！くっ！」

ガンダムAGEに出てくるガフランに記事しているシャドウガフランが掌からビームサーベルを出して切りかかってきて尚哉はとっさに避けるとそのまま至近距離で魔力弾を何発も撃ち込むが撃破にはいたらなかった。

ディエンド「っ！マスター！魔力反応あり！数は二つこちらに急速に接近しております」

尚哉（っ！まさか…）

俺はその何かが飛んでくる方向を見ると魔力光は紫と赤…そしてベルカ式の魔法陣

尚哉（夜天の書が起動したのか…）

そう思っている矢先、剣のデバイス…レヴァンティンを持つシグナムと目が合いそして、殺気を飛ばして空から俺に目掛けて急降下してくる。

尚哉「ちよっ！ちよっ」と…」

はやて「ストップや!!!」

シグナム「っ!!」

俺の静止を言おうとしたときシャマルとザフィーラを連れていたはやてがきてシグナムを止めた。

ディエンド「っ！マスター！シャドウ一体がはやてさんに…」

尚哉「はやて!!」

ザフィーラ「我が主は傷ひとつつけません!」

ザフィーラが己の拳でシャドウを一撃で撃破し爆発し煙が舞うなかその中からもう一体のシャドウがはやてに光弾を放ってくる。

ザフィーラ「っ!しまった!」

既にシャマルとザフィーラが、守る時間がなく車椅子のはやてでは直撃するとこの場の全員が思った。

I b o n e m y s w o r d (私の体は剣で出来ている)

はやてのところ、光弾が直撃し土煙が舞っていて安否が気になるが煙が晴れていくとはやては傷ひとつついてはいないが、はやての前にたつて守っている男をみて俺は目を疑った。

はやて「あ、あの…誰ですか？」

??? 「ふむ、何かに引き寄せられて来てみればまた、女とは…私もずいぶんと運が悪い」

白い髪に赤い外套を纏った浅黒い肌の男

初対面だが、俺はその男を知っている、もし彼が協力してくれるのならこちらとしてもかなりメリットとなるであろうその男は…

尚哉「サーヴァント…アーチャー…」

アーチャー「まず、あの人でない何かは敵と判断していいのだから」

サーヴァントアーチャー…今、海鳴に舞い降りた。

プロローグ&前回までのお話（大まか）

俺の名前は浅倉尚哉

どこにでもいる高校生だったんだがある日を境に事故で死んでしまった。負の感情から産み出されたシャドウ…そのシャドウを束ねるブラッディクライシスを倒すため転生者としてリリカルなのはの世界に転生することになった（体も幼くなり）

そこから俺の生活は一変し魔導師として戦う日々を続けていた。

その中で願いをねじ曲げて叶えるジュエルシードをめぐるジュエルシード事件…はやてとアインスの命運をかけてしのぎを削った闇の書事件なども関わりアリシアの復活、アインスとプレシアの生存などの本来の運命を変えたり凄いことをしたこともある。

そして闇の書事件が終わった翌日のクリスマスに俺は、はやて、アリシア、すずかに告白し恋人になった。

そして俺の知らない事件…映司さん…仮面ライダーオーズと共に財団Xと激闘を繰り広げたインフィニットクリスタル事件…そしてブラッディクライシスがミッド『クラナガン』全域に侵攻したブラッディクライシス事件…この詳細は作者シグナムさんの所の小説で書いているからそちらを見てもらおう。

そしてブラッディクライシス事件ではブラッディクライシスの首領であるデュポンと共に相討ちになり命を落とした俺は神にもう一度あの世界に戻ることを願った。

だが神のミスで他の平行世界に飛ばされデイケイドに出てきた銀

のオーロラを駆使して平行世界を旅した。

どこから見ても女の姿をした男東野麻紗人 別名男を騙し女を絶望させる人型最終兵器（尚哉命名）

の世界で一緒にオフトレに参加したり

Wの世界では大ショッカーとの因縁が始まったり

オーズの世界で映司さんに再開したり…

ファイズ&スマイルプリキュアの世界ではファイズに突然襲われたり…

龍騎の世界では一緒にアビスと戦ったり

裕の世界では釣りしてたらアビゾドンが釣り上げちゃったり

最後の和也さんの世界では和也さんが犯罪者にされていて管理局の戦力の9割が和也さん一人で全滅されちゃったし…

まあ色々あって途中で一緒になった綾野珪子…シリカと共に旅し元の世界に戻るのであった。

プロローグ

俺がこの世界に帰ってきてきて年明けて冬休みは風のように過ぎて
いってその間は今までの時間を取り戻すかのようににはやて達とお話
して遊んで…デートして時には…／＼／

ごほん！まあ、こんな感じで冬休みは過ぎていき久々の風見学園の
教室前にたっていた。

俺は覚悟を決めて教室内に入ると義之が一番早く気づいた。

尚哉「その…おはよ」

義之「尚哉！いままでどこに行っていたんだ！」

尚哉「ちょ、ちょっと世界一周にな」

小恋「ふえ！そうだったの！」

杏「なら、連絡ぐらい寄越しなさいよ」

尚哉「いや、突然だったしその上海外からだとかかなり通話にかなりの料金かかるからよ」

杏「…そういうことにしといてあげるわ」

こうして俺は元の風見学園に戻ってきた。

キャラ紹介

八神尚哉（旧姓浅倉）

年齢 13

男

階級 三等空佐 特務官

所属独立特殊部隊DTX部隊長

魔導師ランク SS

デバイス デイエンド

異名 管理局の蒼き終焉者

ポジション センターガード

特別武器 ケータッチ

本作の主人公、ブラッディクライシスを倒すためにリリカルなのはの世界に転生させられた、原作前に両親を亡くした当時のはやてと出逢いそこから八神家の居候として暮らしている、ジュエルシード事件では黒フードきて顔を隠し第三者として介入したのは時には敵に、時には味方になった、闇の書事件ではなのは達と完全に敵対するも最後は管理局に闇の書の闇の破壊する協定を結び共に戦った、そして小

学6年の冬に謎の女の子ユキに出会ったが襲いかかってきたキメラグリードになにもできずに殺されてしまう、その後キメラグリードを倒しユキの敵を討つ、中学1年の秋にはブラッディクライシスがミッド、クラナガンに進行を開始し尚哉は首領デュポンとの決戦で相討ちになり2度目の人生が終わった。

ブラッディクライシスとの決戦後異世界を渡り二ヶ月に渡ってようやく帰還した。

戦いかたは元々は銃撃戦だったのだがソードモードを追加したことによりオールラウンドで戦う

デイエンド

神によって作り出された高性能デバイス

性能は他のデバイスを見ても一目瞭然とといったほどで仮面ライダーデイケイドに出てくるライドカードも使うことができる。無印では尚哉とはやての恋を影から応援するなど人間らしいところもある。

主な使用魔法

デイメンジョンバスター

直射系砲撃

威力はエクセリオンバスターを上回る

デイメンジョンブラスト

追尾弾を8発発射させる、射撃魔法

エナジーウイング

尚哉の背中に青透明な翼が展開し高速で移動し翼に見真似た魔力刃を射出や翼で防御など多彩に使える。

クロスファイアー

お馴染みのティアナが使っている魔法だが尚哉は一瞬で五百発生成し一斉総射：チャージすれば数が五桁にのぼる、尚哉も使いこんでいる魔法

フレイムスラッシュ

デイエンドソードモードの刀身に炎を纏わせ切り裂く、尚哉の師匠直伝の技（フレイムフォームの時だけ）

デイメンジョンビット

なのはのブラストビットに似た支援ユニットを4基だせる、射撃、防御など多彩に活躍してくれる。

ディメンジョンバスターハイマツトフルバースト

フルドライブ時限定技

二丁のディエンドとビット4基の砲撃にクロスファイアとエナジーウイングの射撃が同じ発射される尚哉の殲滅戦ではかかせないほど使っているが今はフルドライブが使えない状態なので使えない。

ディメンジョンブレイカー

収束砲撃で尚哉の奥の手、破壊力はお墨付きでロストロギアを破壊することもできる。

ツインディメンジョンブレイカー

フルドライブ時限定技ディエンド二丁でディメンジョンブレイカーを2発作り同じに放つ。

ディメンジョンマキシマムブレイカー

フルドライブ時限定、二丁のディエンドを連結させてライフルにして使うことができる尚哉の最強魔法威力はディメンジョンブレイカーを遙かに上回る。

フレイムフォーム

フレイムのライドカードを挿入することで力と炎の力を得る
フォーム、正し機動性が落ちてしまう。

ガイアフォーム

ガイアのライドカードを挿入することで守りと土の力を得る
フォーム、正し攻撃力が下がる。

ウィンドフォーム

ウィンドのライドカードを挿入することで速さと風の力を得る
フォーム、正し防御力が下がる。

トリニティフォーム

フレイム、ガイア、ウィンドのライドカードを連続で挿入すること
で発動するフォーム、フレイムの炎と力、ガイアの土と防御力、ウイ
ンドの風と速さを得る。闇の書の闇との決戦で初めて登場した。

インフィニットフォーム

謎の男性から渡された、シークレット級ロストロギアインフィニッ
トクリスタルの半分が宿ったライドカードを挿入することで完全無
欠の力を得る。その強さは圧倒的でクレーターができるレベルの攻
撃を軽々と受けとめクロックアップを気配だけでとらえる、専用武器
として亜空間からインフィニットソードを取り出すことができる。
亜空間を使って移動もでき尚哉曰く「あれは人を越えてる」とのこと

正し弱点としてインフィニットフォームは10分しかもたない。インフィニットクリスタル事件で登場しインフィニットクリスタルの半分を吸収したキメラグリードを2分もかけずに倒した。現在は力を失い使えなくなっている

霧島勇翔

年齢13

男

階級 陸曹 デバイスマイスター

所属 独立特殊部隊DTX

魔導師ランク なし(あったとしたらS)

デバイス なし

特別武器 N E O電王ベルト

詳細

尚哉の親友でなのはとはお隣で高町家の家族同然、機械にはかなり詳しく、リンカーコアはFランクだが運動神経は大人顔負け、普通にAランク魔導師を倒せるほど

ジュエルシード事件でなのはと共に行動し尚哉と敵対した、闇の書事件でも尚哉と敵対しリインフォースと闇の書の闇との決戦で活躍を見せた。

小学6年の頃になのはの撃墜を阻止するためにN E O電王ベルトを使い、仮面ライダーN E O電王に変身した。

インフィニットクリスタル事件では財団Xの基地でデスイマジンと戦い、後からきた電王と協力してデスイマジンを撃破した。

ブラッディクライシス事件ではクラナガン防衛戦に参加しシャドウと戦い、途中で現れた闇に落ちたなのはと対決したのは本当の気持ちに気づきなのはを闇から解放した。

現在では勇翔に好意を寄せていた、なのは、フェイト、アリサと恋人関係になっている。

仮面ライダーN E O電王

謎の男から渡されたベルトとシュテル達とユニゾンすることで変身する電王、武器はネオデンガツシャでソード、ロッド、鎌とあった組み立てしだいで武器を変えられる。

スターフォーム

シユテルとユニゾンして変身するフォーム容姿はソードフォームを橙色が基本カラーになった姿、ネオデングアツシャ、ソードモードを使う。

必殺技

ルシフェオルブレード

ネオデングアツシャの刀身に炎を纏い切り裂く。

ライダーキック

仮面ライダーのお馴染みのキック、右足に炎を纏い飛び蹴りを放つ、闇に落ちたなのはを倒した一撃でもある。

ライジングフォーム

レヴィとユニゾンすることで変身するフォーム、容姿はガンフォームを水色が基本カラーになった姿、ネオデングアツシャを鎌にして戦う変身すると一時的にレヴィに乗っ取られ「お前僕が倒してもいい？ 答えは聞いてなあああい！」といった決め台詞がある。

ライジングスラッシュ

フルチャージすると超高速で連続攻撃を繰り返し10秒以内にもう一度フルチャージし、正確なタイムを告げてからネオデングアツ

シャーで横に切って最後に縦に切る。

ダークネスフォーム

ディアーチエとユニゾンすることで変身するフォーム、容姿はロッドフォームを紫に基本カラーしたような姿、ネオデンガツシャーをロッドモードにして戦い、レヴィ同様変身直後に体が乗っ取られ「我！降臨！」という台詞がある。

ジャガーノートキック

フルチャージをしてネオデンガツシャーを敵に投げつけ当たると魔法陣が展開しそれめがけて飛び蹴りを放ち当たると半径20メートルが黒い球体に飲み込まれる。

恐怖…デスゲーム再来

風見学園に戻ってきて数週間、ことの始まりは涉の一言だった。

涉「なあ、明日の土曜日にこの前出来た駅前のボーリング場に行か
ねえか？」

尚哉「ボーリング場？…まあ何もよつじとかはなかったから良い
ぞ」

涉「そうかなら多い方がいいし義之達も連れていこうぜ」

そんなわけでボーリングに行くことが決定した。

その夜俺は宿題をしながらボーリングのことを考えていた。

尚哉（明日のいくメンバーは俺とシリカと保護者ってことでシャマ
ルとアインス、後は同じ謹慎中のなのはだな、稟と楓は行ってくつ
てたし大丈夫だろう）

その後宿題を終えた俺は早めに寝て翌日…

シリカ「あ、あの、本当にあたしも来て良かったんですか？」

まだこちらにきて間もないシリカは遠慮がちに言うてる。

尚哉「大丈夫、大丈夫恐らく義之の所にも由夢ちゃんがいると思うしピナもあーいうのを魔界だといえるらしいからペットとしても見られるだろうしな」

そんな雑談を交わしていると…

渉「おっ待たせ！」

小恋「ヤッホー尚哉くん」

お馴染みの義之達と音姫さん、由夢ちゃん、そして、高坂先輩がやって来た。

尚哉「…なんで高坂先輩も？」

まゆき「なに？私が居たら不味いことでもあるの？」

尚哉「いや、音姫さんは義之が読んだってことでわかりますけど高坂先輩は…」

音姫「それはね、私が呼んだのみんなが騒ぎを起さないように」

尚哉「…さいですか」

そういう雑談を交わしながらボーリング場に向かった。

これがあのゲームの幕開けだとはまだ誰も知らなかった。

ボーリング場に来た俺達はボーリングを始めた。

俺は勿論一発でストライクを連発し続ける。

杏「完璧ね」

尚哉「そついう杏だつて完璧なフォームでストライクを連発してるじゃないか」

杏「一番驚いたのはなのはじゃないかしら」

尚哉「…そつだな」

なのは「やった!」

なのはが投げたボールはピンをすべて倒した…どうやらスペアのよつだ。

簡単に言うとペインに操られていたのが原因なのかそれによって運動音痴が解消されたのである。

渉「ギヤアアアアアアアアアア」

尚哉「な、なんだ！」

何故か渉の奇声が聞こえてきたことで渉に駆け寄ると何故か気絶

していた。

尚哉「おい！何があつたんだ！」

茜「涉くんが紙コップの飲み物を飲んだら…」

俺は近くに落ちていた紙コップを調べると次元の海色をした液体？が入っていた。

尚哉「これは！」

シヤマル「ああ、それは私が作った特性栄養ドリンクです」

その瞬間俺達、シヤマルのバイオ兵器の威力を知っているみんなは一瞬で後ずさった。

シヤマル「ちょっ！なんでみんな構えるの！」

尚哉「いやこれが当然の対処だというか！そのことばよく言えたな」

まゆき「お、音姫!?どじしたの？」

音姫「まゆき、本当にシヤマルさんが作ったあれは不味いのこの世に存在しちゃいけないの」

まゆき「…そこまで」

尚哉「よし、さっさと…」少し待て「なんだよ杉並」

杉並「面白そうではないか、このようなのはどつだ？このドリンクをガーター三回した者がのむというのは」

尚哉「待て！やめろ！杉並はその恐ろしさを知らないから言えるんだろ！」

杉並「なあに、ガーターをしなければいいのだよ」

尚哉「まあ、そうだけど…」

杉並「それでは許可を持ったわけでこれより、罰ゲームありのボーリングを楽しむもつではないか！」

そんなこんで第二回のデスゲームが始まった。

尚哉「よし！ストライク！」

杏「余裕そうね」

尚哉「そういつ杏も完璧なフォームな上にストライク連発じゃないか」

杏「私は些細なことでも覚えられるの忘れたかしら？」

尚哉「雪村流暗記術か…」

このデスゲームが始まって1時間…俺と杏はこれまでストライク連発でノーミスなのだがバイオ兵器は残り3つ…どうやら5つ持ってきていたようだ。

え？1つどうしたって？大丈夫、犠牲になったのは

シャマル「…」

シャマルだから

義之&稟「嘘だあああああつ!!!」

尚哉「な、なんだ!」

俺は不意に義之達を見て大体のことは理解した。

要はあれだ

あと一回ガーター出せばバイオ兵器を飲むことになりよりによって端に1本たっている状況…極めて最悪だ。

尚哉「義之、稟、骨は拾ってやる」

その後義之と稟は天に召された。

さてと残り1つか…

珪子「アインズさん！」

尚哉「今度はどっ…っ…っ！」

俺は今度は反対方向の珪子達の方を見ると絶句した。

そうして、第二次デスゲームは終わりを迎えた。

その数週間後シャマルを呼び出し訓練所でフルボッコにしたのは記憶に新しい。

伝説の不屈の心

時空管理局所属、X-1級次元航空艦アースラのデバイスルームでは俺を始め、なのはと桂子そして呼び出した張本人勇翔がいた。

尚哉「それで集まったのはなんの意味があるんだ？」

勇翔「ああ、なのはの大破していたレイジングハートの改良が完了してな…その性能を見てもらおうと思っただけ」

尚哉「レイジングハートが？ああ、そういえばペインの奴に構造を無茶苦茶にされたんだっけ」

勇翔「本当に構造が無茶苦茶でな…それとその模擬戦は四日後だから頭に入れとけよ」

尚哉「わかった、四日後だな」

そうして時は直ぐに過ぎていき四日後を向かえた。

4日後

本局、第8訓練所…

そこは今日俺となのはが戦う場所であり、何故かそれを見ようと観客席が局員により一杯になるほどだった。

なのは「そういえば、こんな一対一の対決なんてあの時以来だね」

尚哉「ああ…運動会後のディエンドが俺だってわかって挑んできた時な」

なのは「でも、あの時はあまりのちからの差で完敗したけど今回はそうはいかないから」

尚哉「確かにあの時みたいにはいかないだろうが…それでも勝つのは俺だ」

俺となのはは互いに闘志を燃やす。

なのは「それじゃあ始めようか」

そういつて少し距離をとり俺はディエンドをなのははレイジングハートを手を持つ。

尚哉「ディエンドセットアップ」

俺はバリアジャケットを身に纏い手にはディエンドガンモードを持ちなのはをみると何かを思っているのか目を閉じていた。

なのはSIDE

尚哉さんと戦う前に目を閉じてこれまでのことを振り返っていた。

私は2度と孤独になりたくないから良い子にしている…魔法あるから孤独じゃない…みんなと一緒に居られる…そう思った…

でも、あの時…勇翔くんに言われてやっとわかった…魔法なんて無くて私にはかけがえのない友達が居るってことに…

あの事件の後私は病院に搬送されて久々の家族、友人にあって本当のことを話した…

みんなにどうして黙っていたんだと怒られたけどその後にお母さんに辛い思いをさせてごめんなさいって謝られた。

嗚呼…例えば良い子じゃなくても魔法が使えなくても私には友達や家族が見捨てたりしないじゃないか…そんな私は幸福者だと思える。

そして私は目をゆっくりと開け目の前には既にセットアップしている尚哉くんが居る。

なのは「また、力を貸してくれる？ レイジンググハート」

私は手のひらに乗っているレイジンググハートに話しかける。

レイジンググハート「勿論です、私のマスターはあなただけです」

レイジンググハートは当然と云うばかりに言ってくれた。

なのは「ありがと、それじゃあ行くよ…」

もう魔法をあんなことに使わないように…そして新しい不屈の心をこの胸に抱いて…

なのは「レイジンググハートレジェンド!!セエエエエツト
アアアアアップ!!!

レイジンググハート!「スタンバイレディ?セットアップ!」

私はまた空を飛ぶ。

尚哉VSなのは

作者SIDE

尚哉となのはが戦闘体制にはいり開始のカウントが迫っていく。

尚哉(さてと、相手はあのなのはだ…原作とは違い撃沈もされてないし何より運動音痴が直ってその上バカミからもらったデータで改良したレイジングハート…一筋縄では行かないだろうな…でもそう簡単にはやられるかよ)

なのは(尚哉くんのこれまでの戦闘データを見てみたけどやっぱりすごい…多分どの距離だろうと対応してくる、でも戦闘データを見てわかったことがある…狙うならそこ)

尚哉(多分、なのはは俺のこれまでの戦闘データを見たはずだ…とすることはあれにも気がついてそこを狙ってくる…でもその対策はとってある…)

そして互いに作戦を考えていると開始のブザーがなった。

尚哉(それじゃあまずは小手調べに!)クロスファイア…シュート
「！」

尚哉はなのはとレイジングハートの実力を調べるべくクロスファイアを20発発射させる。

なのは「来た！レイジングハート！行くよ！」

レイジングハート「いつでもどござー！」

なのは「アクセルシューターバニシングシフト…」

レイジングハート」「ロックオン」

なのは「シューウウウート！」

なのはの回りに20発の魔力弾が作られてなのはの掛け声で一斉発射して尚哉のクロスファイアを全弾、相殺する。

ディエンド「クイックムーブ」

尚哉はその隙になのはの懐に飛び込みディエンドソードモードを横に振るう。

尚哉「もら「甘いよ！」なっ！」

なのははしゃがんでディエンドを避けてレイジングハートで接近戦に持ち込み鏝迫り合いに持ち込まれる。

尚哉「取ったと思ったんだがな…」

なのは「簡単には入れさせないよ！」

レイジングハート」「バスターカノンモード」

なのはは後ろに下がりレイジングハートをバスターカノンモードに切り替えて射撃体制に入る。

尚哉（砲撃が来る！）

なのは「デイベイイイイン…」

なのははレイジングハートについているトリガーを引く。

なのは「バスタアアア!!!」

なのはのデイベインバスターが尚哉に向かって放たれる。

尚哉「(カートリッジ無…いける!) うおおおおおっ!」

尚哉は迫り来るデイベインバスターをソードモードのディエンドで真つ二つに断ち切る。

尚哉「くっ! (手が痺れる…やっぱり威力が上がってる) ほんとー筋縄にいかないな…」

尚哉はそういつてディエンドを再度構え直す。

それから数分後尚哉となのはの戦いは激化し観客席でみてる人も爆風が巻き込まれるほどに…

なのは「はあ…はあ…(開始してからもう数分…戦闘空域の魔力散布は充滿してるけど…今の尚哉くんを集束砲を撃つたとしても避けられる…だったら!) くっ! シュート!」

なのははアクセルシューターを放ち尚哉は地上戦では不利だと思いき飛行魔法で空に飛ぶ。

なのは(空に上がった!) レイジングハート! フルドライブ! エクシードモード! ドライブ!」

なのははエクシードモードを使い形状が変化したレイジングハートを空にいる尚哉に向ける。

尚哉「はっ！（なのはが切り札を切った！なにか仕掛ける気か！）」

なのは「エクセリオン…バスター!!!」

なのははエクセリオンバスターを撃ちアクセルシューターに追われている尚哉はクイックムーブで回避するが…

なのは（尚哉くんの唯一の欠点…それは…）

尚哉「なっ！」

尚哉が回避した所の真上にはなのはが次の砲撃を放とうとしていた。

なのは「（反射神経は凄くても尚哉くんは空では直線以外なら素早く動けない！クイックムーブを使って回避した今なら！）ストライク…スターズ!!!」

なのはは回避した尚哉に砲撃と射撃魔法が飛んでくる。

尚哉「（あの魔法は…それにこのままじゃ避けるのは…あっちも切り札を切ったんだならこっちも！）ディエンド!!」

ディエンド「エネルギーウィング」

尚哉はストライク・スターズが直撃する寸前に横に避ける。

なのは（避けられた！）

なのはは予想外なことに驚くが尚哉は高速でなのはに迫る。

なのは「（早いー）」のぉー」

なのははアクセルシューターで尚哉を迎撃するが尚哉は速度を落とさずに翻弄するかのようには避けてディエンドソードモードでなのはに切りかかるがレイジングハートで防がれる。

そして尚哉はそのままなのはの横を通りすぎ距離をとってからなのはの方に向き直り、背中に付いている青く半透明なひし形の三対六羽…エナジーウィングからひし形の形をした小型の魔力刃を無数に発射させる。

なのは「っ！」

なのはは回避運動をとるがそれでも何発かエナジーウィングがちよくげきしていた。

なのは（あの技…1発1発の威力は無いけどあんなのが沢山くらったら不味い…それに飛行魔法であって射撃魔法にも使える魔法か…面白い魔法を考えたもんだね）

エナジーウィングのイメージがわからない人はコードギアスのランスロットアルビオンのエナジーウィングがはやてのスライプニールのような形になったと思ってください。

尚哉「はあ…はあ…（そろそろ決めないとな…）なのは…次の攻撃で最後にしないか？」

なのは「はあ…はあ…うん、こっちも魔力が後わずかだからね、次の一撃で！」

そういつてなのははレイジングハートを構える。

なのは「ブラスタ―！モードマルチレイド！！」

尚哉（ちよっ！ブラスタ―システム!?しかもモードマルチレイドって…）

尚哉はその二つの単語に驚く中なのはは既に集束に入っていた。

なのは「やっぱり驚いてるね、麻紗人さんの世界の私が使ってた魔法だからね…悪いけど勇翔くんをお願いしてディエンドから映像データをコピーしてもらったの」

尚哉「ああ、なるほど…だからストライク・スターズもっておい！しかもビットの数多いし…」

以前、麻紗人の世界でオフトレに参加したときの模擬戦で向こうの世界のなのはがマルチレイドを使っていたが…そのビットの数は8基ほど…だが目の前のなのははそれを上回る20基そしてなのはの目の前にも集束しているのでスターライトが21発飛んでくる。

尚哉「やっば、向こうのなのはより強い…それにあんな数の集束砲撃をくらったら…まず終わりだな…だったら…（こつなれば！目には

目を！歯には歯を！マルチレイドにはマルチレイドだ！モードマルチレイド!!」

尚哉は4基のビットを展開し集束に入る。

なのは「スターライト…」

尚哉「デイメンション…」

なのは 尚哉「ブレイカアアアアツ!!!」

そして両者同時に集束砲を放ち訓練所全体が煙に覆われる。

集束砲のぶつかり合ってから1分が経ち漸く煙が晴れてきてそこには…

なのは「きゆう〜」

バリアジャケットがボロボロで気絶しているのはと…

尚哉「はあ…はあ…なんとか…耐えきったか…」

バリアジャケットがボロボロであるが立っている尚哉…これにより尚哉の勝利だとわかる。

尚哉（危なかった流石にディメンションブレイカーでも相殺しきれなかったからファンネルを盾に使って軽減させたが間違いなく実力は朱音さんと同等だ…）

そんなことを考えていると勇翔がやって来る。

勇翔「凄まじい戦いだっとな…」

尚哉「全く…マジで負けると思ったぞ…」

勇翔「まあ、それだけ、なのはも強くなっただってことだ」

尚哉「…帰ったら新しい魔法でも考えるか…（主に砲撃対策…）」

その後なのはが目覚めたのはこの数分後であった。

大シヨツカー襲来

尚哉SIDE

なのはとの模擬戦から数日が経ちもつすぐ、期末テストが後わずかに迫っていた。

そして今日も学校は終わり家に帰ろうとしていた。

尚哉「…で1つ聞いて良いか？」

杏「なにかしら？」

尚哉「なんで着いてきてるんだ！」

俺の後ろには初音島メンバー&稟、楓が揃っていた。

杏「そうね、一度尚哉の家に行ってみたかったからかしら」

茜「はい！はい！茜さんも杏ちゃんに賛成です！」

尚哉「俺の家にはなんも面白いもんなんてないぞ」

杏「あるじゃない…知らない内に女の子が増えていくとか…」

尚哉「うっ！それは…」

妙に痛いところをついてきた杏に後ずさるがその時携帯に着信音が…電話がかかってきて見ると、はやてからだ。

尚哉「す、すまん電話だ…はい俺だけどう《尚哉！大変や！尚哉が居る所から少し離れた場所で大ショッカーが暴れとる！早く行かな取り返しのつかんことに！》っ！わかった！直ぐに向かう！！」

はやて《お願いな、私達も出来るだけ早く合流するから！》

そういつて言われて電話を切り直ぐに向かおうと足を動かそうとするが杏達がこっちをみていた。

尚哉「……何？」

杏「そんな急いで何処に行く　うとしてるの？」

尚哉「ちょ、ちょっと、はやてに急な用事を頼まれてな…」

涉「ふ〜ん…まあそれだとしてもしょうがないよな」

涉が納得すると義之達も納得するなか杏はまだ疑っていたが俺は急いで現場に向かった。

身体強化魔法を最大限に使い全力で走る。

そして怪人達が暴れているのが近くなったのか逃げ惑う人達が大勢見られてきて俺の目でショッカー戦闘員を目視できる。

そのなかで今にも襲われそうな親子が目にはいり勢いを落とさずにそのまま回し蹴りをくらわせる。

ショッカー戦闘員「イーッ！」

尚哉「早く逃げろ！」

一般人「あ、はい！」

親子は急いで逃げていきそれをちゃんと確認してから視線をシヨツカー達に向ける。

尚哉「あんまり、活動しないから大丈夫かなと思ってたんだが…勘違いだったか…」

俺はそう言いながらディエンドを起動しバリアジャケット(黒フールド)を着る。

尚哉「これ以上被害を出したくないんでな…速攻でけりをつける…」

そういつて俺はディエンドをソードモードにして飛び出した。

数分後…

尚哉「こいつで最後か…」

俺は辺りを見渡すとシヨツカー戦闘員は誰も居らず、すべて倒したと思われる。

尚哉「さてと、警察が来る前に退散…したいところだが…」

ここから離れようと思った矢先仮面ライダーナイト、ベルデ、シザース、インペラー、ライア、ガイ、ファム、王蛇、タイガーが目の前に現れる。

尚哉「龍騎系ライダーがこんなに来るとはな…」

俺は斬りかかるかと構えたところであることに気がつく。

ナイト「おっと、妙な動きを見せるなよ、さもなければこの女の命はない」

尚哉（茜!?)

ナイト達に捕まっているのは花咲茜であり、ナイトはウィングランズを茜の喉元に突きつける。

尚哉「ぐっ！卑怯な！」

俺は下手な動きが出せなくなりナイト達を睨み付ける。

ナイト「警察も来るだろうし今から一時間後にミットチルダの廃棄ビル地区に來いさもなければ…わかつているな？」

尚哉「なっ！待て！」

俺の言葉も聞かずにナイト達は背を向けて銀のオーロラに入っていく…

ナイト「いい返答を待っているぞ」

そっぴい残して銀のオーロラにと共に消えた。

茜救出戦

尚哉「くそ！」

ナイト達が去った後俺は心は後悔で満たされる。

多分さっきの戦闘員は俺を誘いだし茜を拐うための陽動でその結果、俺は下手を打つことが出来なくなった。

それに後一時間というタイムリミットによってミッド地上からの武装隊の援軍はまず間に合わない…それに普通の転移ではかなり時間がかかるからそこは銀のオーロラで行けば問題はない。

あるとすれば…

尚哉（どうやって茜を救出するか…）

まず、敵は龍騎系のライダーが9人でまずミラーワールドからの奇襲は無理…だとすれば…

尚哉（誰かが単独行動をすれば…）

そう考えていると俺を見る視線に気づき振り替えると義之達が立っていた。

尚哉「君達は…」

小恋「あ、あの、茜を見ませんでしたか!? こっちに連れ拐われたんですけど…」

小恋は声を荒げながら聞いてくるが…俺に返せる言葉がなかった。

杏「その黙りよう…肯定ってとっていいのかしら？」

黙っていたことを指摘してくる杏…

杉並「おおよそ、人質に捕られなにもできずにいたといったところか」

尚哉「…お前の言う通りだよ、人質がいた以上下手な動きをすれば危ない」

涉「だから黙って見てたって言うのか！」

義之「涉落ち着け！」

杏「涉の怒りもわかるけど彼を責めてもなにも変わらないし茜も戻ってこない…」

それから誰もが黙りこみ中、俺はそんな義之達に背を向けるように歩きだし目の前に銀のオーロラを発生させる。

稟「…っ!?どこにいくつもりだ！」

稟の言葉で黙りこんでいた全員が立ち去ろうとしていた俺に気がつく。

尚哉「……………奴等の目的は俺…先程奴等が待っている場所は分かっているから…」

そういつて銀のオーロラの中に入っていった。

銀のオーロラから出た俺は直ぐに辺りを見渡しミッドの廃棄ビル地区付近だと確認する。

尚哉「…ディエンド、茜がいるところは割り出せるか？」

ディエンド「あの…その…マスター？」

ディエンドは何故か歯切れが悪くいつてくる。

尚哉「どうした？ディエンド？」

ディエンド「その…後ろを見てください」

尚哉「後ろ？」

そして後ろを振り向くとそこには…

尚哉「…目が疲れてるのか…」

そうだあれは幻覚だ…そうでなければこんなところに…

杏「大丈夫よあなたの目は正常よ」

嘘であってほしかった…

そのには杏と義之が立っていた。

尚哉「…それでどうして君達も来ているんだ？」

杏「簡単よ、あなたが入っていったあれに私達も入ったのよ…

尚哉「

俺の名前を呼んだことに少し動揺してしまうが直ぐに冷静さを取り戻す。

尚哉「はて、誰のことかな？」

杏「惚けても無駄よ、さっきの茜の名前が出た時点で確信したわ」

尚哉「それは君達が良く知っているから名前ぐらいわかるだろ」

杏「いいえ、尚哉は気づかれるかもしれないからわざと私達の前では名前を呼ばなかった…違う？」

尚哉「……」

既に杏は確信をもって知っているか…

義之「…もういいんじゃないか？」

尚哉「…はあ…全く…関わらせたくはなかったんだがな…」

俺は深く被っていたフードをおろし杏達に正体を明かす。

杏「それでどうして私達に隠していたのかしら？それに義之は知っていたみたいだけど…」

尚哉「まあ。なんだこの事はあんまり言っなって言われていて…でも今はそれより茜の所に」そう簡単にいかせるとでも？「…やっば見張りはいたか」

俺は後ろを向くと仮面ライダーベルデが居た。

ベルデ「やはり、お友達を救いにノコノコと来たか」

尚哉「杏、義之下がっている、直ぐに終わらせる」

俺はディエンドをソードモードにして構え飛び出しベルデも突っ込んできて拳とディエンドが交わる。

作者SIDE

尚哉達がいる場所から2km離れた廃棄ビルの中…そこには警備に出たベルデ、王蛇を除くナイト達と捕まっていた茜がいた。

シザース「おい、もう後10分しかないぞ、本当に終焉者は来るのか？」

残り少ない時間の中シザースがナイトに尋ねる。

ナイト「この女は終焉者にとって大切な存在、それを見捨てるような男じゃないさ」

ナイトは当然と言わんばかりに答えそれを聞いた茜は困惑を隠せない。

茜（大切な存在!?私!?それってつまりあの人の正体は…）

茜は黒フードの男が尚哉ではないかと思ってしまう。

そして茜は在るものを見て確信してしまった。

ナイト「漸く帰ってきたか、遅かったな」

ベルデ「終焉者と戦っていたんだ予定より遅れて当たり前だ」

尚哉「ぐ…っ！」

そこに戻ってきたベルデはボロボロの尚哉を連れていた。

ベルデ「後、小柄な女と黒髪の男がいたが逃げられちゃった」

茜（もしかして杏ちゃんと義之くんのこと!?!）

茜が杏達のことを考えていると尚哉はナイトの前にひざまずかせられナイトは片足を尚哉の頭に乗せる。

ナイト「無様だな、ダークディエンドを倒したと聞いていたがこの程度だとはな」

尚哉「ぐっ…」

ナイト「ならば、苦しむ暇もなく殺してやるっ」

そういつてウィングランスを尚哉に向けて構える。

茜「やめてください！尚哉くんを殺さないで!!」

茜は必死に叫ぶがナイト聞く耳を持たずに…

ナイト「去らばだ、終焉者」

ザシュ！

尚哉「あ……がっ……！」

尚哉の体に突き刺さった。

茜「い、いや…いやあああああああああ
!!!!
」

ナイト「何!？」

ナイトは驚愕した。

ウイングランスが突き刺さった尚哉が幻影のように消滅し何もな
かったかのように消えた。

この光景を見て全員が呆気にとられるのは当たり前だ。

だが一人だけ驚かなかった人がいた。

ナイト（終焉者が消えただと！どういうことだ…元々こいつは偽者…なら本物は何処に…まさか！）

ナイトは血相をかいてある方向を見るとそいつは既に茜の近くにいた。

ナイト「シザース！ガイ！そいつから離れろ！そいつはベルデじゃない！」

ナイトは二人に警告するが時既に遅し

気づけば二人は断末魔をあげて爆発し元のライドカードに戻りそれをベルデだった者が掴む。

茜「あ、ああ…」

ナイト「やはり、貴様だったか…終焉者!!」

ベルデがいた場所には先程幻影のように消滅した尚哉が立っていた。

尚哉「作戦成功だな」

ナイト「貴様…ベルデはどうした!」

尚哉「ベルデならここにあるぞ」

尚哉はカードケースを開けてベルデのライドカードを見せつける。

デイエンド「デイメンション…」

尚哉「悪いが時間が無いんだ…」

デイエンド「バスター」

尚哉「押しとおる!」

尚哉はデイメンションバスターを放ち射線上にいたライダー達は上手く避けるが尚哉は倒すために撃った訳でなかった。

「ファイナルベント」

ゾルダがファイナルベントのカードを挿入するとマグナギガが現れマグナギガの背中にマグナバイザーを装着しマグナバイザーのトリガーを引くとマグナギガから大量のミサイルとレーザーご放たれ尚哉達がいるビル目掛けて全弾飛んでいきミサイルがビルの中に入っていく直前に尚哉が茜を抱いて脱出しミサイルとレーザーはビルに着弾しビルが倒壊する。

ここで尚哉の作戦の概要を簡単に言っておこう。

ベルデと接触戦闘の後勝利

尚哉はイリユージョンで分身を作り本人はコピーベントでベルデに化ける。

ベルデに化けた尚哉が尚哉の分身を連れてナイトの元に行き隙を見て茜を救出し脱出ルートを砲撃で脱出口を作る。

砲撃を合図にゾルダのエンドオブワールドを発射しビルを倒壊しナイト達を殲滅。

以上が尚哉が考えた作戦である。

尚哉SIDE

尚哉「ふう…上手く行ったようだな…」

ゾルダのエンドオブワールドでビルが倒壊して直ぐに俺は義之達の近くに降りる。

義之「茜！大丈夫か！」

茜「う、うん、何ともないよ」

杏「全く、とんでもないこと考えたわね……」

義之「ビルを崩すなんて正気のさじゃないぞ」

尚哉「大丈夫、大丈夫ビルの破壊は承認がおりてるから」

義之「そう言う問題なのか？」

尚哉「いいんじゃないか？壊す経費が浮いたんだから」

デイエンド「あのマスター？つかぬことを聞きますが……」

尚哉「ん？どうした？」

デイエンド「ライドカードの回収…大変ですけど目処がたっているのですか？」

尚哉「……」

ヤバイカンガエテナカッタ

義之「お、おい！尚哉、お前汗がすごいぞー！」

尚哉「いや、これからあそこを大搜索するということに少し…でもその前に義之達を家まで送り届けないな」とな

そういつて銀のオーロラを出そうとするが…

杏「待って、私達も手伝うわ」

杏のその一言で踏みとどまる。

尚哉「手伝うって…あの瓦礫のなか探すんだぞんだけ時間かかるか…」

杏「一人よりみんなで探した方が時間も短縮できるわ」

尚哉「確かにそうだが…家族が心配するぞ」

杏「それなら勉強会っていう理由で友達の家泊まり込むって連絡すれば心配ないわ」

尚哉「……………はあ……………しょうがない……………」

俺は腹を決めライドカードの搜索を開始するのであった。

その後俺達は廃棄ビル跡地を隅から隅まで搜索して三時間が過ぎた。

尚哉「ライアのライドカード…後はナイトなんだが…」

既に隅から隅まで搜索したのに関わらずナイトのライドカードだけがなかったので俺はひとつの推測をする。

尚哉「あいつだけ察知して撤退したか…」

そう考えるのが妥当であった。

ぎゅるるるる〜

尚哉「ん？」

ビル跡に腹の虫が響き、その発信者を見ると…

茜「あ、あはははは…／／／／」

顔を赤くし苦笑いを浮かべる茜が立っていた。

尚哉「…夕飯食べに行くか？」

義之「食べに行くって…そんな金持ち合わせてないぞ」

尚哉「そこは大丈夫、俺が奢るし金は卸せば出せるから」

義之「でもな…」

尚哉「まあ、お詫びだと思ってくれ、ああ…後泊まるとこの金も出すから気にするな」

杏「尚哉がそこまでいうならご馳走になるうかしら」

義之「まあ、尚哉がそこまで言つのならな…」

そういつて俺達はライドカード探しを打ち切りクラナガンの市街地へと歩いていった。

説明

市街地にたどり着いた俺は近くにあったコンビニがあったので義之達を外で待たせてATMから金を引き下ろし十分な金を持って義之達のいる場所に戻る。

尚哉「お待たせ、それじゃあホテルに行こうか」

杏「待って…」

そういつて歩き出そうとしたとき杏に止められてしまう。

杏「ひとつ聞きたいのだけど…此処って地球じゃないわよね？」

茜「え？此処って…地球のどこかじゃないの？」

茜がいう通りそれが一般的な答えだ、だが杏は何かに気がついたのだろう。

杏「街並みだけなら近未来的な都市

だと思えるけど空見たら…」

茜と義之も杏に言われて空を見上げて

義之「…あ…！」

茜「月が…二つある」

地球なら月は一つというのが普通なのだが空には二つの月がある。

杏「それじゃあ宿泊場に行ったらじっくり聞かせてもらおうかしら」

尚哉「…はあ…」

これにより説明する内容が増えてタメ息し俺達は宿泊するホテルへと歩いていった。

ホテルにたどり着き早速部屋を借りたのだがよりにもよって一室しか空いている場所が無く気が引けたが杏と茜が同室でもいいと言ったのでその一室で泊まることにした。

そして杏と茜はシャワーを浴びに行き義之は売店に食べるものがないか行った（金は渡してある）

俺は何もすることがないのでテレビを付ける。

《それでは続いてのニュースで…》ピッ！

《みんなー！集まってーちび…》ピッ！

《ぼろ雑巾の様に捨てて…》ピッ！

《届いていたぞ…アクセス》ピッ！

何でだろっつ異様に見覚えのあるものがちらほらと…

尚哉「…新しい魔法のプログラムと未完成のエナジーウィングの調整でもするか…」

俺は回りにいくつものウィンドウを展開させプログラムを組み込んでいく。

茜「ん〜さっぱりとした」

そこに風呂から茜と杏がジャージ姿で上がってくる。

尚哉「上がってきたのか…」

杏「ええ、気持ちよかったわ、尚哉も入ってきたら？」

尚哉「これ終わったら入るよ」

そういつて作業に集中する。

尚哉「はい、これで終わりっ」と

そういつて展開していたウィンドウをすべて閉じる。

茜「ねえねえ、さっき空中に画面が浮かんでたけどあれなんなの？」

尚哉「それはあとでいいだろ？それじゃあシャワー浴びてくるわ」

そういつてシャワールームへと向かった。

あのあと流石に疲れていたなので眠りについたのだがふと喉が乾いたため冷蔵庫をあさるが…

尚哉「飲みもんなにもないな…」

冷蔵庫には何もなく自動販売機に買いにいこうと思ったとき。

茜「あれ？尚哉くん？どうしたの？」

同じく目を覚ましたであろう茜がやって来た。

尚哉「茜、いや喉が乾いたもんだから…でも冷蔵庫にはなかったから自動販売機に行こうかと」

茜「そうなんだ、じゃあ私も尚哉くんと同じだからついていって良
いかな？」

尚哉「別に構わないぞ」

そういつて俺と茜は部屋を出て自動販売機に向かった。

自動販売機で飲み物を買った俺達はどこか座れる場所に座ろうと
思い近くのベンチに座る。

茜「…本当に此処は異世界なんだね…」

茜は空を見上げながらその一言を言っ。

尚哉「まあ、あれだ…地球とはあんまり変わらないぞ…まあ、魔法
文化と月が2つっていつ点はあるけど…」

俺は少々笑いながら言っしてみた。

茜「尚哉くんは…」

尚哉「ん？」

茜「うづん、尚哉くん達は中学を卒業したらこっちで管理局の仕事をするんだよね…それぞれの道に」

尚哉「まあ、こっちでの仕事が多くなるだろうな」

茜「それじゃあ…」

そういつて茜は俺に近づいてくる。

尚哉（ま、まさか…！）

以前はやて達に言われたことがある、茜がフードの男に好意寄せていたことに…つまりその黒フードの男は俺なので正体がバレたいま当然の如く俺への好意へと変わる

尚哉「あ、茜!？」

茜「私は…尚哉くんのが…」

茜はどんどん顔を近づけて来るが…

尚哉「!？」

茜「………」

尚哉「茜？」

突如動きを止め俺は心配する。

茜「い、今のは、な、なかったことだ！」

茜は部屋に全速力であろうスピードで逃げていった。

尚哉「…あ…」

俺は1人になり先程の茜のことを考える。

尚哉（あのとときの茜…雰囲気が変わったような…）

尚哉はそんな疑念を残して部屋へと戻った。

翌日

俺達は早めにホテルを出て海鳴市に戻ってきてそこで解散となった。

そして家に戻る途中…新聞が落ちていたので拾ってみてみると…

『魔界の生物、海鳴の商店街を蹂躪!!そこに現れた黒フードで身を隠した謎の人物!!』

…バッチリ記事にされていた。

そこに電話がかかってくる…勿論はやてだった。

尚哉「…はい、もしもし?《尚哉?》皆まで言っただけのこととは大体新聞読んで気づいた」

はやて《うん、帰ってきたらOHANASSIやで》

尚哉「…はい…」

そんなこんなで家に帰り事情を説明するのに2時間かかったのは余談である。

百聞は一見にしかずと言つがまさにそのとおりだ

茜の件から三週間が経ち一年最後のテストも全教科満点でなにもためらうこともなく春休みを満喫していたのだが…

尚哉「暇だな勇翔…」

勇翔「そうだな尚哉」

今日はやることもなく…休日だった勇翔と一緒に怠けていた。

尚哉「はやて達は仕事でシリ…瑠子はなのはとすずかと一緒にシヨッピングに行っちゃったし…」

勇翔「一緒に行こうとしたらなのはに女の子だけで行くから勇翔くん達はゆっくりしてって言われてこうしてますが…」

尚哉「暇だよな…しゃあねえ！知り合いのところでも行くか？」

勇翔「そうだな行くとするか」

そつ決めると俺は銀のオーロラを出し平行世界に向かった。

尚哉「とうちゃくくってあれ？」

勇翔「どうした？此処はどこの世界なんだ？和也さんか？それとも麻紗人さんか？」

尚哉「…知らない…世界だ」

勇翔「はぁ!？」

どつやら座標を間違えてしまったらしい。

勇翔「っでこれからどつするんだ?」

尚哉「すぐにこの世界から出ていこう、此所に滞在する意味がない」

俺は直ぐに銀のオーロラを出すが…

勇翔「ちよつと待て」

尚哉「ん?どつした?」

銀のオーロラの中に入ろうとしたが勇翔に止められる。

勇翔「足音が聞こえないか?」

尚哉「足音?……………確かに聞こえるな」

何か慌てているのか足音のテンポが早い。

勇翔「…嫌な予感がする…すまん尚哉、俺は少し見てくる!」

勇翔は足音がする方向に走り去る。

尚哉「ちよつ!勇翔!」

俺は勇翔を追いかけた。

???
SIDE

??? 「はあ…はあ…はあ…」

私は森のなかを無我夢中で走っていた…うつん逃げていた。

もうあんなところに居たくなかった…あんな人たちがいる場所なんて…

??? 「っ!!」

私は逃げている中で後ろから足音が複数聞こえてくる。私を追ってきたのであろう。

??? (どこかに隠れなきゃ)

私は必死になって身を隠せる場所を探す。

勇翔「君こっちだ！」

そんなとき茂みの中からあの人達と同じような異国の服を着た男性が出てくる。

この人もあの人達と同じだ…私を捕まえて自分のものにするため

に言ってるに違いない。

勇翔「?どうしたんだ?」

あの男性は私に近づいてきて私は懐に携えてあつた護身用の短刀を取りだし構える。

???「来ないでください!さもないと...この短刀で刺しますよ」

男性は一瞬驚いたが、なおも私に近づいてくる。

勇翔「大丈夫、君に危害は加えない」

そんなことを言っているが私は信じる事ができない。

勇翔「それに仮に刺したとしてもそんなに震えていたら狙いが定まらないだろ?」

男性に指摘されて私の手が震えていることに気がついた。

勇翔「俺は君の味方だ、だから」

男性はもう私に触れるほどの距離まで来て手を差しのべる。

この人はあの人達とは違うそう思い私は男性の手を掴もうとしたとき...

??? (!?)

あのときのことを鮮明に思い出す、親友が私の身代わりである人達に連れていかれ心を壊れ...そして...

自害したときのことを…

??? 「いや…」

勇翔「どうしたんだ？」

??? 「いやあああああああっ!!!」

あの記憶で錯乱して…私は手をさしのべてくれた彼を…

刺してしまった。

??? 「あ、ああ…！」

やってしまった…信じてよかった彼を…私は…

彼は刺した私を恨むだろう

だが彼はあろうことか私を抱き締めた。

勇翔「大丈夫、俺は君になにもしない」

そういつて優しく私の頭を撫でてくれる。

??? 「どうして…私は貴方を！」

勇翔「刺されたのはちょっと予想外だけど…怖かったんだろ？俺が

何かするんじゃないかって、それに辛かっただな…苦しかっただな…
1人でこんな小さな体で…全部抱え込んで…泣きたいんだろ？だっ
たら俺の胸元で泣けっつてそれで少しは楽になるだろ？」

そっいつて男性は私を抱き寄せる。

私は感情を抑えきれず彼の胸元で泣きじゃくった。

その時、私の心臓の鼓動が高鳴りその理由は直ぐに理解した。

私はこの人のことを…好きになってしまったんだと…

尚哉 S I D E

尚哉「っで…どうやってたらキスマでたどり着いたんだ？」

勇翔「えつとそれはだな…」

??? 「へう…／／」

簡潔に説明しよう俺が来たときにこの二人がキスしていたしかも
濃厚に…これはこれは親友として事情を聞かなければならぬだろ
う。

勇翔「簡単に言つとだな…何かわからないものに引かれあったのか
…気づいたらキス…してました」

尚哉「それは運命だったと？」

勇翔「まあそんなところだな」

尚哉「…はぁ…まあそれで納得しておくか、でもキスする前に流れてる血を止血しろよ、もう今は止まってるが」

勇翔「あははは…」

尚哉「さてと…えっと君の名前を聞いてなかったね、俺は八神尚哉それで…君が一目惚れしたのが」

勇翔「霧島勇翔だ」

???「霧島さんに八神さんですね、私は董卓字は仲穎と申します」

尚哉「…へ？」

董卓？もしかしてあの董卓？三国志に出てくる…こんな子が洛陽で暴虐の限りを尽くした悪逆非道と言われた董卓？

ならば断言しよっ…

絶対にこの子はそんなことをしない！

尚哉「董卓さん、少し聴きたいことがあるんですけどいいですか？」

董卓「はい、何でしょうか？」

尚哉「あなたは何かから逃げていた…違いますか？」

董卓「!？」

俺がいった言葉に董卓さんは怯える。

尚哉「凶星…ですね、大方来る前に誰かを探していたあの馬鹿でも
だろっし…」

董卓「…はい、その通りです、あの…尚哉さんになにかいってませ
んでしたか？」

尚哉「言ってた言ってた」

確か、てめえ俺の月ちゃんにたえだすんじゃないかねえ！とか月ちゃんを

どこに隠した！このモブとか…そんなやつが20人…いや匹でいいか

董卓「その人たちはどうしたんですか？」

尚哉「何かどっかにいつちまった」

…嘘です、本当は人を物扱いした屑共を塵も残さず砲撃で殺っちゃいました。

というかあいつら間違いなく転生者だったぞ

董卓「そうですか…ボソツいっそのこと殺してくれて構わなかったの…」

あれ？今とんでもない言葉が出てきたような…気のせいかな？

勇翔「それで董卓さんはこれからどうするんだ？逃げ出して来たってことは元の場所には戻りたくないんだろ？」

董卓「はい…このまま何処かの村で平穩に暮らそうかと…」

董卓さんはそういっが…

尚哉「嘘だな…多分自殺しようとしたんじゃないか？もうこんな世界が嫌で…」

董卓「っ！」

勇翔「そう…なのか？」

董卓「…尚哉さんの言う通りです…私はあの人達から逃げ切ったあと自害しようと思っています、もうこの世界には詠ちゃんも頼れる人も居ないから」

勇翔「そんなの…自殺するなんて間違ってる！その詠さんだって董卓さんに生きてほしいと思ってるや…」

董卓「そんなの…勇翔さんにはわからないじゃないですか！」

尚哉「確かに死んだ人の気持ちは誰だってわからない…けどこれだけは言える…詠さんは親友である董卓さんに生きてほしいって思うのが親友つてもんだからな…」

董卓「それじゃあ生きるとしても帰る場も…ない私に…」

勇翔「なら…」

俺達の所に来るか？」

董卓「へ？」

尚哉「勇翔…マジか？」

勇翔「ああ、本気だ、それに珪子ちゃんがそうなんだから大丈夫だろ」

尚哉「まあ…大丈夫…かな？」

尚哉（絶対杏達にそこをつかれるな）

董卓「いいんですか？」

勇翔「ああ、みんな優しいからきつと董卓さんとも仲良くなれるよ」

そういつて勇翔は董卓さんに手を差し伸べる。

そして董卓さんはその手をとろうと…

だがその瞬間大地震が引き起こり俺達はふらつく。

尚哉「な、なんだ！地震か!？」

デイエンド「いいえ違います！この世界が崩壊し始めてます!！」

勇翔「な！崩壊だと!！」

デイエンド「恐らく、董卓さんが言っていたバカ共がやりたい放題やり過ぎてこの世界の許容範囲を越えたから崩壊してきているんです」

尚哉「あのバカ共！ならこの世界から離れよう!！」

そういつて俺は銀のオーロラを出す。

董卓「へう！な、何ですか!?それ…」

勇翔「驚くのは後！早く此処を潜って！」

董卓「は、はい…！」

そういつて董卓さん、勇翔そして俺と言つ順に入っていき世界と世界の境界を走る。

そして後ろからとてつもない光が迫り来ているのに気づき俺達は足を止めてしまう。

尚哉「!?まずい！飲み込まれる！」

勇翔「ここまで来て！」

尚哉 勇翔「うわあああああああつ！」

董卓「きゃあああああつ!!」

そして俺達は光に飲み込まれるのであった。

此処は…

俺は確かあの光に飲み込まれて…

そつだ！勇翔と董卓さんは！？

……

誰も居ない…というより此処は…一面泉のようだが…

ん？あそこに誰かいる

???「……」

なっ！そんな！あいつ！何で…

俺とそっくりなんだ！

っ！目があった。

尚哉？「…初めまして…僕の
?????」

待て！お前は一体！

そこで俺の意識はまた光に包まれた。

勇翔SIDE

くっ！此処は…

そうだ俺はあの光に飲み込まれて…

此処はどこだ？何処かの研究所か？

っ！誰か来た！

女性「いよいよやね…」

青年「そうだな…絶対にこのオペレーションユグドラシルは成功させないといけない…先に死んでいった友達のためにも」

っ！あの人は俺にNEO電王ベルトを渡した！

青年「それで一真も飛ばすんだろ？良いのか？なにも言わずに飛ばすのだから？」

女性「そっちの方があの子のためや…一真には平穏な世界で暮らしてほしいしな」

青年「そうか…ではさよならだ、次会うときはあの世でな…??？」

女性「うん、
????」

待て！あんたらは一体！

そこで俺の目の前は白い光に包まれた。

尚哉SIDE

…スター…マスター！

尚哉「ん…此処は…」

デイエンド「マスター！目を覚ましたのですね！此処は私達の世界です何とか元の世界に帰れたみたいですよ」

尚哉「そうか…っ！勇翔と董卓さんは!?!」

デイエンド「大丈夫です、お二人ならマスターの横に」

そういわれて横を見ると勇翔と董卓さんが手を繋ぎながら気を失っていた。

尚哉「よ、よかった〜というか幸せそうな顔で気を失ってないか？」

デイエンド「あっ！マスターもそう思いますか？」

尚哉「それと…董卓さん…縮んでないか？」

ディエンド「恐らくあの時の影響で…若返ってしまったのかと…マスターと勇翔さんは問題はありませんでしたよ」

尚哉「そうかならよかった…」

尚哉（それにしても俺に似ていたあの男…いったい何者なんだ…夢が作り出した幻想…だったのか？）

俺はあの俺に似ている男のことを考えるが直ぐに考えるのをやめた、今悩んでいてもしょうがないから

そしてその数分後勇翔達が目覚めて状況説明し話し合いの結果なのはの家にいくつと言つことになり歩き始めた。

董卓、高町家の養子になること

俺達は今高町家の目の前に立っている。

理由は董卓さんのことを話さなければならぬので(特に勇翔の恋人のなのは達に)親衛隊に見つからないように高町家までたどり着いた。

尚哉「覚悟はできたか？」

勇翔「できた…逝こう！」

尚哉「字が間違ってるかい？」

勇翔「…気のせいだ」

そして勇翔はインターフォンを押すと中の人に誰か来たのかわからせる音が鳴ると董卓がおどおどとする。

董卓「な、何ですか!?!この音は!?!もしかしてこれからこの館を襲撃するための…!」

といった、ように少し暴走してしまっが、まあ、当たり前だと踏み後で教えなければならぬと思った。

恭也「はい、どちら様で…勇翔、尚哉くんも！久しぶりだな」

尚哉&勇翔「恭、恭也さん！」

玄関から出てきたのは何と！外国で恋人の忍さんといちゃラブしているはずの高町家長男の高町恭也さんが出てきた…それはある意味で土郎さんと並ぶ今一番最悪な人でもある。

恭也「少し前になのは達も帰ってきたから上がって…ん？勇翔、君の後ろにいる彼女は…まさか！」

勇翔「恭也さん！これには深い訳がありまして…お願いですから殺気をぶつけないで〜！」

恭也「勇翔…なのは達との付き合いは顔見知りだから見逃していたがあまつさえ他の…年下の女の子まで手を出すとは…少し…道場に行ってOHANASIしなければな」

皆さん忘れていてもかもしれないが、そう何を隠そう、恭也さん重度なシスコン、そしてなのはの父の土郎さんも重度な親バカ…それに加えて剣術の達人となってはそこらの親バカ、シスコンよりたちが悪い。

恭也「尚哉くん、少し俺は勇翔とOHANASIをしなければならぬから先にリビングに行ってきてくれ」

そういつて勇翔の服の襟を持って道場に強制連行された。

尚哉（勇翔…骨は拾ってやる）

俺は逝ってくる勇翔の冥福を祈り家へと入っていった。

尚哉「なのは、お邪魔しまーす」

なのは「にやっ！な、尚哉くん!」

アリサ「誰か来たと思えばあんだだったの？」

尚哉「勇翔も一緒なんだが…恭也さんに道場に強制連行された…あれはかなりマジだったな…」

すずか「え!? 恭也さんに?」

尚哉「なのは、急いで道場にいった方がいいぞ…じゃないと取り返しつかんことになる」

なのは「う、うん、尚哉くんがそう言うなら行ってみる」

なのは、はりビングから出ていき道場に向かう。

珪子「あの尚哉さん先程から気になっていたんですが後ろにいるその子は誰なんですか？」

すずか「汚れているけどすごく良い着物だね、何処かのお金持ちの娘さん？」

董卓「えつと…」

アリサ「尚哉…あなたたちどういった関係なわけ？」

尚哉「いや、俺より…勇翔に関連してるな」

シリカ「勇翔さんにですか？」

董卓「え〜つと…勇翔さんとはせ、接吻をしたなかでして…」

どな

此処で余談だがこのあと董卓さんはこの世界で語られている董卓を聞いてカルチャーショックを受けたと勇翔が言う。

董卓「あの…勇翔さんあのお一人は…あのままでよろしいのですか？」

勇翔「恭也さんと士郎さんね…」

なのは「大丈夫大丈夫、少しお話しした後の反省だからしばらくしたらこれも解くし」

一応恭也さんと士郎さんの現状を言おう…

まず、リビングに帰ってきたなのはと勇翔は何故かバインドで縛り付けられていた恭也さんを連れて戻ってきたが董卓さんとの接吻のことはリビングにいた人…士郎さんにも聞こえていて勇翔を認識した瞬間何処からともなく小太刀2本を構えて突撃をかけるがなのはのシールドで防がれそのままバインドで恭也さんと同じく縛られたのである。

桃子「事情はわかったわ…董卓さんで良いかしら？」

董卓「は、はい」

桃子「よく、今まで苦しかったのに頑張ったわね、こんな小さな体で…」

董卓「数ヶ月前は親友が支えてくれましたから…それほどまでは…でも…」

桃子「それで董卓さんがよければなんだけど…

うちの養子にならない?」

その言葉に董卓さんだけでなく俺達も驚いた。

尚哉「えっと…桃子さん…マジ?」

桃子「こんな場面で嘘なんて言わないわよ」

董卓「本当によろしいのですか? 私なんかを養子に…」

桃子「もちろん! こんな可愛い子が家族になるんだったら嬉しいもの、ね? なのは?」

なのは「うん、ということは私の妹ってことなのかな?」

勇翔「年齢から見てそうなるかな」

董卓「…桃子さん…養子の件慎んだお受けします」

士郎「これで決まりだね…」

尚哉「となると戸籍は…杉並に頼めばなんとかかなるか」

恭也「となると最後の難関が残っているぞ」

なのは「え? それって一体…」

俺はすぐに恭也さんが思っていることに気がついた。

尚哉「名前…ですね」

そう名前董卓さんがこの世界で名乗る名前である。

勇翔「そうか、董卓って名前は有名すぎる名前だ…となると偽名は必要になる」

なのは「うーん…と言われても名前なんか考えたことなんてないし…尚哉くんはいい名前思い浮かんだ？」

尚哉「人を名付けの名人みたいに言わないでくれ…そうだな…」皆さん「ん？董卓さん？」

全員の視線が董卓さんに向く。

董卓「皆さんには本当に感謝いたしています、それで名前なのですが…」

アリス「もしかして心当たりあるの？」

董卓「はい…董卓という名と字を言わなければいいんですよね…でも真名はそう簡単に口にしてはいけない名だし…」

すずか「真名？」

董卓「はい、真名とは神聖な名前でその名を許可なく口にしたものは首を跳ねられても文句を言えない…それほど大切な名前なんです」

尚哉「なるほどな、要するに董卓とは違う別の名前があるけどそれを公に口にされるのに抵抗力がある…そういうわけだな」

董卓「…はい」

勇翔「卿に入っては卿に従え…っておう言葉があるんだが…抵抗力はもちろんあるけどな…」

董卓さんは勇翔に言われて考え込む。

董卓「そうですね…わかりました、抵抗力はありますがこれからは真名の名前で生きていきます、私の真名は月（ゆえ）です、これからお世話になります」

高町家に新しい家族が加わったのであった。

新学期！そして宣戦布告!?

高町家に月が向かえられてから春休みは風のように過ぎていき昨日に入学式があった。

この時にシャマルが保護者として出席した…なぜかと言つと…

尚哉「おい！はやて！珪子！早くしろ」

はやて「ちょ！ちょう待って〜」

珪子「まだ間に合う時間ですよ〜」

玄関前ではバタバタとした足音が聞こえそして扉が開くと…

はやて「お待たせ〜」

珪子「準備満タンです!」

風見の制服を纏ったはやてと珪子が出てくる。

そう今年は何と珪子が風見バーベナー学園に入学するのだ。

珪子「それじゃあいい子でリインちゃんとお留守番しててね」

ピナ「きゅる〜」

ヴィータ「はやて、尚哉、珪子〜いつてらっしやい」

はやて 尚哉 珪子「行ってきますー！」

そういつて俺達は通学路につく。

学校へと向かう通学路そこで雑談をしながら登校している

尚哉「なあ、珪子、そういえば珪子のクラスってどこだったんだ？」

珪子「えっと、確か5組です、由夢ちゃんとも同じクラスでした」

尚哉「なるほど由夢ちゃんと…おっと噂をすればなんとやらだな」

前方に朝倉姉妹と歩いているのは義之ではないか間違いなく両手に花の状態だ。

音姫「弟くん、背筋しゃんとするー！いつどこで新入生が見てるかわからないんだから、先輩としてダメだよ」

音姫さんがみっともない義之にしかりつける。

尚哉（ちよつと遊んでやるか）

そう思った俺は密かに義之に近づき…恐らくここに一番来てはいけない人の真似をする。

尚哉「音姫の言う通りだよ弟くん」

義之「ま、まゆき先輩…って！尚哉お前か!!」

尚哉「なんだよ、初めの怯えようは…高坂先輩がいたら不味いとでも？」

義之「そりゃそうだろ、こんなところまゆき先輩にでも見られたら…誰に見られたらって言おうとしたのかにゃ」…

絶妙のタイミングで高坂先輩がやって来る、この人計ってたのか？

まゆき「おはよ、音姫、由夢ちゃん、尚哉くん、そして弟くん」

音姫「まゆき、尚哉くんおはよ」

由夢「おはようございます、高坂先輩、それに八神先輩も」

尚哉「おはよ、音姫さん、由夢ちゃん、高坂先輩」

はやて「もう、私達は除け者か？」

珪子「そうですよ、あたし達も居ましたよ」

尚哉「あつ、すまんすまん…」

少し忘れてた…とは言えないな…

まゆき「それより、音姫、今日はほんとに忙しいんだから弟くんに構うのはほどほどにね」

音姫「うん、わかってる」

はやて「そんなに忙しいんですか？」

音姫「もっちゃん、だって始業式に杉並くんがなにもしないとは思えないもん」

まゆき「そのうえ、親衛隊のやつらも新入生の女子に飢えるから押さえるのも大変なのよね」

尚哉「親衛隊っていつでもそんな1日で結成…されるな」

確かはやてのファンクラブも半日で結成したとかなんとか…

まゆき「あれ？八神くん、知らないの？WPGのこと」

WPG？

音姫「ワールドプリンセスガーディアン…略してWPG、風見学園の親衛隊が全部合併して作られた元気な集団だよ」

瑠子「な、なんですか…その組織…物凄く怖いです…」

いや標的確実に俺や勇翔だからな

というかバカテスのFFF団より強大じゃね？

まゆき「その組織の中には魔族や神族がいるから魔法まで使ってくる始末で…ほんとに迷惑なのよね」

尚哉「……」

なんか今更だがとんでもない学校だよな俺達の学校って…

はやて なあ、尚哉…由夢ちゃん…猫被つとるよな

尚哉 まあ、昔っから知ってる俺達なら知ってるしな…

念話で由夢ちゃんのことを話していると風見学園が見えてきてそして…見知った顔の三人の前におおよそ1000人だろうが恐らく親衛隊の奴等が臨戦体制を取っていた。

尚哉「あれは親衛隊だな」

はやて「その前にいるんは勇翔くん達やな」

まゆき「全く、朝から早々これか…音姫さつさと言いに行くわよ」

尚哉「待つてくださいますその必要はありません」

音姫「必要がないって…まさか喧嘩する気なの？ダメだよそんなとこしちゃあ」

尚哉「大丈夫ですよ、正当防衛ですから、そのあとじっくり指導してください」

まあ一掃なんだけどね

尚哉「と、言うわけではやて、カバン持っててくれ」

俺ははやてにカバンを渡しずかずかと親衛隊へと近づく。

樹「おやおや、これはこれは尚哉まで来たのか…よほど運がなかったみたいだね」

尚哉「それはこっちの台詞だ、お前こそ此処で引かなかったことを死ぬ気で後悔させてやる。勇翔、木刀…」

勇翔「そういうと思ってたぜ、ほら」

俺は勇翔の隣に立ち木刀を手に持つ。

尚哉「なあ、勇翔…勝負しないか？」

勇翔「勝負？」

尚哉「どっちが親衛隊を多く倒せるかのな」

勇翔「なるほどな…乗った！」

樹「別れの話はすんだかい？なら…殺ってしまえ！」

親衛隊「往生しやがれえ！」

親衛隊「滅滅滅滅滅滅滅…」

その瞬間炎や水や雷やもう一杯の魔法と武装した親衛隊が突っ込んでくる。

尚哉「さつてと…こっからは正当防衛だ…行くぜ!!」

そういつて俺と勇翔は親衛隊にぶつかった。

一分後…

樹「ば、バカな…こんなはずが…」

樹は目を疑った…なぜならば目の前には1000にも及ぶ親衛隊の倒れた山（死んでません）と二人の鬼神（人間です）が着実と樹に近づいている。

尚哉「こいつで…」

勇翔「気を失つとけ!!」

まさかの俺と勇翔のダブルアッパーが樹に直撃し樹は宙を舞いながら意識を失い地面に叩きつけられた。

尚哉「全く数同じか…引き分けだな」

勇翔「しょうがないか…」

尚哉「音姫さん！高坂先輩！後の処理お願いできますか？」

音姫「え？う、うん、ま、任せといて」

尚哉「それじゃあいこうか」

そういつて校門を潜った。

校門を抜けた俺達は前に人だかりがあるのを確認しその集団の奥には掲示板：クラスが書かれているのだろうか…だが俺達はその溜まり場には行かず杉並を探す。

あいつならクラス表ぐらい持っているはずだから

それに例え月がこの世界の一般常識を教えたとしてもあんな所に行かせるのは引けるのである。

茜「あれ〜？あそこにいるの…尚哉くんじゃない？」

そんなことを思っているなか茜が俺達に気付き俺も声が聞こえた方向を見ると杉並を初めとする親友が一纏めに集まっていた。

尚哉「よう、みんな考えるのは同じか…」

渉「そりゃあ、あんな所にいくより杉並に聞いていた方が手っ取り早いからな」

レイ「おはようございます、尚哉さん」

渉と話しているとレイが制服を身に纏って俺の前に立つ。

尚哉「レイ…どうしてこんなところに？」

杏「園長先生に頼んで風見学園に入学させてもらったの、もちろん、1年生よ」

レイ「よろしくお願いしますね、先輩」

尚哉「こちらこそよろしく、それでクラス表見せてくれないか？」

小恋「これだよ」

そう言われてクラス表を貰い書かれているものをみる。

2年1組

桜内義之

月島小恋

杉並

アリシア・テストロッサ

2年3組

板橋渉

月村すずか

アリサ・バニングス

フェイト・テストロッサ

2年5組

八神尚哉

八神はやて

霧島勇翔

高町なのは

高町月

土見稟

芙蓉楓

緑葉樹

雪村杏

花咲茜

これは…俺らのクラスにかなり固まったな…

はやて「あ、アリシアちゃんとすずかちゃんとは違うんや…」

尚哉「その代わりに勇翔になのは、月が同じクラスだな」

なのは「うん！これから1年よろしくね」

杉並「それでは皆の衆、早速各教室に行こうではないか」

渉「そんじゃあまたな…」

そういつて俺達はそれぞれの教室に向かうのであった。

5組の教室に向かった、俺達は直ぐに体育館で始業式が始まろうとしていて俺達5組がついたときにはかなりの生徒が集まっていた

そして学園長…さくらさんが壇上に出てきた。

さくら「在校生の皆さん、お久しぶり、そして新入生には始めまし

て、僕がこの学園の園長の芳野さくらだよ、よろしくね」

さくらさんの自己紹介が済んだらやはり、ざわつく人が出てくる。

さくら「それで新入生は知らないけどこの学園には非公式新聞部、WPGっていう学園を騒がせる、面白い組織があるんだけど…これには生徒会も手を焼いちゃっててね、だから突然だけど！此処に生徒会の新しい部所！特別執行部を此処に設立します！」

はやて「特別執行部？なんやそれ？」

さくら「みんな、わからないから説明するね、特別執行部が行うことは非公式新聞部やWPGの普通じゃ手に追えない集団なんかを武力で鎮圧するのが仕事だよ」

いいのかよ、学校側は了承済みなのか？

さくら「それで…早速特別執行部の人を紹介します」

なぜだろうか…さくらさんが異様にこちらを見てくるのだが…

さくら「中等科2年5組八神尚哉くん、壇上が上がってきてね」

ちよつとまてえええええええええつ!!!

俺は生徒全員から視線を向けられながらも壇上上がりさくらさん
んに一言。

尚哉「さくらさん、なんの冗談ですか？これは…まさか俺にやれと
」？」

さくら「にやははは うん、僕はそのつもりだよ」

帰ってきたのは肯定で俺は念話で…

尚哉 悪魔め

さくら 悪魔でいいよ…もうこれは悪魔なりの行動だから

さくらさん…なのはと同じ声だからってそれだけは言わないでよ

…

さくら「それじゃあ壇上に上がってもらったのが特別執行部の八神尚哉くんですそれじゃあ、一言どうぞ」

そう言われてマイクを手に取らされ俺は覚悟を決めてこう言った。

尚哉「中等科2年5組の八神尚哉だ、あえて言うが俺もこの一件は何も知らなかった…だが任された以上、逃げるわけにはいかないからな…責務は果たすつもりだ、それと攻撃目標はWPGが中心だ、非公式新聞はお祭り以外はあまり騒がないからな…あ、でも、羽目はずすぎたやつも遠慮なくやるからそこ頭に入れとけよ、以上だ」

俺は一言？を言って壇上の隅に移動しそのあと直ぐに始業式は終わりを迎えた。

始業式が終わり、放課後になると俺は一直線にある場所に向かっていった。

向かっている途中でも帰宅する者がちらほらと見え始め俺は生徒達の間を速度を落とさず俊敏に動く。

そして目的地にたどり着いた俺はノックもせずに堂々とその扉を開けた。

尚哉「さくらさん あのとときはじっくり聞けませんでしたが…放課後ならじっくり聞けるんで…理由を話してください」

そうそこはさくらの居城とも言える学園長室…そこに乗り込んだ

俺だったが…

はりまお「あん！」

そこにいたのは犬？のはりまおただ一人でさくらさんは部屋には存在していなかった。

尚哉「なあ、はりまお、お前のご主人様はどこいったか知らないか？」

はりまお「くうくん」

どうやら知らないと言っているのである。

尚哉「さてとこのままさくらさんが来るのを待つて見るか…」

そう思い俺ははりまおと遊びながら暇な時間を費やした。

はりまおとじゃれあうこと約10分学園長室の出口の扉が開き外から…

音姫「さくらさん！失礼します！」

まゆき「音姫、ちょっと落ち着きなさい」

中にはいつてきたのは音姫さんと高坂先輩だった。

まゆき「あれ？尚哉くんじゃない、君も学園長に用事？」

尚哉「はい、特別執行部について聞きに」

音姫「そうだよ、私もそんなこと聞いてないし、そもそも、尚哉くんの了承もとってないんでしょ」

どつやら音姫さんはかなりご立腹のようだ。

さくら「うーやっとなんて戻ってこれた」

そこにくたくたのさくらさんが帰ってきたが状況は最悪であった。

音姫「さくらさん？」

さくら「にゃーにゃーにゃーにゃー音姫ちゃん？どつしてそんなご立腹なのかな？」

音姫「そんなの！きまってるじゃないですか！特別執行部と尚哉くんのこと、それと…」

はあ
!?

私が生徒会長になってるってことですよ！」

さくら「な、何も言わずに決めたのは謝るけどね、これには全部理由があるんだよ」

まゆき「理由？」

俺も3つの出来事の理由が気になり耳を傾けた。

さくら「一つ目は音姫ちゃんが生徒会長になった理由前生徒会長が転校しちゃったから次期候補だった音姫ちゃんが推薦された」

それなら納得だ

さくら「二つ目の特執についてはやっぱりWPGみたいな、やり過ぎる輩もいるからね、それらの抑止力みたいなものだよ、それで何で尚哉くんかと言つと…僕の親友からの直々のご指名だね」

尚哉「直々の？一体誰から？」

さくら「まあ、近い内にわかるよ それじゃあ僕は仕事があるから後の詳しい話はまた今度ね、はりまお行くよ」

はりまお「あん…」

はりまおは返答すると俺の腕から出ていきさくらさんの頭に乗っ

かって、さくらさんはまた何処かへ出て行ってしまった。

まゆき「まあ、話はわかったけどこれからどうする？音姫？」

音姫「うーん…今日は生徒会のお仕事も無いし…」

尚哉「あの、何でしたら翠屋にいきませんか？多分義之もいると思いますし」

音姫「弟くんもいるのか…うん！それじゃあお言葉に甘えて行こうかな、まゆきはどうする？」

まゆき「もっちろん、一緒に行くよ、弟くん、だけじゃなくて雪村や杉並っていうA級の危険人物もいるしね」

尚哉（杉並はともかく、杏もなんだ…）

そう思いながら俺達は翠屋に向かった。

その後翠屋にたどり着いた俺達は先に楽しんでいたメンバーと楽しく夕方まで楽しんだ。

そして…夜になり夕食の準備をしていた俺は…俺達はテレビに映っていた人に戸惑っていたそしてその内容にも…

ミゼット《私は此処とは違う世界ミッドチルダという世界からやって来ました時空管理局、本局統幕議長のミゼット・クローベルです、今回私が此処に出向いた理由は今この放送を見ている皆さんに真実をお教えするためです》

尚哉「ミゼットさん？」

はやて「いくらなんでもこれはないで…。」

今、俺の新学期は波乱の幕開けとなったのであった。

嵐が通りすぎた後

翌日、やはりと言ったところか

テレビでも新聞でもネットでもミゼットさんが言った真実…時空管理局や次元世界、そして魔法の事やブラッディクライシス、大シヨッカーのことなのが主な内容だった。

特に時空管理局は批判の言葉が多かった理由は皆までもなく子供が戦場に出るからである。

やはり才あるものであっても小さな子供が戦いに出るなんて正気とは思えないのである。

はやて「んゝおはよう、尚哉」

尚哉「おはよ、朝御飯の準備後少しで出来るから顔をなんか洗って来てくれ」

はやて「わかったわ」

そういつてはやては洗面所に行こうとするがやはり新聞に目が止まる。

はやて「…あれは夢や無かったんやな」

新聞の記事をみて再び確認するはやて…流石に無理はないか

朝食を食べた俺達は支度をして学校にやって来て教室にやって来

るといつものメンバーが揃いに揃っていた。

涉「よっ！尚哉早速だが昨日のあれ見たか？」

涉が言うあれとはミゼットさんの話のことだろう。

尚哉「勿論、どのチャンネルでもやってたろ？」

涉「最初は嘘っぱちだと思ってたがよ、あんなもん見せられたらな……」

涉がいうあんなものとは、よく通信や報告書とか打ち込むときに出てくる空中に浮くウィンドウのことである。

杉並「ふむ実に興味深いものだったな」

杏「それにしてもわからないことがあるわ」

茜「ん？なんなのそれ？」

杏「なぜこの時期にあの人は私達に他の世界のことや時空管理局のことを話したのか……」

義之「確かに……妙な話だな……」

そここのところはミゼットさんに直接聞くか

小恋「ねえ……みんな……」

小恋が恐る恐る声を出しみんなの視線は小恋に向く。

小恋「戦争とかにはならないよね…」

小恋が言った予想はその場の空気を重くした。

戦争… 確かになる確率はある… 例えば強硬派が武力による管理をしてくるのならば三界も黙っちゃいけない全面戦争は避けられないだろう。

小恋「私は嫌だよ… 争うなんて…」

争い事を嫌う小恋は弱々しい声で自分の思いをいう。

尚哉「…」

俺は黙って教室の外に行こうとする。

杏「どこにいくつもり？」

それに気づいた杏が俺に声をかけるとはやてたちの視線もこちらに向く。

尚哉「ちょっと用事が出来たから… 一限目に戻れるかわからないから先生に遅刻っていつといてくれ」

そういつて俺は教室を出て走り出す。

尚哉（俺の推測が正しければ…）

そう思いながらおくじょうにのたどり着き誰もいないことを確認

すると銀のオーロラを発生させてそのなかに入ってしまった。

本局にたどり着いた俺は直ぐに受け付けカウンターに向かった。

尚哉「あのすいません、三提督直属独立部隊隊長の八神尚哉ですミゼット議長にお会いできますか？」

受付嬢「や、八神三佐！しよ、少々お待ちを！」

受付嬢は慌ててミゼットさんに会えるか取りつく。

受付嬢「ミゼット統幕議長に確認は取りました、議長は三階の執務室に居られます」

尚哉「そうですね…それじゃあ…」「あ、あの…」「ん？どうしたんですか？」

受付嬢「えっと、サインもらえませんか？娘が八神三佐のファンなんです」

そういつて用紙を手渡され特に躊躇いもなく書き込む。

受付嬢「あ、ありがとうございます！」

そういわれて俺はミゼットさんがいる場所へと向かった。

そのあと、本来なら5分程でつくはずだったのだが俺の熱狂的なファンが一杯出てきてサインの嵐だった。

中にはサインを『我が家の家宝とします!』とか『尚哉三佐のサイン…これがあればもう死ねる』とかいって昇天しかけた人もいた。

そして受付から十五分でミゼットさんがいる場所にたどり着きドアをノックする。

尚哉「ミゼット議長、八神尚哉です、入りますよ」

ミゼット「ドアのロックは解除されてるからは入ってきな」

ミゼットさんから許可を貰ったので俺は部屋に入室する。

尚哉「失礼します、ミゼット議長単刀直入に申し上げます、何故地球にミッドチルダのことを話したのですか、あれでは世界を混乱させるだけです!」

ミゼット「確かに八神三佐の言うことが最もだ…けどね、あのままほっておいたらブラッディクライシスや大シヨッカーに襲われたときに迅速な対応ができないだろ?」

ミゼットさんが言うそれは一理あった被害を出さないための措置…か

ミゼット「…来たんだったらまあ、好都合か…八神三佐、今日一日だけ謹慎を解く、私の護衛に当たってもらおう」

尚哉「へ、護衛って…何処か行くんですか」

ミゼット「地球だよ、魔王と神王を交えた話し合いだけだね」

尚哉「時間はいつ頃で？」

ミゼット「夕方の5時…場所は海鳴市だよ」

尚哉「う、海鳴!？」

ミゼット「まあ、驚くのも無理ないね…それじゃあ頼んだよ」

尚哉「りよ、了解であります」

ミゼットさんから話にいったあと、学校に戻ってきた俺は何かと一限目前だったので普通に授業を受けていた。

尚哉(まさか、一日謹慎解かれるとは…思いもよらなかつたな…)

俺は心のなかでため息をする。

はやて 何や? 本局でなんかあつたんか?

俺の異変に気がついたはやてが念話で話しかけてくる

尚哉 まあな…今日の夜は遅くまで帰ってこれないからそのつもりでいてくれ

はやて え!? 今日の夜になんかあるんか?

尚哉 ミゼットさんから一日だけ謹慎が解かれてミゼットさんの護衛に…

はやて ……そうか、ならしよつがないな…

何故だろうか…はやては何か誘おうとしてたのか？

そんなことを考えていると授業終わりのチャイムがなり…って

尚哉（もう昼休みだったっけ）

気づいたらあっという間に昼休みになっていた。

尚哉（さてと、昼休みだしいつも通り飯を…!!）

そしてこのとき俺はあることに気がついた。

尚哉（やべ…そういうえば弁当は今日作ってなかったっけ）

いつもは作っていたが今日に限っては忘れていた…ということとは、
はやてと珪子もそうだと頷ける…

そう思った俺ははやてと珪子に念話をかける。

尚哉 はやて、珪子、すまんそういうば弁当作るの忘れてた

はやて やっぱりな、なんか忘れとると思うたらそれや…

珪子 それじゃあお昼どうしますか？

尚哉 なら学食にいくか…

はやて そうやね、あ！あと弁当忘れた罰として私達の分の食費は
尚哉くん持ちな

尚哉 ちょっ！それとこれとは！

異論があつて反論しようとしたが、既に決定事項なのか俺の言葉は受け付けてくれなかった。

尚哉「結構混んでるな…」

俺達は学食を食べに来てみると既に食堂は既に食事をしている人が何人もいた。

尚哉「それじゃあ俺が食券買いに行くからなに食べたいかいつてくれ」

はやて「そやね、私はこのAランチにするわ」

珪子「あたしはきつねうどんをお願いしますね」

尚哉「了解、それじゃあ人数分の椅子の確保頼むな」

はやて「了解や」

はやてと珪子は三人分の席を取りに向かった。

涉「おっ！あそこにいんの…尚哉じゃねえか！うーす！お前も学食か？」

そこに涉と義之が二人も学食なのか最後尾に並ぶ…

尚哉「弁当忘れてな…今日は学食お前らはなに食べるんだ？」

義之「素うどん」

涉「スープ ウィズ ウ・ダンヌ！」

…素うどん、な

そのあと食券買ってはやてたちの頼んだ品物をはやての所に運ぶとはやて達がいた場所には由夢ちゃんと由夢ちゃんのもう一人同級生だろうか牛柄のホルスタイン帽を被った少女と同じ場所に座っていたので俺ははやてのもとへいく。

尚哉「はやて、持ってきたぞ」

はやて「あ、おおきにな」

義之「げっ！」

少女「……チッ」

義之と少女の間に何かあったのか…少女は義之に対して舌打ちする。

由夢「あれ？兄さん、天枷さんと知り合いなのですか？」

義之「まあな…」

尚哉「えっと…由夢ちゃんそちらの方は…」

「

珪子「あたしのクラスと同じの天枷美夏さんで帰国子女だそう
です」

由夢「それで、一番風見学園に詳しい私が天枷さんを案内して
るんです」

ああ、なるほどな

…

…

.....

美夏以外（き、気まずい…）

何も話し合いもなしに昼飯は続いていくがかなり重い空気に一刻も早く抜け出したいぐらいだ。

由夢「兄さん…一体何やらかしたんですか」

由夢は天枷に聞こえない小声で義之に原因を聞いてみる。

涉「こりゃ、よっぽどのことをしねえとこんなことにはなんねえって」

尚哉「涉に同意見だ、この元凶が義之なら義之がこの空気打開しろよ」

義之「お、俺か」

俺と涉も小声で義之に訴え義之にこの空気の打開を任せる。

義之（って言ってもこの状況どうしろと…ん？）

義之は何かに気づいたのかそのことを話にしよつとする。

義之「天枷ってバナナ好きなのか？」

天枷の皿を見ると確かにバナナが残ってる。

美夏「なんだと…」

おいこれって地雷踏んだんじゃないのか？

美夏「貴様、昨日言った言葉を忘れてるようだな…」

しかもこれは昨日に忠告されたばかりだな

美夏「いいだろう、特別にもう一度言ってやる、美夏がこの世で嫌いなものが二つある…一つはバナナももう一つは…」

人間だ！」

…はあ？

ピロン…ピロン…

まさかの返答が来て数分後に其れはウルトラマンのリミットを知らせるような音が聞こえてくる。

美夏「ちい！バナナミンが！」

尚哉（バナナミンってなんだよ！）

と、心のなかでツツコムと天枷は嫌いなはずのバナナを口に入れる。

由夢「……………」

渉「……………」

はやて「……………」

珪子「……………」

まさかの美夏の行動に啞然とする俺たちだった

昼休み後の授業は特に何ともなく過ぎていき放課後になると俺は用事があるということ音姫さんに伝えて帰宅し鞆などを置いて本局に向かった。

尚哉「…この服も着るのも久しぶりだな」

袖を通しながら本局の制服を着るのを懐かしむ。

尚哉「さてと、感傷に慕ってる場合じゃないな」

俺は準備を完了すると集合場所に向かう。

尚哉「デイエンド、準備はできたか？」

デイエンド「問題ありませんよ、マスター」

デイエンド（と言ったもののフルトライブが使えなくなっている以上問題だらけですね…やはり、ダークデイエンド戦でのディメンジョンマキシマムブレイカーの反動が原因…いいえそれだけじゃありませんね、これまでの戦いの蓄積していた損傷のせいですかね、やはり神が作られた私はフルメンテを一度もしていないことにも原因があるでしょうね…）

デイエンドがこんなことを思っていたとは俺は知る由がなかった。

第二次プリンセスガード

前編

夕方17時海鳴の高級ホテル前にはやはりといったところかこれをニュース、記事にしようと報道陣が沢山居る。

ミゼット「まあ、沢山いるもんだね…」

尚哉「当たり前だと思いますよ、何せ魔王や神王も、来るんですから、そろそろ玄関前につきますね」

俺はというと助手席に顔を隠すためにバイザーを着けている。

そして後ろにはミゼットさんと俺と一緒にミゼットさんの護衛に当たっているシュテルが乗っている。

そうしていると車が玄関前に到着し先に俺一人が車から降りると周囲の目はこちらに向く。

そして周囲を警戒しながら後部座席のドアを開け、まずシュテルが出てきて続いてミゼットさんが出てくる。

尚哉（周囲に敵意を出すやつはいないな…）

俺は回りにミゼットさんを狙う輩が居ないのを確認してミゼットさんが先頭に玄関へと向かっていく。

その間にも写真や映像が撮られていたのは言つまでもない。

ホテル内に入るとホテル内にいる人達にも注目の的になり、多分慣

れていないと平然とできないぐらいだ。

神王「よう！ミゼット久しいな！」

魔王「ほんとに久しぶりだねミツちゃん」

ミゼット「今回は此処に呼んでいただいて光栄だよ」

ホテルのロビーには神王と魔王がいてミゼットさんを見るや挨拶をする。

その光景を目にしていた人達はざわつき出した。

神王「それじゃあ会場の方へ行こうじゃねえか」

神王に連れられて俺達は会場へと向かった。

会場に入ると既に多くの資産家や政治家などが来ているのを視認しながらミゼットさんの後ろから護衛する。

ミゼット「八神三佐、私の護衛はここまでで十分です、八神三佐とシユテル三尉は周囲の警戒をしながらパーティーを楽しむと良いよ」

尚哉「よろしいのですか？」

ミゼット「此処は神界と魔界の精鋭が護ってるんだ私達は招かれたお客なんだしね……」

尚哉「了解しました、それでは何かあればお呼びください」

神王「おっと、いい忘れてたがこのホテルには娘のシアとまー坊のネリネがいるからよ、もしなんかあったらそっちの護衛に行ってくれシア達がいるのは最上階のVIPルームだ」

尚哉「了解です、シア様達守ればよろしいのですね」

そっ言って俺とシュテルはミゼットの元をあとにした。

と言ったものの…

尚哉（やっぱりこんなパーティーは馴染めないもんだな…）

神王、魔王のみならず、政治家や資産家、名が通っている人達がたくさんいる、ついさっき日本の総理大臣居たし…

尚哉（まあ、俺みたいない一般人には遠い遠い縁かな）

そんなことを考えながらも俺は高級なジュース片手に辺りを警戒などをしていた。

尚哉　こちらエクス1よりライダー2へ、シュテルそっちは問題ないか？

シュテル　こちらにも問題はありませんが、ただナオヤ気を付けなければなりませんよ

尚哉　ん？どうしてだ？

シュテル 私の目の前に…

尚哉 目の前になんだ？

杉並「ほう、もしやと思って近づいてみればやはり同志八神ではないか」

シュテル ナノ八達が居ます

尚哉 …そうみたいだな

俺の目の前には風見の制服を着た杉並が居た。

杉並「何故、俺がここに居るかとおもっているのでしょうか？何故ならば月村やバニングスのお陰とだけいっておこう」

尚哉「なるほどそういうことか後頼むからあまり接触するなよ、杉並がいるってことは小恋や渉もいるのであろう？」

杉並「それなら心配あるまい、既に玄関辺りで八神を見たが二人とも他人だと断言している」

尚哉「…バイザーしてるだけだぞ」

杉並「まあ、騙せているのだからそれでよしではないのか？」

尚哉「まあ確かに一理あるな」

杉並「それでは俺は此处等で引こう」

杉並は立ち去ろうとするが何か思い出したのかこちらに向く。

杉並「それとロビー方に雪村がダンスホールの方には花咲がいるから会うことおすすめする、ではさらばだ」

その言葉を残し颯爽と杉並は姿を消した。

杏に茜…ね

ちとと警護してもミゼットさんからは羽を伸ばせと言われたし…

尚哉「ちとと…」

尚哉「杏かな、その後茜の方にもいけばいいことだし…うん！」

俺はそう思ってロビーへと足を進めた。

ロビーにたどり着くとそこには大勢の参加者が置いてある料理な
んかを食していた。

尚哉（さてと杏は…）

俺はこの近くにいるはずの杏を探しているよ…

杏「あら？尚哉じゃない」

後ろから杏と思われる声が聞こえてきて振り向いてみると案の定
でこれまた制服をきた杏がいた。

杏「ちやお、尚哉、入ってくるときの多くの視線は災難だったわね」

尚哉「まあ、それが有名人とかを護衛するときの宿命みたいなもん
だなそういえば小恋や渉は？一緒じゃないのか？」

杏「小恋は茜と義之、朝倉先輩達と一緒にダンスホールの方につ
たわ、後渉は…あそこよ」

杏が指指す方向をみると

渉「うん、うぐ、うめえ」

ガツガツと料理を食べていた渉の姿だった。

尚哉「…案の定ってやつだな」

杏「ねえ、あっちに空いていた席があったからそっちにいかないかしら？ここにいと渉と関係者ってことになりそうだから」

尚哉「そうだな行こっか」

俺と杏は少し場所を移動した。

杏が行った場所まで来てみたが

尚哉「2席も空いてないな」

杏「前にきたときには空いていたのだけれど」

尚哉「まあ、時間が経ってるからな…ん」と他に座れそうな場所は
…あっ！あつた！」

俺が見つめている先には席が1つだけがあった！

尚哉「…あゝでもひとつだけかどうしょう」

杏「…あそこ」にしましょ」

尚哉「あそこ」に？まあいいけど」

俺は空いている席に近づく

尚哉「俺が座ればいいのか？」

杏「ええ」

俺は椅子に座る。

尚哉「杏はどうするんだ？」

杏「私は…ちょっと目を閉じてなさい」

俺は言われるままに目を閉じていると

杏「よいしょ」

尚哉「あ、杏!？」

杏「まだよ…目を開けてもいいわ」

そして俺は目を開けそこに見た光景は

杏「ふふ、私だけの特等席かしらね」

俺の膝の上に乗る背中を俺の体に委ねている杏だった。

尚哉「あ、杏さん？」

予想外すぎる杏の行動に流石の経験豊富な俺でも戸惑ってしまつた。

杏「やっぱり例え尚哉でも取り乱すことはあるのね」

尚哉「あのな、俺も人の子だぞ人外だと」

杏「そうね」

そのあと何分ぐらいだろうか外を眺めたまま俺達は無言であった。

杏「ねえ、尚哉」

尚哉「ん？どうした？」

杏「尚哉は奇跡って信じる？」

尚哉「奇跡か？そりゃ信じるな俺の場合そういつのかなりあったか
ら」

杏「へえ、そうなんだ」

尚哉「それじゃあこっちも同じ質問するぞ杏も奇跡は信じるのか

「？」

杏「そうね、信じるかしらね」

尚哉「そっか」

杏「尚哉、茜のほうにだってあげなさい」

尚哉「茜のところじゃ？」

杏「ええ、きっと面白いことになりそうだから」

尚哉「??？」

俺は訳がわからず茜がいるダンスホールに向かうのであった。

ダンスホールにたどり着くとやはり行った方がいいか正装きた男性にドレスを着た女性が大勢いる。

尚哉「ん？あれは…義之と小恋？」

よくみると正装をしていた義之とドレスを着ている小恋がダンスしていた。

尚哉「はは、誰かが押したな」

茜「違つよ小恋ちゃんが自ら行ったんだよ」

尚哉「茜、てか茜もドレス姿か」

茜「うん！なんか貸してくれ可愛いの一杯あったから迷っちゃただよ」

尚哉「なるほどなてかドレス来てるのに踊らないのか？」

茜「うーんお誘いはあったんだけどいまいちピーンと来なかったからお断りしたの」

尚哉「でもよ、ほとんどが有名人や資産家の御曹司だぞ？」

茜「だって、みんな私の胸とか見てくるんだもん」

尚哉「あ、あはははは…確かにスタイルとか良いしな」

茜「でも、せっかくきたんだし踊ろつかなどは思ってるんだけど…
そつだ！」

何か閃いたのか妙に俺の方を見てにやにやする。

茜「尚哉くん 私と一緒に踊ろつ」

…え？

尚哉「ちよっ！ちよっ！待て！そんなことしたら確実に小恋にバレるって！」

茜「大丈夫、大丈夫、それつけてるから問題ないよ」

尚哉「いや、茜と親しげにしてたら流石の小恋でもバレる！涉じやあるまいし」

俺はかたくなに目立ちたくないので拒否する。

茜「ぬう〜それなら…えい！」

茜は俺の手を掴み。

茜「行くよ」

そのまま一気に皆さんがダンスしている方へと駆け出していった。

尚哉「あ、茜！」

茜「ふっ、ふっ、ふっもうここまで来ちゃったら踊るしかないよっ」

くっ！完全に退路を断たれたか！

茜「それじゃあ尚哉くんがリードしてねっ」

ちょっと待てまさか…

尚哉「なあ茜？もしかして俺がこんなダンスしたことがあると踏んだのか？」

茜「うん、そうだよ、え？もしかして違うの？」

尚哉「違っつてこんなところでダンスなんて生前もやったことないぞ」

茜「ど、どうしよっか」

焦り始める俺達の前…

ディエンド「しよぅがありませんね、私が指示しますからその通りに動いてください」

いつもより小さな声でディエンドが助言すると言っつ。

尚哉「…ここはディエンドの案に乗ろっついいか？茜？」

茜「うん、いいよ」

そして俺達はディエンドの指示にしたがって踊り始めた。

ディエンドの指示通りに動いた俺と茜は曲が終わると直ぐにその場を後にした。

茜「ごめんね、無茶しちゃって」

尚哉「いや、ある意味でいい経験だったかも」

ディエンドが指示はかなり正確で俺は難なく動けたが茜は思った以上に動けたことにあのときは驚いた。

小恋「茜」

尚哉（まずい）

なんとそこに小恋と義之がやって来た。

小恋「もう、どこ行って…あ…」

小恋が俺と目が合う。

尚哉（バレたか…）

流石の小恋でもこの距離ではばれるのは必然だったが…

小恋「え、えっと、管理局の人ですよね、」

尚哉「え？ああそうだが…」

予測外な言葉だったが俺はちゃんと返答する。

小恋「あ、あの、わ、私の親友がご迷惑をおかけしました」

あれ？バレてない？

尚哉「いや、別に気にしないでくれ、それでは私は失礼するよ」

そういつて俺はダンスホールから離れていった。

第二次プリンセスガード

後編

ん

茜と杏のところに行ったわけだがさてさて…これからどうしようかな

そんなことを用意されていた部屋で考えている時だった。

突然部屋の…いやホテル全体の電気が消えた。

尚哉(なんだ？停電？いや違う電源を落とされた？ならなんで…っ！)

俺は電源を落とされたことによりひとつの答えが導きだした。

尚哉「デイエンド！」

デイエンド「わかっています！バリアジャケットセット！スタンバイレディ？セットアップ！」

俺はバリアジャケットを身につける

はずだった。

尚哉「なっ！バリアジャケットが展開しない!?まさかAMF!?しかもかなり濃い…これじゃあバリアジャケットを展開できない!」

そんなとき部屋の外からかなりの数の足音がくる恐らくホテルジャックをしに来たテロリスト集団だ。

尚哉「どっする…!」

このままではまずいと思い辺りを懸命に探すと俺は部屋の上についている抜け道を見つけ直ぐに俺はそのなかから部屋から脱出するのであった。

なんとか部屋からでて隠密に行動するが恐らく監視カメラは敵の手に落ちているだろう。

尚哉「さてと念話も繋がらないしミラーワールドからいけば監視なんて気にせずに行けるんだがバリアジャケットを展開できない以上

それも無理か」

だが幸いにディエンド本体は起動できてるので戦うことはできる。

尚哉「ん？この気配は…」

俺は監視カメラに注意しながら気配がするところにたどり着くと

…

茜「えつと…絶体絶命？」

杏「茜、今此所でいっても洒落にはならないわ」

小恋「だから大人しくしておこうって言ったのに」

涉「月島の言う通りだ、あん時におとなしくしていればだな…」

義之「お前は杏達に賛成してただろ！」

涉「あ、あれはだなその場の流れでな…」

杉並「そんなことをしている間にも困んでいる輩が痺れを切らして襲いかかってくるかもな」

涉「なあ、杉並対策あるのか？」

杉並「板橋よ、当然…

あるはずがなからう！」

義之「ダメじゃん！」

茜「小恋ちゃん、チャンスだよ今こそ義之くんを抱き締めちゃえ」

杏「絶体絶命の中、義之と小恋は……流石、小恋ね、見事に計算していたのね」

茜「流石はエロの女王」

小恋「っ、月島はエロの女王じゃないもん！」

何故か雑談に近い話があるが義之達がテロリスト20人に完全に
困まっていた。

尚哉「何やってんだよ…助けるか…ディエンド、魔力結合ができな
い以上魔力弾は出せないけどカートリッジを使って魔力を剣圧にの
せることは可能か？」

ディエンド「可能ですよ？やります？」

尚哉「勿論」

俺はディエンドをソードモードに切り替えてカートリッジを2発
ロードされる。

テロリスト「おとなしくしていれば怖い目に会わなかったもの…
少々痛い目に…」

尚哉「ふっ！」

テロリストが何かしゃべっている最中に剣圧を飛ばすと…

テロリスト×10「ギャアアアアアアアアアアッ!!!」

尚哉「もういっちょー！」

再び剣圧を飛ばす。

テロリスト×9「ギャアアアアアアアアッ!!!!」

テロリスト「…に？」

尚哉「さつさと…」

俺は身体能力だけでテロリストの懐に飛び込み

尚哉「閻魔様のところ行って土下座してこい！」

テロリスト「ぐべらあー！」

俺はアッパーを繰り出すとテロリストは上へ上へと飛んでいき天井に頭が突き刺さるのであった。

決まったところでディエンドからカートリッジが排出される。

尚哉「君達無事か？…無事のようにだな」

俺は他人を装い義之達に話かける。

小恋「はい、大丈夫です」

尚哉「君達は安全な場所に避難するんだ」

渉「なんだよ、一緒に来てくれないのか？」

尚哉「普通ならそつしたほづがいんだか現場が現場で自分は神王達に頼まれてわけあって最上階にいかねければならないのでな」

杏「そつみたいね、なら邪魔したらいけないわね」

尚哉「すまない、急いでいるのでな、君達は無事を祈っている」

そつ「って俺はその場から急いだ。」

作者SIDE

尚哉が去ったあと義之達はその場で立ち止まっていた。

小恋「それじゃあ何処かに隠れよう」

義之「…」

小恋「義之？」

杏「あの人変だとは思わない？」

小恋「へ？何処が？」

小恋は杏が思っている疑問に首をかしげる。

茜「小恋ちゃん、気づかなかったの！あの人デバイスは起動させてたけど防護服は着てなかったんだよ！」

涉「言われてみりゃあそつだな…もしかしてかっこつけてんじゃねえのか？」

杏「涉じゃあるまいしそれはないわ」

義之「ちょっとその人に聞くか」

義之は尚哉が倒したテロリストの一人に近づく。

涉「義之のやつ、あれはマジだぞ」

小恋達は付き合いが長いいため義之が本気だと気づく。

義之「なあ、ちょっと聞きたいんだけどいいかなあ…」

ドガア！

テロリスト「ぐへえ！」

義之は気絶しているテロリストに対して本気で蹴る。

テロリスト「な、なんだ!？」

義之「起きたところ済みませんけど色々聞きたいことがあるんですよー！」

ドガア！

そのあともテロリストを殴る蹴るなどの暴行をさわやかな顔をし

ながら重ね拷問していく義之、そしてこの時の義之をみんなはこう呼んだ…

さわやかヤクザ…と…

杏「AMF…ね」

テロリスト「あ、ああ…そうだ、なんかここには管理局の最強が来てるらしいからなAMFを出す機械が1つじゃ駄目だからな複数設置してるんだ」

小恋「それって能力を重複してるってこと？」

テロリスト「そ、そうだそうしなきゃ止められない奴らしいからな」

杉並「ということはAMFさえ破壊すれば彼は力を出せるというわけだな？」

テロリスト「ひ、ひとつ聞いていいか？俺達を倒しちまった奴ってまさか…」

杏「ええ、察しの通りよ」

テロリスト「AMFで押さえてる筈なのに…化け物か…」

八神尚哉っていうガキは」

その瞬間知らなかった涉と小恋に衝撃が走った。

涉「何でたらめなこと言っただ！あんだ！あいつが…そんなことしてるはずがねえだろ！」

小恋「そ、そっだよ！尚哉くんが…そんな人を傷つけることなんて…」

やはり信じられない二人はテロリストが言った事実を出鱈目だと言いつ切る。

涉「義之達も何か…」

涉は気がついた。義之達…尚哉の正体を知っている者みんなが黙っていることに。

涉「…知ってたのか…尚哉が危険なことをしてたって…黙ってたのか！」

親友の隠し事を二人だけ除け者にされていたことに声を荒げる涉

杏「私たちだって偶然尚哉の秘密を知ったのよ」

杉並「ならば聞くが板橋よ、八神のことを聞いた後お前はどつする？」

涉「とりあえず、一発ぶん殴る！こんなことを黙ってたんだからな」

杏「それじゃあ、行きましようか尚哉は最上階に向かっているはずだわ」

杉並「ならば行くとしよう」

杉並はいつの間にか尋問したテロリストが突然倒れて確認したのちこちらに無理むく。

渉「杉並、お前何やったんだ？」

杉並「なあに、少し眠ってもらっただけだ」

尚哉の後を追う義之達は最上階に唯一向かうことができるエレベーターに目指していた。

何故そのようなことを知っているかは杉並がこのホテルの見取り図を持っていたから内部構造は把握していた。

義之（なんだこの胸騒ぎは…これ以上来るなど行ってるみたいだ）

杉並「よし！次を左だ！そして突き当たりを右に曲がれば最上階に続くエレベーターだ！

「

義之が先頭だつて走っているので始めに左に曲がるのは義之だった。

そして左をみた義之は目を大きく開けて立ち止まった。

小恋「よ、義之どうした…」

小恋は立ち止まった義之に声をかけたが小恋も義之が見ている方向を見て絶句した、他のみんなも同じ表情だ。

義之達が見たものそれは…

バラバラになった無数の死骸だった。

義之達「…っ！…っ！」

みんなはこの惨劇をみて悲鳴所か声が上がらない。

その時！

キン！ガキン！ブン！

最上階に続くエレベーターの方から何やら音が聞こえてくる。

義之「な、なんだ!？」

杉並「どうやらあちらで誰かが戦ってるのであるっつ

杏「恐らく尚哉とこれをやった本人…」

杉並と杏が冷静に話すが内面はそう穏やかではない。

小恋「義之今からでも遅くないよ、ひ、引き帰そう」

小恋は震えている手で義之に引き返すことを言う。

茜「で、でも尚哉くんが殺されちゃうかも…」

義之「…行くところ…尚哉を親友を殺されるかもしれないのを黙ってられない！」

小恋「義之…うん、そうだね尚哉くんは大事な友達だもん」

他のみんなも覚悟を決めたのかそういう目で義之を見る。

義之達が死骸が転がる通路を越えてもうすぐ突き当たりまで来たところだった。

尚哉「ぐっ！」

肩を切られていた尚哉がディエンド、構えた姿が義之達の目に写った。

義之「尚哉！」

尚哉「!?義之!?それにみんなも!どうしてここに!早く離れろ!此処は危険だ」

尚哉は血相をかいて義之達に警告する。

??? 「よそ見とは随分となめた真似を… 尚

哉ああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああ

あああああつ

「

それは雄叫びにも似た叫び声でその者は義之達の目にも入った。

その者は人であらず、その手には鞘と収めてあったであろう太刀…

無惨な死骸作り上げ尚哉が相手をしていたのはブラツディクライ
シス残党の幹部：レクサスだった。

尚哉SIDE

俺の目の前には今は亡きデュポンの幹部であったレクサスが俺に

太刀を向けていた。

更に最悪なことに義之達まで来てしまっしまっ…

そんななか俺は目の前のレクサスを考えながら応戦できる相手では無いことは明らか

尚哉「くっ！」

考えてる最中レクサスに切られた左肩が痛む。

奴の速度は麻紗人さんのフラッシュエッジの速度を越える…だからこそまずいのだ

レクサス「その首を跳ねられてデュポン様に手向けにしてやる！」

レクサスは既に俺の懐に迫り既に首もとまで太刀が迫っていた。

義之「尚哉！」

義之が言っているが既に手遅れだった。

レクサス「ぐっっ！」

だが俺の首もとに向かっていた太刀は一瞬鈍りその隙をついて蹴りを入れて怯んだところを後ろに下がる。

尚哉「!?お前その胸の傷どうした!?!」

俺の覚えでは二年前にはなかった傷だ。

レクサス「ぐっ！まだこの傷が疼くとは…あの人間め…死してなお私を苦しめるか！」

尚哉「今がチャンスだ！」

レクサスが無防備なことを好機だと踏み一気に接近しディエンドを振るうが…

ガキン！

尚哉「なっ！」

???「…」

俺とレクサスの間に以前によくつけていた黒フードで顔を隠した誰かが俺のディエンドを騎士剣で受け止める。

俺は受け止められたことで一度後ろに下がる。

尚哉「この感じ…まさかだとは思っがあいつは…」

ディエンド「反応からあの人の姿をしたのはシャドウですー！」

尚哉「人の形をした…シャドウ…」

ペイン「困りますよ、レクサスまだ我々が表舞台にでる時ではありません」

するとレクサスの後ろから幹部であるペインが現れる。

レクサス「何故止める！ペイン！奴はデュポン様の仇！私の全てを奪った敵なのだぞ！」

ペイン「終焉者の相手をするのはまだ少し後です、我々はまだ計画の半ばです」

レクサス「…ちっ！いいだろう今回はペインの指図に乗ってやる」

ペイン「そういうことです、終焉者…今回は我々は引きましょういずれあなたと合間見てる時まで…」

そういうとペイン達は霧のように姿を消した。

尚哉「…撤退した…でいいんだな…」

俺は安堵したのか肩の激痛が走る。

義之「尚哉！」

義之達は俺に駆け寄る。

尚哉「何で来た…と…いつかその様子だと…渉と小恋にまでばれたか…
へまはしなかったはずなんだが」

杏「テロリストが口を滑らせたのよ」

尚哉「なるほど…そういうことか…っで…それでも来た意味にはならないよな」

渉「お前をぶん殴りにここまで来た…」

小恋「板橋くん！今は駄目だよ！尚哉くん怪我してるんだよ！」

渉「…そうだな…だけどよ、それはこの騒ぎが終わってからだ」

尚哉「わかった」

俺は負傷している肩を押さえながら立ち上がった。

尚哉「まずは最上階にいこう、どうやらそこはまだ制圧されていない現に此処がさっきまで防衛線になっていた…でもレクサスに…テロリスト共々」

茜「そんな…酷い」

尚哉「…ともかく最上階にいるメンバーと合流が最優先だ」

こうして俺達はエレベーターにはいつていった。

エレベーターで最上階に向かっているエレベーター内では静かに上へ上へと上がる音しか聞こえなかった。

小恋「ねえ、尚哉くん…その傷痛くないの？」

尚哉「大丈夫、血はもう止まってるし魔力を回復の方に回してるから直ぐに治る」

小恋「そうなんだ、ねえ尚哉くんはどうして管理局に入ってるの？」

尚哉「んゝ護りたいものを…護りたいからかな」

小恋「それってはやてちゃんのこと？」

尚哉「ああ、けどそれだけじゃない、俺が護りたいもの守るだけだよ、要するに全部って訳じゃない」

小恋「そうなんだ…えへへ」

尚哉「ん？何ニヤニヤしてるんだ？」

小恋「だって、いつもの尚哉くんなんだもん、だから変わってなくて嬉しいなって」

尚哉「そうか…」

杉並「そんなことをしていたら着いたぞ最上階に」

杉並に最上階と知らされ少し緩めていた警戒を強める。

そしてドアが開くとそこに広がっていたのは誰もいない通路と見せかけてうまく隠れているようだ。

俺は先だって前へ出る。

尚哉「俺達は敵じゃない、俺は時空管理局所属の特務官の八神尚哉だ、後後ろの子供は一般市民であり、警戒を解いてくれ」

俺は身分を明かすがなおも警戒を解いてはくれない。

杉並「八神よ、恐らく奴等はお前をしたにいたブラッディクライシスの仲間だと思っているのだろう」

茜「それじゃあ、私たちって…絶体絶命？」

杏「そうね、前門に虎、後門に狼ってところかしら」

杏がいった通りか。

???「お待ちなさい！」

そんなとき前から気迫がこもった声が聞こえてくる。

神族「ネ！ネリネ様！しかし」

ネリネ「この方は以前に私とシアを助けてくれたお人です」

シア「そうそう、だから武器を下げて」

神族「はっ！失礼しました」

そういつて前にいた神魔族の親衛隊は武器を下げる。

尚哉「ありがとうございます、ネリネ様、リシアンサス様、お二方のお陰で戦闘にならずに済みました」

ネリネ「敬語は結構ですよ、私のことはリンで構いません」

シア「私のこともシアでいいです」

尚哉「そうか…リンとシアでいいんだな？俺のことは尚哉でいい」

ネリネ「はい、尚哉様」

シア「うん、尚哉くん」

義之「なんか凄いことになってないか？」

小恋「凄いつてもんじゃないよ！神王様と魔王様の娘さんなんだよ
」！

後ろではかなり驚いていた。

音姫「弟くん！」

由夢「兄さん！」

義之「音姉！由夢！無事だったんだな！」

音姫「うん、私たちは親衛隊の人達にここまで連れてこられたの、それより、弟くん！怪我とかしてない？」

義之「音姉！大丈夫！どこも怪我なんてしてないから！」

音姫「でも自分が気づいていないだけで怪我してるかも！お姉ちゃんが見ますから」

尚哉（音姫さん、過保護全快だな）

周囲の人達は全員一致で苦笑いをしていた。

その後音姫さんが…いや現在進行形で義之を見ているなか俺はシアさんが怪我をみたいなか回復魔法をかけてくれている。

シア「はい、これで傷は回復しましたよ」

尚哉「ありがとうございます」

ネリネ「それで、お父様達は…」

尚哉「ごめん、捕まってると思う」

ネリネ「そうですか…」

尚哉「まあ、自分が必ず人質となっている人達を救出してみますか
ら」

デイエンド「マスター、先程通信が回復しました、シュテルさんから通信が来ています」

尚哉「そうか、繋いでくれ」

そういつと俺の目の前にウィンドウが開きシュテルが映る。

シュテル《ようやく繋がりましたか…こちらシュテルです、今見つからないようにAMF発生装置を探しています》

尚哉「そうかこっちは、最上階に到着した、これから俺はミゼット議長達の救出に試みようと思う」

シュテル《わかりましたお気をつけて》

通信を切って俺はミゼットさんの救出に動く。

だがこのとき尙哉は知らなかった、あの場所に義之達^が居^なか^った
ことだ

お色気作戦！

義之SIDE

…なぜこうなってしまったのであるっ…

義之「なあ、杉並本気でやる気か？」

杉並「無論実行するが？」

義之「…杏、俺達がやろうとしてることもう一回聞かせてくれ」

杏「忘れたの？ならもう一回言っわ、私達は…」

義之「はい」

杏「尚哉の手助けをするために…」

義之「はい」

杏「監視カメラの映像が映っている管理室を乗っ取りに行くのよ、覚えた？」

義之「ああ…」

はい、色々ツツコミ所があるな

今現在、杏がいったように管理室は目の先まで迫ったのだが部屋に入るドアの近くに二人のテロリストが警備をしている。

涉「っでどうするんだ？」

杏「そうね……」

お色気で誘うというのはどうかしら

義之「は？お、お色気？」

杏「ええ、誰かがあの二人を誘惑してこつちまで誘導させるの」

音姫「で、でもそれって危険なんじゃ……」

杏「大丈夫です、美女なら獣のように食らいついて来ると思います」

小恋「で、でも誰がするの？」

由夢「そんな危険な役目をする人なんかあまりいないんじゃない……」

杏「そうね…」こは義之に決めてもらおうかしら

義之「何で俺!？」

杏「一番義之がまじだったからよ、涉は論外だし、杉並も少しね、だから義之ってこと」

義之「そんなこと言われたって…それじゃあ」

此所は音姉がいいんじゃないか？

此所は茜にしよう！

杏が自分でやるのはどうだ？

小恋で大丈夫なはずだ…多分

義之「…なら杏が自分でやるのはどうだ？」

言い出したのは杏だし自分がやるというのは視野に入れているはずだ。

杏「自作自演ね…わかったわやってあげる、そうねみんなは物陰に隠れていて」

渉「おう、わかった」

みんなが物陰に隠れたのを確認すると杏は進んでいき…

杏「キャツ！」 演技スタート

角の所で転ける。

テロリスト「ん？なんだ？」

テロリスト2「おい！見てみるよ！どつやらまだ捕まっていなかったやつがいたみたいだな」

杏「あ…あ…」 演技中

テロリスト「よく見りゃあ滅茶苦茶かわいい子じゃねえか」

そういつてテロリスト二人が杏に近づいてくる。

杏「嫌…来ないで…」 演技中

テロリスト「恐がらなくていいよ…ちょっと俺達と遊ぼうぜ」

杏「嘘よ…そんなことをいつて私の体を犯すんでしょ」 演技中

杏は体を震わせながら少しずつ後退する。

…あれって本当に演技だよな

テロリスト「大丈夫、初めは痛いかもしれないけどな」

はい決定、こいつ犯す気満々だ

杏「来ないで！」 演技中

そういつて走って俺達がいる場所まで来てそこで盛大に転ける。

テロリスト「ぐへへへへ、さあ楽しい楽しい時間の始まりだ」

…そろそろやるか

ドガ！バキ！ドス！ドガン！ 現在フルボッコ中

テロリストだった人「……………」

義之「これでいっちょ上がりだな」

涉「なあ、俺やってる時にさ黒い龍が見えたんだけど気のせいかな？」

小恋「え？そんなのいたの？」

音姫「きつと気のせいだよ」

音姉「ホープウイング起動してバハムート召喚したんだ。

茜「杏ちゃん、大丈夫!?どこも触られてない？」

杏「大丈夫よ、それより急ぎましょう」

涉「これで前にいた奴は片付いたした行こうぜ」

俺たちは管理室に向かった。

尚哉SIDE

最上階から降りた俺はある所の突撃のチャンスを見計らっていた。

尚哉（人質はあそこに固められている、どうにか解放したが…）

そんなことを考えていると…

ピンポンパンポーン

尚哉「ん？放送？」

…はあ!?

杉並《それとこの部屋あったAMF発生装置も停止しているそれはテロリストの皆さん思う存分祭りを楽しむがいい、さらばだー》

そして放送が終わりテロリストがパニックに陥る。

ディエンド「バリアジャケット展開可能です…いきますか？」

尚哉「ああ、杉並も危険なことを…さてと…」

そう言っている間にバリアジャケットを装着する。

尚哉「祭りの始まりだ！」

それと同時に突撃をかけた。

その後人質を解放しこちら側の大反撃が始まりテロリストは直ぐに鎮圧された。

暗躍する陰

作者SIDE

なにもない丘…上を見れば何とも美しい月が見え何とも神秘的なところにペインとレクサス、謎の女性の姿だった。

ペイン「もうすぐ我らが大きく動くときが来る」

レクサス「ペイン、時が来ればデュポン様の敵を斬滅していいのだから」

ペイン「時が来ればな…それでシャドウの生産は順調か？」

謎の女性「ええ、それはもう から までのみんなが負の感情を
どんだん人間から出していつているわ」

認知外世界

近未来的な都市…普通なら帰宅中の住民が多い都市は紅蓮に燃え盛っていた。

それを空中でみる黒フードの人物

「あらあら？ちよっと強すぎたかしら？」

「少しやり過ぎた」

「そんなこと言って手加減無用で切り刻んだ人言うかしら…それで？ファルシオンはあったのかしら？」

「なかった…このファルシオンの偽物では本来の力を出しきれない」

「私もこんな偽者の魔導書じゃあんまりコントロール聞かないのよね〜やっぱり本物じゃないと」

「それで十分な負の感情は取れた、そろそろ終わらせる」

「わかってるわよ」

の人物は詠唱をするそして

「メテオスオーム」

その瞬間その世界全体に無数の巨大隕石が降り注がれその世界は
終わりを迎えた。

認知外世界

二人の人物が互いに背中を預けファイティングポーズを取っていたが構えをやめる。回りには複数の死骸が転がっていた。

「これで最後みたいだな」

「そうね、それじゃあ次にいきましょつか」

「ああ、僕達の悲しい運命を変えるために」

認知外世界

「……」

「やはり、人を殺すことにまよいがあるのですか？正義を語って
いた者として」

「いや、あんな、紙切れ同然の正義など捨てた」

「そうですね、そろそろ終わりにしましょういいかしら？」

「ええ問題ないわ、行きなさい……」

アルテマウエポン」

アルテムウエポン「G a a a a a a a a a a!!!」

認知外世界

住民「ひいひいひいひいっ！や、やめ」

ザシユ！

「…これで最後…ん？」

子供「あ ああ…」

「まだいたんだ、命令だ此処で死ね」

は騎士剣を子供に振り落とそうとするが

「っ!!」

子供の頭上で止めてしまう。

子供はそれを好機だと見たのか全速力で逃げる。

「あいつに会ったからか……僕は……」

ペイン「さあ、行くぞ、レクサス……」

ファイアーよ」

レクサス「ふっ！」

ファイアー「楽しくなってきたわ」

ペイン「待っている 番目になるものよ」

ペインが持つ水晶には…

破壊されたシャドウとそれを倒したであろうウェーブがかかった金髪ロングヘアの女の子だった。

ペイン「砕けえぬ
システムU
」D

学園のアイドル

あのホテルジャックから2週間あまりが過ぎた平日の朝…俺はと
いっしょ

尚哉「こいつで終わりだ！フレイムスラッシュ！」

天鬼&威吹鬼「ぐわああああっ！」

俺のフレイムスラッシュの一撃が決まり大ショックの手先の天
鬼と威吹鬼が倒される。

尚哉「ふう…なんとかなっ たな」

俺はバリアジャケットを解いて倒した天鬼達のライドカードを拾
う。

尚哉「さてと、学校にいか…」

俺は携帯の画面に釘つけになっていた。

今の時間は8時17…のこり13分しかない故に

尚哉「やつべ！遅刻！」

こうなりました。

尚哉「よし！これなら間に合うな」

俺はあのあと直ぐにスタッグフォンでディエンダーを呼び出して
車道を規則ギリギリで走らせていた。

尚哉「ん？あれは…」

俺が見た先の歩道では杏とレイが走っていた。

俺は左によって停車する。

尚哉「杏！レイ！お前らも遅刻寸前か？」

レイ「え？あつ！尚哉先輩おはようございます」

杏「尚哉、バイクで通学なんて…堂々と遅刻寸前の人に言うかしら

「？」

杏はあまり表情を表していないが怒っているようだ。

杏「それにこのまま走っても間に合わないわ後10分しかないし」

俺は胸ポケットのケータイを見ても確かにそうだからここから走っても遅刻は免れない。

尚哉（…そうするか）

俺はディエンダーの中から予備用のヘルメットを取りだし杏に投げ渡す。

尚哉「乗れ、バイクなら5分で行ける」

杏「良いのかしら？でも3人は…なるほどそういうこと、レイ通常サイズに戻って私のポケットに入れてなさい」

レイ「え？…ああ！そういうことですね、わかりました」

そういつてフルサイズからユニゾンデバイスと同じサイズになり杏の胸ポケットに入る。

杏はディエンダーの後部座席にのり確りと俺にしがみつく。

尚哉「よし！行くぞ」

そしてまたディエンダーを走らせ学校に向かう。

杏「全く、尚哉の場合これがあるから余り遅刻しないんじゃない？」

尚哉「そうでもないとは思つが…確かに遅刻者常連にはつらやましいだろうな…例えるなら…」

杏「義之ね」

尚哉「ああ、あいつは遅刻寸前の常習犯だから」

そうしてディエンダーを走らせていると

義之「走れ！由夢！まだ間に合う」

由夢「はあ…はあ…何で私がこんなこと…」

尚哉「あつ！義之と由夢ちゃん」

レイ「本当です、遅刻しそうですね」

尚哉「義之はいつもの寝坊で…由夢ちゃんは…巻き込まれたか」

そうしていると義之と由夢ちゃんの横を通りすぎ…

杏「義之、急がないと遅刻するわよ」

杏は小悪魔みたいに義之に挨拶をした。

由夢「え？今の…雪村先輩!？」

義之「何でバイク!?というかもしかして運転してるのは…お前か！
尚哉!!きたねえぞ！」

聞こえない〜聞こえない〜 棒読み

そんなこんなで5分前にたどり着き俺と杏とレイは遅刻を免れた。

余談だが義之と由夢ちゃんはギリギリで間に合った。

四時限目が終わり昼休みはやって達と一緒に食べよういわれ屋上に
いった。

はやて「こんな、みんなでお昼御飯食べるのは久しぶりやな〜」

すずか「そつだねよ〜みんな仕事とかが重なっちゃってこんなのお
んまりないし」

フェイト「そついえば、なのはが謹慎とかれて部隊に復帰するのっ
ていつだっけ？」

なのは「えっとね、尚哉くんと同じだよ」

アリサ「それじゃあクリスマスまでは大丈夫ね」

勇翔「尚哉、こんなところで言つのもなんだが後から送信するデータを見てくれ今開発中のマジックカードとアポカリプスの資料なんだ」

尚哉「マジックカードは知ってるけどアポカリプスってなんだ？」

勇翔「…例の動力炉を使ったデバイス…だ」

尚哉「なぜ最後に躊躇ったのかわからないがあれの途上の試作品かでも動力炉は結構でかくなかったか？」

勇翔「まあ、それはデータを見ればわかる見たら連絡してくれ」

そんなこんなで昼休みは終わった。

放課後、はやて達は管理局の仕事でいなくなったので一人で帰ろうと学校の廊下を歩いていた。

尚哉「さてと、どうしたもんかね」

いつもとは違うが大抵こういふときは暇になる…流華のところに行くかそれとも最近見つけた優樹のところに行くか…

そういえば、何か俺平行世界に行くのが趣味になってるような…

???「退いて退いて、ごめんね！」

後ろから女の子の声が聞こえてきたので振り替えると桃色の髪をツインテールにした女の子とそれに振り回されている義之だった。

尚哉「義之？それにあの子は確か…白河さん？」

義之を振り回されている少女、白河ななかはこの学園ではアイドルと言われるほどに可愛いからか男が群がってくる。

親衛隊「いたぞ！白河さんに桜内だ！」

白河さんの前から親衛隊十二名が立ちふさがる。

ななか「え？嘘！」

親衛隊「いまこそ！憎き桜内を討ち取るとき！元ななかちゃん親衛隊！NNNN ニコニコななかちゃんの力を見せるとき！」

親衛隊達「うおおおおおっ！」

ななか「むう〜こうなれば」

そういつて白河さんが窓の入り口に足をかけ…ちよ！

窓から飛び降りました（ここ二階そんでもって義之も道連れ）

尚哉「大丈夫か!？」

俺が下を確認するとどうやら義之が白河さんの下敷きになったらしいが…

親衛隊「おのれえ！これで逃げられたと思うてか！とお！」

親衛隊が風を纏いながら飛び降りた。

親衛隊「俺は風を操ることができる！例え飛び降りても直ぐに追い付けるのだよ」

尚哉「はあ…しゃあねえやるか」

俺は右手首についているショックスパイダーを使ってまずワイヤーを引っかけられそうな場所に引っかける。

親衛隊「桜内！覚…」

そして

尚哉「あーああーあーあー!!」 ターザンみたいに

親衛隊「ごふう！」

ターザンキック直撃し親衛隊は勢いよく地面に叩きつけられた。

尚哉「よつと」

そのまま俺は地面に降り立つ。

義之「尚哉…流石にそれは…な…」

尚哉「大丈夫、大丈夫、死にはしないから、というか逃げたらどうだ？ほら親衛隊降りてきたし」

ななか「え？」

親衛隊「ななかちゃんに親しげにしている桜内義之を討ち取れえ！そして隊長の敵の八神尚哉も同罪だ！」

俺が見ている方向には凄い勢いでこちらに攻め寄せてくる親衛隊だった、あれ？なんか増えてね？　というかやったの隊長だったの

尚哉「義之、お前は学校から離れた方がいい、そうすれば親衛隊もあきらまれるだろう」

義之「尚哉はどうするんだ？」

尚哉「そりゃあもちろん」

どこからか俺は木刀を手に持ち構える。

尚哉「あいつらの肅せ…じゃなかった殲め…でもないな、討伐するだけだ」

義之「色々隠せてないぞ！」

尚哉「さっさと行け！包囲されたら突破は難しい」

義之「お、おう、頼む」

そういつて義之と白河さんは校門へと向かっていった。

尚哉「さつてと…ショータイムだ」

その後五分もしないうちに迫り来る親衛隊は全滅し指導の席につかせた。

あの殺戮劇（誰も死んでません）が終わって俺は海鳴の商店街をぶらぶらと歩いていた。

正直暇なのだ

茜「あゝ尚哉くん発見！」

そんなとき後ろから聞きなれた声が聞こえてきて振り向くとそこには風見の制服の茜が此方に向かってきた。

茜「今？暇？暇だよね」

尚哉「ならそんなこと聞かないでくれっで確かに暇だけど？」

茜「じゃあさ、じゃあさ私とお買い物付き合っつてよ」

尚哉「別に構わないぞ」

茜「やった、それじゃあレッツゴー」

そんなわけで茜の買い物に付き合っつことにした。

茜の買い物に付き合っつことになった俺はふと思ったことを聞いてみた。

尚哉「そう言えばさ、なに買いに来たんだ？」

茜「ちょっとお洋服を買いに」

尚哉「洋服？それならいい店あるんだけどさっき過ぎて行っちまったぞ」

茜「やっぱりそんなことも知ってるんだ、流石尚哉くん」

尚哉「そりゃあ、付き添うこと多いからなっで知ってるのに通りすぎたけど…お目明けがあるのか？」

茜「うん、この先にあるお店でB級品を売ってる所があるから」

尚哉「B級品？なんでそんなものを…」

茜「忘れたの？私、お裁縫得意なんだよ？」

尚哉「そう言えばそうだったな」

此处でB級品について教えておこう。

B級品とは簡単に言うところちょっとダメなやつ、ほつれてたりボタンが取れてたりするのを示すのだ。

茜「このお店だよ」

たどり着いたのはあまりいかない洋服店で 茜はやはり良く来て
いるようだ。

尚哉「うわあ…結構並んでるな…これ全部B級品か？」

茜「うん、全部そうだよ、これとかほら此処見て」

茜が指した方向を見ると少し解れていた。

尚哉「あっ！解れてる…もしかしてこれだけでB級なのか？」

茜「うーん、他にはボタンが取れてたり解れてたりしてるところは無いからそこだけだね」

尚哉「それでお値段は…安！」

茜「安いでしょ？学生にはお得なんだよ」

尚哉「た、タシカニソウダナ」

茜「あれ？何で棒読みなの？」

尚哉「気、気にしないでいいよ」

茜「気になるな」

尚哉（い、言えない、お金たくさんあるからそんなに気にしてなかったことに）　ちゃっかり億持ってたりする

そんな気まずい空気が少し続くのであった。

夜…やることを終わった俺は勇翔が渡してくれたアポカリプスの詳細をぱつと見て見たのだが…

尚哉「ディエンド、勇翔とすずかに通信」

ディエンド「わかりました」

そして2回ぐらいコールがなると勇翔とすずかに通信が繋がる。

どつちやら画面を見るとすずかは自分の寝室でパジャマ姿、勇翔は本

局にいるようだ。

すずか《こんばんわ、何かあったの?》

尚哉「すずかは大丈夫だけど、勇翔は今空いてるか?」

勇翔《ああ、もう今日は終わりだ、んで俺とすずかに用ってなんだ?》

尚哉「アポカリプスについてだ、あれって本当にセカンドトリガータイプのデバイスだよな、どっかの最終兵器ではなく!」

勇翔《やっぱりっていった感想だな...》

すずか《さ、最初はね、リンカーコアを持たなくても誰でも使えるセカンドトリガータイプのデバイスを作ろうとしてただけど...》

勇翔《ハイスペックを追求しすぎて...知ってるなかで尚哉しか扱えなくなってるな》

尚哉「なるほど...それでかなり資金とか出費してるんだろ?」

勇翔《そこはジェイルルートで...》

尚哉「了解、というか不振に思わないのか?」

すずか《思わないんだろうね、そこで尚哉くんのアポカリプスの試運転とあの装置のテストをしてほしいんだ》

尚哉「あの装置って？」

勇翔《それはミッドの革命軍のアジト地下格納庫で話す》

尚哉「わかった、それじゃあ明日の放課後な」

そういつて俺は通信を切って直ぐに眠るについた。

アポカリプス起動！

翌日学校が終わると俺は銀のオーロラでミッドの郊外まで移動しそこからディエンダーで革命軍のアジトまで来た。

尚哉「此処に来るのも久しぶりだな」

俺はアジトの入り口にディエンダーを止めてなかには行っていき岩でカモフラージュされているエレベーターを使い地下格納庫まで到着しそこにある物の見据える。

尚哉「トレミー…ここまで完成していたのか」

俺は窓越しで作りかけているXL級の次元航空艦を見て驚く

勇翔「驚いたか？尚哉？」

そして部屋に先に来ていた勇翔とすずかが入ってくる。

すずか「まだ、形だけだよ、装甲とか武装はまだ実装してないし、肝心のMドライブも作られてないもん」

勇翔「アポカリプスについてるMドライブ2基より一回りはデカイMドライブだからな…まあ、今回の演習でうまくいけば完成に近づけるか」

尚哉「そつだな、決戦までに間に合ってくれればいいが…そつだ、アポカリプスは？」

すずか「これだよ」

すずかは服の内ポケットからデュランダルの特機モードに似たカードが手渡される。

勇翔「今は待機モードにしてあるから、詳細は昨日渡したデータ通りだ」

すずか「それじゃあ行こっか、例の装置トレミーの中にある着いてきて」

そういつて俺達はトレミー…正式名、プトレマイオス に乗り込んだ。

俺はすずか達に導かれとある部屋の転送ポットにたたさされていた。

尚哉「なあ、…本当にこれが例の装置なのか？」

すずか「うん、そうだよ、ちょっと待ってね…これでよし！それじゃあいくよ」

その瞬間俺は何処かに転移した。

次に視界に入ってきたのは俺にとって見覚えがある場所だった。

尚哉「ここは…海鳴？」

俺が転移でたどり着いた場所は正しく俺が知っている海鳴市だった。

尚哉「なあ、すずか、なんか間違えたんじゃないか？」

すずか「うっん、間違っていないよ、そこは仮想空間で本当の海鳴じゃないのただの作り物、その仮想空間に尚哉くんを体ごとダイブさせてるの」

尚哉「仮想空間…でもよく作られてるなこれ」

そういつて近くにあった電信棒を叩いてみる

すずか「それはね、桂子ちゃんがいた世界のSAOの技術を使ったからだよ」

尚哉「なるほどなSAOか…それでどうするんだ？」

すずか「それじゃあ、アポカリプスのテストに入るよ、アポカリプスを起動させて」

尚哉「了解、アポカリプス！セットアップ！」

その瞬間俺の体が光に包まれ一気に輝きだし次に俺が見たのは俺の右手に巨大なキャノン砲AFX 06Z「ソードオブキャノン」

左手にはこれまた巨大な六連のガトリングを二門もついたAFX 05G「ライフルシールド」

そして背中には俺の身長と同じぐらいのブースターがつけられ俺の体はブースターに固定されている。

ここまで聞いたら知る人はわかるかもしれない…

アポカリプスが非常にあの種死の最後らへんにいつも出てくる殲滅兵器に似ているのだ。

すずか《それじゃあ、手始めにシャドウとシヨッカー戦闘員あわせて5万体现在してみようか》

そういつて直ぐに俺の回りはシヨッカー戦闘員とシャドウに囲まれた。

すずか《それじゃあテスト開始！》

その瞬間一斉にシャドウ&シヨッカー連合が俺へと襲いかかってきた。

俺は直ぐにブースターで空に上がり元いた場所にライフルシールドのガトリングから放たれる魔力弾の雨を食らわせる今ので約100体だろう。

次は空からシャドウイーグルのミサイルに特攻を仕掛けてきたシヨッカー達が襲ってくるがミサイルをライフルシールドを盾にしるとライフルシールドからバリアが発生し全弾防ぎ、防ぎきったら右手のソードオブキャノンを構え砲撃のチャージが始まる。

尚哉「行っけえ！」

俺はトリガーを引くと極太な砲撃が放たれ一直線上にいた特攻シヨッカー戦闘員が塵も残さず消滅し残った特攻シヨッカー戦闘員

も風圧で俺に向かっていった軌道がそれで地上の味方に同士討ちが起ころ。

尚哉「次は！イーグル！」

俺は標的をシャドウイーグル に変えてブースターの至るところからハッチが開く。

尚哉「Mミサイル…行けえ！」

ミサイルの発射口から30発ほどミサイルが放たれミサイルは無事に着弾し一帯の空中戦力は片付く。

尚哉「よし！後は地上の戦力を叩けば！」

そういつてアポカリプスのブースターを点火して素早く向かってくるミサイルや弾幕を避けながらブースターからクロスファイアを連射する。

すずか「うーん、それじゃあこれが最後のターゲットだよ」

そういつてデストロイシャドウが現れ手の指先からレーザーが放たれ俺は旋回しながら避けまくる。

尚哉「懐に飛び込む！」

俺はブースターの最大出力で加速しソードオブキャノンから巨大なビームの刃が発生しそのまま俺は…

尚哉「ぬおおおっ！」

DESTROYの胴体を横に真っ二つに切断しDESTROYを一撃で撃沈することに成功した。

すずか《うん、いいデータが取れたありがとうね尚哉くん》

尚哉「そっか、ならよかった、でもこれってかなり癖があるな、確かにこれは使用者が限られてくる」

そついいながら俺はアポカリプスを待機状態にする。

尚哉「っでテストが終わったんだろ？ だったらどうやってここから出るんだ？」

すずか《ちょっと待ってね、今から出口を作るから》

そういつて数分すると目の前に白い魔法陣が現れ俺はそのなかに入ると視界が真っ白になった。

尚哉「…戻ってきたみたいだな」

次に目にしたのはあの世界に入る前の転送ポットですると部屋に
勇翔が入ってくる。

勇翔「お疲れさん」

そういつてスポーツドリンクを投げ渡す。

尚哉「ありがとう」

そういつてスポーツドリンクを飲み一息する。

勇翔「どうだ？アポカリプスは？」

尚哉「そうだな、使用者が限られてくるところ以外は全然大丈夫だ」

勇翔「そうか、ならトレミーの武装にする案は行けるかな？」

尚哉「そんな話があるのか？」

勇翔「ああ、やっぱり本来の武装じゃあ、心細いからアポカリプス
をもっと強化したやつを両サイドに1機ずつ、付けようかと思って
な」

尚哉「そうなんだ、それとすずか？この装置って操作簡単なのか？」

「さすが「簡単だけど…どうして」

尚哉「いや、いいこと思い付いてさ…使おうかなと思ったんだ」

勇翔「別に構わねえぞ、ここのは誰も使わないし」

俺は勇翔に聞いてから銀のオーロラを使い地球に戻っていった。

「ラボ企画！プロローグ&第一話」ぎくしゃくした関係

作者SIDE

トレミーのトレーニングルームを内容で操作できる部屋には尚哉がなにやら設定を作っていた。

尚哉「ステージはこれでよし！ボスも大丈夫だし、物の破壊不能オブジェクトもこれで…後は…」

そうして回りに幾つものウィンドウが展開させてそこには尚哉が以前に知り合い友好な交友を重ねた者達の姿が写っていた。

尚哉「みんなには悪いけど巻き込む形で参加してもらおう…そして…」

尚哉は正面に新たなウィンドウを展開しそこに写っていたのは何にも接点などない少年少女の姿だった。

尚哉「…全く彼女達の素性を調べるのは容易だった、みんな転生者…か…そのなかでこの子…」

そういつて画面がズームして恐らく彼女達のリーダーであろう女の子が目がいく。

尚哉「彼女…恐らく強さはあの中では一番弱い…けど何か人を引き付ける力を持つてる、それにあの黒いリボン…あれからジュエルシー

余談だが何故転生者だと気づいたかは、朱音のところに行きそこから女神アテナに接触しそこからその子達を転生させた神に行き着いたのである。

トレーニングルームの仮想世界の中…一面森が生い茂る世界のあるところでは一人の女の子が倒れていた。

??? 「…うう…」

女の子は目を覚まし状況を読み込むのに数秒、ぼっとして次に辺りを見渡す。

??? 「此処…どこ？」

??? 「気がついたか？ 祈梨」

祈梨 「ネブラ？ 何で私、こんなところ？」

彼女、絵空祈梨は自身のが身に付けている黒いリボン…ネブラに状況を聞く。

ネブラ「覚えていないのか？私達はいつも通りに帰宅途中に突然現れた謎のオーロラに飲み込まれたのを」

祈梨「オーロラ…あっ！うん、思い出した、そのあと気を失っちゃったんだ…」

ネブラ「私も気がつけばこの森にいた、それと同じ様にオーロラに飲み込まれた他のみんなとは、はぐれてしまったようだ」

祈梨「みんな…大丈夫かな…」

ネブラ「心配はいらんだろう、みんなつよいのだから」

祈梨「うん、そうだね！」

祈梨はみんなの無事を信じ、体を起こし学校の制服に付いていた土などを払う。

祈梨「それじゃあ、みんな探そっか」

祈梨は動き出そうとしたとき！

ネブラ「むっ！待て！なにかいるぞ！」

ネブラは茂みにいる何かに気づき、その何かは祈梨の前に飛び出してくる。

その正体はシャドウスパイダー、尚哉の初戦闘の相手でありシャドウの中では最弱である

祈梨は突然の出現に呆然としていたが

ネブラ「祈梨！来るぞ！」

ネブラの声で正気に戻ると既にシャドウスパイダーは祈梨を襲おうと飛びきっていた。

祈梨「きゃっ！」

祈梨は咄嗟に横に避けて直ぐにメモ帳とペンを取り出す。

何故かメモ帳とペン？と言いたいひとはいっぱい、いるでしょう

そして祈梨は紙に丸くてひもが付いた物を書く

それがどうした？と普通ならいうだろうがその書いたものが浮き上がりそして祈梨はそれを右手に持ち…

祈梨「えい！」

それをシャドウスパイダーに目掛けて投げそれはシャドウスパイダーに直撃すると爆発しシャドウスパイダーを倒した。

何故このような現象が起きたかそれは祈梨が持つペンに秘密があった。

あれはとあるアニメの侵略してきた蛙達が持っていた、実体化ペン

でそれは書いたものを実体化することが出来、それが核兵器だろうが
怪獣だろうが実体化できるのである。

そしてさっき実体化させたのは良くアニメやマンガで出てくる爆
弾で…何故こんなに早く書けたのかは追求しないでほしい

祈梨「な、なんだったの〜？」

ネブラ「わからん、だがあのようなのがいるということは…祈梨！
危ない！」

祈梨「ふえ？」

世の中にはこういう言葉がある。

G一匹見つけたら三十匹はいると思えと…

その瞬間その言葉の如く、三十匹のシャドウスパイダーが襲ってき
た。

ネブラ「祈梨！」

突然の事態に体が固まってしまった祈梨は身動きがとれなかった。

このままではやられてしまう、誰もがそう思うだろう…

もし祈梨一人だったのならば

??? 「火遁・豪火球の術！」

その瞬間、祈梨を、襲おうとしていたシャドウスパイダー達は炎に包まれて倒される。

ネブラ「これは！」

祈梨「な、何!？」

祈梨は余りの展開についてこれない。

??? 「大丈夫か？」

祈梨は声が聞こえた方に向くと木の枝の上に鎖鎌の刀を持った祈梨と同じ年ぐらいの少年がいた。

??? 「よつと」

少年は軽く木上から降りて祈梨に近づぐ。

ネブラ「気を付ける祈梨、こいつ、魔導士だ」

祈梨「っ！」

祈梨はその事を聞いて身構える。

??? 「ちょ！ちょっと待て！何で身構えるんだ？」

祈梨「ネブラは絶対に渡さないよ！」

そういつて実体化ペンで剣を描きすると剣が実体化して構える。

祈梨…いや、祈梨達にとって魔導士とは全員、管理局に協力してい

ると思ひ込んでいるのだ。

そして管理局とは一度、元ジュエルシード…友達であるネブラを取り上げようとしたので祈梨とその友達達は管理局を毛嫌いしているのだ。

少年「滅茶苦茶、信用してないな…わかったよ」

そっいいながら、デバイスを突き刺す

少年「これで信用してくれないか？」

祈梨「……」

未だに警戒を解かない祈梨に対して少年はタメ息をついてしまう。

ネブラ「…祈梨、此処は彼と行動を共にすべきだ」

祈梨「ネブラ！何を！」

ネブラ「確かに祈梨の思うところはあるが私が戦ったとしてはあの怪物の大軍で来て相手するならば危険だ」

祈梨「…」

少年「ネブラ…だったけ？そいつのいつ通りだ、こんな未知の所でうろつろしていたら危険だ、何よりさっきの戦闘でみたが戦闘は不向きだろ？」

祈梨「うっ…わかった、ネブラがそう言うなら…でももし変なことしたら…」

少年「その時はその剣で切っても爆弾を投げつけられても構わな
い」

そういつて突き刺したデバイスを抜き取り肩にかける。

少年「そういえば、名前いってなかったな、夜刀優樹だ、んで、これが俺のデバイス、アサルト・レイダーだこれからよろしく」

祈梨「絵空祈梨…よ、よろしく」

ネブラ「ネブラだ、よろしく頼む」

優樹と祈梨…どちらもリーダー的存在が合流し森のなかを進んでいく。

「リボ企画！第二話『悪夢』」

祈梨達がいる場所とは別の場所地底洞窟では暗い道を歩く少年がいた。

その少年の名は桐沢流華、そしてデバイスのルナ、彼らもまた他の者達同様にこの謎の世界に連れてこられたのである。

流華「ねえ、ルナこの道どこまで続いているんだろう」

ルナ「まだまだ続いているでしょうね…」

流華「うう帰ったらはやてちゃんが怖い」

彼は八神家に住んでいるので帰ったらはやて怖いのである。

ルナ「恐らく、縄とハリセン持って改造車椅子のエンジンかけて玄関で待ってるでしょうね」

流華「洒落にならないからその例え止めて！」

ルナ「おや？マスター前に誰か倒れてますよ？」

流華「話、いきなり変えないでよ！って本当だ！」

流華は倒れている人の所に駆け寄り安否を確かめる。

流華「脈はあるみたいだ、ただ気を失ってるだけか」

ルナ「マスター、どうしますか？」

流華「うん、一旦此处で休憩しよう、この子が目を覚ますまで」

ルナ「そうですね、それなら焚き火と食料を取りましようか、ちょうど良くあそこの湖に魚が」

流華「いや！そんなに本格的でなくても！というより焚き火っていつても木とか無いんだし…」

ルナ「それでもないですよ、マスター…あそこ」

流華「へ？」

流華は目線の先には先程は何も無かったのに木材が大量にあった。

流華「…絶対にこれは今用意したよね…」

ルナ「ちっちゃいことは気にしない、それわかちこわかちこ」

流華「いや気にしようよ！…でもまあ…あるんだったら使おっか」

そうして流華は焚き火をつける準備をした。

流華達が休憩して何十分も経過した頃、流華は釣った魚を焼いて簡

単な調理をして焼き魚にして食べていた。

流華「ねえ、ルナひとつ気になることあるんだけど…」

ルナ「何でしょうか」

流華「もしかして僕やこの子をつれてきた人って…尚哉さんかな？」

ルナ「恐らくそうでしょうね」

流華は何故このようなことをしたかを考えていると気を失ってる少女に異変が起きた。

???「ん…此処は…」

少女は目を覚まし起き上がると辺りを見渡す、そして近くにいた流華に視線が泊まり。

流華「あ、目が覚めた？」

少女「は、はい、私は気を失っていたのですか？」

流華「うん、ああそういえば自己紹介がまだだったね、僕は桐沢流華、よろしく君は？」

少女「シャロン・ランフォードです、長いのでシャロとお呼びください、流華さん」

流華「うん、よろしくシャロさん、それで聞きたいことがあるんだ

けだいいかな？」

シャロ「はい、何でしょうか？」

流華「あの、シャロさんは…「マスター！3時の方向に生命反応数は1！」え!？」

シャロ「まさか、流華さんは魔導士だったんですか！」

流華「やっぱり知ってたんだ、うんシャロさんがいうとおり僕は魔導士だよ、それよりどうやら一人誰か来るみたいだ」

そうして流華達はその人物がくる方向を見据えると…

金ぴか「おお！こんなところにいたのか！俺の嫁た…ぎゃあああああああっ！」

出てきたのは以前SAOでシリカにしつこく俺の嫁と連呼し最後は尚哉に無惨に殺された金ぴかだった

その男はあろうことかシャロ達を嫁扱いにしようとした瞬間シャロの剛力のトイズをつけた右ストレートが金ぴかの顔面に直撃し金ぴかは後ろに吹き飛んでいき硝子のように体が割れた。

シャロ「はあ…はあ…はあ…何故でしょうか…あの人が言い切る前に殺らないといけない気がしてつい殺ってしまいました」

流華「いや！それ以上にあの人硝子みたいに粉々になったよ！というかさっきの右ストレートなに!?物凄い威力だったよ！」

シャロ「これは剛力のトイズです…ふう…」

シャロは金ぴかを倒したからか一息する。

だが気を抜くのはまだ早かった。

ルナ「マスター！シャロさん！新たに10000の生命反応！囲まれました！」

流華「っ！シャロさん！」

シャロ「またですか！一体誰が…」

金ぴか×1000「照れんなよ」

まさかの金ぴかが千人でできた。

もちろん、流華とシャロは…

流華&シャロ「いいいいああああああつ!!!」

当然とも言える反応である。

金ぴか×1000「だから照らんなって嫁たちよ」

シャロ「うっ！吐きそう…」

流華「いや吐かないで！いや、確かにこれは嘔吐しても可笑しくはないけど！」

これはこれで精神的なダメージが強大だった。

シャロ「流華さん、此処はみんな殺っていいですよね？」

流華「うん、殺っていいと思う…うっん、もういっしひ殺さっし」

んなの普通じゃない！ルナ！太刀を」

ルナ「はい、わかりました」

そういつて流華は太刀を持って構えるシャロも拳を構える。

流華「これじゃあ…行くよ！」

そういつて流華とシャロは包围している金ぴか達に向かっていった。

「クラブ企画！第三話『魔導士ですか？いいえ魔法少女です』」

またまた、ところ変わって何処かのヨーロッパを模した市街地

誰もいない街道を二人の少年、少女が歩いていた。

少女「あーくん、誰もいないから不気味だね…」

少年「ああ、まったく尚哉兄はなに考えてるんだ？」

少女「ヴィヴィオ達…みんな無事かな？」

少年「大丈夫だって、ヴィヴィオ達は強いしな」

少女「うん…そうだね」

少年「それより…コロナ…」

コロナ「ん？」

少年「何で腕組んでるんだ？」

コロナ「…ダメ？」

少年「駄目じゃないけど」

コロナ「あーくん、大好き！」

あーくんと呼ばれた少年…東野朱哉とコロナはそんないやラブな雰囲気の中で歩く。

そんなとき！

突如と回りにショッカー戦闘員が100体現れる。

朱哉「こいつら！どこから現れた！」

コロナ「そんなことより！あーくん！」

朱哉「わかってる！」

そういつて朱哉達は互いの背中をパートナーに任せ戦闘体制をとる。

朱哉「コロナはゴライアスの準備！」

コロナ「うん！あーくん気を付けて！」

コロナは詠唱を初めて朱哉はブレイブブレイドを構えて突撃する。

朱哉「ふっ！」

朱哉は一気に踏み込んでブレイブブレイドで一閃しショッカー戦闘員倒していく。

朱哉「ふっ！はあぁー！」

コロナ「あーくん！もう少し耐えて！」

朱哉「わか…コロナ！上だ！」

朱哉が上を見上げるとショッカー戦闘員がミサイルのように飛んできており詠唱中のコロナを狙っていた。

朱哉は助けにいかうとするがショッカー戦闘員がそれを邪魔する。

朱哉「邪魔だ！どけえ！」

朱哉は狂気のように立ちはだかるショッカー戦闘員を叩ききっていくが倒しても倒してもショッカー戦闘員が湧いてくる。

そしてショッカー戦闘員ミサイルは既にコロナの間近に迫っていた。

朱哉「コロナアアアッ！」

??? 「絶対防御！」

その瞬間ショッカーミサイルとコロナの間に何者かが割り込みコロナを守った。

??? 「大丈夫か？」

コロナ「は、はい…」

朱哉「コロナは…無事か…よかった…」

朱哉はコロナの無事に安堵するが後ろからショッカー戦闘員が襲おうとしていたのに気づいていない。

??? 「あーくん！危ない！」

その瞬間、朱哉の後ろのショッカー戦闘員を殴りそのときようやく朱哉は後ろから狙われていたのに気付く。

そして朱哉を助けてくれた少女の姿を見て朱哉とコロナは同時にその少女の名を叫んだ

朱哉&コロナ「ヴィヴィオ！」

朱哉を救ったのは大人モードのヴィヴィオであり、朱哉とコロナにとって離れ離れになった、親友と合流したことが朱哉達にとって何とも心強かった。

??? 「ヴィヴィオ！俺はこの子の詠唱が終わるまで守る！二人は出来るだけ数を減らしたくれ！それとそこで隠れてる奴も！手を貸せ！」

少年は誰もいない暗い路地の方に顔を向け、そうすると朱哉達の手をそちらに向き、そして路地の奥から少女が頭をかきながら出てくる。

少女「全く…めんどくさそうだから傍観してたのに…何で気づいたのかしら？」

少年「俺のレアスキルで半径10kmを完全把握できるんだ」

少女「なるほどね…そういうわけ…」

少年「ということ、あんたも魔導士だろ？なら此処は共に行動するのがいいと思うぜ？…えっと…」

少女「如月夢咲よ、それと私は魔導士じゃないわ…」

そういつて手を前にだし横に振るうとそれを合図に黄色のリボンが夢咲の後ろに大量のマスケット銃を生み出す

夢咲「パロットラ・マギカ・エドゥー・インフィニータ!!」

技名を叫ぶと同時に、無数の魔弾がショットカーに襲いかかり一帯のショットカー戦闘員達が殲滅される。

夢咲「魔法少女よ」

そういいながらマスケット銃を持ってにこりと微笑む。

コロナ「えっと…ゴライアス作ったの…意味なかった？」

朱哉「いや、そうでもねえみたいだぞ」

朱哉が指を指しコロナ達はその先を見るとショッカー戦闘員がさっきよりかは少ないがこちらに向かってきていた。

夢咲「千客万来ね」

ヴィヴィオ「まだでてくるの！」

朱哉「取り合えず進むぞ！」

少年「そうだな、そういえば俺だけ言ってなかったな、加賀里龍だ」

朱哉「龍か…それじゃあ行くぜ！」

それを合図に朱哉達は一齐にショッカー戦闘員がいる方向に走り出した。

少女「條助、スタンドで攻撃しても無理だって…ほらスタンドが叩いてるところに破壊不能オブジェクトって書いてあるよ」

此処で何故このようなことになっているのかの経緯を語ろう。

まず、斎条條助は近くにいた知り合いの少女暁ひなたとどこかわからない鉦山内に行く手を阻む敵を倒しながら探索していると謎の大きな扉を発見するも開くことが出来ず、條助がスタンドのゴールド・イクスペリエンスで扉を押し開けようと試みるがシステムの破壊不能なので傷ひとつついてなかった。

ひなた「うーん、こういつのはRPGだと何かキーアイテムが無いと開かない仕組みなのかも」

條助「といわれてもよ、来るときにいたのはあの木の棍棒もった、猿人だろ？」

條助がいう猿人とはSAOの迷いの森で出てきたあの猿人です。

???「確か…声が聞こえてきたのはこっちだったはずんだけど…」

ひなた「ん？後ろから誰かくるよ…」

條助「敵か！」

條助はそう言いながら鉄球を取りだしいつでも攻撃できるように手の平で完全摩擦無視の回転をしながら待ち構える。

ひなた「まだ決まった訳じゃないよ、でも足音から二人だね」

そういつていると後ろからきた人物の姿が見えてきた。

ひなた（ええ）；。。（）!? あれってVividのリオにD・C・の小恋!?)

現れたのは朱哉の世界のリオと優樹の世界の小恋だった。

ひなたが心の中で混乱している時に、リオと小恋も啞然としていたが、正気に戻ったのか二人とも戦闘体制にはいった。

リオ「その子！後ろにいるそいつ危ないから離れて！」

小恋「物騒なもの振り回してるから！早く離れて！」

ひなた（後ろ？物騒なもの？）

ひなたはなんのことやらと後ろを振り向くと…

條助「敵意があるってことは倒していいんだな？」

鉄球を手の平で回転されている條助…リオ達は條助が敵だと認識している…

ひなた（こゝ、こづいづのって勘違いバトル!?）

ひなたはことこのしだいを理解したが既に開幕の火蓋をもう止められなかった。

リオ「行くよ！小恋！」

小恋「うん！援護は任せて！」

條助vsリオ&小恋…勘違いから始まったこの戦いをひなたは止められるのか…

「コラボ企画！第五話『全力逃走』」

視点は祈梨達に戻り、祈梨達は遭遇する下級シャドウ（シャドウスパイダー等）を一撃で…というより優樹の一撃で倒し着実に密林の中を進んでいた。

優樹「うーんここまで来ていつこつに進展なしか…しかも日がくれてきやがった」

祈梨「そんな〜お母さんとお父さんに怒られちゃう…」

優樹「お、俺も…帰ったらリニスに説教が待ってる…」

案外似たような状況に二人は陥りそうだった

祈梨「あの、優樹くん…優樹くんって家族っているの？」

優樹「ん？ああ、リニスっていう家庭全般やってくれる山猫の使い魔がな」

祈梨「使い魔？…アルフさんみたいな人？」

優樹「アルフを知ってるのか？それじゃあもしかして時の庭園の決戦に参加したのか？」

祈梨「うん！友達と一緒に」

優樹「…大体な想像通りか…祈梨ちゃんは平行世界とか知ってる？」

祈梨「ん？なにそれ？」

優樹「…いや、知らないならいいよ」

そんな雑談を交わしながら歩いているとふと優樹が足を止め、祈梨も止まったのに気づき自身も動きを止める。

優樹「…なにか来る」

祈梨「へ？何かってなに!？」

ネブラ「む!?!この気配は…」

そして遠くの草むらから飛び出してきたのは…

少年「むうおおおおっ！」

祈梨「玲音くん!」

飛び出してきたのは祈梨の友達で同じ転生者光玲音で何故か血相をかいて何かから逃げていた。

そしてその玲音が前にいる祈梨に気づいたのだが…

玲音「祈梨!逃げるぞ!」

そういつて玲音は祈梨の制服の襟を掴んで祈梨と一緒に逃げ出した。

祈梨「ふえ!?!玲音くん!?!」

優樹「どうした！そんな火事場のくそ力みたいになり得ない速度で走って…」

そんな火事場のくそ力と同等な速度で走る優樹…

玲音「あんた、誰!? いや今はそんなことより後ろから追われてるんだよ！」

優樹&祈梨「後ろ？」

優樹と祈梨は後ろを振り向くと…

巨大なシャドウスパイダー…シャドウスパイダー融合体8体が玲音達の後ろを追いかけてきていた。

祈梨は後ろから追ってくるシャドウスパイダー融合体達をみて体全体が震えだす。

優樹「いや、あれぐらいならなんとかできるだろ？」

玲音「あいつらだけならな！」

玲音がいったことがわからない祈梨は頭の上に？のいくつも浮かび、優樹は少し考え、すぐに玲音がいつている意味がわかった。

優樹「上か！」

優樹は上を見ると顔を青ざめ、祈梨もそれに釣られて上を見ると…

ネブラ「あれは…確かに不味いな…」

空にはシャドウィーグルに小型のガトリングが二門追加された
シャドウィーグルがおおよそ300体に超大型のシャドウィーグル…シャドウィーグル母艦体が5体もいた。

これを見ている皆さんもお分かりだろうか、もしシャドウスパイダー融合体達と戦う場合はその場所に止まることになる。

そうならば…上からの集中砲火が来るのは当たり前だった。

祈梨「で、でも玲音ならウルトラマントで…」

ウルトラマント…物理攻撃以外の攻撃をすべて防ぐことができる、チートのようなマント…

確かにそれがあればこの状況を打開できるのは可能だろうだがしかし…

玲音「すまん…今持ってない！後バトルナイザーも持ってきてないから打つ手がねえ！」

玲音達は迎撃するのを諦め全速力で逃げるが。

優樹「っ！待てその先は確か！」

優樹はなにかを思い出したのか玲音達を引き留めようとしたが遅かった。

玲音「っ！崖だと！」

優樹達の目の前には地面がなくそのしたには勢いが強い川があり…優樹は一か八かと決死の覚悟でいった。

優樹「こうなれば…祈梨！崖の下の川に飛び込むぞ！」

祈梨「ふええええっ！そんなの無理だよ」

玲音「しゃあねえ…あいつらの目から離れるのはそれしかないのか…行くぞ！」

そういつて玲音が飛び込み、次に優樹が飛び込んだ。

祈梨「ふ、二人とも…うう…もうこうなったら…えい！」

祈梨も覚悟を決めて崖から落ちて川に飛び込んだ。

そうして後ろからはシャドウスパイダー融合体達が追いついたものの目的の優樹達が居ないため辺りを探すも見つからなかったので引き上げていった。

川に飛び込んだ優樹達… 彼らの運命はいかに！

『リボ企画！第六話』金ぴか包囲網』

そして視点は流華達地底洞窟メンバーに変わり、今もなお金ぴかとの戦いは続いていた。

流華「食らえええっ！」

金ぴか×30「ギアアアアアッ！」

シャロ「アローのトイズ！食らいなさいー！」

金ぴか×25「ギアアアアアッ！」

シャロ「はあ…はあ…ま、まだいるんですか…」

流華「というか、これ増えてるよ」

流華がいつている通り減っているどころか増えていた理由は簡単で増える速度の方が圧倒的に早いのだ。

流華「これじゃあきりがない…シャロさん此処は一点突破で包囲を抜けましょう！」

シャロ「確かにその方がよろしいです…ぐっ！」

流華「シャロさん！」

シャロ「大丈夫です、ただ先ほどあの金ぴかから一撃食らっただけですから…」

流華「くっ！」

流華（どうする、シャロさんが負傷していたら強行突破は僕は抜けてもシャロさんが抜けられない可能性がある、それでカバーしたとしても今度は僕とシャロさんどちらも抜けられないかも…こうなれば！）

流華「ルナ！ボルテックを使うぞ！」

ルナ「しょ！正気ですか！」

流華「正気だよ、だってそうしないとシャロさんと一緒にここを突破できない」

ルナ「だめといても止まりませんよね…わかりましたですが、無茶だけはしないでくださいよ？」

流華「うん、わかってる…ボルテック！」

そういつと流華の身体に電撃が走り髪も少し逆立つ。

流華「シャロさんちょっとごめんね」

そういつて流華はシャロの身体を左脇に挟む。

シャロ「え？流華さん？」

流華「ごめん、舌嚙むかもしれないから黙っとしてね、それじゃあ行くよ！」

そういつて流華はおもいつきり足で地面を蹴りあげ光の矢のように包囲を駆け抜けていく。

流華（くっ！包囲網が厚い…もしかしたら尚哉さんは僕がボルテックで強行突破を読んだのか！）

一層…二層と金ぴかの壁を突破していくが金ぴかの壁はまだかなりあった。

流華「くっ！負けてなるもんかああああっ!!」

流華は更にパワーを上げて次々と金ぴかの壁を突破していき…そして…

流華達は金ぴかの包囲網を突破することに成功した。

そして勢いそのままに奥へと飛んでいき此処で問題が発生した。

流華「…どうしよう、ルナ…スピード出しすぎて…止まらない…？」

流華は止まることが出来ずだがこのまま行くと石の壁があった。

ルナ「マスター…ご武運をお祈りします」

ルナに見捨てられた流華はそのまま、壁に激突した。

その頃…トレミーのトレーニングルームでは

尚哉「うわぁ…」

ディエンド「痛そうですねあれは…」

尚哉「でももう少し苦戦すると思ってたけど…みんな成長してるってことかな」

ディエンド「ですが流華さんとシャロさんは現在気絶中です、どうするのですか？」

尚哉「どうもしないよ、どうやら流華達のメンバーも全員集合したみたいだし…」

尚哉が見たモニターには倒れる流華達に近づく3人の人物だった。

尚哉「さてと次は…朱哉のところでも見るか」

そういつてモニターを切り替えて市街地を走る朱哉達が移った。

『コロボ企画！第七話』『平行世界の雑談』

ヨーロッパの市街地では朱哉を先頭に中央にヴィヴィオと龍、後方にゴライアスの肩に乗ったコロナとマスケット銃をもった夢咲といった陣形で行く手を阻むショッカー戦闘員を尻ぎ払って進んでいた。

龍「朱哉！もうすぐ日が落ちる！此処は何処かで朝まで待たないか？」

走るなか龍は朱哉に今日は此処までにして明日に動こうと提案する。

朱哉「俺は夜間でも走り続けていいけどヴィヴィオ達には無理があるからな…それじゃあどっかで休もう」

コロナ「それならここにしない？此処宿屋みたいだし」

コロナが指さす建物の入り口の立て看板にINNと書かれた看板があり宿屋と直ぐにわかった。

龍「そうだな、夢咲もそれでいいか？」

夢咲「別に構わないわ」

夢咲はどうでもいいような顔をして賛成する。

朱哉「それじゃあ入ろうぜ」

そういつて朱哉達は探索を打ち切って近くにあった宿屋へと入っ

ていった。

宿屋に入った朱哉達はまずは中に罾がないか等を調べ安全を確かめた後に一度食堂に集合していた。

龍「調べ回ったが特に罾ってものはなかったし敵も今のところ半径10kmにはいないようだ」

ヴィヴィオ「じゃあ、少し一安心ですね」

朱哉「でも、相手はどこから来るかわかんねえからな気を引き締めろよ」

朱哉はそういいながらキッチンの方へと向かっていく。

夢咲「なにしてんの？」

朱哉「さっき調べたんだけどよ、冷蔵庫に食糧があったから使わせてもらって料理つくんだよ」

夢咲「あんだ、料理つくれるの？」

コロナ「うん！あーくんの作る料理は美味しいよ」

朱哉「ほんじゃあまあ、作りますか…ナポリタンにするか」

朱哉はナポリタンを作ることを決めて食材を取りだします。ピーマンを切る作業に取りかかった。

一方その頃

夢咲「ふーん、魔導士って全員が管理局に協力してる訳じゃないんだ」

ヴィヴィオ「そうですね、確かに私のパパやママは管理局員ですけどね」

コロナ「それにヴィヴィオのパパは物凄く強いし」

龍「そんなに強いのか？」

コロナ「うん！二重の意味で最強だもんね」

夢咲「二重の意味って何よ…」

コロナ「なんと 言いますか…ヴィヴィオのパパが切り札を切った瞬間そのものは必ず負けるとあーくんのママが言ってたし…」

ヴィヴィオ「尚哉さんからは人型最終兵器っていう二つ名を貰いましたし…」

夢咲「いや！どんな人よそれ！」

コロナ「うーんと初見は必ず絶世の美女だと思ってしまっ美貌の持ち主で…ああ、そういうえばモデルとかやってるとか言ってた」

龍「一体どんな人なんだ…」

夢咲「というか、勝てる人いるの？」

「ヴィヴィオ」あっ！居ますよ、古河和也って人でパパと同等の魔導士です」

「夢咲」なるほど…世の中広いのね…」

そんな雑談が続きナポリタンを持ってやってきた朱哉と一緒にナポリタンを食べてその日はその三時間後には就寝した。

「コラボ企画！第八話『集結（優樹パート）』」

一方シャドウの追撃を何とか逃れるために川に飛び込んだ祈梨達は何とか岸に上がり近くにあった洞窟で冷えきった体を祈梨が実体化ペンで出した木材とライターで火を付けて暖めていた。

祈梨「くしゅん！」

優樹「大丈夫か？」

祈梨「風邪引いちゃった」

祈梨と玲音はが実体化ペンで作った服を着て優樹は一度バリアジャケットを解除して私服の姿である。

優樹「そういえば聞き逃してたことがあるんだけど、二人は八神尚哉っていう名前に心当たりない？」

祈梨「八神？」

玲音「尚哉？…いや、知らねえな…」

優樹「…そうか…」

優樹（祈梨達は尚哉さんのことを知らない…でも此処に来た経緯を聞く限りあの人しか…）

優樹はこの騒動の根元が尚哉だと大体の予想を付けるなか外から足音が聞こえてきてそれに反応して全員が臨戦態勢にはいる。

猫? 「ニャー」

祈梨「猫?」

??? 「ティオ、待つてください」

始めにティオと呼ばれる猫?が入ってきて直ぐに飼い主だと思われる、少女が現れてティオを、抱き抱える。

少女「漸く捕まえました、勝手にどこかにいくのはメッ!ですよ」

ティオ「ニャア」

??? 「まあまあ、ハルニャンこれぐらいでええやろ?それより...うちはそのにいる僕達に聞きたいことあるんやけど...」

優樹「俺は夜刀優樹だ、もしかしてあんたらもこの世界に飛ばされてきたのか?」

少女「ということはあなた方も...尚哉さんが使われていたあの銀色をしたオーロラに飲み込まれたのですね?」

優樹「尚哉さんを知ってるんですね?」

少女「は、はい、一度手合わせをしたことがあります...完敗でした」

少女はため息混じりに息を吐き。

祈梨「あの、尚哉さんって誰なの?」

優樹「ああ、簡単に言うとな…俺達が東でかかっても勝てない人だ」

祈梨「そ、そんなに!？」

玲音「そんなにヤバイやつなのか？」

優樹「根は優しいよ、でも出会ったときは敵対しちゃってなボゴボ
「ゴ…」

少女「はい、私もはじめてお会いしたときは些細な誤解で戦闘になりましたが簡単にあしらわれました」

祈梨「そ、そんなに強いのか？」

少女2「私は手合わせしたことはないんやけどあーくんが言うには
相当やで…っと、そういえば名前いってなかったな、私はジークリン
デ・エレミアや気軽にジークでええで」

少女1「アインハルト・ストラトスです、それでこっちの子がアス
ティオン…友達からはティオと呼ばれています」

ティオ「ニヤーツ！」

そして互いの自己紹介を済ませたのちにアインハルト達を加え…
祈梨はこの洞窟の奥が気になったのか祈梨達は洞窟の奥へと進んで
いくとそこには別の世界でただいま絶賛誤解バトルしているリオ達
がいる門と同じだった。

祈梨「わあ、大きな門だ」

優樹「さしずめこの先が正解みたいなもんかな…みんなはどうする」

玲音「俺は先に進んで構わない」

ジーク「何が待ち構えてるかわからんけど…行ってみよか」

アインハルト「この先に尚哉さんがきつというはずです」

優樹「それじゃあ行くぞ！」

優樹は大門を開け全員は中へと入っていき中には上へと続く螺旋階段があり優樹達は階段を上がっていくとまた扉があり開けて中に入ってみると

玲音「確か此处は！」

優樹「時の庭園!？」

ネブラ「おかしいぞ、この場所は崩壊したはずだ」

辿り着いた場所はなんとプレセアが居城としていた時の庭園であり、崩壊したはずの時の庭園に来たことに来たことがある優樹達は頭が混乱する。

ジーク「混乱するのは後や…どうやら敵さんみたいやで」

ジークとアインハルトは既にデバイスを起動し構えをとり、他の優

樹達も構える。

そして敵の正体は

フェイト「あなた達に恨みはありませんがごめんなさい、母さんのためにジュエルシード渡してください」

現れたのはジュエルシード事件でのフェイト・テストアロツサだった。

「コラボ企画！第九話

『集結（流華パート）』

そして金ぴか包囲網を突破し壁に激突した、流華達は…

流華「…ん、此处は」

???「あつ！目覚めたんですね！」

流華が視界に捉えたのは朱哉の世界のミウラでミウラは流華が目覚めたことでひと安心し自然に微笑む。

ミウラ「麻沙美さん！雫さん！シャロさん！流華さんが目覚めました」

そういつて少し離れた場所にいる東野麻沙美と月宮雫そして流華より先に目を覚ました、シャロが、その声で流華に一斉で振り向く。

麻沙美「ようやく起きたみたいですね」

シャロ「流華さん、体はなんともないですか？」

流華「は、はい、不思議になんとも…」

ルナ「それは麻沙美さんが回復魔法で治してくれたのですよ」

流華「そうなの？」

ルナ「はい、ですから麻沙美さんにお礼をそして私にも！」

流華「いや！ルナにはいらなないよね！えっと治してくれてありがとう
っごいいます」

麻沙美「いえいえ、人として当たり前ですよ」

雫「ねえ、流華ちゃんも目覚めたことだしこれからどうするの？」

ミウラ「そうですね、やっぱりこの世界からの脱出することが目標
じゃないですか？」

麻沙美「それは間違えありませんね、それと尚哉兄様は…恐らくこ
の世界の奥にいますよ」

雫「そうだね、もしかしたら優くん達とも合流できるかも」

麻沙美「それでは私たちの力を存分に尚哉兄様に披露いたしましたしよ
う」

そういつて流華達は移動を開始した。

そして奥へ奥へと進んでいく流華達はずいに祈梨たちと同じ大き
な扉を発見しその前に立つ。

麻沙美「RPGでいう、ボスの部屋へと続く扉ですね」

シャロ「この先にその尚哉さんという人がいるのかもしれない
ね」

流華「それじゃあ行く？」

そういつて流華が扉に手をあてる。

麻沙美「恐らくこの先に尚哉兄様が待ち受けているはずです」

シャロ「私達をここに集めた理由を聞き出さないといけませんね」

栗「うん、行こう流華ちゃん」

ミウラ「みんなで行けば怖くありません!」

流華「…ねえ、なんで僕をちゃんづけするんですか？」

栗「え?もしかしてちゃん付けるのいや?」

流華「いや、その…そういえばいつてなかったけど…僕男だよ」

栗&ミウラ「へ?」

シャロ「なん…だと…!」

麻沙美「あら」

流華「え?ちょっと待って…もしかして気づいてなかったの?」

ミウラ「じ、ごめんなさい、女顔だったから…つい」

流華「……………」

その時、流華のガラスのハートにひびがはいる。

麻沙美「申し訳ございません、気づきませんでした」

ミウラ「…麻沙美さん、気づいていましたよね」

麻沙美「いえいえ、そんなわけありませんよ、気づいたのはほんの
一時間前ですから」

流華「いや！それって気絶してる僕を見たときから気づいてたんだ
よね！」

麻沙美「というより、なぜそこまで女顔にコンプレックスがあるの
ですか？わたしの知る方はそんなことお構いなしにその顔で笑顔を
振りまいて、その上でモデルにアイドルの仕事をこなし趣味は御菓子
作りにそして何度も都市を機能停止にしたかも千回ぐらいはやつ
てるんじゃないですか？、まあそんな人を知ってますよ」

流華「その人って…いったい何者？」

麻沙美「私の父上ですが何か？」

流華「しかも父親!!」

麻沙美「ですから恥じることはありませんよ」「ニパニパ

そんなやり取りがこのあと数分も続き扉の中に入るときは流華の
顔は真っ赤で瞳は虚ろだったというのは余談である。

『ロボ企画！第十話』

『それぞれの戦い』

一方ひなた達がいる空間では今もなお戦闘が続いていた。

條助「うりゃあ！」

小恋「くっ！はあっっ！」

リオ「はあっっ！」

ひなた「……」

リオ達が戦闘しているなか、ひなたはわなわたと震えていた。

ひなた「いい加減に……」

ひなたは銃型ストレージデバイスあるうことか條助に向ける。

ひなた「しろお！」

次の瞬間放たれた砲撃により條助は砲撃に飲み込まれた。

そしてこの砲撃によって誤解による戦いに終止符をうったのであった。

そして所変わり、優樹一行は門を潜り時の庭園にてフェイトと戦闘していた。

フェイト「はあっ！」

フェイトはバルディッシュをサイズフォームに切り替えて魔力刃を飛ばす。

祈梨「キャッ！」

魔力刃の進行方向に祈梨がおり、祈梨はなんとか盾を実体化させて防ぐが魔力刃は本命ではなく牽制であってすでに祈梨の後ろにフェイトは回り込んでいた。

フェイト「もらった」

フェイトのバルディッシュが祈梨に振り落とされようとするが…

優樹「させない！」

優樹が祈梨とフェイトの間にたち、バルディッシュを防ぎバルディッシュを弾く。

フェイト「くっ！」

優樹「祈梨、大量の爆弾あるか？」

祈梨「うん、あるけど」

優樹「そうか、なら爆弾をフェイト目掛けて投げてくれ」

祈梨「わ、わかった」

祈梨は言われたままに懐からストックしていた、大量の爆弾が書かれた紙を取りだし実体化させると爆弾計十個をフェイト目掛けて投げた。

だが優樹はフェイトに爆弾を当てることが本命ではなかった。

優樹「ふっ！」

そして優樹がその爆弾目掛けてクナイを投げて爆弾を爆発させる。

優樹「今だ！玲音！」

玲音が優樹に言われて光線を放ちフェイトはとっさの判断で肉薄で避けるが優樹の狙いはそれではなかった。

ジーク「もらった…で！」

フェイトの真上からジークが迫ってきて拳を一気に振り落としフェイトを地上に落とす。

そして落下予測地点にはアインハルトがベルカ式の魔法陣を展開し拳を構える。

ジーク「ハルにゃん！一気に決めえ！」

アインハルト「霸王！断・空・拳!!」

アインハルトの必殺技霸王断空拳が決まりフェイトは吹き飛ばされ、そして次の瞬間フェイトの体は消滅した。

ジーク「や、やったんか？」

優樹「…どうやら尚哉さんは進めっていつてるみたいだ」

優樹が指差す方向には転移魔法陣があり優樹はそれで尚哉がこの先に進めと言っているとは解釈する。

玲音「…まだ続くのか」

優樹「でも、この先に尚哉さんがいるのは何となくわかる、だから行こう！」

そしてみんな魔法陣にのるとみんなどこかへ転移した。

そして優樹達が突破したのち他のチームもそれぞれの敵と戦っていた。

流華ルート

流華「いやあああっ！」

シャロ「また、ミサイルきましたあ！」

栗「ほんとにまずいって！」

ミウラ「麻紗美さん！なんでそんな冷静にいられるんですか！」

麻紗美「こついつときこそ、冷静さが最大の友なのですよ？」

流華「いや！たしかにそうだけど！」

流華達は4体のシャドウタートルによるミサイルの雨を避けまくっていた。

朱哉ルート

なのは「バスター！」

朱哉「のわぁ！」

なのは「お話聞かせてほしいんだ」

夢咲「そう言いながら攻撃する？」

なのは「だってお話……」

夢咲「あんたの話は肉体言語か！」

朱哉「夢咲話しても無駄だあれがなのは姉だ」

龍「おい！お前らたんたと話してるけど防いでる俺の身にもなっ
てくれえ！」

朱哉達はジュエルシード事件時のなのはと戦っていた、余談だが朱哉と夢咲が普通にしゃべっている中降りかかる攻撃は龍が防御していた。

そしてひなた達も條助が復活後に門の中へと突入し現在進行形でひなたが狂乱していた。

ひなた「いやあああああつー！」

條助「ひなたあ！もうやめろー！」

リオ「……………」

小恋「……………」

何故こんなにも狂乱しているのかそれは回りにいる奴等が原因だ。

それはトラックサイズのG…シャドウGがわんさかといるのが原因だ。

それにより女の子のリオと小恋が倒れてた。

そしてひなたも転生者で一度は性別を変える腕輪で男を装い踏み台転生者になって最悪の転生者闇倉に一度は殺されたがそれでも女の子だ、リオたちとは違い気絶はしなかったがあまりの多さで狂乱してしまった…

そして現在敵味方関係なく砲撃をぶちまけていた。

ひなた「お前らなんか…この世界からいなくなれえ！」

條助「いや！こっちに銃口…ぐぼお！」

シャドウG以外に被害を被っている條助だけで小恋達はひなたの足元に倒れているため当たらなかった。

そしてこのひなた狂乱はシャドウG全滅して10分後に収まるのであった。

「リボ企画！第十一話

『待ち受ける敵』

そしてその後3チームとも試練を乗り越えそして2回目の門をみつけた。

優樹ルート

祈梨「あ、暑い」

玲音「門は通ったからもつすぐ出口だと思うが…」

現在優樹達は火山火口を歩いていた、そして歩き続けていると大きな空洞に出た。

祈梨「行き止まり？」

アインハルト「一方通行でしたからこちらのはずです」

優樹「ということは何かあるかもな」

祈梨「でもそんなの…」

ジーク「っ!!祈梨ちゃんあかん！」

いち早く危険を察知したジークは祈梨の元に駆け寄り抱えて横に飛ぶと祈梨がいたところに高速で何が通りすぎた。

玲音「なんだ！」

祈梨「あ、ありがとう」

ジーク「どういたしまして、それより……」

優樹「明らかにボスって言う雰囲気してる」

アインハルト「はい、まさかこのような敵とも戦つとは」

祈梨「大きな…ドラゴン？」

それは赤いドラゴン…以前尚哉が珪子と共に倒した緋天龍エルドラドが優樹達の前に立ち塞がった。

流華ルート

流華「僕、尚哉さんのことだからそれほど驚かないと思ってたけどね…ちょっとこれは…」

シャロ「流華さん！現実逃避しないでください！」

ミウラ「シャロさん！攻撃そっちにいきました！」

シャロ「へ？」

雫「シャロちゃん！」

流華が現実逃避しそれをシャロが現実に戻そうと呼び掛けるがそこにボスのビーム光線がシャロ目掛けて放たれ雫が持ち前のスピー

ドを使ってシャロを抱えて回避する。

麻紗美「全く反撃をさせてくれませんね」

流華「そんなこといつて何でそんなに平然とできるのぉー！」

そして全然取り乱さない麻紗美であった。

ひなたルート

ひなた達は古びた糖の頂上にてひなた達が戦う相手とご対面し二人はその威圧感から緊張がはしり一人は体からの汗が止まらずそしてまた一人はその巨体の二頭をみてうずうずしていた。

ひなた「ねえ…こんなのありなのかな？」

リオ「ありなんじゃないですか？」

小恋「これが尚哉さんがつくったものなら…すごいと一言言いたい」

條助「よっしゃーっしー！」

ひなた「いやいや！なんでそんなに好戦的!?といつかなんで普通と亞種を越えて…希少種が出てくるのさー！」

ひなた達に待ち構えるのはなんと金リオレイアと銀リオレイウスであった、果たしてひなた達は勝てるのか？

そして朱哉のところでは

夢咲「ねえ、朱哉なんか私の第六感がこの人は非常に危険って警告してるの」

朱哉「…いやいやいや、確かにそうかもしれないぞ」

ヴィヴィオ「こんなの…絶対に違うよ！」

コロナ「そうだよだって！こんな薄気味悪い笑みなんてしないもん」

龍「それにしてもこれは一筋縄じゃないかな」

朱哉達はかつてない敵と見舞わっていた。

その正体とは

黒なのは「さあ、私の力見せてあげる」

かつて力に固執した性で闇に落ちてしまったなのは通称黒なのは
(朱哉の世界のレヴィが命名)が朱哉達の第二のボスとして立ちふさ
がった。

勝率0%のなか朱哉達の死に…必死の抵抗に好ご期待

「ロボ企画！第十二話」 『VS緋天龍エルドラド』

優樹達はエルドラドと死闘を演じていた。

優樹「そこおー！」

玲音「はあああっ！」

優樹と玲音が正面から突っ込みエルドラドの注意を引く。

アインハルト「はあああっ！」

アインハルトが側面からの打撃攻撃を試みるが…

エルドラド「ぎゃおおおっ！」

アインハルト「っ！！」

ジーク「ハルにゃん危ない！」

エルドラドの口からブレスを放ちそれをなんとか体を反らして回避する。

祈梨「アインハルトさん！この！」

祈梨は実体化ペンで作ったRPG…ロケランを何十丁も作り狙いを定めて発射し発射したロケランを捨てるとまた新しいロケランで攻撃していく。

ロケランの嵐をくらい悲鳴をあげるエルドラドだがドラゴンのこともあってかそれでも倒すことができない。

優樹「あんなにくらってもダメなのか!?ここで体力を使わない方がいいんだが…まてよ…これなら!祈梨!そのペンならどんなものでも作れるんだよな?」

祈梨「そ、そうだけど…」

ネブラ「何をするつもりだ?」

優樹「俺がこれからいう物を書いてほしいんだ!他のみんなはあのドラゴンを引き付けてくれ!」

玲音「わかった!」

アインハルト「まかせてください!」

ジーク「ほな、いこっか」

そういつて三人はエルドラド目掛けて動きだす。

その光景を見てから優樹は口答で祈梨に作るものを教えていく。

玲音「おらおら!」

まず、一番に玲音がエルドラドの懐に入り何発も打撃を与え…

アインハルト「霸王!空波断!!」

アインハルトがエルドラドの顔面に霸王空波断を放ちエルドラド

を怯ませ…

ジーク「これで…どうや！」

そしてジークが上から一気にエルドラドの顔面に目掛けて飛び蹴りを放ちエルドラドは悲鳴をあげる。

優樹「すまん！待たせたな！完成したぞ！」

どうやら思ったより早く例のものが完成したみたいでアインハルト達が振り向くとそれは巨大な重機で先端には、とても危険なあのマークがついた弾丸がついておりその瞬間アインハルト達はここは危険だと察知してエルドラドから離れていく。

祈梨「それじゃあ、いっくよー」

そういつて何故か普通にトリガーを引くととても危険な弾は飛んでいくと優樹は見計らって土遁で岩の壁を何十につくりシエルトアを作る。

そしてエルドラドに弾は当たった瞬間先程のロケランの嵐での爆発とは比べ物にならないほどの爆発が巻き起こりエルドラドは悲鳴をあげながら爆発の中へと姿を消していく。

そして爆発が収まると土遁の術をとき外からであるとエルドラドの姿はなくて倒したのを確認した。

ネブラ「倒したみたいだな」

祈梨「うん」

玲音「な、なあ、さっきの弾なんだけど…あれってマジであれなのか？」

優樹「え？ああ、確かにあれは核ミサイルだよ？」

アインハルト「物凄い威力でしたね」

ジーク「流石に凄すぎるで」

そういつていると優樹達の下に転移魔法が出現しどこかに飛ばされるのであった。

「コラボ企画！第十三話

『狂乱の宴の終り』

祈梨「あれ？ここは？」

転移した祈梨達は辺りを見渡すとそこは尚哉達を通っている風見バーベナ学園であり、だが誰もいないことから無音で薄気味悪い雰囲気かしていた。

アインハルト「ここは…」

???「うわぁ！」

玲音「な、なんだ!？」

祈梨達から少し離れたところに魔法陣が二つ現れその上から流華チームとひなたチームが現れる。

優樹「雫！」

雫「いたたた、あれ？優ちゃん？優ちゃん！」

流華「ふうぐう！」

雫は優樹の姿を見るなり倒れている流華を踏みつけて優樹の元に飛び込み抱きつく。

麻紗美「おやおや、これは見せてくれますね」

流華「麻紗美…ちゃん…そろそろ上からどいて」

その光景を流華の上に平然と立っている麻紗美が、ニパニパと眺めている。

アインハルト「麻紗美さんは相変わらずですね」

ジーク「まあ、あの子らしいからいいんじゃない？」

リオ「えつとこれでみんな揃ったのかな？」

ひなた「あれ？そういえば夢咲は？」

リオ「そういえば、ヴィヴィオにコロナ、あーくんも居ない」

優樹「龍のやつもな」

この場に居ない者達を周囲を見渡して探すが見つからずにいると優樹達の目の前に魔法陣が現れそこから

ぼろ雑巾のようにされた朱哉達が転移してきた。

リオ「あ、あーくん!」

優樹「龍!? どうした!? 何があった!」

シャロ「夢咲さん! しっかりしてください!」

ボロボロの朱哉達を心配したのか優樹達は安否を気にする。

尚哉「うわーやっぱり黒なのはやり過ぎたか」

そこに自然に尚哉まで来た。

ひなた「え!?ど、どこから現れたの!？」

尚哉「それは気にするな、それとよくエルドラドやデストロイシャドウ2体、金レイア銀レウス倒せたな…少々驚いたぞ」

優樹「それでやっぱりあのボスやモンスターって」

尚哉「ああ、俺、もしくは俺の友達が今まで戦ってきたやつらだよ」

流華「いやー!どうしたらデストロイと戦うんですか!」

尚哉「いや〜色々とな、あつ!今なら一人でも倒せるからな」

麻紗美「それで尚哉兄様、これで私達のあの戦いは終わりだということですか?」

尚哉「そうだな、本来お前ら全員で俺と戦うのが締めだったんだが…朱哉達がこんなだからそれじゃあ直ぐにもとの世界に帰すよ」

リオ「ん〜それにしてもおおかあさん達心配してるかな」

尚哉「それなら問題ない、此処は仮想空間だから飛ばされてからまだ30分も経ってないよ、それじゃあまずは玲音達をもとの世界に戻すぞ」

そういつて尚哉は銀色のオーロラを発生させて玲音に続いて祈梨達が次々と入っていくなか(気絶していた夢咲はシャロに引きずられながら後でこっぴりと物理的にお話ししたという)そして残りのひなたは入る前に足を止めて尚哉に向く。

ひなた「あの、尚哉さん良ければ連絡できるようにアドレス交換し
ませんか？」

尚哉「ん？ああ、別に構わないぞ」

そういつてちゃっかりアドレス交換をしてひなたも帰ったので
あった。

そして残りのみんなも元の世界に帰すと尚哉も此処には用がなく
なった為に自分の家に戻りディエンドの調整をする。

尚哉「やっぱり世界にはまだまだ面白いやつもいるってことだな、
そうは思わないか？」

ディエンド「全くです」

珪子「尚哉くん、はやてちゃんがかはん出来たって」

尚哉「ああ、今行く、さてとつまく行けば制限ありだがフルドライ
ブできるかもな」

そういつて平行世界の戦士を交えた波乱の一日は幕を閉じるので
あった。

神にも悪魔にも凡人にもなれる者

作者SIDE

とあるホテルの一室そこには親バカ二人と幼女一人そして管理局の提督一人があることに関して話をしていた

親バカ1「……のことよろしく願います」

幼女「やははは、こちらこそ任せました、クラスはあの子がいるクラスだよ」

親バカ2「それはそうだよ、なんたって……ちゃん達はその子に会うために人間界に来たんだしね」

親バカ1「……達のお願いだ、叶えてやらねえとな」

提督「全く……そのクラスには八神三佐がいるからね、クラスの護衛はなんとかなるだろ、ただし保険としてもう一人つけるよそうだね……なら大丈夫だね直ぐに手続きを済ませるよ」

これは地球にとって重大な出来事だとは人々は知らない

尚哉SIDE

アポカリプスの起動実験……そして朱哉達を巻き込んだ演習から数日が過ぎ平日の朝俺は毎日の行っているランニング(という名の30kmの長距離走)を終えて家に帰ると今日の当番であるアーチャーが作った朝食に手をつける。

アーチャー「尚哉、稟達の家のところは見たか？」

尚哉「ん？稟の家？確かお隣さんが次々と引っ越してんだっけ…偶然にしては出来すぎてるよな…」

誰かが裏でなにかやっている？ということもあり得るかなと少し思っただけで朝食の目玉焼きを食べているとリビングに珪子が寝ふたそうに目を擦りながら入ってきた。

珪子「おはよう、尚哉くん、アーチャーさん」

尚哉「おはよ、夜更かしでもしたのか？」

珪子「は、はい、ラディの性能とかそういうのを確認したら夜遅くまで」

尚哉「確かに自分の相棒の能力は把握しておかないといざというときにわからないしなでも夜更かしまではするなよ」

そういつてはいとポットお茶をカップに入れて珪子に差し出す。

ピナ「きゅる」

珪子「あっ！ピナ、ピナも起きたんだ」

ピナ「きゅる」

ザフィーラ「私も先ほど起きた」

尚哉「ザフィーラもおはよう、今日はドックフードか？」

ザフィーラ「ああ」

その後はやて達も起きてきて賑やかな八神家は今日も健在だ

者
そういえばアーチャーとザフィーラ久しぶりに出てきたなb y作

シグナム「それでは私とシャマルは今日も遅くなるので」

はやて「うん、わかった、ほな気をつけてな」

シグナム「主もお気を付けて」

はやて「うん、ほな行ってくるわ」

ヴィータ「はやて、珪子、尚哉行ってらっしゃい」

尚哉「ああ、行ってくる」

いつもの学校に行く時間になったので俺達は家を出て風見学園に向かう道を歩いていく。

尚哉「おっ！稟！楓！」

いつも通りに歩いていると稟と楓が少し前で話ながら歩いていたために俺は聞こえるぐらいの声で叫ぶと稟達は気づいて後ろをむき足を止めた。

稟「よお、尚哉」

楓「おはようございます、尚哉くん、はやてちゃん、珪子ちゃん」

尚哉「なあ、早速なんだがお前らの家の隣引越しただろ？なんかの前触れか？」

稟「それが俺達にも…でもあれは確かに不自然だった」

稟達も何故か引越していくことが全くわからなく、俺は考えていると…

???「待っていたぞ！土見稟！」

???「そして！八神尚哉！」

尚哉 稟「ん？」

何故か知らないやつに声を掛けられたのでそちらに向くと登校道の階段には二人の男性が待ち構えていた。

尚哉「あゝ親衛隊だな」

稟「またか」

俺は指をポキポキと鳴らし稟はいつものことで頭を抱える。

親衛隊「俺は元KKKK！きつときつと楓ちゃんファンクラブの一人！土見稟！貴様の楓ちゃんに対するイチヤイチャを許すマジ！」

親衛隊2「それで俺は！元KKKK！」

ん？楓のファンクラブじゃないか？なら狙うなら稟じゃ…

親衛隊2「キョンキョン珪子ちゃんファンクラブの一人！八神尚哉！貴様に天誅を下す！」

珪子「え!?あたしのファンクラブですか!？」

あゝなるほどねKKKでも珪子のほうね、納得

稟「またなんか、厄介なことになったな」

尚哉「いつものことだろ？」

稟「そうだな、楓、お前から一言言ってやれ」

尚哉「珪子、心配するな一撃であいつは沈める」

親衛隊「死に去らせえ!!」

親衛隊2「天誅う！」

楓「私は…私は身も心も稟くんに捧げたんです!!」

親衛隊「ぐぺー！」

尚哉「ふん！」

親衛隊2「あられやほお！」

楓の一言で一人は精神的に深く負い稟を狙っていた照準が外れてそのまま電柱に激突し俺の方は正拳突きで空高く飛んでいった。

楓「あ、まだっというの忘れてました」

稟「いや、もう遅いから」

尚哉「気にするな、それじゃあさっさと行くぞ」

そしてなにもなかったかのように学校に行くのであった。

学校に到着し教室に入るといつものように樹がと思ったが中は男性は誰もおらず女子だけが教室内で話し合っている。

不思議に思った俺は先に来ていた杏と茜を見つけ話しかける。

尚哉「杏、茜おはよう、いきなりだがこの現状はなんだ？」

茜「実は転校生が来るのしかも三人もこのクラスに」

尚哉「こんな時期にか？珍しいな…でも三人もか？それは可笑しすぎやしないか？」

茜「うん、それで杉並くんにも聞いてみたんだけど情報が掴めてないんだって」

はやて「杉並くんでもわからんのか!？」

尚哉「もしかしたらかなり急なのかもな…それなら理由もわからなくもない」

杏「それで男どもはその転校生全員女の子らしいんだけどそれを見に行ったのよ」

尚哉「なるほど、大体わかった」

そして時間が過ぎていき男性もとぼとぼとした足取りで帰ってきた恐らく拝めなかったな

さくら「はい、みんな席についてね、大事な話があるから」

樹「もしかして転校生の話ですか？」

さくら「にやははは、やっぱり噂になってるかそれじゃあ、早速だけど入ってきて！」

樹「おお！またもや！新たな女神が三人も降臨なされる！」

そしてクラスの男子がどこから取り出したか分からなかったがパーティ用のクラッカーを使い飛び出し物が飛び出す。

???「がっはははっー！全く面白そうじゃねえか人間の学校ってところもよ」

???2「ほんとにだね、美しいお嬢さんばかりだ、ついつい若返りそうだよ」

入ってきたのは学生ではないムキムキの男性とひよろひよろとした男性…どっちも成人していつて！

そういう状況を解説しながらも俺はあの二人だとわかった瞬間机に額をぶつけてしまう。

杏「尚哉が思わずぶつけたをみて間違えはないわね」

茜「まあ、あの二人だとそうはなるかもね」

俺の行動をみて二人を見たことがある杏と茜は確信をする。

??? 「それでマー坊、どいつなんだ？」

??? 2 「ちよつと待ってね、あ、いたいた」

そういつて二人は教室を歩き稟の前に立ち止まった。

稟 「え？俺に何か…」

??? 「ふむ…確かにいい目をしてやがる、シアのことよろしく頼む」

??? 2 「抜け駆けは駄目だろ？神ちゃん、娘のネリネちゃんのことをよろしくね」

稟 「え？あの…話が見えてこないんですが」

??? 「しゃきつとしねえか！シアを押し倒すぐらいの勢いでうえ！」

困惑する稟…というか教室だったが…

次の瞬間ムキムキの方の男性の頭に何かは衝撃が当たった。

シア 「もうお父さん！変なこと言わないで！」

どこから持ってきたわからない、鉄パイプの折り畳み式の椅子をシアが父親…もう名前出てきたから神王の頭めがけて直撃させたのだ。

神王 「シア…椅子で叩くのは駄目だといつもいつてるだろ…」

ネリネ「シアちゃんちょっとやり過ぎ…」

なんだこのカオスは…

そういつわけで

さくら「というわけで自己紹介」

シア「リシアンシスです、神界からきましたちょっと長い名前なのでシアって読んでください」

ネリネ「ネリネと申します、魔界からきました、これからよろしく
お願い致します」

神王「俺はユーストマシアの父親で神王なんかやってる」

魔王「僕はフォーベシイ、ネリネちゃんの父親で魔王をやってる」

…神王と魔王の自己紹介いるのか？

楓「あの今、信じられない言葉が聞こえたんですが神王と魔王って」

さくら「信じられないかもしれないけど…この二人は神界と魔界の
統べている王様の娘さんなんだ」

シア「私達のごとは特別視なしで普通の学生として接してください
」

ネリネ「これからよろしくお願いします」

さくら「それで、二人の面倒は土見くんが見るよっ」

稟「え？なんで俺なんですか？」

さくら「それはね」

魔王「簡単に言うと稟くんは二人の婚約者候補に選ばれたってこと」

全員「なにiiiiiiiiいつ!？」

稟「…え、あ…」

さくら「それと最後の一人なんだけど…流石にシアちゃんとネリネちゃんを護衛なしには出来ないから護衛として一人転校してきた…」

そして教室に入ってきた瞬間クラスの全員が集まり俺と勇翔は予想外は登場人物に口が閉じられなかった。

シュテル「この度二人の護衛としてこの学校に編入してきました
シュテルⅡ霧島です、よろしくお願いします」

まさかのシュテルがこのクラスに編入してきました

勇翔「シュテル…何故学校に…」

シュテル「それは後程説明します」

そういうわけで朝から飛んでもない展開になってしまったのである。

そういうわけで放課後…俺達はシュテルにこの説明を受けてい

た。

尚哉「なるほど、要するにシアとネリネを護衛ってことでミゼット議長がシュテルを護衛につけてそれに加えて俺と勇翔も護衛につけて」と

シュテル「そういつことですよレヴィはあれですしディアーチェもあの性格なので自然に私が選ばれました」

勇翔「まあ、確かにな」

残りのメンバーでまともということ選ばれたことに苦笑いをする勇翔となのは

月「それで…これからはどうなさるのですか？」

シュテル「一応、これからのこともありますから稟の家に向かってます、お二方の家も稟の家の近くだとお聞きしているのでそこまできけば二人の家もわかるかと」

そうして稟の家の近くに来て神王達の家は直ぐにわかった。

尚哉「近くって言うか…隣じゃねえか」

稟の家の隣が魔王と神王の家になっており、稟のお隣だった人達が引越したのは神王達の仕業だと直ぐにわかった。

尚哉「えっと、集合場所は稟の家だったよな」

そういつて俺はインターフォンをならして数秒待つが誰も出てこないの留守かと思ったが中には気配がしたので黙って中にはいる

ことにした。

そしてリビングで目にしたのは…

尚哉「なんだこのカオスは…」

稟と楓：シアとネリネ、神王、魔王がいるとは予測できていたがもう一人年下であろう女の子が稟にくっついていた。

稟「な、尚哉！お前らいつからそこに…」

尚哉「ついさっきだ、っでその子誰？耳を見る限り魔族だと思うけど」

魔王「プリムラはネリネちゃんとの知り合いでね…どうやらネリネちゃんがよく話す稟くんに会うために無断で人間界に来てしまったんだよ」

たんだんと話す魔王だが…どうもポーカーフェイスでなにかを隠しているのがみてとれる

尚哉「…そうですか、それで彼女は…」

魔王「プリムラを魔界に帰そうと思ったんだけど妙に稟くんになつかれちゃってね…それで稟くんの家に住まうことになったんだよ」

尚哉「なるほど、そういうことですか」

神王「まあ、そういうことだった、そういうわけで宴といこうじゃねえか！」

尚哉 稟「いや！どうなったら宴に行くんですか！」

そして神王達の宴に付き合わされ説明込みで家に帰ったのは深夜の零時を過ぎるぐらいだった。

校外学習（付属2年）

シアとネリネとシュテルが転入してから一週間が経ち三人ともクラスに打ち解けてきて今日も学校が終わり珪子の練習相手になっていた。

珪子「はあああっ！」

ラディ「クロスエッジ！」

尚哉「ふっ！」

クロスエッジを簡単に防ぎ今度はこちらから横切りを仕掛けると珪子は後ろに回避し魔法陣を展開する。

珪子「クロスファイア…シュート！」

クロスファイア…総数12発が俺めがけて飛んでくるが俺もお返しとばかりにクロスファイア12発で相殺する。

珪子「もらった！」

高速魔法で後ろを取った珪子はラディを俺の身体を切り裂こうと振るうが既に気配で回り込まれていたのはわかったのでその攻撃をしゃがんで避けて身体を反転させてディエンドで珪子を攻撃を仕掛ける。

珪子「え？きゃあ！」

尚哉「良い手だったけどそれだと感知タイプにはあまり有効じゃない

いな、俺みたいに反撃できるやつもいるしな」

瑠子「むむまた負けちゃいました尚哉くんはどうしてそこまで人の気配を追えるんですか？」

尚哉「まあ、経験の賜物だ」

ラディ「またエンド姉様達に負けましたね」

瑠子「でも、もっとガンバないとね、ラディ」

ラディ「そうですね！必ずエンド姉様に見せつけましょー！」

そんな決心をする瑠子達、そんな中俺は時間を見ると俺は瑠子に今日の練習はここまでと言っ。

瑠子「あれ？いつもならもう少ししてましたよね？」

尚哉「いつもはな、明日は校外学習（という名の旅行）があるからな身体を休めない」と

瑠子「そうだったね、うん、それじゃあこれぐらいにしておかないと」

そういつてバリアジャケットを解除し私服の姿に戻り家に戻る帰路についた。

校外学習：全校全員で外へと学習に行く行事であり、去年は確かレイとあったのも校外学習をしていたときだっけ

尚哉（何事もなければいいんだが）

そう思いながら校外学習のために学校側が手配しているバスに乗り込んでおり窓から外を眺めていた。

デイエンド（このままでは一刻も早くなにか参考になるものはないのでしょうか…ラディが持ってきたあのデータが役に立つあるかもしれない…ん？これは…）

デイエンド（このデータはこのシステム…なるほどこれは中々…ですが特殊な装置ですねこれはあの方に極秘で連絡してもらいましょう、それにフレームもかなり頑丈な金属を使って…）

そんなことも知らずに俺のデバイスが自らの強化プランを作っていた。

杏「ちやお、尚哉いつも通り早いじゃない」

茜「尚哉くん、ヤッホ」

尚哉「おはよ、二人とも…今回はなにもないことを祈りたいよ」

杏「それは無いわね、何せ杉並率いる非公開新聞部を始めに親衛隊に神王魔王と娘と来ればこれだけの面子がいてなにも起きないほうがおかしいもの」

尚哉「だよな…はあ」

勇翔「よお、尚哉ってなんだ？なんでため息なんか」

そこに勇翔を初めとするのはと月もやってくる。

尚哉「今後起きるだろう大波乱を想像したらため息ぐらいつくつて」

勇翔「まあ…頑張れ」

月「頑張ってください、尚哉さん」

他人みたいに言わないでくれ

そうしていると稟達もやって来て予定の時間になるとバスが発進して目的地に走り出したのであった。

バスの走行中俺達はどうと…

樹「ふっふっふっ…ジャックのスリーカード！どうだ！これで…」

尚哉「キングとクイーンのフルハウス」

樹「そんな…バカな…」

稟「やっぱりな…」

現在ポーカーをしていて絶賛五連勝していた。

はやて「それでな…ってことがあったな…

月「あときは…で驚きました」

女性陣はガールズトークに花を咲かせていた。

そして目的地に到着した俺達は宿泊先のホテルに荷物を置いて出

かける支度を整えると既に支度をしたはやて達がたっていた。

はやて「ようやくやな」

尚哉「すまん、遅れたな」

茜「ううん、そんなに待ってないから」

尚哉「そうか…杏、レイは？あいつなら杏と一緒になると思ったけど」

杏「レイなら由夢ちゃんと瑛子ちゃん、それに美夏と一緒によ」

なるほど、一年生どうしで行くってことね。

はやて「あれ？美夏って…あの帰国子女の子やんね、杏ちゃん仲良かったん？」

杏「ええ」

それは俺も初耳だな。

杏「それじゃあ行きましょう、親衛隊なんかに見られたら面倒だから」

そういつていきなり杏は俺の右腕に抱きついてくる。

茜「ああ、杏ちゃん、ずるい…」

抱きついてきた杏に嫉妬したのか茜も空いている左腕に抱きついてきた。

尚哉「ちよっ！杏!?茜!？」

はやて「杏ちゃん、茜ちゃん、駄目やで！それは愛人の私らだけの特権や！」

杏「あら？私たちは尚哉の愛人だと思ってるんだけど…ねえ」

茜「ねえ」

そうなんこんなで杏と茜が抱きつくのをやめて行動したのはこれから10分後のことであった。

珪子SIDE

校外学習先についたあたし達は直ぐに準備してレイちゃん達と一緒に商店街に来ました。

美夏「おゝこれほどまでに人で溢れてるとは…」

由夢「そんなに珍しいことなんですか？天枷さん？」

レイ「やっぱり帰国子女だからではないでしょうか？外国と日本とは違いもありますし」

由夢「ああ、それもそうかも知れませぬね」

珪子「確かに今までとは違っつて感じはあると思いますよ」

あたしは世界そのものが違っててそんな実感があるから美夏ちゃんの考えはわかるかな

??? 「はあはあはあ…」

瑠子「あつ！美夏ちゃん！前！」

考え事をやめて美夏ちゃんを見ると前から素顔はよくは見えないけどフードを被った子がこちらに焦りながら走ってくる。

美夏「わあ！」

??? 「きゃっ！」

あたしの警告も遅くて美夏ちゃんとフードの子は衝突してしまい二人とも尻餅をついてしまう。

由夢「天枷さん大丈夫ですか!？」

美夏「ああ、美夏は頑丈だからなこれぐらいなんともない」

そういつて美夏ちゃんはぶつかつた人物をにらみつく。

美夏「おい！貴様…ちゃんと前を見て歩かんとはどういう訳だ!？」

??? 「ごめんなさい、えっとその…」

フードの中の素顔は金髪のウェーブとした髪をしたあたし達ぐらいの女の子で謝っているなかでも何故か後ろをチラチラと見ていた。

??? 「っ！」

女の子はなにかを気づいたのかあたし達の横にある細い路地入り

その近くにあるゴミ箱の影にかくれた。

美夏「おい！なんの真似だ!? 謝る気がないのか!？」

瑠子「美夏ちゃん、ちょっと静かにして」

そういつてなんとかしずめることができると奥から黒いスーツをきたいかにも怪しそうな人達がなにかを探しているしぐさをしていた。

怪しい人「おい、君達こっちにフードを被った子がきたはずだが見なかったか？」

美夏「ああ、そいつなら…」

レイ「あっちの大通りを走っていきましたよ」

怪しい人「そうか、感謝する」

怪しい人達に偽の情報と言ってその情報を元に大通りの方に走っていった。

美夏「レイ、どういっつもりだ!？」

レイ「多分あの子あの人達に追われていたんですよ、あれだけ後ろを気にしていたんですから」

由夢「ねえ、もうあの人たちは行きましたよ」

由夢ちゃんが隠れている女の子に優しく話しかけると女の子も回りを気にしながら出てくる。

女の子「あの、その…ありがとっぺいします、それとごめんなさい、
貴女方に…迷惑を御掛けして…」

瑠子「気にしなくて大丈夫だよ、それとどうして追われてたの？」

女の子「えっと…それは…」

瑠子「人には言えないことなの？」

女の子「はい、これ以上関われば貴女方にも被害が…それでは私は
…」

そういつて女の子は立ち去ろうとしたときあたしは自然に彼女の
手を握った。

女の子「ふえ!？」

瑠子「何か分からないけど、手伝えることがあれば手伝っよ？」

女の子「でもそれだと…」

由夢「それに、あの人たちはフード被ったとっていたのでその服
装はかえって目立つと思いますよ」

女の子「でも…お金が…」

瑠子「それなら大丈夫、ちょっと尚哉くん連絡するね」

そういつてあたしはケータイを使って尚哉くんにごとの事情を話
したら了承してくれて近くにいたためにあたしは尚哉くんのもとに

いってカード（総額桁が10個もある）を渡されて戻ってくる。

瑠子「お待たせ、尚哉くんから貰ってきたよ」

レイ「クレジットカード…一体どれほど溜め込んでいるのでしょうか」

由夢「これで問題ありませんねそれじゃあ服屋に行きましょう、あっ、そう言えば名前言っていますでしたね、朝倉由夢です、それでこちらが」

美夏「美夏だ」

レイ「雪村レイです」

瑠子「綾野瑠子ですよろしくね」

女の子「私は…えっと…ユウです」

由夢「ユウさんですね、それでは服屋に行きましょう」

ユウちゃんの為に服屋に歩いていきました。

尚哉SIDE

突然瑠子から連絡があって近くにいたのか一人でやって来て俺はクレジットカードを渡して直ぐに友達のところ走り出した。

はやて「一体なんやったんやろうな…」

尚哉「さあな、でも瑠子のことだから疚しいことじゃないよ」

杏「そうね、ホテルに戻ったらレイにも聞いておこうかしら」

尚哉「そうだな…っ!？」

俺は強烈なプレッシャーを感じた方向に急いで振り向く。

はやて「どうしたんや？尚哉」

はやても焦っている俺の顔を見てただ事ではないと直ぐに察して辺りを警戒しながら話しかけてくる。

尚哉「遠くから俺にプレッシャーを当ててきた…感じからして禍々しかったプレッシャーだ、今は感じられない…なんだったんだ」

はやて「…尚哉がそういうなら危険かも私らで夜に調査するか？」

尚哉「ああ、その方がいいな」

そういつて先程のプレッシャーを気にしながら観光地をぶらりとするのであった。

「まさか、この距離からのプレッシャーに気づくとは流石は夜天

を守りし終焉か…」

「それで、となりにいた子が今の夜天の主ね」

町から8 kmも離れた山奥で街を…尚哉を見ているのはフードを被った謎の二人…

「やつの話だとあの街にU Dが逃げ込んだらしい」

「全くついでに夜天の主もいるんだし…いっそのこと殺そっか」

「いや、まだまだ…だが敵の力量をはかるのも一興か…そうと思わないか？セリヴィア」

セリヴィア「そうね、ラグナ」

今宵ブラッディクライシスと当たるとは今の尚哉達にはわかるすべはなかった。

そして日が落ちて夜になり外は静かになった頃さくらさんにこの事情を話して俺とはやて、なのはとフェイトは夜の偵察に出た、残りの勇翔、シュテルはというとホテルの防衛の為に残ってもらっている。

はやて「どうや？なんかまた感じんのか？」

尚哉「いや、昏に感じた気配はない…もしかしたら気のせいかな…それとも居ないのかもな」

はやて「そうか、なのはちゃん、そっちはどうや？」

考える姿勢をとったあとに、別のところで搜索しているのは達に通信越しに聞いてみる。

なのは《こつちも同じだよ》

はやて「大丈夫そうやな」

尚哉「…そうだな…」

搜索が空振りに終わったことでホテルに戻ることにした。

尚哉「っ!!はやて!避ける!」

はやて「へ?」

直感ではやてに危険が迫っていることが分かり叫んだがその前体が動いておりはやてを抱き抱える形でその場から移動すると突然はやてがいた場所に雷の大剣が降ってくる

尚哉「敵の攻撃!」

はやて「遠距離から!?!どっから!?!」

「ふん!」

尚哉「っ!」

「ダイエンド」ソードモード「…」

雷の大剣のことを気にしているうちに後ろからフードを被った男性(声からして)が剣を降り下ろしてきて直感で気づいた俺はダイエ

ンドで防いだ。

尚哉「くっ！」

そして弾いてフードの男性から距離をとると相手も一定の距離を保ちながら剣を構える。

「中々やるな」

はやて「あんた、いきなり現れて何者や！」

尚哉「はやて、この気配間違いない昼間に感じた気配はこいつだ」

「やはり気づいていたか…中々の察知能力だな」

尚哉「そうかい、それであんたらは誰なんだ？目的はなんだ？」

ラグナ「俺の名はラグナ…ブラッディクライシス十二神将の四番目だ」

はやて「ブラッディクライシスやて!？」

尚哉「十二神将…ブラッディクライシス新たな幹部か!？」

「そしてわたしがセリヴィア…十二神将の五番目…」

尚哉「くっ！幹部が二人も」

はやて「どうする、尚哉」

尚哉「こつなれば俺は前のラグナをはやてはセリヴィアを頼む、行

けるか？」

はやて「任せとき」

そういつて背中合わせで死角をなくしそして俺とはやてのデバイスを構えると一気に動き出した。

尚哉「はあああっ！」

エナジーウイングで加速し一気に距離を詰めてディエンドを振るい奴には難なく防がれてしまうがそのままセリヴィアを引き離すように押していく。

ラグナ「一対一に持ち込んだか…だが！」

鏢迫り合いで押しきっていた俺のディエンドを軽くはじき剣で垂直切りを放つが反応できる範囲でディエンドで防ぐ。

尚哉「なっ！消えた！」

ラグナ「そこだ」

剣が当たった瞬間ラグナは姿をけし驚くがラグナは俺の背中に回り込んでおり剣を振り落とす。

尚哉「ぐっ！」

とっさに前へ移動したがかわしきれずに背中を斬られる。

ラグナ「ほお、大した反応速度だ致命傷になると思っていたが傷は浅いようだな」

尚哉「くそ、こいつレクサスと同等か」

さすがに幹部を名乗ることもあるか

ラグナ「その程度か…デュポンを倒したという貴様の力は」

尚哉「くっ！言ってくれるね、ディエンド、こいつに出し惜しみはなしだ、フルドライブだ、行くぞ」

ディエンド「わかっていますよ、マスター確認としてフルドライブ限界時間は持って15分です」

尚哉「ああ、わかってる！」

そういいながら俺はカードケースから三枚のカードを取りだしホルダーに連続で挿入した。

「フォームライド フレーム ウインド ガイア」

「トリニティ」

ディエンド「フルドライブ！セブンスガンモード起動！」

そういつて俺はトリニティフォームになりそしてディエンドのフルドライブであるセブンスガンモードになり両手のディエンドドライブをソードモードにして構える。

ラグナ「二刀流か…良いだろうっ！」

尚哉「はあああっ！」

俺はエナジーウイングで先程より上回る速度で相手を攪乱しながら一撃一撃的確に仕掛けていくが決定打になる攻撃は当たらない。

尚哉「くっ！完璧に対処してきやがる…ならー！」

そう思い攻撃パターンを変えて距離をとり左のディエンドをガンモードに変えて構える。

尚哉「ディメンジョンミラージュブラスト！」

50発の追尾弾のミラージュブラストとエナジーウイングの無数の斬撃がラグナめがけて飛んでいく。

ラグナ「無駄だ」

だがそれすべてを剣一本で全弾を弾き飛ばしそのあとにこちらへ接近してくる。

ラグナ「ふっ！」

尚哉「くっ！フレイムスラッシュ！」

カートリッジを一発使い刀身に炎が纏うとディエンドでラグナを切り裂く。

ラグナ「ふっ、腕はいいようだな」

尚哉「くっ…」

鏢迫り合いで徐々に押されていく…

尚哉「っ!？」

はやて!? まずいなぜだかわからないがはやてが危険だ!

尚哉「でりゃあ!」

ラグナ「ぬっ!」

尚哉「はやて待ってる!」

俺は鏝迫り合いで弾くと同時に蹴りをいれてそのあとは見ることもなくはやてがいる方向に急いだ。

ディエンド「マスター急にどうしたのですか!？」

尚哉「わからない…けどはやてに危険なんだ!」

そういつてエナジーウイングで全速力の時速マツハ3で飛び直ぐにはやてのいるところにつくと騎士甲冑はボロボロで肩から息が上がっているはやてを見つけセリヴィアは見覚えのあるブラッディダガーで攻撃しようとしていた。

尚哉「はやて! やらせるか!」

そういつて急停止しエナジーウイングの斬撃でブラッディダガーを打ち落としはやての前に立つ。

はやて「尚哉!」

尚哉「はやて! よかった…」

「はやて」「どっつて」「どっつて！」

尚哉「何でかはわからないけどはやてが危険だっということがわかっていてたっでもいられなくなっくな」

セリヴィア「あーあ、あと少しだったのに…」

尚哉「…はやては…もう二度と大切な人をやらせはしない！」

すると俺の中の魔力ではない何か力が発動し俺の体は青色のオーラを纏う。

「はやて」「尚哉の体が青色のオーラが包んどる…」

セリヴィア「なによ、その力…魔法なんじゃない何か」

尚哉「この力がまだ何なのかはわからないが…」

「デイエンドソードモードにもオーラが纏い刀身のサイズが四メートルに伸びるとエナジーウイングで踏 み込んだ。」

セリヴィア「っ!?これは終焉者のプレッシャーで動けない、やられる！」

尚哉「こいつでえ！」

俺はデイエンドを降り下ろし動きを封じ込められているセリヴィアに直撃すると思われたが横からラグナが割り込むと剣でうけとめた

ラグナ「セリヴィアはやらせん！ぬおおおおっ！！」

ラグナは俺のディエンドを捌くとセリヴィアと共に後退する。

ラグナ「これぐらいでいいだろうっ…帰るぞセリヴィア…」

セリヴィア「そうね、夜天の書がほしかったけどまた今度にするわ、またいずれ戦場で会いましょう」

そういつて後ろに裂け目が 現れその中へと入っていくのであった。

あのあと敵の襲撃も無かったためホテルの部屋で今回の内容の報告書の作成をしていた。

ディエンド「マスター…！一つわかったことがあります、私は前々から気になっていたことがありました、何故あれほどの反射神経が身に付いていたのか…」

尚哉「確かに元から反射神経はよかった…」

ディエンド「私…先程アテナ様経由で神様にマスターのことを調べたんですそれで…マスターあなたは前世では隠されていた能力がこの世界で激戦に乗り越えていくことで開花したのがわかりました」

尚哉「先天的ってことか…」

ディエンド「マスターは…ニュータイプです」

ディエンドがいったことは余りにも驚くしかなかった…

ニュータイプ…ジオン・ズム・ダイクンとその思想ジオニズムによって出現が予言された、宇宙に適応進化した新人類の概念…

ニュータイプは、一般に認識能力の拡大により人並み外れた直感力と洞察力を身につけ、並外れた動物的直感と空間認識能力を持ち、独特のサイコウエーブ（脳波）を発する。また、離れていても他者その状況を正確に認識し、意思疎通をする能力を発揮…そのため敵を視認することなく「気配」で探知し、さらにその機動を先読みして攻撃、一方では敵の攻撃を察知して回避するなど、戦闘において圧倒的な力を発揮している。

ディエンド「マスター先程の戦闘で確実にニュータイプとして覚醒した…マスターからでたオーラとセリヴィアを封じ込めたプレッシャーが何よりの証拠です」

尚哉「俺が…ニュータイプ…」

確かに思い当たることはある…それに開花するのには多大なストレスがいるとか？もしかしたらユキを亡くしたことや度重なる激戦が俺をニュータイプへと覚醒させたのか？

尚哉「…思い当たる節はあるけど、実感ないな…あ、もう6時…徹夜になったな」

ディエンド「温泉にでも入ってきてはどうですか？ここは露天温泉があるらしいですよ、報告書はまとまっていますので私だけでやっておきますよ」

尚哉「そつだな…それじゃあはいつてくるよ」

そついつて首にかけていたディエンドを机に置いて部屋をあとに

した。

「ディエンド」マスターがニュータイプ…ならばフレームは決まりましたね…サイコフレーム…これが最適なはず」

あのあと敵の襲撃も無かったためホテルの部屋で今回の内容の報告書の作成をしていた。

露天風呂にきた俺は衣服を脱いでタオルを巻いて扉を開けるとそこは外のきれいな風景が眺められる場所であり湯煙でかなり暖くなる。

尚哉「さてと、久しぶりだな朝風呂なんか」

そういつて風呂に近づいていくと…

「だ、誰!？」

声からして女の子のいやこれは…

尚哉「えっと…杏?」

杏「その声…尚哉? どうして…あ、そういえばここ朝だと混浴になるんだっけ」

湯煙で姿は見えないが間違いなく風呂に入っているのは杏であり流石に取り乱す。

尚哉「わ、わるいまさかこんな朝に入ってるなんて…お、俺遠慮するわ」

杏「ま、待つてそれだと風邪引いちゃうかもしれないわ、湯煙であまり見えてないから入っても大丈夫」

尚哉「あ、ああわかった」

そういわれては引くこともできず俺は風呂に入り杏の声が聞こえた方に背中を向けて暖まる。

尚哉「…」

杏「…ねえ、昨日はやてと一緒に外に出ていったけど何かあったの？」

尚哉「まあ、少し戦闘でな…さっきまで報告書まとめた」

杏「夜更かし？気を付けなさいよ」

尚哉「大丈夫バスのなかで寝る」

杏「…それじゃあ私は上がるから朝食までには準備しておきなさいよ」

そういつて杏は出ていき俺はゆったりと風呂を満喫するのであった。

露天風呂にきた俺は衣服を脱いでタオルを巻いて扉を開けるとそこは外のきれいな風景が眺められる場所であり湯煙でかなり暖かくなる。

尚哉「さてと、久しぶりだな朝風呂なんか」

そついつて風呂に近づいていくと...

「だ、誰!？」

声からして女の子のいやっねは...

尚哉「えっと...杏?」

杏「その声...尚哉?どうして...あ、そついえばここ朝だと混浴になるんだっけ」

湯煙で姿は見えないが間違いなく風呂に入っているのは杏であり流石に取り乱す。

尚哉「わ、わるいまさかこんな朝に入ってるなんて...お、俺遠慮するわ」

杏「ま、待ってそれだと風邪引いちゃうかもしれないわ、湯煙であり見えてないから入っても大丈夫」

尚哉「あ、ああわかった」

そついわれては引くこともできず俺は風呂に入り杏の声が聞こえた方に背中を向けて暖まる。

尚哉「...」

杏「...ねえ、昨日はやてと一緒に外に出ていったけど何かあったの?」

尚哉「まあ、少し戦闘でな...さっきまで報告書まとめた」

杏「夜更かし？気を付けなさいよ」

尚哉「大丈夫バスのなかで寝る」

杏「…それじゃあ私は上がるから朝食までには準備しておきなさいよ」

そういつて杏は出ていき俺はゆったりと風呂を満喫するのであった。

そして校外学習は終わりを迎えてバスの中では俺は爆睡し疲れを取りそして海鳴に戻って俺達は帰宅の帰路に歩いているとはやてたち女性陣はガールズトークに花を咲かしていたが一人…アリシアだけが何故か落ち込んだ表情をしていて気になったので話をかけた。

尚哉「アリシア？どうしたんだ？落ち込んで」

アリシア「へ？う、ううん、何でもよ…」

尚哉「…ならいいけどな」

俺は何か思い詰めているとアリシアのことを考えながら帰り道を歩いていった。

アリシアSIDE

はあ…尚哉に心配かけちゃったな…

あたしはこれまでの戦いのことを考えてた、尚哉にとっては足手まといになってるのかな？尚哉の背中が遠くなってきちゃった…

アリシア（もっとうつよくなりたい…でもなのはみたいになるのは「めんかな？」）

あのだす黒いのははかなりすごかったし…

あたしはフェイトとは別れて一人で帰り道を歩いていると…

??? 「おやおや、あなたがアリシアさんですね？」

突然帽子を被った男が現れてあたしに話しかけてきた

アリシア（いつのまにこんな近くに！）

いきなり気配を感じた…いったい何者？

アリシア「あなた、誰ですか？」

??? 「いやいや、小さな商店を経営している店長です、それで…どうですか？強くなりたくないですか？」

アリシア「っ!？」

??? 「あなたのごとはミゼットさんから聞いていましたよ、それでどうしますか？他の皆さんは使えない力使いこなすために強くなりたくありませんか？」

アリシア「わたしにそんな力が？」

??? 「はい、間違いはありません」

アリシア「わたしは…」

わたしは悩む…はじめてあった人の甘い話…普通なら信じないけど…

アリシア「尚哉の足手まといにならないためにも、お願いします！」

??? 「そうですか、それでは明日この紙に書いてある住所まで来てください、管理局の方には私からいっておきましょう」

そういつてあの人は背中を向けて次の瞬間一瞬にして消えた。

その時のわたしはこの決断に迷いなんてなかった。

それぞれの展開

校外学習からかなり経ちもうすぐ夏休みが始まりそうな俺はというと去年までは管理局とかの仕事があったからそうでもなかったんだが、正直暇だった。

暇なので生徒会の雑務をこなしていた。

尚哉「音姫さん、昨日の案件全部纏めましたよ」

音姫「あ、ありがとうね、それにしても凄いね、あつという間に終わらせるなんて…」

尚哉「まあ、これぐらいよくやってたからですよ」

管理局じゃ、部長だから今やってる書類の比じゃない大量の書類をこなしてたのだからこれぐらいなら10分で終わらせた。

音姫「あ、お茶入れるね、ちょっと待ってて」

そういつて生徒会室にあるヤカンからお茶を入れて出してくれた。

尚哉「ほんと俺がやらないといけないような…」

音姫「あははは…まあまあ気にしない気にしない」

それにしても

尚哉「この頃、何も起きてないな」

あの一件からブラッディクライシスも財団Xからも仕掛けてこない…まるで

尚哉「嵐の前の静けさだな」

窓から空を見上げ憂鬱とする。

音姫「ね、ねえ、尚哉くん、もし危なくなったら私も手伝うよ」

尚哉「大丈夫ですよ、音姫さんが出ることもありません、それに隠してるんでしょ？高坂先輩や由夢ちゃんに魔法使えるの？」

俺は少し前に魔法を使えるのを高坂先輩に教えたとき、高坂先輩は驚いてたしあれは始めてみる目だった、だから高坂先輩は音姫さんがつかえるのは知らない…

音姫「うん…やっぱり抵抗がね」

尚哉「確かにありますね、俺もありましたから…それにその高坂先輩は…」

杉並「どうした、高坂まゆき！俺を捕まえるのだろう？はははは…」

まゆき「待ちなさい！杉並！今日こそあんたを捕まえる！」

部屋の外の廊下から元気な声が響いてくる、もつこの学園ではお馴染みとかしたおいかけっこだ

尚哉「杉並とのいつものあれですね」

音姫「あははは…そ、そうだ、はやてちゃん達は？」

尚哉「ん？ああ、はやてとフェイトは管理局のお仕事、勇翔とすずかはなんかディエンド渡してくれって言われて渡したら本局に行った、なのはと月とシユテルと一緒に翠屋にアリサは稽古、シリカはレイ達と一緒に遊びに稟はいつものこと、義之達もすぐにどっか行きやがったって俺一人と」

音姫「アリシアちゃんは？」

尚哉「アリシアはわからない、フェイトの話だとなんか上の権限で休まされていて学校出ていってからどこいってるかわからないんだ」

音姫「そうなんだ」

そういえば、勇翔の奴ディエンドで何するつもりなんだろ？

勇翔 SIDE

いきなりだが俺とすずかは本局の自分のデバイスルームである大仕事に取りかかっている。

勇翔「確かにこれなら理論的に可能だ…けどこれはもう」

すずか「デバイスじゃないよね？ロストログアとか言われそうで怖いね」

横ですずかが苦笑いを浮かべる、まあ、俺も顔を引きずってるけど…

ディエンド「それでもやっつけてほしいんです、マスターの新しい剣を手にするために…」

「ディエンドは本気だ…なら俺達もやらなきゃな！」

勇翔「それじゃあ始めるぞ、まずはディエンドのコアを取り外すぞ」
「ディエンドをまず解体してコアだけ取り除く、そしてそこから一から作る…」

勇翔「元々はディエンドの性能を底上げするプランBだったが…もうこれはプランC…プランBをベースにディエンドが考案したプラン、はつきりいってアポカリプス以上の化け物…扱えるのは尚哉だけだ」

「そういつてウィンドウを開いて改良後のディエンドの詳細データを見る。」

勇翔「…フレームから尚哉のニュータイプとしての力を最大限扱えるためにサイコフレーム…ソードモードは、ファンネルを使わずに片手直剣に変更…それとセブンスガンモードのサブマシンガンにガトリングモードとダガーモードと長距離ビーム砲をディエンドライフルモードと合体して超遠距離射撃砲の追加、ショットガンがビームマグナムに変更…それと支援機にサイコミュの実装ディメンジョンビットが増えて12基になりアサルトモードの追加、Dファンネルが12基になって射撃可能になる…それに加えてライフルビットが12基にあと防御特化のストライクシールドが16基…あとは…」

「すずか」一発を3秒で砲撃を連射できるバスタービットが6基…それでディエンドがストライクシールドとバスタービットを操作して尚哉くんがディメンジョンビットとDファンネル、それとライフルビットを使うの…扱つと大変そつ…」

勇翔「どつだがそれに極めつけは…俺達があれを参考にして作ったあれとディエンドの提案で実装するあの装置と俺が作り上げたエレメンタルカートリッジシステムだな…」

すずか「そつだね、早めに尚哉くんに渡さないと…それにこれも早めに」

勇翔「ん？なにか言ったか？」

すずか「ううん、何でもない」

さてと待ってるよ！絶対にお前の愛機を生まれ変わらせてやる！

作者SIDE

とある次元空間ないでは管理局の次元航空艦…元々巡航が目的だったのだが現在予想外なことが起きていた。

艦長「くそ！なんなのだ！何故あれが化け物ども達の住みかとかしているのだ！」

航空艦の前方には尚哉が帰ってくる二週間前に突如姿を眩ました次元航空艦…アッシュ…それが今ブラッディクライシスのシャドウ達とともに襲いかかってきた。

艦長「くそ！アッシュとの回線はまだ繋がらんのか!?!」

局員「だめです、繋がりません」

艦長「くそ！ぐっ！」

艦内が突然揺れる、航空艦の滞空防御の武装が破壊されたのだ

局員「っ！アッシュから高エネルギー反応！」

艦長「っ！！退避！」

局員「だめだ！スラスターがやられた！っ！アッシュから通信が来ます」

艦長「なに!？」

??「愚かなる不当な正義を振りかざす管理局よ、これは裁きだ、あの世で裁かれる」

艦長「そんな！その声は！何故だ！何故!？」

そしてその答えが来ることはなくアッシュからの主砲が放たれ航空艦へと距離を縮めていきそして…

艦長「クラウド・ハラオウン!!!!!!」

艦長の叫び声とともに航空艦は撃沈し大爆発を引き起こした。

クラウド「……………」

「あっけなかったわね…最後にあなたの名前を言っていたけど知り合いでしたか？」

クラウド「さあな、俺を知っている奴だったかもしれないし今になっではわからん、それより、もうすぐ大きく動くのだぞ、リニス、お

前こそ元の主に牙をむけることになるぞ」

リニス「そんなことわかっていているわ、それをいうならクラウドもよ、あとの人もね」

クラウド「すでに決まっているわ」

そういつてクラウド操るアッシュはステルス機能で次元空間から姿を消してどこかへ去っていった。

尚哉SIDE

生徒会の業務も全部終わり、やることが何もなくなってしまった俺は学校内をぶらぶらしていた。

まあしてる間に三回ぐらい親衛隊に襲われたが即滅さ…討滅していた。

え？隠せてないって？気のせい気のせい

尚哉「ん？確かここは演劇部の…」

ふらふらしてきてたどり着いたのは体育館でそういえば杏は演劇部に入部していたのを思いだし様子見で見てもようと体育館にはいるとそこには劇の稽古をしている杏と生徒だった。

一生懸命に劇に打ち込んでいる、杏を遠くから眺めていると杏と視線があいこちらに近づいてきた。

杏「あら？尚哉見てたの？」

尚哉「ああ、暇でぶらぶらしていたらちよつと演劇部が練習しているところで見ているつもりと思ってな」

杏「そうなの？あと少しで練習終わりなんだけど一緒に帰らない？」

尚哉「そうなのか？ならそうしよつ」

杏「なら少し待ってて」

そういつて部員の集まるところに駆け足で向かっていった。

そして数分待っていると帰りの支度ができた杏が俺のところに来た。

杏「お待たせ、それじゃあ帰りましょつ」

尚哉「おつ」

学校からの帰り道、杏が夕飯の買い物があるようなので付き添いで一緒に商店街にきていた。

杏「えつと、これで十分ね」

尚哉「そうだな」

シア「あつ！尚哉くん杏ちゃん！」

そこにシアとネリネそして稟とばったりあつ。

尚哉「よつ！お前らも買い物か？」

シア「うん、もう済ませちゃったけど」

尚哉「そうか…って稟歩きながら聞いてくれ」

稟「ん？なんだ？」

尚哉「お前…誰かにつけられてるぞ」

稟「なっ…！」

稟はつけられているのに気づかなかったのか後ろを振り向こうとしたときに俺は止めた。

尚哉「気づいてないふりしろ、つけてるのは5人…このまま路地裏に誘い込むぞ」

稟「お、おう」

そうして商店街歩きちょうどいい路地裏に入り待ち伏せを計りそしてつけていた奴等が路地裏に入ってくる。

尚哉「稟をつけてたみたいだな…狙いは命か？」

「そつだ！土見稟を殺せば莫大な報酬が約束されているんでな…」

尚哉「暗殺者か…なら俺も全力で妨害させてもらおう」

「ガキが！やっちまえー！」

そして全員が俺に襲いかかってきた。

1分後…

「ぐ、ぐおおお…」

「な、んだ…こ、ガキ…」

尚哉「齒応えないな…さてどこいつらは魔王達に任せてっつと、行っ
つぜ」

稟「お、おう」

杏「派手にやったわね…」

シア「というか、軽くあしらってたよね」

尚哉「そりゃあな、というか親衛隊のほづがまだましたな」

そつな、雑談を交わしながらこの場から離れるのであった。

家に戻った時には日が落ちかけており俺は玄関前のポストのなかに妙に綺麗な引き付ける手紙が入っていたのでそこで立ち止まり中身を開封してみると何処かの招待状で詳細をよく見てみる。

尚哉「えつと…南の島のリゾートホテルにご招待!？」

ちよつとまで、これはなんかの詐欺か？冷静になってもう一度よく見てみよう

……あつ！これ差出人が神王だ、あゝなるほどねという事は…

納得したところでケータイが鳴り響きすぐに取り出して電話に出る。

尚哉「稟、皆まで言わなくていい、招待状のことだろ？」

稟「あ、ああ…知ってたのか…っでどうする？確認したら義之達にも届いていたらしい」

尚哉「ということは俺達全員だな…それでどうする？」

稟「どうするんっていくに決まってるだろ？」

尚哉「当たり前かそれにしてもこの招待状何人でも大丈夫みたいだな…それじゃあ誰がいくのかは他のやつらに聞いていてくれ」

稟「わかったそれじゃあな」

そういつてケータイの閉じて内ポケットから端末を取り出して通信して数秒後相手が電話に出る。

尚哉「あ、朱音さん、どうも…あのじつはですね」

朱音「ふーん、なるほど、南の島に旅行ね…行きたいのは山々なんだけど仕事だね」

尚哉「そうですね…」

朱音《あ、でも朱哉達ならわからないから帰ったらちよつと聞いてみるわ、後でまた連絡するから》

尚哉「わかりました、期待してます」

そういつて通信を終了して家にはいるのであった。

その後再度朱音さんからの連絡があり朱哉達は大丈夫だということに参加が決定した。

尚哉「さてと、勉強したら寝よっかな」

そして俺は勉強して早めに寝るのであった。

南の島へ

夏休み前のテストを終えていよいよ夏休みが入りその初日俺は…
というより八神家全員は旅行の行く前の支度を整えていた。

瑠子「尚哉くん、そっちは準備できた？」

尚哉「ああ、こっちは出来たぞ、持っていくっても少ないしな、後
ははやて達か…俺、はやてのところいつてくるわ」

そういつて荷物を玄関前に置きはやてのところに行く。

尚哉「はやて、何か手伝えることないか？」

はやて「あ、尚哉、ん…特にないな…支度できたし」

尚哉「そうかならいいやつで確か後30分位で迎えくるんだよな」

はやて「うん、神王さん達が手配したって…」

なぜだろう不安しかないな…

はやて「どうしたん？」

尚哉「いや、なんでも…それじゃあ来るまで休憩するか」

そうして迎えが来るまで休憩をとり時間が過ぎていった。

送り迎えのバスが到着して準備が整った俺達は先に乗っていた稟
達と魔王、神王達と合流しなのはとフェイト達の合流場所である翠屋

でなのはたちを拾いそしてたった今義之達初音島メンバーの合流場所
所に到着し今回の旅行メンバーが大体揃った揃った。

義之「よお、おはよう、みんな揃ってんだな」

尚哉「まあな、そっちも誰も遅れずに来たみたい…？」

俺は小恋のおぶられて寝ている白河さんがおり何故、寝てるのと凝
視した。

小恋「あ、尚哉くん、なかなか低血圧で朝苦手なの」

尚哉「なるほど、そういうことが」

まゆき「それにしてもこれは凄いメンツね風見バーベナ学園のお騒
がせの連中を始めに神王、魔王と来たらね」

音姫「あはは、無事に旅行できるのを祈ろうか」

まゆき先輩と音姫さんはこの旅行際の心配をしていたが正直俺も
心配してるだつてこの面子でやらかさなないわけがない。

美夏「む？犬までいるのか？」

ザフィーラ「犬ではない狼だ」

美夏「わあー！こ、こいつしゃべったぞー！」

はやて「ああ、ザフィーラは私の守護獣やけど、別にどうもないで、
あ、良ければ昔みたいにもふもふしてエエで由夢ちゃん」

由夢「な、なんでそこで私が出るんですか、というか、昔のことで、もつやりませんよー!」

美由紀「いや〜ここまで実力派揃いとなるとこれは道中問題ないわね」

桃子「そうね、かえって安心しちゃうわね」

渉「それにしてもさ、これ…男女の比率可笑しくねえか?」

杉並「ふむ、確かに女子の方が圧倒的に多いな」

樹「確かにこれなら口説きがいがあるってもんだ」

勇翔「樹、そんなこと言ってボロボロになるなよ」

フェイト「クロノ、よくお休みもらえたね」

クロノ「いや、部下からな、今回ぐらい休めとごり押しされてな、まあお言葉に甘えさせてもらうよ、そっちのユーノもな」

ユーノ「僕…呼ばれてよかったのかな?」

アリシア「そんなことないと思うよ、ほら今回は無限書庫を勤めてきたご褒美だと思えばね?」

なのは「そういえば、月って海で泳ぐのっではじめてだったけ」

月「はい、川で水遊びをしたことはありますけど、海はないですね」

楓「それじゃあ、泳ぎ方とか教えますね」

月「はい、よろしく願います」

バスが走るかなバスないではみんなそれぞれの雑談を交わしながら時間が過ぎていくなか杏があることに気づき俺に話しかけてくる。

杏「ねえ、そういえば麻紗美達が来るって行ってたけど空港で合流するの？」

尚哉「ああ、その予定だ、今回は保護者が居ないからな、俺らが面倒見ないといけないけど、朱哉達なら問題ねえだろ」

そうして雑談は更に続くのであった。

南の島への旅行する俺ら一行は空港に辿り着き神王達はプライベート用の航空機の取り次ぎのため別行動をとり残った俺たちはあまり離れずにロビーでのびのびとしていたが俺は辺りを見渡して朱哉達の姿を探していた。

杏「予定だとそろそろよね」

尚哉「ああ、そのはずなんだが…」

ななか「何してるの？」

俺が回りを気にしているのに気づいたのか白河さんが近づいてくる。

尚哉「いや、旅行メンバーの最後のメンバーが空港で合流することになってたから…まさか間違えてる？いや朱音さんに限ってそれは…」

朱音「私に限って流石にないわよ、尚哉くん」

尚哉「朱音さん！」

朱哉「尚哉兄！杏姉、こんにちわ」

杏「ふふ、麻紗美、あなたは相変わらずね」

麻紗美「杏お姉さまもおかわりなく」

間違えてると思ったのもほんの束の間、予定通り朱音さんが朱哉達をつれてやって来た。

朱音「今日は朱哉達を旅行に招待してくれてありがとうね、本当は私も兄さんも行きたかったけど…仕事でね」

朱音さんはため息をしてみると視線は白河さんに向く。

朱音「あら？あなたは…」

ななか「あっ！白河ななかです八神くん達とは同学年で」

朱音「そうなの？よろしくね白河さん」

そういつて朱音さんと白河さんが握手すると少しだけ朱音さんの表情がきわしくなった。

ななか「…あのどうしたんですか？」

朱音「ううん、何でもないわ、白河さんも私の息子達のことよろし

く頼むわ、ああそれと…」

朱音（あまり、心を読みすぎない方がいいわよ）

ななか「え!? どうし…」

ななかは何故か驚いたときに朱音さんが口を優しく塞ぐ

朱音（まあ、あなたのその力はなんなのかは知らないけど回りには
言わないわ、私口は固いから）

ななか「……」

朱音「それじゃあね、尚哉朱哉のこと任せるわ」

尚哉「はい、わかりました」

そういつて朱音さんは白川さんの手を離し空港をあとにした。

神王「尚哉殿、準備ができた、急いでくれ」

尚哉「準備ができたみたいだなそれじゃあ、行くか」

そういつて合流した朱哉達と共に飛行機に乗り込み南の島へむ
かって飛び立った

ななかSIDE

私たちはシアちゃん達のお父さんのプライベート用の飛行機に
乗って南の島に向かう途中、私はずっとあの人のことを考えていた

ななか「どうして…私が除いてるってわかったんだろっ…」

私には相手に触れていると相手の考えること思考を読み取ることが
できる。

朱音さんにもいつも通りに触れただけで感ずかれる素振りなんか
してないはずなのに…

尚哉「ん？白河なにやってんだ？」

考えていると八神くんが様子が変わだと思って近づいて来た、そうい
えば朱音さんとは知り合いなはずだから。

ななか「ねえ、八神くん、あと人のことなにか知ってる？」

尚哉「知ってるもなにも呼んだの俺だしな…朱音さんはあっちの知
り合いで心理戦とか戦術なら間違いなく俺より上だし…まあ、ここだ
けの話だけど…朱音さんしか使えないあれがあるからな」

知りたい…そう思ったら尚哉くんの手を握ろうとしたが掴もうと
した手を引いて掴めなかった。

ななか「え？」

尚哉「すまん、なんか触れたら不味いと感覚がしてな…」

ななか「っ!？」

そんなまさかバレてる!?でもそんな素振り八神くんには一度もし
てないはず…

尚哉「まあ、それじゃあな、俺はさきにみんなのところに行くから後から来いよ」

そういつて八神くんは小恋たちがいる部屋に向かっていった。

ななか「…はあ…これ以上ばれないようにしなきゃ…」

そうしないと私はまた…一人になっちゃう

南の島での一時

尚哉SIDE

空を見上げると一点の曇りもない青い空…

海を見渡したら透き通る海…

俺達は南の島に辿り着き今は必要ない荷物はホテルの方に従業員に頼み、俺達は水着に着替えてビーチに立っていた。

尚哉「天気もいい絶好の海日よりだな」

勇翔「そつだな肩慣らしに島一周してくるか」

尚哉「いいな、それ競争といこう負けた方はなにかするか？」

朱哉「いや！一周で肩慣らしってなに!？」

確かに異常だなでもな、俺と勇翔の勝負は全部異常なんだよな…

はやて「おまたせ、尚哉くん！みんな！」

義之「おっ！音姉達が来たみたいだ」

更衣室から女性陣がわんさかとこちらにやって来た。

涉「ぐはあ！お、俺はこんなに水着姿の美女みて幸せだ…」

樹「涉、その程度へばってはまだまだだぞ」

茜「尚哉くん」

尚哉「のわあ！あ、茜!? ちょっと！胸！胸当たってるって！」

すずか「茜ちゃん？」

アリシア「これはこれは、宣戦布告ととっていいのかな？」

茜「ふふ〜ん、そうっていったら？」

はやて「もちろん、ビーチバレーで勝負や！私達と茜ちゃん、杏ちゃん、珪子ちゃんの3vs3の勝負や！」

杏「望むところよ」

珪子「絶対に負けません！」

なのは「勇翔くん、一緒にいこ！」

アリサ「なっ！抜け駆けはするいわよ！」

フェイト「まってなのは！いくよ！月」

月「は、はい」

そんなこんなで各自自由に散らばっていった。

尚哉「さてと、どうしたもんか」

はやてたちと一緒にすすろそうと思っていたがつい先程ビーチバ

レーでどこかにいってしまった為に俺は一人で浜辺を歩いていた。

ユーノ「ん？尚哉じゃないか」

尚哉「ん？ユーノ…お前一人か…」

ユーノ「ああ、なのはたちと遊ぼうと思ったんだけどね…勇翔に先越されたみたいだしね」

ははと苦笑いをして笑うユーノ。

尚哉「まあ、こんな休暇なんてあまりないんだから満喫することだな」

ユーノ「そうだね…ちょっと、森のなかを探検しに行こうかな？」

尚哉「それなら午後から杉並達が探検に行くっていったし、それについていけばいいんじゃないか？」

ユーノ「そうなの？ならそうしよっかな？」

瑛子「尚哉くん、こんなところにいた」

はやてたちとビーチバレーをしているはずの瑛子がやって来る。

瑛子「皆さんが探していましたよ」

尚哉「俺を？わかった」

そう言われて瑛子についていくなか、ふと山の方を振り向く。

瑠子「どうしたんですか？」

尚哉「いや…今なんか心配が…気のせいかな…」

何でもないだろうと思いはやてたちが待っているところに向かった。

作者SIDE

尚哉たちが海辺で遊んで日が落ちてその深夜南の島の森林の中息をあらげてよろよろと歩いているユウいた。

ユウ「はあ…はあ…あれなんなんでしょうかな…」

ユウはこれまで管理局の上層部に追われていたがさらにブラッディクライシス、そして財団Xにも狙われ休める間がなかった。

ユウ「うっ！不味いです、少しずつ破壊衝動が強まっている…」

破壊衝動を押さえているとユウの脳裏には以前、偶然であった、瑠子、由夢、美夏、レイの四人の顔が浮かんでくる。

ユウ「…お願いします、私が私でいられる前に…」

ユウ「誰か私を壊してください」

ユウは何とか破壊衝動を押さえ込みよろよろと歩いていった。

砕け得ぬ闇覚醒

尚哉SIDE

南の島のホテルに泊まって一夜が明けていつも通りの朝を迎えられんと思っていたが…

尚哉「っ!？」

義之たちのところに向かおうとしたとき、禍々しい気配と膨大な魔力を感じてるやいなや、俺は急いで部屋を出て一階へと急ぐ。

フェイト「尚哉!」

急いでいるとフェイトとアリシア、それにアインスと合流した。

アリシア「なんなの、こんな膨大な魔力、こんな感じたこともないよ」

尚哉「一体、何が起きてるんだ!？」

尚哉（でもこの魔力…まさか!）

尚哉「アインス、この魔力…闇の書の闇に似てはいないか？」

アインス「何!?!…っ!そうだ!これは闇の書の闇に似ている!」

アインスがそういうのなら、十中八九、間違いはない、この魔力は

尚哉「ん？電話!?音姫さんから？」

音姫《尚哉くん!》

尚哉「何があつたんですか!？」

音姫《詳しいことはわからないけど…浜に来たら女の子が倒れて、声かけたらいきなり暴走して…由夢ちゃんはその子の事をユウちゃんって言うらしいんだけど…》

尚哉「由夢が？」

なぜと思いつながら考えるがそんな暇はなさそうなので次の質問をする。

尚哉「そこには音姫さん以外に誰がいるんですか!？」

音姫《えっと、弟さんと由夢ちゃんに月島さん、天枷さん、まゆき、シアさんと…あと綾乃さんとレイさんと朱哉くんとコロナさんだよ、いまは、防御魔法で守ってもらってるから誰も怪我はしてない》

なるほど、危険な状況だ

尚哉「直ぐに向かいます、それまで持っていてください!」

音姫《うん、わかった!》

電話を切ると同時にホテルからだと俺は胸元からディエンドは勇翔に渡しているのでアポカリプスを取り出してセットアップして同じようにセットアップしたフェイトとアリシアとアインズと共に浜辺へと急いだ。

作者SIDE

尚哉たちがセットアップした同時期、浜辺ではユウが破壊衝動によつて暴走して魔力を暴発して回りは風が吹き上がりそれに義之たちが吹き飛ばれないように珪子、朱哉、シア、コロナ、レイが最大出力で防御魔法で防いでいた。

朱哉「くっ！一体何が起きてるんだ!？」

コロナ「あーくん、私たちじゃ防ぎきれない!」

レイ「頑張ってください、もう少しで先輩たちも来てくれます!」

かなりの風圧からか障壁を壊れるのも時間の問題だった。

由夢「ユウさん!しっかりしてください!ユウさん!!」

美夏「なんなのだ…あれは…」

珪子「ユウちゃん…」

以前出会っていた珪子たちにとっては正に最悪といつても過言ではなかった。

音姫「こつなつたら私も」

私も一緒にとホープウイングを起動させようとしたとき一閃の砲撃が直撃するとその次は勇翔…仮面ライダーNEO電王ダークネスフォームのジャガーノートキックを直撃させた。

なのは「みんな！大丈夫!？」

やって来たのはなのはと勇翔であり、二人とシュテル達、マテリア達は浜辺に行く途中にこの魔力を感じて飛んできたのだ。

NEO電王D「一体、なんなんだあいつは」

ディアーチェ「何者かは知らんが我らと同じ感じがあるもしや…マテリアルの可能性がある」

そういいながら二人は土煙が舞う、ところが晴れていくとそこには砲撃をもともしていけない無傷のユウがいた。

ユウ「…まさか、先程の魔力…まさか、ディアーチェですか？」

ディアーチェ「っ!?我のことを知っているのか!？」

ユウ「ということは…シュテルとレヴィも」

シュテル「どうやら私たちの事も知っているようです」

レヴィ「もしかして…僕たちと同じなのかも」

シュテルとレヴィがそう推測している中続いてユニゾンしているはやてがこの場到着する。

はやてU「みんな、遅くなってごめんな」

ユウ「あれは…まさか、夜天の主？」

はやてU「へ？そうやけど…えっと君は…」

ユウ「…ごめんなさい、私に会わなければ…」ここで終わらなかつたのに」

そういつた瞬間ユウの近くから血の色をした槍が高速ではやてにめがけて飛んでいくがはやてに当たる直前に空からやって来た尚哉の砲撃で撃ち落とされた。

尚哉「みんな！大丈夫か!？」

アポカリプスで武装した尚哉が地上に降りてくると同時にフェイト達も降りてきてユウを見る。

アインス「あれが…闇の書の闇に似ているものか…」

はやてU「ほんまなんか!?それ!」

アインス「はい、ですが、それに関しては尚哉が一番しているようです」

尚哉「…この世界にかえってきてからいるんじゃないかと思っただけ…でも時期が過ぎてるからないと思っただけだ…やっぱりこの世界にも居たみたいだな」

勇翔「尚哉はあれがなんなのか知っているのか」

尚哉「ああ、俺は二度奴を見たことがある…一回目は此処に帰る途中で…もう一回は女神アテナの要請である世界にいったときだ」

一度目はこの世界に帰るために平行世界を渡り歩いてきたとき神威渡航記の世界にて碎け得ぬ闇事件に巻き込まれ時、そして二度目は

数カ月前、麻紗人と朱音を転生させた女神、アテナの要請により最低最悪の転生者 闇倉を倒すために祈梨達の世界におもむき現地の祈梨達と、未来、そして平行世界から飛ばされてきた戦士たち、そしてあることからその世界に次元を越えてきた現人神 桜庭暮羽、祈梨の両親である冬樹と桃華の友達のケロロ小隊、円卓の理から援軍としてやってきたまどかを除く5人の魔法少女たちの活躍もあり最後は齋条條助による、ゴールド・E・レクイエムによって永遠の死のループの中にさ迷うがゾンビになって抜けてきて尚哉の世界に来て最後は尚哉に圧倒的な実力で不死の能力を封印しまた永遠の死のループへと戻った。

その二つの出来事の最重要の鍵となっていたユウをみてこう言った

尚哉「…砕け得ぬ闇…システムU D…」

尚哉「詳しいことは聞かなかったがあれもシュテルたちと同じマテリアルだったことだ」

シュテル「なるほど、道理で同じ感じがあったのですね」

U D「あなたは…終焉者…」

尚哉「はじめましてと喋っているのかな…」

U D「あなたなら私を壊してくれますか…もうすぐ、私は…破壊の衝動に刈られて生きた兵器となります、ですからその前に…」

今は自我が保っているのか…さてと、どうしたものか…シュテル達が三人いるのだから制御できるかもしれないが…

珪子「尚哉くん！ユウのことあたしに任せてほしいの！」

尚哉「っ!?珪子!?待て!？」

そう叫ぶが珪子はU Dに近づいていく。

珪子「ユウちゃん、本当はこんなことしたくないんだよね？」

U D「したくはありません、ですが…」

U Dは自分の意思とは関係なく槍を生成し珪子に目掛けて放たれると珪子はシールドを貼って防ぐが完全には防げずつきだした左手から血が垂れ流れる。

珪子「っ!!」

U D「もう、力を押さえられない…だから逃げて!!」

珪子「逃げません！絶対にユウちゃんを助けて見せる!!」

そういつてグラディウスを握りしめて構える。

ペイン「残念だがそれは無理な相談だ」

聞きなれたこの声を聞いて俺は突如気配がした上の方向を向くとペインとレクサス、そして数百のシャドウ達が展開していた。

尚哉「珪子！後ろに飛べ!!」

珪子「っ!!」

俺の声と共に珪子は後ろに飛び込むように回避しぎりぎり一斉掃射の餌食にはならなかった。

尚哉「ブラッディクライシス！」

ペイン「あの建物ぶりだな終焉者よ、だが今回は貴様達には用はない、碎け得ぬ闇よ我々と共に来るがいい」

ペインはユーリにブラッディクライシスに入るように勧誘してくる。

U D「お断りします…あなた達に降るわけにはいきません」

ペイン「お前の有無など関係などない私の支配下におけばな」

尚哉「させるか!!」

ペインは交渉が決裂すると精神支配を試みようとしていたので俺はアポカリプスのミサイルを発射させて邪魔をすることにする。

ペイン「やはり、邪魔をして来たか…レクサスよ終焉者の相手をする勿論、生死は問わん」

レクサス「ふ、言われるまでもない」

その瞬間レクサスが音速で俺に目掛けてジグザグで近づいてきて俺もその動きを気配と反射神経で対応して首を狙っていた一撃をソードオブキャノンで弾くと20メートルくらい離れて俺を憎む瞳で睨んでくる。

レクサス「ようやくだ…ようやく貴様を殺せるときが来た」

尚哉「…みんなは！他の敵を！レクサスは俺が相手をする！」

なのは「わかったよ！朝倉先輩義之くん達の退避お願いします！」

音姫「うん、わかった任せて」

朱哉「尚哉兄！俺も手伝う！」

尚哉「朱哉達も音姫さんと一緒に避難しろ！これは！お前達じゃ対処できない！」

そういつて音姫さんは義之達、非戦闘員と朱哉達異世界組と一緒にホテルの方に退避していく。

レクサス「デュポン様…あなた様の敵であるあの者を斬滅する許可を…私にいい!!」

そういつて太刀を目にも止まらない速度で抜刀してそれに反応したアポカリプスのソードオブキャノンとぶつかり合った。

珪子SIDE

尚哉くんがああのレクサスっていうシャドウと激突してこっちもシャドウの大軍が戦闘を開始してくる。

ラディ「マスター！私達も行きますよー！」

珪子「うん！」

「ここは戦場だ…尚哉くんの訓練とは違つ下手な動きをしたら殺ら

れる。

珪子「行くよ！ラディ！」

あたしはユウちゃんを救いたいだからユウちゃんのところに向かうために走りだす。

ラディ「前方から三体来ます」

ラディの警告通り目の前の三体がこちらに向かって光弾を放ちながら近づいてきていてその光弾はクイックムーヴで回避する。

珪子「邪魔だあ!!」

ユウちゃんの行く手を遮るシャドウをまずラピッド・バイトで一体を仕留める。

珪子「一体！」

そして2体目をクイックムーヴでブーストしたアーマーピアースで胴体真っ二つして2体目を撃破

ラディ「マスター！後方から砲撃来ます！」

珪子「しまっ！」

反応するのが既に回避不可の距離まで飛んできておりシールドで防御して完全には防げなかったが撃ち終わったら踏み込んでラディのカートリッジを2発使ってフェイクシルエットを、使ってあたしの分身を2体現して敵を攪乱させて分身と共にシャドウにフレイムスラッシュを放った。

珪子「ユウちゃん！」

そして敵を倒してからユウちゃんを指して駆け出す。

U D「珪子さん！」

ユウちゃんもこっちに気づく。

珪子「今助けるから！」

U D「無理です！私を止めれる存在など誰も…」

珪子「駄目じゃない！」

諦めちゃいけない！あたし…あたし達が…

珪子「きつとユウちゃんを助けて見せる！」

ペイン「おやおや、いけませんね、邪魔がはいつては困ります」

珪子「きゃあああああっ！」

ペインによる放たれた落雷が私の体を襲い避けることも叶わず直撃しその場で膝を着ける。

ペイン「私達は彼女が理想する世界をつくることができるのだよ…いや、誰もが理想とする世界を」

珪子「え？」

いまこいつ何て言った？理想の世界？そんなことが本当に？それなら…

尚哉「珪子！そいつの言葉に惑わされるな！そいつは言葉を巧みに使って心を支配する！」

咄嗟の尚哉くんの声であたしは正気に戻って立ち上がりラディをしっかりと持つ。

レクサス「よそ見の余裕があるか！」

尚哉くんの方ではレクサスが音速の突きで尚哉くんに襲ってきてそれをガトリングシールドで防いでいるがシールドバリアを貫いてフレームを切り裂き尚哉くんの左腕を切り落とそうとして切りかかりそれは尚哉くんはガトリングシールドをパージして外しぎりぎり回避したが左腕を少し切られていた。

尚哉「くっ！アポカリプスじゃレクサスのスピードに追い付けないか」

レクサス「そんなでかぶつで私を倒せると思ったか!!」

そのあともレクサスの連続で繰り出される斬撃をソードオブで捌くのがやっとなあたしの目でもわかる。

珪子「尚哉くん！」

ラディ「マスター！前から砲撃！」

珪子「しまっ！」

対応が遅かったこのままじゃ…

なのは「させない！ストライクスターズ！」

上からなのはさんがストライクスターズであたしを狙っていた敵を撃破して横にたつ。

なのは「珪子ちゃん、油断は禁物だよ！」

珪子「は、はい！」

U D「駄目…もう…力を…うわあああああつ！！」

ユウちゃんが力を抑えきれず遂に暴発して辺りに突風を引き起こしてあたし達は吹き飛ばされないように足を踏ん張る。

N電王D「あのままじゃ…」

ディアーチエ「ユウトよ！我ならあやつを制御できるやもしれん、我らの必殺技で止めるぞ！」

N電王D「わかった！」

「フルチャージ」

ディアーチエ「ジャガーノート！」

N電王D「キックウ！！」

勇翔さんとディアーチエさんの必殺技のジャガーノートキックを繰り出してユウちゃんに目掛けて飛び蹴りをくらわせようとしますが

ユウちゃんの無意識で作りに出した槍により必殺技が届くことはなく槍をもろに受けてしまいアーマーから火花がちつてそして変身まで解除して勇翔さんとディアーチェさんが倒れる。

なのは「勇翔くん！」

U D「うわあああああぁあぁっ!!」

ユウちゃんは苦しみながら何処かへ飛んでいってしまっ。

珪子「ユウちゃん！」

必死にユウちゃんに叫ぶがそれは耳に聞こえることもなかった。

ペイン「逃がしたか……レクサスよ、砕け得ぬ闇を追っぞ」

レクサス「……待て！もう少しで終焉者を」

尚哉「はぁ……はぁ……はぁ……」

尚哉くんの状態は酷かったアポカリプスがボロボロでソードオブキャノンも真つ二つに折れており使えるものではない。

ペイン「まずは12人目を仲間にする……それを忘れるな」

レクサス「ちっ！」

そして幹部の二人が消えると他のシャドウも消えた。

珪子「……ユウ……ちゃん……」

あたしはその場でへたりこみユウちゃんのお安否を気にした。